南沙戦記

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
南沙戦記

【Ｎコード】
Ｎ２４２６Ｂ

【作者名】
鷹嶺綺羅

【あらすじ】
太平洋に君臨する南沙帝國は、独立を目指すＩＢＣを支援。日米を相手に戦争状態に突入して数年が経過。“狩野粒子”によってレーダーやミサイルが通用しない特殊な世界において最も有効な兵器――戦艦――鋼鉄の城同士の雌雄を決する戦いが今、始まる！

第一部　状況説明（前書き）

元は９０年代に書いた『蓬莱学園（遊演体）』世界をベースにした戦争モノです。従って、時代設定も９０年代となっていますし、主人公をはじめ、かなりの登場人物が、蓬莱学園出身となっています。また、作者が長編小説の練習用に書いた代物ですので、パクリ的要素が強いので、ご注意下さい。

第一部　状況説明

中部太平洋の公海上、深度１５００メートルの位置に、世界最大級の巨大海底火山が存在していることは、すでに４０年以上前に確認されていた。

大人しくしてくれていればよかったのに。

今、多くの人々がそう思っているに違いない。

何しろ、発見者であるフランスの海洋学者Ｒ・バルテミアスの名前を取って『バルテミアス火山』と命名されたこの海底火山は、よりにもよってとんでもない時に爆発してくれたから。

１９８０年代の初め、世の人々が、『世紀末』を現実のものとして自覚し始めていた矢先のことである。全てはこの火山の噴火から始まった。

この書では、この火山爆発が、世界の爆発へと繋がっているという説に立脚して話を進めていく。

なお、この世界がほんの少しだけ現世とは違っていることはもう読者各位が共通して理解しているはずなのでそのまま話を進めることを併記しておきたい。

無論、火山一つでどうこうなるほど人間社会は脆くはない。

要因はいくつでもある。その最たる事象、つまり、社会情勢の変化のまず第一の事態の転換は、経済と戦争だった。

１９８２年４月、米国ウォール・ストリートで株価が大暴落。その経済的影響は全世界へと波及。人はこれを『第２の大恐慌』と呼んだ。

米国だけで失業者１３００万人を出したこの事態は、世界経済を混乱させ、そして、各地で経済ブロックを作らせてしまった。

１９８３年８月６日、経済ブロック圏として設立されたアラビア連合がイスラエルへ侵攻。俗に言う『第５次中東戦争』、別名『一

年戦争』が始まった。
イスラエルの核配備に対するアラビア各国の交渉が決裂したこと、そしてガザ地区におけるイスラエル兵士によるアラブ人虐殺事件。さらにはイスラム教の聖地を破壊して観光客向けの娯楽施設を作るという、従来対アラブ強攻策の目立ったイスラエルでも考えられなかった政策が原因であった。
宗教絡みの大事件が彼等をして戦争へと走らせたのも当然であろう。
遂に彼らは決断した。
１９８３年８月６日、威嚇使用ともとれる核実験がなされる。核の標的とされることを恐れたアラブ諸国はイスラエルへの武力侵攻。
『ユダヤ教徒への隷従か死か』
ホメイニ師はそう叫び、アラブ人の結集を訴えた。
『聖戦』の発動である。
イスラム教国家連合となって団結した彼らは、親イスラエル国への石油禁輸政策を打ち出してイスラエル支持国への圧力とした。
『我らは神と共にあり』
彼らは十字軍がエルサレムを陥落させた時の様に彼らの神の名を叫び、狂気の如く戦った。
この時、多数の移民を抱えたイスラエル国防軍は、占領区で広範囲に散在し、逃げまどう国民の保護で手一杯。しかも、難民を逃がすべき港は、船舶ごとイスラム兵士達の自爆テロで破壊されていった。
それでもイスラエル国防軍は死力を尽くして戦い抜いた。
１年にわたって続いた激戦は、両軍による民間人の虐殺・暴行・略奪の応酬に始まり、バクダットへの核の使用、エルサレムへの化学兵器の報復使用という最悪の事態を経て、イスラエルを滅亡させ終結した。
当然、化学兵器に汚染された聖地はイスラム教国家連合の占領下

におかれたが、彼らは国連にその地を委ねざるを得なかった。
米国の無言の圧力である。
彼らもこれには屈せざるを得なかった（すでに彼らの継戦能力に限界が来ていたことが、この圧力に屈した原因である）
そして現在、エルサレムは国連の管理地域となり、旧イスラエル領土は、アラビア各国により分割統治されている。
結局、獲物は勝者のものだった。

この戦争は、当然ながら世界中に大波紋を投げかけた。
政治的にはともかくも、一般人のレベルでは、原油を中心とした物価の高騰の影響が一番大きかったといえる。戦争の投機熱により、世界恐慌の悪影響はある程度軽減できたが、物価の上昇はどうしようもなかった。
おかげでとんだトバッチリを被った存在がいくつかある。
８５年に突然誕生し、わずか２年で石油・貴金属の価格暴騰をうまく利用して、三流弱小企業から、超一流国際複合企業へと成長し、世界のダイヤ以外の貴金属類のトップシェアを奪い、わずかの間に、経済界を席巻したリムゲードのような企業ばかりではなかったのである。
日本ではバブル景気が一気にはじけ、今まで我が世の春を謳歌していた人々を不況へと追い込み、兵器輸出の特需で復興なるかとみられたソ連経済も崩壊、ソ連そのものも瓦解した。
それと同じくして没落していった組織の一例がＷＷＤＦＣ（世界軍艦愛好者連盟）である。
ＷＷＢＦＣ－
船舶業界では、その技術力の高さと品質、そして風変わりな商品で知らない者はいないとされた会員制の造船メーカーである。
このメーカーの会員となるということは、世界のビリオネアーの仲間入りを果たしたという証明であり、希にみるステイタスであった。

故に、世界経済が斜陽に向かった８０年代前半まで、全財産と引き替えにしてでも会員となることを希望する者には事欠かずにいられた。

最新鋭の造船技術を駆使し、優秀なワーカーによって、会員達の『会員証』として作り上げられるもの。それは『軍艦』であった。

大半の会員は、米軍などの中古の駆逐艦をプライベート用に改装していたが、それは低ランクの会員のすることであって、『チープ・ライセンス』と呼ばれ、正規上級会員として見られることはなかった。

最高級の会員は、なんと戦艦そのものを建造してしまうのである。

戦艦の所有者は、そのまま世界トップクラスの金持ちであることを無言のうちに証明していた。『私は戦艦を持っている』はそのまま自分がどれほどの金持ちであるかを証明してしまうのである。これが、『連盟の抱えている戦艦の数だけ金持ちがいる』といわれた所以である。

戦艦一隻のコストは、通常建造したら『ステイタス・クラス』と呼ばれた４万トンクラスで、ＷＷ１時台の装備でも５００億円はするはずである。

しかし、現在の最新鋭技術を駆使したＷＷＢＦＣの戦艦は、４万トンクラスで、なんと２００億円を実現した。駆逐艦に至っては２０億円で購入できた。

会員を呼び集めたのは、この低コストのためでもある。

しかも、その軍艦達は、オーナーの趣味によって、Ａ（米）方式、Ｂ（英）方式、Ｇ（独）方式、Ｊ（日）方式、Ｆ（仏）方式の船体にそれぞれ装備を変更しただけで引き渡されるという方式がとられていた。

いわば大量生産品なのである。しかし、ローンが２０年、３０年という者もザラにおり、『最低艦齢５０年は大丈夫』を目標に作られた（特に独方式の）艦は非常に頑丈な代物であった。

このようにして、世界の大富豪相手に独自の方法で低コストで娯楽用にと本物と寸分違わぬ軍艦を売り出し、世界の造船業界にその名を轟かせていた彼らは、この折の原油価格の暴騰と暴落のアップ・ダウンの繰り返しのおかげで財政難に陥り、社員5万人に給与が支払えない状態に陥っていた（会長が独断により原油買い占めに走ったのが原因である）

しかも、この頃、次々とかつての金持ち、つまり顧客が財産を失い、それを保険として連盟が買い取る事態が頻発していた。この保険金支払いも窮地に陥った原因である。

兵器輸出で大儲けした米国政府の介入も空しく（彼らとて5万人もの失業者を抱えたくはなかった）、１９８０年1月4日にまず社員1万人の解雇が決定。2月2日にも追い打ちをかける形で8千人が解雇。破産などでオーナーのいなくなった軍艦１００隻近くがスクラップもしくは海没処分となることが決定した。

バルテミアス火山が爆発したのは、奇しくもこの日だった。

社員はこれを『神のお導き』と考えた。

その中、2月7日、１０日に予定されていた恒例の観艦式を待たずに同連盟は米国財務省により破産を宣告された。

一気に5万人がその居場所を失ったことになる。

模擬戦闘から造船まで、あらゆる分野で活躍していた彼らは、２ヶ月以上の給与支払いの滞りですら我慢していたのだが、ここが我慢の限界だった。

彼らは行動を起こした。

２月１０日、約３万人の社員がＷＤＦＣ解散式のためニューヨーク沖に集結した各種艦艇を乗っ取り、会長以下、会社重役を吊し上げた後、『船乗りの恥晒し』としてこれを処刑。それぞれの艦に立て籠もり、民衆に理解と協力を求めた。それに答える形で２月１４日までには他の社員達が次々と彼らと合流。

人口が家族を含めて２０万人に達した彼らは、アーダベルトを大

統領とする国土を持たない独立国家『ＩＢＣ（インディペンデント・バトルシップ・コミュニティ）』と名乗った。

１９８１年２月１４日、世界に新たなる国家が誕生したのである。

ＷＷＤＦＣは、これ以上のもめ事はご免とばかりに、退職金代わりに彼らの要求した通り、彼らの乗っ取った艦艇全ての供与を宣言。

『あんなアナクロなものを』と、世論は笑っていたが、後にその無知のツケを払わされることとなる。

なぜ合衆国がこれを黙ってみていたのか。と疑問に思う者もいるだろうから説明しておく。難しいことは何もない。彼らが非武装・もしくは武装していても大した驚異にはならないとタカをくくっていたからである（ＩＢＣは軍艦の中に大量の武器弾薬をため込んでいた）

そして彼らは『物好きの集団』として世界を旅し続けた。領土を持たない主権国家として……。

だが、地球は『流浪の民』を新たなる土地で迎え入れた。

１９８１年３月５日、この日、バルテミアス火山の活動が本格的になった。

単なる海底火山の噴火は、完全な造山活動へと切り替わり、１ヶ月以上に渡って、人類観測史上最大規模の活動を続け、その爆発は、近海の海底火山の爆発を誘発し、これによりいくつかの火山が海底隆起を引き起こした。

被害は凄まじいものとなった。

３月１４日、高さ５０メートルの大津波により日本の三陸海岸全域に壊滅的打撃と多数の死傷者を。中国・韓国の沿岸都市には１００メートルという人類史上類を見ない大津波により大被害を与えたこの津波は、北米・南米大陸、そして豪州大陸にも大被害を浴びせ、全世界的規模でみても死者・行方不明１０万人という犠牲を出した。

バルテミアス火山の噴火は、近隣諸国にこれほどまでに大規模な被害を及ぼし、その破壊に満ちた活動を停止したのであるが、ある

学者は、この自然の活動こそ、後の人類の愚行を予言していたと言う。

真偽のほどは正直わからないが、この破壊がある意味で新たなる創造を行ったことを認めない者はいない。

噴火終了から一週間後のヴィクトリー島及び南沙島の誕生である。前者は偶然にも第一発見者となったＩＢＣ船団がそう命名し、その領有を宣言した。後者は名の通り、南沙帝国の領土となった。

島は豊富な地下資源と日本全土とほぼ同規模の大地で彼らを迎え入れた。

その島で金属、そして石油の大鉱脈を発見したのは、領有宣言の翌日に島にやってきたリムゲードの社員だった。

リムゲードはすぐに日本円にして２０兆円規模の投資を実施し、食料から医薬品まであらゆるものを代償にしてこの鉱山開発の権利を独占することに成功。

彼らはＩＢＣの独立に一役買っていたのである。

ＩＢＣは、その見返りとして、リムゲードには税金をかけないなど、あらゆる待遇を約束。合計投資額５兆円という超大規模投資が功を奏し、ヴィクトリー島はこの後、リムゲードにより、実に効率よく人の住める土地となっていった。

鉄鋼・マンガン・プラチナ・ウラニウム・そしてダイヤ。世界の金属の見本市のような豊富な鉱床。それらが彼等の資源だった。

ＩＢＣは確実に軍備を拡張。かつてのＷＷＤＦＣ処理委員会が予算不足でスクラップにも出来ずにいた艦のめぼしいものは、スクラップ名義ですべて彼らに買い上げられ、修復の後、一部は海外に売却されたほどだった。

また、良好な港であるネルソン湾とトーゴー湾では、戦艦用ドックなどの港湾施設建造が推進され、さらには船舶に税金をかけない方針が功を奏し、９３年にはＩＢＣの船舶保有数は世界第２位にまで上り詰めた。

造船を可能とするため、鉄工所を始めとした重工業関連施設が一

気に建設・可動を開始。これらのプランニングを担当したリムゲード総帥の計画通り、この間の国民のＧＮＰ伸び率は人類史上初の５００％という奇跡的な数値を叩きだした。

さらに、ネルソン湾に面したステニス地域は観光名所となり、ここからだけでも莫大な利益が転がり込んできていた。

このようにしてヴィクトリー島は人類への贈り物とまで言われたが、そう甘くないことを、人類はこの後、嫌という位味わわされることになる。

１９９０年１１月３０日、ヴィクトリー島の火山ヴァンガードが噴火。

成層圏まで到達する大規模な噴煙を吹き上げた。

ジェット気流に乗った各種金属を含む噴煙は、ヴィクトリー島から半径数十万キロという長大な範囲に飛散し、その後、あらゆる天文学者を悩ませていた新種の宇宙線の複雑な洗礼にさらされた結果、一月後、レーダーを無効化する謎の粒子と化して人類に襲いかかった。

当時はその生成過程も除去する方法もはっきりしていなかった。

はっきりしていたことは、そのような粒子があるとわかった時点で、太平洋では航空機９２機が航路をはずれて墜落もしくは行方不明。９４３２名が犠牲となる航空史上類を見ない連続した大惨事を引き起こしたことだけだった。

人々は、レーダーを無効化する何かを『悪魔のマント』として呪いつつ、絶命していった。

その最中の悲劇のうちで最たるものが、レーダーの無力化がまだ知られていなかった時に発生した『第７艦隊事件』である（ちなみに、この事件こそが『悪魔のマント』が初めて人を殺した事件とも言われている）

１９９１年３月、海軍力の強化を目指すＩＢＣに脅威を感じた米軍が、示威行動のため太平洋公海上で演習させた第７艦隊所属の航空機７２機が、この粒子の影響で母艦の位置も自らの機位も見失っ

たのだ。
天候が広範囲に渡って低い雲に覆われていたのも災いした。
米軍司令部は、雲っていたとしても、所々に青空があり、積乱雲も確認できるが心配するほどではないとして、飛行を許可してしまったのだ。
本来はそれで良かった。だからこそ悲劇は起こった。
積乱雲と誤認したもの、それが狩野粒子雲だった。
雲が生成過程の中で狩野粒子を大量に吸収した末に生まれる雲で、これが彼等の悲劇を招いた元凶である。
各編隊ごと、もしくは単機でばらばらに飛行を続けて、雲（狩野粒子を含んだ雲は強烈な雷を含むことが多い）の中に突っ込む者。燃料切れで墜落する者。いずこかへと消えていく者。他の編隊機と衝突する者が続出。運よく空母を発見できた者も、我先にと着艦を試みた結果に空中接触もしくは生き残りたい一心で僚機を撃墜する者もあり、または無茶な着艦を試みて甲板に激突する者もいた。
この日、空母ジョージ・ワシントンでは着艦事故が3回発生。４４９０名という、航空海難双方で事故としては史上最高最悪の犠牲を出した挙句に爆沈。
各艦は、死に逝くパイロット達の悲鳴や絶叫を数多く受信したが、その交信記録は、『あまりに残酷である』として、その日の内に破棄されたという。
このことがあってから、各国は必死になってそんな中でも機能するレーダーの発明に腐心した。
１９９４年４月までに、人類はこの神々の試練を、己の知恵によって半ば乗り越える事に成功した。
従来のレーダーは、高度3千メートル以下、こと高度２００メートル以下の粒子高濃度空域では無力に等しくなる（雲の中はもう絶望的とされていた）
この対策として、衛星を使用した超極短波レーザーをメインシステムに組み込んだ新型ＧＰＳによる航法の開発に最初に成功した（

レーダーそのものは、現時点においても従来のレベルを取り戻してはいない）のは米国であり、『悪魔のマント』が何かを発見したのは日本だった。

この年の末の緊急学会で、狩野純生博士が発表した『Ｋ粒子』それが『悪魔のマント』の正体だった。前年死亡したＴ、Ｙ、ミノフスキー博士が提唱し、『ミノフスキー物理学』と呼ばれた素粒子物理学の世界的権威であった博士の説では、こういうことである。

静止質量が殆どゼロで正か負の電荷を持つ。これらは目に見えないフィールドを形成するが、このフィールド内を伝播しようとする電磁波の内、マイクロ波から超長波にかけての波長域は減衰が著しくなる。一方で長ＬＳＩ等の集積回路に誤作動、機能障害を生じさせる特質がある。

学会名『狩野粒子』と名付けられた未知の粒子状金属が、強力なチャフの役目を果たしていたのであり、その金属がヴィクトリー島でしか取れないことを知った各国は、兵器となることを期待して研究に没頭した。

だが、それは比重はアルミ並みに軽いが、その分脆く、どんなに加工しても、硬度はせいぜいが発泡スチロール程度どまりの欠点だらけの金属であることがわかると、宇宙線にさらされたこの人類にとって憎むべき悪影響をいかに軽減するか。そこに焦点が集中してそそがれることとなった。

というより、人類はそんなことにかまっていられなくなったのである。

ほぼ全地球規模で狩野が覆うのは時間の問題であり、濃度が濃い場所は、晴れるまで１００年単位かかるという、航空産業および軍にとって絶望的な状況が、学会で発表されたためである。

国連での独立承認に一番乗る気だったにもかかわらず、ＩＢＣの独立を取り消すとする決定が、米国議会で決定したのは、そんな中だった。

建前は、彼らの大半の国民は元来、米国国民であり、彼らは合衆国国民である以上、他国の国民として扱われるのはおかしい。なぜなら、彼らは未だに合衆国からの国籍離脱の許可を得ていない。というのだ。

彼らの先祖がどうやって大英帝国という親を見限ったのかを考えもしないような見解だった。

本音は、米国国内のユダヤ勢力がダイヤ産業に深く食い込んできたリムゲードの勢力を削ぎ、彼らの中核的鉱脈のある、ヴィクトリー島を手中に納め、あわよくばヴィクトリー島を第２のイスラエルとしたいとして議会に圧力をかけた結果である。

彼等もまた、流浪の民だったのだ。

湾岸戦争で帰るべき土地を失った彼らは、それでも未だに世界経済を握っていた。

しかし、どこかでその斜陽がこの時見え始めていたのである。

故に、時代の変化を受け入れを拒んだユダヤ勢力はＩＢＣの親とも言うべきリムゲードの貴金属マーケットにおける一方的なまでの進展に危惧し、リムゲードつぶしに躍起になった。

議会・政府・民間各界を巻き込んでのこの大騒動は、世界経済を大混乱の中に放り込み、自殺・暗殺・テロなどで死傷者１００名近くを出しはした挙げ句に、結果として勝利を掴んだのは、ユダヤ勢力の横暴なまでの圧力に嫌気の差し始めていた民衆（核兵器使用という残虐行為がユダヤ人への同情心を削いでいた）に支持された方だった。つまりはリムゲードである。

徹底したフェアプレー精神を建前に、正々堂々戦っているように見せつけたことと、巧妙な商売が功を奏し、半年以上に渡るユダヤ勢力とリムゲード勢力との中傷混じりの戦いで、勝ったのはリムゲードであり、彼等はその後、ユダヤ勢力が弱体化すると見るや、絶妙な販売手腕で確実にダイヤ市場を『中傷への報復』とでも言いたげに席巻していった。

後は陰での暗躍である。

しかも、彼等は南沙島の開発にも全力を投入していた。

本社第3支部の建設を始め、南沙島に新しいヴィクトリー島を創ろうとしていたのである。世界経済の建て直しは、この二つの島への公共投資によってなされたといっても過言ではないのである。となれば、この二つの大プロジェクトを実現するためにも、リムゲードは遊んでいる余裕はなかった。つまり、とてもではないがＩＢＣのことをかまっている余裕はなかったのである。

無論、この抗争が、リムゲードの一人勝ちでケリが付くにしても、米国、そして世界経済そのものへは大きな影響は出まいと、だれもが考えた。リムゲードは米国経済の中核にコミットしすぎていたからである。彼等がおかしくなれば米国そのものが狂う。もし仮に狂ったにしても、それはユダヤ人からリムゲードへと経済の中心がシフトする程度である。経済家はそう判断していた。国民がそれに習ったのは言うまでもない。

だが、そうは問屋が降ろさなかった。

リムゲードについた大統領がアーカンソー州へ向かう途中、航空機事故により事故死したのである。ユダヤ勢力による暗殺であったことは明らかである。

この後、大統領に昇格した副大統領、ビル・クリントンは、ユダヤ人の使い走りにすぎなかった。米国経済の要ともなっていたリムゲードを潰すわけにはいかないにせよ、この大統領は、自国の富の発展、さらには自分の名声の収集にご執心のあまり、とんでもないことをやってしまう。

ヴィクトリー島を自国領土に編入しようとしてしまったのである。

平時の軍人の多くがそうであるように、名誉を得たい軍人達の支持を得たこの大統領は、即座に対ＩＢＣ戦へと軍を動かした。

後に『開戦ベトナム。戦い方は太平洋戦争』と呼ばれたように、まさに米国のかつての誤りと成功の歴史の繰り返しを、この大統領はやってしまった。

９４年１２月１０日まで、ＩＢＣと米国は、同年１０月６日に発生した米軍が国連のＰＫＯとしてフィリピンのスル周辺での紛争監視に従事していたＩＢＣ海兵隊の陣地を攻撃。対戦車ヘリの機関砲攻撃で、逃げまどう兵士をなぶり殺しにした事件に関して協議を重ねていた。

これは米国の謀略であったが、米国はＩＢＣが先に撃ったと主張。相変わらず自己の正当性に固執し、ＩＢＣの抗議に耳を貸さなかった。

もめにもめた末、遂に米国がＩＢＣへ宣戦布告へと動いたのが運命の１２月８日だった。

米第３艦隊がＩＢＣの領海内で挑発行動に撃って出て、威嚇射撃を受けると、反撃を開始。これをもって開戦が無言の内に宣言されたとしたのである。

そしてこの日、戦闘待機中だったＩＢＣ第２艦隊により、第３艦隊の主力部隊は壊滅的打撃を被る。

この戦いへのプロセスの中で、とある研究が各国で盛んとなっていた。

レーザー開発が波に乗った末での、狩野粒子の兵器への転用再研究である。

敵のレーダーを狂わせることができれば、戦局が優位になる。または他国にこれをばらまけば大損害を与えられる。軍人達はそうふんだのだ。

だが、その研究は大半が頓挫する。何しろ実験すればその上空が狩野粒子で覆われてしまうのであり、あまりに危険だったためである。

粒子を実用的な意味でモノにしたのがリムゲードであった。

狩野粒子はオゾン層生成にも多大な効果があることを発見した彼らは、北極などのオゾン・ホールに狩野粒子を大量にばら蒔くこと

を提言したりもした。

では、彼らの果たした軍事的転用とは何か。

チャフである。

濃度を高濃度のレベルまで高めると、狩野粒子は熱源探知装置を狂わせることができる上に、レーダーも完全に無効化する万能のチャフとなることを発見したのだ。

これが後に『ファーランド独立戦争』と命名されたこの戦争の折、凄まじい猛威を振うこととなる。

初戦では米軍は航空機と戦略ミサイルで攻撃を敢行。９５年１月１１日から９７年２月１４日まで続く『ヴィクトリー島大航空戦』が開始される。

初戦から、米軍側は航空戦力での制圧を狙っていた。だが、航空機はＩＢＣ航空隊の必死の応戦で次々と撃墜されていき、ミサイルは狩野粒子に狂わされる。

結局、ＩＢＣが優勢な国連軍を相手に善戦を繰り広げられたのも、狩野粒子の結果だった。

何しろ、レーダーも戦略ミサイルをも使用不能とする上に、航空機のジャイロや無線機をも狂わせてしまう。リムゲードが開発した保護システムにより、航空機そのものがただ飛行するだけならば何の問題もなくなりつつあったが、レーダーや長距離索敵、無線データーリンクは使用困難となり、電子装置も高価で重量もかさむ保護システムが必要となり、精密誘導兵器はコスト、サイズ、重量すべてにおいてクリアー出来なくなった。

この下での戦闘とはすなわち近接戦闘、いわば殴り合いである。

詰まるところ、狩野粒子とは、まさに現代人類の知識の産物をすべて無効とする恐ろしき物体であり、これを大量に利用したＩＢＣは、潜水艦についても十分以上に研究を重ねていたため、独自（リムゲードの研究施設が主体だった）に開発した対空・対潜探索システムと迎撃システムをもって航空機と潜水艦の攻撃すらも無力化した。

対艦ミサイルが封じられた戦闘となれば、海戦とは、技術的には第一次世界大戦のレベルでの問題となるのである。

近接信管や魚雷はきちんと効く。とはいえ、ＩＢＣはこれらにも十分な研究と対抗兵器開発を推進していた。

実際の所、航空機が対艦攻撃兵器として、ミサイルなしでも有効に使えたのは、レシプロの時代のことである。四方八方から襲いかかり、戦艦を撃破するには、航空機はあまりに高価であり、大きすぎ、そして速くなりすぎていた。

リムゲードの開発した艦船搭載型対空迎撃システム（ＲＶ－ＡＡＳシステム）が、そのことをいやが上にも教えてくれた。

画像追尾式を採用した、当時としては画期的なこのシステムを配備しているのはＩＢＣ側だけであり、開戦ほぼ直前に実戦配備が開始され、初戦から各所でＩＢＣ軍に凱歌を上げさせた。

航空機の爆撃は、水平飛行かダイブによる方法のいずれを採ろうとも、結局は限定されてしまう。速すぎて爆撃コースからそれる危険性もあり、自然と速度も落ちる（マッハいくつで爆撃をやる馬鹿は存在しない！）上に、機体も大きいので狙いやすい。そんな敵機を近接信管とビジュアルトレーサーにより効率的に迎撃するこのシステムは、米軍パイロットから『炎の煉瓦職人』と呼ばれ、彼等を血祭りに上げていた。この時の戦闘機は、一部を除いて、複雑なアビオニクスは必要とされなかったし、潜水艦には、複合探索システム（『キラーホエールシステム』）を駆使した迎撃で十分に足りた。

こちらもあまりに肥大しすぎたのである。航跡魚雷を迎撃可能な『カウンターシステム』まで搭載された日には、潜水艦の出る幕はなかった。

実際、戦争を通してＩＢＣ艦隊を攻撃した米軍機の８７％、潜水艦の９９％が未帰還とされているのも、すべてこのシステム達のためである（原子力潜水艦の撃沈により海洋が汚染されることを危惧した米国側の一方的撤退により、潜水艦の出撃一撃沈比率は開戦から半年、２５－２４にすぎないが）

結果として、魚雷を抱いた航空機もしくは潜水艦の攻撃はきわめて危険なものとなってしまっていた。

艦隊戦闘に終止符を打つのは艦船より放たれる砲弾と魚雷。

つまり、そういうことである。

ＩＢＣのように戦艦が好きで独立を志した海の男達は、その限定された戦闘の中で、その持てる実力をフルに発揮し、１２７ミリ程度の豆鉄砲しか持たない国連軍を窮地に陥れ、ことあるごとに独立受入れを要求し続けていた。

国連を指導した米国が、これを断固として拒絶したのは、（繰り返すようで申し訳ないが）ヴィクトリー島で産出する豊富な天然資源に着目したためだった。

ここで産出するダイヤは世界の産出国の中でもトップ５の中に入るほど豊富だったのだから、その利権を欲する米国としては無理もない。

さらに、米国の世論もここまで来てやめることに怒りを覚えていた。

ベトナム戦争の二の舞と非難する声も高かった。だが、湾岸戦争を暗黙の内にに停止させたことに勝利を見いだして以降、「強いアメリカ」を自覚した識者が強硬に戦争続行を主張。マスコミがそれを煽り、国民はそのタンゴに合わせて踊らされた。

開戦から約１年半、１９９６年４月を迎える時点で、米国は太平洋での稼働艦艇の２７％を損失し、２万近い戦死者を出していた。

だが、ここでやめれば、何のための戦争かわからなくなる。もとい、米国政府はやめることができる一線をすでに越えていたのだ。

２万の命が、彼らの欲望の代償に過ぎなかったことを国民に悟られないためには。

そして、新たな悲劇が幕を明けようとしていた。

第一部　状況説明　2（前書き）

断っておきますが、世界情勢とかはめちゃくちゃです！突っ込まないでくださいね？……金持ちが戦艦、趣味で建造するなんてことで、もう諦めた方もいるかもしれませんけど……。

第一部　状況説明　2

●国連

国連では連日、第三諸国を中心にＩＢＣの独立の承認を求める声と、米国の横暴を非難する声で満たされていた。安全保障理事会は、米露仏が中心となってＩＢＣの独立不承認の立場は維持していたが、その声を沈黙させることは不可能であった。

彼らの足並みすらしっかりしてはいなかった。

第三諸国は、ＩＢＣが独立しても賠償請求も戦争裁判も開かない。彼らは独立を勝ち取るために戦っているに過ぎず、しかけたのはアメリカなのだ。ということで一致していた。この足並みは崩しづらかった。何しろ、彼らはこの意思を条約として臨時開催されたＡＡ会議で締結していたのである。

条約は一度締結されると崩しがたい。

そんな中、米国の戦争継続を可能にしたのは、話合いではなく、恐喝であった。

南沙沖で日本向けの商船団護衛についていた米国第３艦隊が、それを狙って強襲を受け大敗した翌日、米国の国連代表は、戦争の早期終結を求めたインド代表に対して、こう述べた。

「米国の正義に異議を唱える者はすなわち米国の敵である」と。

米国はその威信にかけて戦争の勝利を掴む必要が生まれていた。それを邪魔する者は如何なる者であろうとも排除するという、強い姿勢がそこにはあった。

そして同時に、米国は国連加盟国全てに対して、国連軍としての参加を要求した。

日本も例外ではなかった。

米国は日本の船団護衛のために米国が南沙より受けた損害の事例をつきつけ、賠償金と自衛隊の派遣を要求（もはや要請ではなかっ

た）し、一兵も出さぬ場合、制裁どころでは済まさないという姿勢を見せた。

これに慌てたのが無能の好例、日本政府である。

狩野粒子への対応のため、民間用のレーザー誘導装置は開発が急ピッチが進んでいたが、自衛隊用が財政難から大幅に遅れ、のみならず、そうしたレーダーが満足に使えない世界でもっとも有効性を発揮しうる「戦艦」を多数所有し、米軍を窮地に追いやっているＩＢＣに対抗できる兵器が存在しなかったからである。

国内世論も黙らせることは困難に等しい。よしんば、それが出来たとしても、苦心惨憺して配備したイージス艦は何の役にも立たない。それでも出さねばならないというのならば、隊員達を無駄死にさせることになる。でも、やらなければ、商売がダメになる。

戦艦はすでに米国が可動全艦を接収しており、どこからも購入の目処はなく、自国での建造はもう間に合わない。予算も実績もない。

米国への返答期限は１ヶ月。

内閣も防衛庁も、外務省も皆が頭を抱え、平和団体が憲法九条を絶叫し、朝日新聞がでっち上げ記事を書き、ニュースステーションの久米宏が不気味にクスリと笑い、進歩的文化人が反核フォーラムを開き、現実主義者が事態打開へ向けて試行錯誤をくり返す中、世論が一つの変化を見せた。

『南沙に頼もう』というのだ。

南沙ー

正式には南沙連邦帝国という。

政体は立憲君主制。

面積は日本のおよそ2，5倍。人口８５００万人。

紀元前４２００年に初代皇帝早瀬命が即位したのを建国元年とし、ほぼ一系の皇帝が支配している。

この一族が統治する南沙は、昭和の終わりの頃はまだ九州に毛の生えた程度の島だったが、優れた航海技術を有しており、独自の船

を駆使して琉球、シナ、果ては欧州とまで貿易し、侵攻してきた者はすべて自力で排除してまで、国を維持させてきた。一部は海賊までやったという。

南沙の歴史における近代化が日本よりおよそ1世紀早かったのも、その独立を保持し、貿易を守るためであったというから、その力の入れ方がわかるだろう。

そんな彼等だったが、日本の軍事的驚異の元、その保護国化を余儀なくされたのは、時代の趨勢としかいいようがない。

南沙人が最大の国辱と考える『対日朝貢』が行われたのは１９０２年。

即位したばかりの時の皇帝明和帝（１８７１－１９２３）が日本の軍事的圧力の元、国民を救うため、明治帝に対して臣下の礼をとることを余儀なくされたのである。

そして、同年の水上条約により南沙島は日本領となった。

皇帝は天皇により島の統治権を保証された存在に落ちぶれ、小早川家が創設される。

だが、小早川家は従来の対外・対内的ネットワークを縦横に駆使して水面下での南沙独立回復運動を続けてきた。

この原動力となった明和帝は優れた人材で、この屈辱にも耐え、１９２１年には独立までもう一歩というところまでこぎ着けた。

後に『情け枯れ骨にまで及ぶ』といわれる善政をなした名君だったが、１９２３年、現在茜坂記念公園（旧宮城）がある茜坂で安住恨に触発された朝鮮人の凶刃にかかり志半ばで倒れた。『茜坂事件』と呼ばれ、南沙人ならば朝鮮人に対する反感を植え付けられる上で必ず一度は聞かされる事件である。

心の支えであった帝を殺された南沙人の報復は苛烈を極め、虐殺された朝鮮人およびそれと誤認された者は３５０名以上と見られており、現在でも南沙は朝鮮人の市民権獲得を認めていないというから、その根深さがわかるだろう。

帝の弟、明照帝（１８７９－１９５６）が即位したのは１９２４

年、後に３０年に渡る彼の治世は、この後の激動の時代を、日本を利用するだけ利用して裏切ることにより乗り切ったという一言に尽きる。

貿易の振興に日本の軍事力を利用し、日本の敗北必至とわかると駐留軍司令官を殺害。

突如として『南沙独立戦争』を宣言。南沙帝国として独立宣言を掲げ、米軍に恭順の印として門戸を解放、全面的対日戦争にと突入する。

世界初のヘリ部隊を初め、最新鋭の兵器で固めた南沙帝国軍は、日本を屈服させ、４８年には欧州戦線にまで進出する。日本海軍の残存戦力（その大半は彼等が日本海軍から戦中に略奪したのだが）を保有した彼等は太平洋における中核的存在へと拡大していく。

５６年の皇帝の死を受け、そして混乱する国際情勢の元、即位したのが元正帝こと小早川明仁（１９１９－１９９２）だった。若干２７歳にして南沙国皇帝に即位したが、明治になって確保した宗主権を放棄したくない日本政府、そしてフィリピンと台湾がそれぞれ各地の領有権を主張。彼の道のりもまた、厳しいものだった。

国際的にも、国を挙げて必死の思いで努力した結果、日本侵攻の米軍サポート、そして欧州戦線出兵という功績が斟酌され、日本より早く国連加盟を実現、太平洋の小国として独立を勝ち取った。

だが、日本が経済的発展を続けるうち、南沙は日本の属領であるような認識が世界的に広まってしまい、時代と共に南沙はまたもや苦境に立たされることになる。父譲りの名君とされた彼とて、この程度が精一杯だったのである。

その彼がやった最大級の功績とは、皮肉にもその曖昧さを活かした貿易の振興と、裏貿易により南沙に軍事力をつけたこと（蓬莱学園学防軍の最有力就職先が南沙帝国海軍だった）、そして、家族を失うことにより、南沙人の反朝鮮人感情を煽ることだった。

元々、英子皇后と帝は仲が悪いことで知られていた。

結婚そのものが互いに望んだものとは言い難く、物静かで保守的

な帝と勝ち気であっけらかんとしている皇后ではウマがあうはずもなく、普通の夫婦ならとうの昔に離婚していただろうといわれており、当然、その間に生まれた二人の皇子と帝の仲もいつのまにか冷めていた。

１９６８年９月１１日、そんな英子皇后と皇子の乗った車めがけて爆弾を投げつけた者がいたのは、もしかしたら、帝にとっては幸運だったろう。

爆弾は車の下で爆発し、皇后と皇子２人は還らぬ人となった。

俗に言う『ショスコム・ガーデン事件』である。

死傷者２２名という事件は、当初、活動が過激化していた学生運動家によるものと見られ、面目を丸つぶれにされた南沙警察により学生運動家２２５名が無差別に礼状なしに逮捕され、うち１７５名が獄死するという事態を引き起こした結果、学生運動の１セクトと繋がりのあった朝鮮人グループを浮かび上がらせた。

関係者とその家族６５名が逮捕され、およそ拷問という言葉に連想されるあらゆる手段により、実際は皇帝を暗殺しようとしたものであったと判明。徹底的な追及の末、首謀者と実行者も逮捕、もしくは警察により殺害され、逮捕された者全員が死刑に処された。

わずか半世紀のうちに2人もの皇帝が朝鮮人に殺害、もしくは殺害されかかった南沙人は怒り狂い、１９７０年、国民投票により、今後９９９９年間、朝鮮人および朝鮮人が血縁に一人でもいる者、そして朝鮮人を3等親に持つ者は入国することすら許さない。いかなる事態になろうとも、この法律は変えることが出来ない。という、『朝鮮人排除法』を成立させた。

そんな彼がその後、たった一人だけ設けた子供が、今上、天照帝、小早川綾羅だった。帝は皇后を失うと、すぐに寵愛していた『更衣』と呼ばれる宮廷付きの女官、鷹嶺静子（１９４５－１９７４）をその後継として迎えたのだ。

とはいえ、彼女は正式な皇女ではない。正式な皇后のお気に入りだった彼女が、皇后となることを拒み、最後までその位に就かなか

ったからだ。
皇帝の妻としてわずか3年、ただ一つ、子を設けるという仕事を終えると、更衣のまま、短い一生を終えた。
そんな彼女が産んだ子は南沙の変革の申し子そのものだった。
１９７４年８月６日
南沙に住む者はこの日を忘れることはあるまい。
その日は『南沙海底火山群』が一斉に不気味な活動を開始した日であり、同時に綾羅が生まれた日だった。
この日こそ、南沙海底火山群が大爆発。およそ1年9ヶ月、綾羅がしゃべり始めた日まで続く、現在の南沙の原型が作り上げた日の始まりでもあった。

そう。彼女の誕生が全ての引き金となったのだ。
彼女は生まれながらにして『異常』な子だった。
「本朝最高」の美人と歌われた母譲りを倍にしてもまだ足りないほどの類い希なる美貌といい、その深い知識から始まって、何もかも、何をやらせても、同輩の子どころか大人と比較しても比べモノにならなかった。
なにより、幼い頃から、異常なまでに『カン』が冴えていることから始まって、通常の人間とは違った能力を発揮した。そう。彼女は一種の超能力者であり、『人間以上』の存在だったのである。
南沙ではこういう人物が歴史上数名確認されている。
不老長生という人類史上類を見ないこのテの人物の誕生は、南沙の歴史では「変化と繁栄」を意味していた。彼等は大抵百年を生き抜き、最長命は３９０歳だったという。
彼女の場合、同じように『変わり者』（南沙ではこのテの人間をそう呼ぶ）とされた母と、元来、『変わり者』だった皇祖の血が混ざった結果（ようするに先祖返り）、まさに人間以上の存在となっているとされているが、この作品の修正版を書いている２０７４年現在、彼女は丁度１００歳のはずなのに、若干２０歳前後にしか見

えないのは、驚嘆すべきではないことかもしれない（彼女は最終的に７７７歳で没。翌年転生し、再び南沙皇帝の位に就く）

その彼女が１０歳で米国旅行中にポケットのコイン一枚から作り上げたのが、世界最大の複合企業、リムゲードである。

現在、世界有数の力をふるう南沙帝国だが、２０世紀の流れは決して彼らに優しくはなかった。

残念なことに、その彼女の成人を待つことなく、元正帝はこの世を去る。

といっても、時期が悪すぎた。当時蓬莱学園を手中に収めつつあった綾羅は、女子高生という立場故、帝位に着くことが出来ず、皇位継承権を主張する貴族達の内戦を招いてしまう。

１９９５年、第７７７代南沙帝国皇帝に即位。南沙の実質的改革に動く。

南沙が国際的に一躍注目を集めるのはこれ以降のことだった。

政府首脳部はすでに内戦により消滅同然。軍司令部も同様の有様。

綾羅の初仕事は国家そのものの再建であった。

そして、彼女は中層部として活躍していた者達の登用と無能な上層部の時には流血さえ辞さない排除を実施。蓬莱学園学防軍スタッフの軍上層部大量登用はその象徴であった。

後に夫となる秋谷悠介を筆頭に、すぐれた人材を駆使した綾羅は、『アマテラスキングダムス』と呼ばれる体制を作り上げる。

９５年５月のＩＢＣ政府の国家総動員令発令に伴い、世界的企業のリムゲード本社が南沙へ移転し、世界的恐慌のため混乱した日本経済に見切りをつけ、日本より南沙に移民する者達が増大したために人口が拡大、この時までに人口は７０００万を越え、未曾有の規模で国力を拡大し続けていたのもまた強みだった。

人口の内、軍人は推定４０万と言われ、その力は決して侮れない。

日本政府は、ことあるごとに南沙を『軍政国家』と非難するが、実際、南沙は確かにその性格を持っていた。

内務省、国防総省、文部省、警察庁は確かに軍人・旧軍人が大臣もしくは長官として名を連ねている。日本政府はそれを負のイメージで煽ったが、『犯罪者に厳罰』『善人に幸福』という南沙政府の政治姿勢は、まさに善政そのものであり、批判すればするほど、日本と南沙の政治的レベルの違いが浮き彫りにされてしまう。

実際の所、軍政そのものは全くと言って良いほど問題ではなかった。地方自治政府間のもめ事の調停と国家治安の維持、そして外交にだけ国家が全力を向けていれば、あとは地方自治体が勝手にやってくれていたのである。

『小さな国家』それが南沙の実体。それを護るのが、南沙帝国軍の任務なのである。

南沙帝国軍は、１９９４年の宇津帆島侵攻により、日本領から南沙帝国領へと変化した蓬莱学園の武装解体から生まれた余剰、つまり学防軍を吸収合併していた。

南沙帝国軍は元来、陸軍もそこから派生した空軍も保有しない、純粋な意味での海軍であり、陸戦部隊は、陸戦隊と近衛軍しか存在しない。海洋民族としての伝統と誇りに則り、陸軍の存在を認めていなかった。

それが日本軍の侵攻を可能にしたという苦い経験を持つ。

対日戦争開戦時も兵力は海軍全体で８万に満たない弱小軍隊に過ぎなかったが、戦後２０年までに戦力を常備兵力だけで４０万まで増加させ、太平洋の中核的軍事組織となっていた。

陸戦隊と航空隊、そして水上艦隊から成立する世界的にも珍しい統合軍という概念で構成されている軍隊である。

陸戦隊は旧警務海兵隊と軍事研野戦軍が中心となり、航空隊は航空部と元ＳＳ航空隊、水上艦隊は海洋冒険部が主導権を握るようになった背景は、前述したとおり、内戦によるものだが、これが今となっては功を奏している。

現在、戦時体制下に突入しているため、兵員９４万５千、技量的

にも世界最高水準と讃えられる。

『なんとかしてコンタクトをとれっ！！』

日本はこれに飛びついた。ほかに打つ手はない。

政府は、南沙に頭を下げることで設置した大使館を通じ、犬猿の仲の南沙帝国政府に接触を謀り、なんとかして自衛隊に戦艦を供与してもらいたいと持ちかけようとした（実はこの時点では、彼等は南沙の保有する戦艦が如何なるものか、全く知らなかったのである）

成功の見込みは皆無に等しかった。

米軍も日本筋の情報で、戦艦の存在に注目した。

ＣＩＡも調査に乗り出し、旧ＷＢＦＣ関連の資料を元に、調査に調査を重ねた。

調査結果は、それが連敗に打ち沈む海軍の力強い味方となるであろう事を示唆していた。

４５隻のＩＢＣ戦艦部隊に対抗するため、ＷＷＢＦＣ破産管理人より購入、または予備艦となっていたオンボロ戦艦（戦闘に耐えられる艦の大半は、それ以前に既にＩＢＣおよび南沙が接収もしくは買収済み）１７隻を急ピッチで修理・調整中の米国海軍は、敵に対抗できるだけの戦力を1隻でも増やすために、何としても南沙軍の戦艦の出撃を可能とするよう日本政府に多大なる圧力をかけた。

最初はそれでよかったのである。日本に対しては制裁をちらつかせるだけでよかった。米国の大好きな、そして最も有効なカードたる棍棒外交は健在だった。だが、それだけでは、とてもではないが状況の変化についていけない事態が発生してしまったのである。

９６年2月１１日のマラッカ沖海戦、そして2月１４日のヴィクトリー島攻略部隊の壊滅という、『合衆国海軍史上最大の敗北』を経験したのである。

すでに南沙が確保していたトラック島に一大拠点を築きあげてい

たＩＢＣがマラッカに侵出。米軍と交戦したというこの海戦で、米軍は再編成がようやくなった太平洋第７艦隊に壊滅的打撃を被り、ＩＢＣ軍をしてマラッカ港になだれ込ませることを許してしまった。

結果、嵐のためマラッカ港に避難していた日本向けのタンカー４０隻を中心とした貨物船２００隻以上が、ほぼ無血で拿捕され、フィーランドへと連れ去られたのである（中には米軍の軍艦すらあったという）

ＩＢＣの大勝利。逆に言えば米軍の大惨敗。

悠々と船団に護られるかのように本国目がけて航行する独立艦隊は、世界の海を征する王者のように世界の人々の眼に映ったという。

ホワイトハウスと海軍省に投石が続く最中、さらに米軍にとって悪夢が訪れたのは、それからすぐのことである。

開戦以来続いていた『ヴィクトリー島大航空戦』が、この時佳境に入る。

功に焦った米軍は、ヴィクトリー島上陸計画『幌馬車』の断行を持って戦争に終止符を打とうと画策、マラッカの悪夢から一週間後にはハワイに待機中だった上陸部隊（海兵隊４万）をヴィクトリー島攻撃部隊に参加させ、一気にヴィクトリー島を目指した。増援を含め、空母４隻を主力とした艦船２５隻、航空機２５０機という大兵力を手にした米軍はミッドウェー沖に展開。強気の攻撃に打って出た。空爆の範囲は民間人居住区に拡大し、犠牲者も鰻登りに上昇した。

だが、これを逆に利用したのが、ＩＢＣ航空隊教導団に派遣されていた鷹嶺興忠大佐率いるＩＢＣ航空隊教導団、通称『壬生狼』だった。

激戦が続く中、鷹嶺はふと、おかしな事に気付いた。

ヴィクトリー島沖合に展開していた空母部隊が従来展開していた海域から姿を消したにも関わらず、襲ってくる。

彼は数日間を費やして敵空母の位置の割り出しを試みた。その当

時、ヴィクトリー島からミッドウェー付近に至る海域全体に狩野粒子を大量に含んだ厚い雲が存在しており、偵察衛星などで敵部隊の位置は割り切れなかった。

そして、ＩＢＣ軍情報部からついに念願の情報が手に入った。敵部隊はミッドウェー海域まで後退しているというのである。

この情報に興忠は色めき立った。つまり、重武装したＦ－１８の作戦行動範囲ギリギリの位置、しかも、敵は位置をごまかすために途中、定位置でターンしているというのである。

『敵は今、非常に無理な状態で攻撃している』

それが彼の分析であった。彼はその無理を有利に利用することを目論み、送り狼となって敵陣に進入、空母を撃破するという計画を立案した。

彼は一撃必殺の辻斬り的攻撃を企画した。

多数では敵に知れてしまうため、彼はこの作戦を、自分だけで実施することにした。

ＩＢＣ側にそれを止める理由はなかった。

成功すればそれだけ彼等の利益となる上に、万一失敗しても、損害は１機に止まる。

総司令部はその行動に協力し、生還率皆無と判断された作戦に従事する彼に誠意を見せる意味でも、また、これ以上損害を拡大させないためにも、彼の半ば自殺的なまでの攻撃への支援として、従来薄暗闇を利用して実施されていた『イブニング・エキスプレス』と呼ばれる米軍側の攻撃に対して、現有兵力全機で対抗。鷹嶺が躍起になって教えていた戦法がようやく定着したことも功を奏して、まず各部隊隊長機を数機をもって血祭りに上げた末、経験の浅い機から攻撃、敵部隊に通常より一層の損害を与え、部隊を散りじりにさせ、彼が紛れ込みやすい状態を作り出し、事実、彼は敵部隊に紛れ込むことに成功した。

彼の僥倖はそれだけに止まらなかった。

この日、米軍では、戦意の上がらぬことを懸念したマクリーン海

軍大臣が、激励のためこの艦隊を表敬訪問していたのである。
この己の義務に忠実な海軍大臣の演説のため、米軍は、受け入れ準備が遅れた第2次攻撃隊を収容し、入れ替えで夜間攻撃向けの第3次攻撃隊を発艦させる準備に入ろうとしていた。第2次攻撃隊の送り狼となった鷹嶺により、『ミッドウェー航空戦』、米軍兵士達が後に『デイドリーム・オブ・ワン・ミニッツ』（白昼夢の1分間）と呼ぶ対艦隊攻撃が開始されたのは、まさにこの時だった。
米軍自体が狩野粒子を大量に散布し、レーダー網を攪乱していたこと、そして、その影響で厚い雲に覆われていたことも、仕掛けた側にとって幸いした。鷹嶺の読み通り、上空を舞う機の大半がガス欠寸前、部隊そのものも消耗が激しいため、直援がほとんどない状態で、第2次攻撃隊の各機が着艦体制に進入した途端、満を持して彼等は行動を起こしたのである。
レーダー網をかいくぐって突入した敵機。
彼等がいったい何なのか。何が起きたのか解らない。もしくは海軍大臣に関係するイベントと誤解した第二次攻撃隊機と護衛艦艇を無視した彼は、『インディペンデンス』『ミニッツ』『ジョン・C・ステニス』『ハリー・S・トルーマン』の4隻目がけて突入。神業的な技量でアクロバットさながらに気化爆弾を投下、そのまま遁走した。
たった一通過のこの攻撃は、何が起こったのかわからないほどの素早さで終了した。
航空機が突き抜けていったと思った米軍将兵が次に目にしたのは、炎の塊と化した彼等の守護神、そして自分の姿だった。
通常型気化爆弾を改造した気化集束爆弾による被害は誘爆云々の問題どころではなく、艦隊周辺の酸素が一瞬にして消滅し、乗組員のほぼ全員を一瞬のうちに殺傷。そして爆風と瞬間的な急激かつ強烈な気圧の変化が、艦内のあらゆる物をなぎ倒した。
それが機関部にまで到達した瞬間、悲劇は起こった。
『念には念の入った攻撃』と評されるこの攻撃により発生した閃

光、そして爆発。機関にまで到達した破滅が、その瞬間、４隻の空母の原子力機関をほぼ同時に爆発させたのである。

『任務部隊は全滅。空母４、駆逐艦８、フリゲート艦１４戦没。戦死及び行方不明４万。敵に与えた損害皆無』

この日、遊説先で大統領は報告を受けた。

彼に出来ることは、この大敗北を米国国民、そして世界へと伝えること。

ＩＢＣ側の攻撃により、海洋汚染が引き起こされたと非難する程度だった（後に彼はＩＢＣの首都『ヴィクトリア』めがけて核攻撃を計画、実施寸前で阻止される）

米軍が一度に、しかもわずか1分間で一個艦隊を喪失という大損害を被ったのである。

センセーショナルな見出しが掲載された翌日のニューヨークタイムズ誌が報じた米軍の損害は、単純に艦隊一つが消滅しただけでなく、別の意味も持っていた。

海軍大臣以下の海軍最高スタッフがこの戦いで死亡したこと。そして海軍そのものの命令系統の混乱により、翌日に予定されていたヴィクトリー島上陸作戦の部隊を乗せた船団が現地に釘付けとなってしまったことである。

米軍を待っていたものは、ＩＢＣ側の総力を挙げた攻撃だった。

虎の子の海兵第１師団を初め、計４個師団約６万名と戦車５０両を残らず沈められるという壊滅的打撃を被った『セント・バレンタインデーの虐殺』と呼ぶこの戦闘により、米軍は投入戦力の９０％を喪失してヴィクトリー島近海より敗退。『ヴィクトリー島大航空戦』も、この日をもって終息した。

生還した兵士達にＩＢＣ国民は熱狂的な歓呼の声で答え、大統領が勝利宣言を行う背後で、米国議会は世論と共に紛糾し、米海軍将兵は、米国各地で国民から石を投げられた。

業を煮やした米国は、今までの打撃からようやく立ち直りつつあった空軍爆撃機部隊によるものへと切り替える事を決定。

その中で、レーダーも衛星誘導もない状態で実施される事となった作戦『太平洋の悪夢作戦』、ベトナム戦争以降、最大規模の爆撃作戦が立案された。

だが、その計画は出動した航空機の規模があまりに大きすぎる事が災いして、ＩＢＣに筒抜けとなり、２月１８日の『夢魔作戦』と命名されたＩＢＣのカウンター作戦を実施させてしまった。

その日、Ｂ－５２爆撃機６０機が展開していたテニアンとサイパンに、南太平洋の油田地帯に展開していると考えられていたＩＢＣの強襲部隊が出現。

米空軍戦略爆撃隊は、初参戦の前夜、奇襲を受けた。

全滅しても爆撃機を護る覚悟をした守備隊であったが、奇襲でまず空軍基地の核保管庫を押さえたＩＢＣ海兵隊は、核を保管庫から引きずり出し、「抵抗すれば爆発させる用意がある」と米軍側を恫喝。民間人を巻き込んでの戦闘を恐れた両島守備隊の指揮官の判断により、両島守備隊はその日の内に降伏。

米国は虎の子の爆撃機６０機と支援用の戦闘機５０機、そして輸送機２０機、輸送船３０隻を拿捕された。

翌日から暫くの間、両島近海ではヴィクトリー島に向けて飛び立つ航空機の大群と物資を根こそぎ腹にため込んだ輸送船団が目撃できたという。

数日後、米国は、彼らが恐れていたとおり、サイパンに貯蔵しておいた核爆弾が運び去られたことを正式に確認した。

空軍はこの失態に面目を失い、海兵隊も、降伏した指揮官を島民の命を救った英雄と讃えはしたものの、それは一時のことで、後は海軍の怠慢が原因と、陸海空軍三つ巴で中傷キャンペーンを展開した。

一方のＩＢＣは、爆撃機と核兵器を手にしたことを世界中に宣伝し、国連軍が核の使用を検討していたとして、国連を非難し、これから先、航空機による攻撃が一度でもあった場合、これを国連加盟

国のいずれかへ使用すると宣言。
　ことを国連も重く見て、以降の航空機による攻撃の一切を中止することを宣言。
　ここで核の使用を懸念し、戦争の早期終結を願うローマ法王ヨハネパウロ2世が仲介となり、サイパン陥落から一月後、対艦攻撃を目的とした航空機及び潜水艦（！）の一切の使用を禁止する趣旨の条約『ヴァチカン条約』が締結された（気化爆弾の使用禁止を盛り込んだ『モナコ条約』締結はこの半年後）
　この意味は凄まじいものがあった。
　ここ半世紀以上、対艦攻撃の主役として君臨していた航空機と潜水艦が使えなくなった、つまりは戦術どころか戦争のやり方そのものの変更を余儀なくされたのである。
　当初、この条約は航空機だけを目的としていたが、条約交渉中にヴィクトリー島の近くで行動・ＩＢＣの駆潜艇に降伏した米軍の攻撃型潜水艦のミサイル発射筒に戦術核弾頭が搭載され、あまつさえ指令があり次第、首都『ヴィクトリア』に対して無差別攻撃的使用を命じる大統領の命令書が発見されたことが問題となり、それをフルに活用した鷹嶺が法王を煽り、それを真に受けた法王が激怒。ＩＢＣ側の主張を汲む形で潜水艦までも盛り込まれたのである。
　航空機と潜水艦が使用可能な範囲は観測・偵察・救難・連絡。ただこれだけとなった。双方ともに、兵器としては格下げとなったことを意味し、同時に戦いの舞台は、これで完全に海上に限定されてしまった。
　悪夢を見たのは国連加盟国、彼らだった。

『世界にはナンサの戦艦が必要だ』
　米国海軍省政務官が、統合参謀本部次席参謀長と共に、未だに世界がどんなところかわかっていない平和団体がデモを続ける中来日し、防衛庁に招かれた際、憔悴しきった顔で、総理等の主要大臣と防衛庁および海上自衛隊の幹部の前でそう切り出した。

『どうしても、必要だ』

南沙は常にＩＢＣ寄りの態度を崩さなかった。

彼等独自のドミノ理論により、次に潰されるのが自分達だとわかっていたのだ。

彼等は戦艦（戦艦の建造能力を有していたのは当時、米国、南沙、ＩＢＣだけ。日本が建造技術を確保することは２０００年）から食料まで、ロシア・中国と協力して莫大な額の軍事援助を実施。船団も自国の艦艇で守り抜き、ＩＢＣ海軍がマラッカ海峡にまで展開する後ろ盾となり、世界各国に『太平洋に南沙あり』という認識を植え付けていた。

無論、経済は軍需景気に沸き上がり、未曾有の好景気を迎え、実質成長率は２ケタの横台を維持し続けていた。

反面、日本政府は困り果てていた。何しろ資源も資金もないのだ。実質成長率はマイナス二ケタの横台に乗り、失業者がちまたに溢れ、資源も枯渇。そろそろ配給制度を取るなどの措置を実施せざるを得なかった。

しかし、飽食の時代に生きた日本人の若者達に、配給などという言葉そのものが理解できるかどうかすら、正直不安とされていた。人権を楯に好き勝手する馬鹿者が大手を振って町中を歩ける今の御時世である。

米軍協力国として、日本も宣戦布告文書の中に戦争当事国として明記されていたため、「我々は関係ない」といっても聞いてもらえそうもなかった（どっちが勝っても賠償金問題は立ち消えになるだろうというのが一般論だった）

経済状況も悪くなるばかりだった。兵器輸出三原則に固執したため、かつての朝鮮戦争時の特需景気のように兵器で金を儲けるということが出来ないのだ。

その上、燃料は先の『シナ海沖海戦』のため、断続的に備蓄に頼ることが続いていたため、彼等自身、価格暴騰に頭を痛め、ＩＢＣ

を独立国として世界で初めて承認へと転じたロシア、そして豪州を含めたアセアン諸国（フィリピンを除く）との経済協力関係を利用した好景気により、何ら事欠かない生活を送る南沙を指をくわえてみているしかなかった。

これから暖房用の石油の消費が拡大する冬が来るというのに、このままではどうしたらよいものか。という状態であった。

『日本政府は昨日まで日本の一地方に過ぎないといっていたではないか』

米国はＩＢＣと日本の手前、南沙の独立を認めていなかった。

『我々としましては、南沙は日本の一領土として認識は堅持しております』

『そう。そのおかげで我々は大迷惑だ』

南沙は昔から船舶建造に力を入れてきた。

建国以来、試験的導入目的以外で海外から軍艦を買ったためしがほとんどないというのが、その力の入れようを如実に表している。

旧島の瀬田島海軍工廠を筆頭に、４００メートル級ドック３を保有するリルガミン造船所。６００メートル級ドックを保有する大神海軍工廠、この時点で一度に２５０隻の建造が可能だった。ＷＷＢＦＣ仕込みの低コスト・短期建造能力、しかも信頼性の高い船舶は建造する端から売れていった。

米国はこの能力を太平洋で展開する時自国艦隊の修復に充てたいと考えていたが、南沙がＩＢＣ側についたことでオシャカ、どころか、ＩＢＣ側の補給拠点となってしまったのみならず、南沙までもが対米戦に加わり、各地で米軍を圧倒しつづけため、大損害ではすまない損害を被っていた。

実際、米軍は開戦から半年で日本近海以外において制空・制海権双方をほぼ完全に喪失していた。

『我々はどっちでも良い』

ＩＢＣへの補給路の一つは露中－南沙－ＩＢＣと繋がる輸送路は

当然、日本近海を通過する。これを南沙帝国軍が護衛していたのだ。当然、輸送を阻止する役目は自衛隊のものとなる（輸送路は日本近海、一部は日本領内を通過する場合もあった）、南沙海軍にとって自衛隊ははっきりいって目障り。相手が自衛隊とわかると、接近するだけで無差別発砲により相手を撃沈。いままで仕留められた艦艇は実に８隻に登り、韓国海軍だと、わざわざルートを変更して全滅させることすらしていた（これを指揮していたのが田中雷蔵大佐である）こちらの損害は撤退する艦を追い回し、港に逃げるや港めがけて砲撃をかけてまで仕留めていたので、２２隻となる。

そして何より（米軍にとって日韓の損害などどうでもよかったのだ）、９５年に正式に南沙領に併合され、自治権の認められた蓬莱学園の航空部（実質的には南沙統合軍航空隊）が、ＩＢＣ空軍に教導団を派遣し、教官となっていた彼らが南沙の支援の元、『壬生狼』を編成、『バトル・オブ・ヴィクトリー』と呼ばれた大航空戦を戦い抜き、米海軍航空戦力に壊滅的打撃を与え、彼が尊敬して止まなかった前任の海軍大臣を消し炭にしたことを知っている新任の海軍大臣は口の端をつり上げた。

それをジョークと勘違いしたか、愛想とも苦笑いともつかない表情を浮かべた眉毛の長い総理大臣に、海軍大臣は容赦がなかった。

『兵力的には別だが、いざとなれば……あぁ、つまり、同規模で戦えば、少なくとも我々は、君達より彼等の方が格段に強いと考えている。世界のために皆が戦っているのに、ただ世界のすみにいるだけで、世界のためには何にもしてくれない役立たずよりはね』

日本側の面々は苦渋の色を浮かべた。

『しかし……』

『とにかく、自分達が彼等の上位に立つというのならば、南沙に戦艦を出してもらいたい。合衆国としては、それさえしてくれれば、制裁のような行為には出ないことを約束する』

『ですから、双方ともにすでに独立国家的要素をおびておりまして……』

『そんなことは我々の知ったことではない！！』
彼はテーブルを叩くと叫んだ。
『やらねば国交断絶！横須賀に待機している第３艦隊でＩＢＣの前に日本を降伏させてやる！！』
『そんな！』
『……自衛隊を出撃させてくれるとでもいうのかね？』
『それは……無理です』
『無論、全く期待してはいないが』
『ですが……』
彼はふと、壁に張られた世界地図を眺めた。
『君たちは役立たずだ。我々には戦艦がいる』
『しかし、戦艦とはいえ、その詳細すらはっきりと判っていないのに、なぜ貴国はそうも盲目的に欲しがるのですか？』
海上自衛隊幕僚長の席にすわっていた人物が口を開いた。
『正しくは２２隻。何隻かは先の大戦で日本からせしめて記念艦となっているがね。うち、相次ぐ実戦で現在戦線投入可能な艦は１６隻だ。しかし、彼らの戦艦は世界最強だ』
『はっ？』
『ニュー・ナガトクラス３隻。ニュー・ヤマトクラス２隻の上が存在している。ＩＢＣの戦艦「フリードリヒ・デア・グロッセ」と「ロスバッハ」とほぼ同時期に建造された世界最強の戦艦艦だ。本当なら我々合衆国が欲しい所だ』
『どこまで情報を仕入れているのでしょうか』
『我々の情報収集能力はあなた方ほどいい加減ではない。もっとも、南沙の情報管理は極めつけに厳しいからね。スペックまで詳しくわかっているわけではない。だが……』
カシャッ
彼はプロジェクターに情報を流させた。
『げっ！？』
日本側はそこに写し出された一枚の写真に驚愕し、そして幾人か

は腰を浮かした。
それは彼らの夢であり憧憬となった日本海軍の象徴の姿が写し出されていた。
浮かべる鉄の城Ⅰ
『スーパー・ヤマト型戦艦、砲は４９サンチ砲９門……強い』
『そんな馬鹿な……』
『世界は、この戦艦を欲している』

南沙外交省史上最悪の失態とされた対ＩＢＣ宣戦布告承認がなされたのがこの二週間後の国連総会であった。
時の全権代表外交省大臣時田大地は、完全な詐欺にひっかかった。簡単なことだ。
彼は捕虜交換条約の締結に来ていたのだが、その間に「対ＩＢＣ宣戦布告」を米国全権代表Ｒ・ニックに依頼され、断固拒否した末で捕虜交換条約文書に調印したのだ。
しかし、その文書がクセモノだった。
捕虜交換条約調印文書の後ろに南沙の対ＩＢＣ宣戦布告文書が隠されていたのである。
「この文書に調印したつもりはない」
当然ながら時田は抗議し、ニックのやり口に殺意に近い憎しみを込めて言い放った。
「こんなことがまかり通るようならば、外交に必要なのは外交官ではなく詐欺師だ」
これに対してニックは平然と言い放った。
「調印に際しては、中身をよく吟味するのは当然である」と。
この言葉に時田は絶句した。
文書調印はあくまで形式的なものであり、内容については既に事務官レベルで決定していると勝手に判断していたのは確かに自分自身である。しかも、調印の寸前、確かにニックは言っていた。

「捕虜交換と対ＩＢＣ宣戦布告をお願いします」と。
それを諦めの悪い奴だ。と勝手に判断していたのは自分の失態に他ならない。
時田はその失態がどれほど自らの国家国民に損害を与えるか、そして戦友たるＩＢＣを裏切ったという汚名を削ぐのにどれほどの努力が必要か全く予想がつかず、その場にへたり込み、護衛のＳＰに脇を抱えられた。
自分に注がれるニックの視線が自分を哀れんでいるかのように見え、そらせた視線の上にＳＰの懐の拳銃があった。
勝ち誇ったように背を向けたニックに対して、時田は鈍重そうな体型からは想像もつかないような敏捷さでＳＰの懐から拳銃を抜き取ると、ためらいもなくその引き金を引いた。
南沙と米国側ＳＰ同士の銃撃戦の末、ニックと時田の遺体が運び出された後に再開された国連総会は紛糾どころの騒ぎではなかった。
米国代表が総会へ顔を出した途端、各国の議席からは投げられるものは全て投げつけられ、あらゆる國の言葉で罵り声が続いた。
しかし、外交は残酷なモノである。
調印文書自体はどの國も有効性については否定できなかったのである。
国連総会の場において、米国の圧力の結果、ロクな論議もなされないままに、承認があっさり決定した。
自分たちの国が巻き込まれなければそれでいいと、朝日新聞も、同系列のテレビ局も、平気で書き立てた。
こうした馬鹿はともかくも、理性的な世界の国々にとって、条約承認は無理もないことだった。
ＩＢＣは強すぎた。
強すぎる存在は常に危惧され、自らに危惧が及ぶ前に始末しようと考える者はいるものだ。
決議の４日前、南沙沖で日本および韓国の合同船団を護衛していた米仏連合軍（欧州はこの戦争に徹底して否定的だった）とＩＢＣ

主力艦隊が激突。

そこに、この機に相手国を出し抜こうと画策した中国とフィリピン、ベトナム海軍が乱入し、挙げ句に同士討ちという、信じられない、まさに最悪の事態が発生し、国連軍が連戦連敗記録を最悪の規模で更新したのである。

これは、アジアよりの太平洋の制海権が、ＩＢＣに掌握されたことを意味していた。

これがパワーバランス的に自らの國の国益を脅かすのではないかと危惧する國を一気に増やした。実はその中に南沙も入っている。

相変わらず、国会での決定が延びに延びていた日本は、インドネシアのマハティール首相曰く『顔がないため』爪弾きにされ、今回の南沙側の経済的負担の全面的負担を余儀なくされた。反面に置いて、緊急に国連本部に核弾頭のおまけつきで来訪した天照帝は、徹底的に米国を批判し、事が済んだ暁には対米総力戦すら辞さない構えを見せて米国をけん制しつつ、ある演説をしてのけた。

それはＩＢＣ宣戦布告はやむを得ないが一度でも戦闘が実施され、事態が収束したらすぐに和議を結ぶ。という南沙の方針の宣言に他ならなかった。

マスコミから国連大使までを含めて、その気品と威厳、慈愛と、そして冷厳な、女特有の残酷さを感じさせる態度と、たぐいまれなる美貌を武器に徐々に国連の中核へと近づいていった。

欧州及びＡＡ諸国の大半は、既にリムゲード総帥としての綾羅を介して、ＩＢＣとは独立承認の調停が終了していたし、彼等の視点は、誰が戦争後の太平洋の治安を維持するのかを問題としていた。彼等は米国の覇権が減ることに賛意を示したのである。

だから、それを可能ならしめるためにも、米国を講話の席に引きずり出すためにも、たった一隻でも戦力が欲しかった。唯それだけとは言えども、彼等に何の負担もないのだ。あるのは日本だけである。どうなろうが彼等が知ったことではなかった。

第二部　海の女王

●海の女王　　南沙柱島沖　９月１２日

民間人が立ち入りを禁止されている大神軍港からゆっくりと離れつつある艦が一隻あった。

今は、これしか記さない。これ以外のことは、後に記す。

朝焼けの海をバックに航行する優雅にして洗練された容姿は、まさに芸術の名に値した。

だが、もちろん単なる置物でも飾り物でもない。飾り物としては高額過ぎる。

ただ浮いているだけで莫大なの維持費をたった1隻で食いつぶすほどの代物である。

無論、それに見合うだけの性能はある。副次的な余禄として、見るものがほれぼれするぐらいの美しい姿を持っていたとしても、ばちは当たるまい。

純粋な人殺しの道具としても。いや。殺しの道具だからこそ、美しいのかもしれない。

華麗な薔薇にはとげがあるものだ。

戦艦・ＮＢＢ－１１１。『大和』という艦名が与えられている。

のべ５万人の手を経て、すべてが異例づくめの中で、彼女は、９４年４月７日、奇しくも、先代大和が４９年前に戦没した日に産声をあげ、同年１２月８日の太平洋戦争勃発の日に統合軍水上艦隊第１機動戦隊に編入された。

歴史的には、ＷＷＢＦＣ最終艦として建造されたその姿は、オリジナルであるかつての大日本帝国海軍戦艦『大和』に勝るとも劣らない。

何しろ桁外れなまでにデカいのであるが、しかし、決して間延びしているとか、そんなことはない。むしろ実にバランスのとれた芸術的要素が加味されていた。

現代技術を作り上げた以上の頭脳と叡知と、そして野蛮の粋を集めた結晶。砲兵二個師団と防空一個旅団の火力に対艦型トマホークの直撃にも耐えるという無敵の装甲を与えられたまさに海を駆ける矛盾ー。

自称「良識派」から言わせると、巨艦巨砲主義の具現。万里の長城と並ぶ無駄の見本。対する軍事関係者に言わせると、人類の開発しえた機動兵器の芸術性の究極の結晶。

人により評価は様々だが、近ごろではその重要性は否定されなくなっていた。

ＩＢＣの驚異が南沙すら脅かすようになったからである。こうなると必要悪といわざるをえない。

事実、所有すらほぼひた隠しにしてきた大和を前線配備とした時から、この書が書かれている年に至るまで、いつの時代にもいる兵器マニアから国民、そして子供達の間まで幅広く、大和はその力強さ、美しさ、そして幾重にも秘密主義のベールでくるまれた幻想によって頼られ、親しまれ、愛されてすらいる。

初の大神基地入港、そして引き渡し式（お披露目）がなされるや、大和には熱狂的な固定ファンがついたのである。

噂は噂を呼び、尾ひれのついた大和の虚像は、不沈戦艦のお手本のようだった。

いくつもの根も葉もない噂が飛びかった。だが、それは悪魔で噂でしかない。一般誌は勿論、専門の軍事雑誌ですらその全貌を明らかに伝えたものは皆無である。

にもかかわらず、実際の大和は、それら民間に流布したどんな虚像よりも強力だった。

引き渡し式の席上、小早川綾羅によるシャンパン割りの儀式に続いて、水上艦隊司令長官藤島悠理少将は、次のようにいったもので

ある。

「諸君！我々はかつて空母『蒼龍』の出現に驚愕し、従来の倍以上の強力な火器を備えた駆逐艦『風』型改にまた驚愕した。しかるに我々は、もはや驚きというものに慣れてしまい、この先いかなる強力無比な新型艦が登場しても、もう驚くことはないと思っていた。だが、我々の予想は、実に好ましい形によって、今また完璧に覆されたのだ。この『大和』によってー」

巨大すぎるまでのサイズ、登場と同時に伝説と化した破滅的な火力。それだけでも十分に藤島長官の言葉を裏づけるものであろう。

だが、大和には、もっと別の、そして真の意味での強さがあった。それが今、この公海上にセッティングされた演習海域で試されようとしていた。

ゆっくりと演習海域を進む大和のメインマストには、南沙の軍艦旗が翩翻と翻り、優美なシルエットとあいまって、その姿は風格さえ感じる。

が、一見なにもないかのように進む大和の“眼”は、すでに姿も見せずに接近しつつある“敵”を、その視野の片隅に捕らえていた。

『狩野粒子濃度、低下しています。レーダーサーチレベル８可能です』

警告音が鳴り響く。

『ミサイル接近中！』

『大和』が、高速移動する物体を敵ミサイルと識別した報告がＣＩＣに流れる。

彼の“頭脳”は、ただちにデーターバンクにあるミサイル識別一覧表に、そのミサイルを照合した。

『照合完了。“ハープーン”１２発です。大和を取り囲む形に亜音速で接近中。予想される接触時間は３２秒後です。迎撃か回避を』

「迎撃する」

『迎撃体制とります』

迎撃のための複雑な演算を、大和は人間の手を患わせることなく、全く一人でやってのけた。しかもすべてが、コンマ何秒というほんの瞬きする時間にー。

『対空迎撃システム・オートスタンバイ完了。射撃許可願います』

「オーケー。ナツ。撃ち方始め」

ＣＩＣに射撃許可の申請が出される。オペレーターが許可のスイッチを入れた。

『了解。撃ち方開始します』

すると、ハリネズミのような大和の対空火器ーすなわち切れ目ない弾幕を張り巡らす垂直発射式多連装『ファウスト』型ミサイルと、正確無比に毎秒数百発の２５ミリ機関砲弾を射ち出すバルカン・ファランクス。４０ミリガドリング砲が、一斉に恐るべき死の火線を敵ミサイルに向けて吐き出した。さながら花火のスコールである。

これらの対空火器は、給弾ですらほとんど一切の人的要素を介さず、すべて大和の頭脳によって制御されている。恐れることを知らぬ自動防空システムは、肉薄するミサイルにいささかもひるむことなく、しかもその狙いは比較にならないほど正確だ。

大和の周囲で爆発が発生する。まるで彼女を囲む華のようにー。

ＣＩＣに敵ミサイル完全撃破の報告が入ったのは、その数秒後のことである。

これがもし戦闘機だとしても、大和の頭脳はそんな事情を斟酌するほどお人好しではない。疑問すら持たない。都合のいい所だけが人間的であり、悪い所だけが非人間的なのだ。統合軍が欲しがっていたのは、まさにこういった「兵士」だった。

これの初代艦長を勤めた綾崎悠矢大佐（当時：現大将）は、そんな大和をこう評している。

『まさに現代の人類が到達した理性と非理性の極致。知性と狂気の芸術的融合がここにある。たとえ、それが両刃の剣だとしても』

「完璧だ」
「大和」のＣＩＣでその男は眼を丸くした。
「まさに究極の兵器だ」
幾見一矢中佐。大和艦長である。
「ハープーンの奇襲攻撃を、一瞬のうちに撃破するとは……。何度見ても……いや、信じられれん……」
自分のはいた台詞が自分に返ってくるとも知らず、幾見は素直に感嘆した。
ひょっとしたら、もう艦長なんて必要ないんじゃないか？もしあったとしても、それは便宜上のことで、本来の艦の主ではないではないか。
その艦長が、平気で自分の立場を危うくするような自己否定のセリフをはいて憚ることがないのも奇妙な話だが、要はそれだけ大和の働きが見事だったというわけである。
「真田少将。あなたの作品はまさに芸術ですな」
幾見は傍らにいた３０代の青年にむけて称賛の眼差しを送って見せた。
「恐縮です。艦長」
そう答えた板さんみたいな男こそ、大和改装計画主任設計技師、いや、艦政本部最高責任者の真田だった。
「ナツ。お前の働きに艦長もご満悦だ」
メイン・モニターに映った人工合成の少女が微笑みながら、
『恐縮です。艦長』
と、ペコリと頭を下げた。
彼女はナツという。だが、彼女は実在の人間ではない。コンピューターが生み出した虚像である。そして同時に、この大和のすべての管理・運営を行うのが、彼女なのだ。
その範囲は砲術から操艦、万一の際の白兵戦指揮にまで至る。大和に配置されている兵員は２５００名。普通の軍隊でこの艦を運用しようと考えたならば、６０００名を要するはずである。だが、こ

の数なのである。
とはいえ、人手不足の状況はかわらない。予備兵力までこの中には含まれていないのだ。その穴埋めとして、砲弾の装填から発射、損傷時のダメ・コンまで、艦の機能のほぼすべてを、ここまでのレベルで自動化した艦は、世界中でも大和、ただ一隻だけだった。
説明が長くなってしまった。話を戻そう。

（破壊の女神か……）
幾見は自分のかつての上司の女性の別名をつい口ずさんでしまった。
「いっ、いや、たいしたものだよ。ＮＡＴＵ」
言い換えてみれば、彼女こそがこの大和なのだ。
Ｎｅｗ　Ａｕｔｏｍａｔｉｏｎ　Ｔａｃｔｉｃａｌ　Ｕｎｉｔ。
略してＮＡＴＵ。
艦の運営をほぼ全面的にコンピューターに任せることができるユニット。それが彼女なのだ。
「うっ、うん」
幾見はこのナツが少し苦手だった。なぜか。
どうやら真田は幾見が艦長となるを見越して、彼の恋人である秋元しおり大尉をモデルにナツのデザインを行ったらしい。おかげで幾見はなにか奇異なものを感じずにはいられないのだ。
無論、気の強いしおりよりは余程ましだが、それでは面白味がないのだ。
幾見は無理に気丈を演じている詩織の、時折見せる儚げなところが大好きだった。
彼女は裏を返せば弱い。それは幾見が一番よく理解していた。
ナツはある意味、しおりよりも少女らしい性格を有していた。そのしぐさや物腰は、まさにその具現だった。
だが、それまでなのだ。

並みの男なら満足できるだろうが、幾見はその中にいなかった。
ナツは、進んだコンピューター技術により自我すら与えられている。総司令部の判断により、彼女自身のみならず、他人ですらプログラムすべてを破壊しなくてはならないようにセッティングされた、人間への絶対服従の精神がなければ、彼女はまさに世界最大級の血の流れない生命として活動することすら出来た。
その管理費、年間実に5億円。
なぜこんな金のかかる機械を導入したか？答えは意外なところにあった。
総司令部の要求である。
彼等はこの大型艦導入に際して、それを補うために彼女を作ったのだ。そして彼女はコンピューターとしてではなく、乗組員のよきアドバイザーとして位置づけられ、乗員から高い信頼を得ている。
導入されてから1年はほとんど綾崎大佐の相手をしていた。
大和が動くことがなかったからである。
その間のナツの任務は、シュミレーションやチェスの相手から、小説の原稿の校正、経済に関する膨大な計算まで、極めて多岐に渡ったが、その度にナツは感謝で報いられた。その中でナツは人に使われる喜びというものを自覚していった。
「このシステムが一般化すれば、我々艦長なんてものは、お払い箱なのかもしれませんね」
「そんなことはありません」
真田はキッパリとそれを否定した。
「確かにナツシステムは軍艦の革命的システム足り得るでしょう。ですが、最終的にものをいうのはマン・パワーであることはいつの時代も同じです」
「……」
「私の作品は確かに絶大な評価を得てはいます」
本人が自覚していないにせよ、この技師特有な不遜なまでの態度が幾見のカンに触った。

「ですが、それすら、ほぼすべて、有能なクルーの乗った、コンピューターもロクに搭載していない旧型艦に敗北しています。コンピューターですら予測できない行動をとれる可能性が、人間にはあるんです。私は、それを今までイヤという位味わわされてきましたからね。そんな考えをマトモに信じることは出来ません」

「それを聞いて安心しました」

「……では、私はＭＣＲに用がありますので、これで」

ＣＩＣの後ろにある幾重にも防護された大部屋ＭＣＲに、彼女の本体がいる。

そこは厳重にガードされ、真田大佐などの限られたＶＩＰしか立ち入ることができない。

仮に侵入を企てたとしたら、神無月綾女親衛隊親衛隊長。そしてオットー・スコルッエニー大佐などが考え出せる限りの防御方法を採用した、幾重にも張り巡らせた自動防御システムの餌食となる。

数時間後、この中に真田大佐がいた。

静かだった。

静寂だけが支配する中に巨大なスーパーコンピューターを中心に、天井まである棚にずらりとコンピューターが並んでいる。無論、将来の改造に備えて増設する余裕が残っている。

その先にプログラミング・ルームがある。

室内に入った真田を、モニターに映った美女が迎える。

『今日はどうしたの？大佐』

明らかにＮＡＴＵとは違う、甘ったるい女性の声がスピーカーから響く。

彼女はＮＡＴＵと表裏一体の存在であると共に、ＮＡＴＵを含む大和に搭載された人工知能の本体であった。

ＡＬＩＣＥ－Ａｄｖａｎｃｅｄ　Ｌｏｇｉｓｔｉｃ＆Ｉｎｃｏｎｓｅｑｕｅｎｃｅ

Ｃｏｇｎｉｚｉｎｇ　Ｅｑｕｅｐｍｅｎｔの略。

それはまさに、後に『彼女一体で科学は2世紀進歩した』とまで語られる人類が作り出した最新の血の通った肉体を持たない人工生命体であった。

ＮＡＴＵは彼女の一つの面に過ぎない。そう。ＮＡＴＵの上位に存在し、そしてその行動を決定・統括する人格。それがＡＬＩＣＥだった。

故に、性格はＮＡＴＵと同じだが、ＮＡＴＵよりもきわめて冷酷な判断、報告・そして命令の実行すら、平然と、しかしきわめて正確に行うことができた。

これはＮＡＴＵがそういった事が出来ないと言うのでない。ＮＡＴＵのように相手を慮ることがない。否、できない。そういう意味である。

彼はキーボードの前に座った。

「ＡＬＩＣＥ、幾見艦長の指揮をどうみるか、今日中に上層部へ報告しなくてはならない。そこで君の意見を聞きたいんだ」

『うーん……』

ＡＬＩＣＥの映像はＮＡＴＵのような少女ではない。妙齢の美女である。どこか冷たい印象を受けるが、それは人が女に求める母性のある程度具現化された姿だった。見ているだけで落ち着く。保護してやりたい。そういった感じの。

ＡＬＩＣＥは考えた末、結論を出した。

『綾崎大佐に比べれば、もう論外ね。計算されつくした動きが不十分なの。しかも、私ですら理解不可能なイレギュラーな指揮がとれるのがすごいわ。それに比べて、幾見中佐は、水上艦の指揮官としての能力は、私の登録するデーターバンクの中では8位だし、2位にランクされている大佐とは比べようがないわ。艦長としても問題ありね。第一、事を先に読むという点では、同様の状況に置かれた場合、大佐より判断も指揮も遅すぎるし、適正さの点でも、大佐より大幅にポイントで差があるわ。大佐の場合、私はあくまで報告

係くらいに徹することができるけど、幾見中佐の場合、艦長の判断ミスを補正するので手一杯よ』

「艦長として使われることに関してはどう思う？」

『はっきりいえば不服よ。もう少し、いいえ、相当に有能でなければ、私は全力を発揮できないわ』

「今まで実力をフルに発揮できたケースを教えてくれ」

『了解。各シチュエーションごとに表示します』

しばらくするとモニターに三人の名前が出てきた。

Ｓｉｔｕａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｆｒｅｅｔ　Ｂａｔｔｌｅ

１位・藤島　悠理　上将　４５５ｐｏｉ

２位・綾崎　悠矢　大佐　４２１ｐｏｉ

３位・九鬼　篤芳　中佐　１０２ｐｏｉ

－以下は問題外として除外－

Ｓｔｉｕａｔｉｏｎ　ｏｆ　Ｐａｓｏｎａｌ　Ｂａｔｔｌｅ

１位・綾崎　悠矢　大佐　４８８ｐｏｉ

２位・藤島　悠理　上将　４２２ｐｏｉ

３位・野中　宏　大佐　１５１ｐｏｉ

４位・幾見　一矢　中佐　１０３ｐｏｉ

－以下は問題外として除外－

幾見が見たら死にたくなるような酷評が映しだされていく。それはある程度覚悟していたが、真田ですら驚かせるに値した。

１ポイント稼ぐだけでも、何ら天賦の才能がない通常の軍人ならば、相当な努力が必要である。だが、ＡＬＩＣＥの保有するデータ

ーバンクに登録された他海軍、こと、海自の軍人の多くが５０ポイント以下であることを考えれば、それでも統合軍指揮官の資質の高さはわかってもらえると思う。とはいえ、そんな言葉で救われる程、世の中は甘くない。

「こんなに酷いのか？」

『酷すぎるわ。オートマチックで動いた方がまだましよ』

「おいおい……」

『私だけなら、まず天照陛下と秋谷上級大将。この人がいまの所一番。それで次が大佐。後は藤島上級大将ね。小早川元帥は二人を完全に凌駕しているわ。艦隊戦でもなんでも、藤島長官と綾崎大佐の力は五分五分。二人がかりでようやくなんとか陛下に張り合えるセンにすぎない』

『すごいな。このポイントは』

『ええ。何しろ他の二人とは桁が違うもの……。まぁ、二人とも有能のお墨付きは与えられるわ。私、この三人の中で、誰か一人、艦長になって欲しいの』

「データーを少し変えた方がいいな。幾見の無能でもなんとかなるように」

『わかったわ』

デスプレイが点灯した。

『書き換え用のキーワードを』

真田はパスワードを唱えた。

「チェックメイト・キング２、こちらホワイトロック。カービー。リトルジョンを援護しろ」

『パスワード、確認されました』

プログラミング用に切り替わったモニターを見つめた真田は、「しかし、幾見の奴も」と、一人言のように呟いた。

（ナツは秋元をモデルにしたと思っているらしいが、実際は陛下だと知ったら、腰抜かすんじゃないかな）

「しかし、陛下もとんでもないものを導入させたな」
「そんなものよ」
幾見の一人言を小耳に挟んだのか、昼戦艦橋（大和では第１ブリッジという）の司令シートに座って紅茶を飲んでいる女性が否定した。
飯島愛をさらに美しくしたような、モデルで通りそうな程の端正な美貌の顔立ちが制服と見事に調和している。
黒髪をアップにした２０代後半の女の魅力に満ちあふれ、どこかしら気品を感じさせる優雅な物腰。
藤島悠理水上艦隊司令長官である。

「しかし、金剛クラス４、長門クラス2、リルガミンクラス3を足しても、戦艦はすでに２２隻の体制が維持されています」
この時期、金剛型４隻は相次ぐ船団護衛戦における損傷と故障が原因でドックに入ってようやく修復がなろうかどうかという瀬戸際だった。
「すでに艦隊随伴型防空艦が、天城、赤城、さらに2隻の確保できていると聞きましたが？」
「そう」
藤島はカップを置いて続けた。
「就役している天城、赤城、建造中の宮城、葛城ね」
「戦争は、数ですか」
「数と質よ。戦争は」
「艦の設計や改造をやるのに、まず慢性的な人手不足解消のための自動化なんてやるのはウチだけでしょうな」
「いずれ、どこの国でもやるようになるわ」
悠矢は穏やかな海面を見つめつつ言った。
「今、時代は変わりつつあるのよ……」

●逝く者、還る者　　南沙大神基地　午前１１時３０分

「いったか」

「いきましたね」

数人の士官が、他の者達とは少し離れた場所、基地レーダーサイトの脇にある海の見える丘の上で海を見ていた。

上空を航空隊の１編隊が飛行機雲を引きながら西の方へ飛び去っていった。

「全く、情けないことです」と、中肉中背、やや腹が出ている恰幅のいい士官がため息混じりに言った。

「壬生狼に行った連中の大戦果に遅れまいとしていたら、『雪風』の機関が、まさかあんなことになろうとは……」

彼の視線は、眼下に広がる軍港の一角、一隻の駆逐艦の入っているドックに注がれていた。イージス駆逐艦としてアーレイ・バーグ級を遙かに凌ぐ高性能艦とされる『風』型１番艦『雪風』である。

韓国海軍とやり合った際の被弾箇所を応急処置で誤魔化していた結果、今回の出撃を目前にして機関の一部が爆発事故を引き起こした悲劇の艦だ。

未だにあちこちで火花を散らしているのを見ると、工事は難航しているらしかった。

「もしものことがあったら、なんと幾見に侘びればよいのか」

「構うな」と、彼等の先端に立っていた士官が言った。その声は、どことなく、知性を感じさせる厳格なものだった。だからこそ、不思議と説得力があった。

「絶対に生きて帰ってくる。そう。絶対にな」

「そうありたいですな」

「心配なのは大将の方だよ」

「といいますと？」

「あいつ、大和の扱いには慣れていない。それに、最悪なことに、

大和が完全な不沈艦だと誤解している」

「はぁ……」

「でしゃばりはしないタイプだが、何しろ、運がないからなぁ。あいつ」

今回の派遣部隊の指揮官は、『提督』として、任命されたのが、海江田一郎大将であった。

だがこの男、実に運のないことで知られていた。実力そのものはあるのだが、どこかで必ずケチがついて、全てがご破算となってしまうのである。

こんな人物が何故、提督として派遣されたか、兵達は本気で不思議がっていた。

苦労の甲斐あってここまで登り詰め、大抜擢を受けた彼であるが、『海江田のダンナはもう運を使い果たしている』というのが、兵達の間でまことしやかに語られていた噂である。

彼が抜擢を受けたのには、理由がある。

第一に部隊派遣が決定した時、誰も本格的戦闘への参加があるとは考えていなかった事。そして第二に、彼はこの仕事を最後にクビにされるはずで、この仕事は彼に与えられた最後の華を与えてやろうと考えたことである。

「それに、幾見の馬鹿はな」

胸のＩＤカードに『海洋戦略研究室室長　綾崎悠矢』と書かれた大佐の階級章をつけた男がポケットから煙草を取り出し、ズボンのポケットに手を突っ込みながらライターを探しつつ、言った。

「戦争で死ぬタマじゃない」

「といいますと？」

同じく大佐の階級章をつけた男が、彼にあわせるように煙草を取り出しながら訊ねた。胸のＩＤには『水上艦隊第二水雷戦隊司令　田中雷蔵』と書かれている。

「あいつの死因は既に決まっている」

どうにも遠回りな物言いを好む男らしい。煙草に火をつけると、

その火を田中に廻してやる。
「ああ。こりゃどうも……。ハハッ、どうせ浮気がばれて秋元大尉にぶっ殺されるとかいうんでしょう？」
「それもあるが」口からは言葉ではなく、紫煙がこぼれ、海からの風に乗って流れていく。
「腹上死だよ。あいつは」大和艦長幾見一矢中佐の下の事情を知っている一同は大爆笑した。
「説得力ありますな」
「全く、なにが悲しくてあんな種馬みたいなのが第一線に」
「かねてから艦隊旗艦を任されてきたんです。大丈夫ですよ」と、胸のＩＤに『水上艦隊参謀第４課課長　山本透』と書かれた中佐の階級章をつけた男が言ったが、それは綾崎によって否定された。
「時代だよ」
「はっ？」山本には意味が分からなかった。
「確かに、ミサイルでケリが付くあの時代だったならば、あのバカでも十分だ。だが、そうならば戦争そのものがあいつが出ていく前に全てにケリがついていたはずだ。しかし、違う」
吸い終わった煙草を近くに控えていた従卒の持つ灰皿で揉み消す。
「今日の戦いは砲弾のぶつけ合いだ。ミサイルのボタンを押せば敵が勝手に潰れてくれるという楽に慣れた人間がそんな闘いに出ていくのだ。そう簡単には白黒つけるのは困難だ」
「狩野粒子……ですか」
田中が苦々しく言ったのを受けて、綾崎は頷きながら言った。
「あいつを産んでくれた母なる自然という奴は、つくづく性悪女だよ。その麗しき玉顔を殴りつけてやりたい気分だ」
海からの風はやや生暖く、雨の匂いを含んでいた。
「今まで、潜水艦と航空機主役の戦法ばかりがご熱心に研究されていたというのに、あのお陰で今や過去の産物になりつつある。そして、それよりもっと過去の産物を求めて我々は徽の生えたような書物をあさっている。それが最良の策だとしてな。こんな馬鹿な話

があるか」
「かつて、我々人間は、素手で殴り合う獣同然の戦いをしていたといいます」
その後を田中が続けた。
「しかし、道具を作るという、神の産物は同時に悪魔の産物でもあった。我々はその恩恵を使い、武器を作り、それを発展させてきた。決してこの営みに逆流はなかった。しかし、今、実際にそれが発生してしまった。誰が望んだわけでもないのに……」
「神様や仏様が怒っとるのかも知れまっすぇん」と、胸のＩＤカードに『水上艦隊参謀第２課長　神重信』と書かれた少佐の階級章をつけた士官が九州弁で口を開いた。
「知恵というものは神仏の授かりものなのに、それを良いことに、悪用して好き勝手やる人間に、怒りだしているのかもしれません」
「いつから宗教家になったんだ？」
「信教は自由でしょう。心のよりどころは作っておくべきです」
「おかしな時代だよ……本当に……本当に、な」
大和の姿は既に見えなくなっていた。

第二部　綾瀬提督

●人事交代　　9月28日

航海は順調。波もおだやか。
しかし―
ここ「大和」通信室は、上弦の月がきれいな夜中、柱島基地の水上艦隊総司令部とのA級重要通信の発信に追われていた。
「幾見艦長が倒れただと?」
「はっ、はい。現在軍医のオペを受けています」
通信室にはいってきた腕に赤十字の腕章をつけた看護兵が通信機の前に座り、その背後で、大和副長岩美隆雄少佐ら大和の幹部達が、真っ青な顔でモニターに映っている守屋実篤(もりや・さねあつ)准将に向かっていた。
「なんの病なのだ?」
「急性盲腸炎です」
「む?急性盲腸炎だと?……で、軍務に復帰するのにどれくらいかかる?」
「はっ、それが2ヶ月は必要と……」

ことのおこりは、昨日から腹部の不調を訴えていた幾見が、今日の午後になって突然倒れ、軍医による診察の結果、急性盲腸炎とわかったことだった。
幾見は今、手術の真最中なのだ。
艦長が人事不省になったのだ。このままでは作戦に相当な支障がでることは十分にわかっていた。

「……わかった。こちらでも検討を重ねて、後任の人事をおって発表する。海江田提督。それまで、現在のところ君が一番立場的に上だから、君が臨時に指揮を執りたまえ」

「大和」は、現在のところ、ようやく戦闘艦としての機能を確保しつつある状態で戦闘に就くはめとなっていた。

水上艦隊は、開戦初期の段階においては、きわめて人的資源にめぐまれていたが、艦隊への急激な配備が、そのプールを一時的に枯渇させてしまっていた。しかも、長年軍務についていた連中は、「大和」のような大型艦よりも、巡洋艦や駆逐艦、フリゲイト艦といった扱いやすい艦を好むため、大和に配備されるのは、よほど特異な原因がある連中ばかりだった。

例えば、副長の岩美はダメ・コンについて一言の論客といえたが、それ以外には大した能力を有していない。砲術長の天城冴子も、航海長の佐々木一貫も、機関長の奈良元道夫も、みな似たり寄ったりの一芸に秀でただけの連中だった。

通常、旗艦は前線に出ることはまれである以上、前線に出る機会の多い多目的艦に率先して人員が回されたため、大和に乗り込む連中は、技術はあるのだが、それなりにクセのある連中が揃っていた。

「どうするよ」

「どうするってったって、仕方あるまい。敵さんがこの状況で襲ってこないことを祈るしかないな」

「そうだが……ったく、艦長も大事な時にとんでもないことになってくれたもんだ」

兵達は、一人で意気込んでいる海江田提督の姿をチラリと見て、彼に聞こえないように囁き合った。

「海江田のダンナの不運に感染したに違いない」

「幾見艦長も気の毒に」

「大丈夫かしらね。不運の固まりが乗ってるのよ。今の大和……」

●救難信号　大和通信室

「ここんとこ不作だなぁ…」

木原里美二等兵曹は、自分に割り当てられた通信システムを前に、次々と無線のバンドを変えていた。

（出港前は公安の大失態がとれたってのに…）

そう、彼女はその上を飛びかう無線を盗聴しようとしていたのだ。

高さ９０メートルに達せんという通信マストを筆頭とする各種通信設備は、通信上の受発信の面で、絶対に事欠くことはなかった。

ここ大和の通信室は、大和自体が「旗艦」であるだけに稼働率が極端に低く、通信任務も特にないという立場にあるため、こういった悪戯には格好の場所といえた。

だが、それだけの装備を持ちつつも、取り扱う通信が極端に少ないというのが、少なくとも木原にとっては不満だった。

何しろ、ほとんど無線封鎖状態での航海だ。

「……時間が時間だからって……もうっ！なにかないの！？艦長がしおりちゃんにふられたとか！狩野粒子濃度がこんなに低いのに！！このままじゃ……ん？」

不満と暇が高じたのが功を奏したのか、彼女はひとつの通信と遭遇できた。

モールス受信中を示すＬＥＤランプが点滅していたのを目にしたのだ。

「おやおや、どこの坊やがやってるやら。ハムかしら？」

彼女は、モールス信号に一種の懐かしさを感じながら、解読のメモを取り始めた。

（どんなことかしら？）

彼女自身、頭からこの程度にしか考えていなかったのだが、それが結果として間違いであったことを、そして、繰り返し発せられる文章を読み返しつつ、それがどういった重要性を秘めているのか、はっきりわかった。

『発・イギリス　セージ海運ポセイドン号　宛・付近ヲ航行中ノ全船舶　我、敵艦隊ノ攻撃ヲ受ケツツアリ、ＳＯＳ、ＳＯＳ』

木原は規定通りに記録をとると、艦内通信用インターホンをとった。
発信位置は、そう遠くはなかった。

●同日　２１時５０分
ルルルルルー
（こんな時間に……）
入浴を楽しんでいた藤島悠理上級大将は、バスルームから水滴を滴らせながら出て来ると、書類の山積みになったデスクの上の電話をとった。
「私だ。……何？……ふむ…わかった。大至急陛下にもご報告を、それから、ソロン根拠地隊司令部に緊急電で、全艦艇出撃体制のまま、出港を差し止めるようにいえ。出港している分には、同様に戦闘体制のまま、大至急基地に戻るように指示を」
受話器を戻そうとして、肘が書類の山に当たり、バサッと音を立てて崩れる。
デスクの上に纏めて置いてあった見合い写真の束が床にこぼれた。
「あっ……」
藤島は、じっと写真の男達を見つめていたが、クシャミをしてからそれらを蹴飛ばした。

●同日　九重基地
「はっ、はいわかりました。大至急、閣下にお知らせ致します」
「エラいことになったな？」
「ああ。所で、どこに連絡つければいいんだ？」
その一言に、その場に居合わせた他の隊員は全員が顔を見合わせた。
誰も自分の司令官たる者の居場所を知らないのだ。
「親衛隊に聞いたほうがいいかな？」
「……あっ、そうだ！」

女性隊員の一人が、そういって外線をどこかへ繋いだ。

●同日　某所

高級の上に「超」がつきそうな部屋のダブルベットの上に裸の男女がいた。

「……というわけだ。いかなくちゃなるまいな」

特殊部隊用小型通信機を脱ぎ捨てていた服の内ポケットにしまいながら、男は不服そうに彼を見つめている女に言った。

「……なにが、というわけよぉ……」

女は拗ねたように男を睨つけた。

赤い瞳がいじけたような光を孕んで男を睨んでいた。

「3ヵ月ぶりなんですからね……ずっと我慢してたのに…」

「まっ、そうすねるな…あとで可愛がってやる」

「……もう」

●大神基地水上艦隊総司令部

「幾見がつぶれた？」

「なにを考えてるんだあの馬鹿は」

幾見の先輩格にあたる連中は、口々に幾見をこき下ろした。

「まあそういうわけだ。あればかりは幾見中佐が管理できる問題ではないから、責めるに責められないけどね」

「では、幾見中佐は不問ということで？」

「馬鹿おっしゃい」

藤島はキッパリとそれを否定した。

「性根が弛んでる証拠よ。後方へ戻ってきたら、たたき直しておやり。あの子は叩けば叩くほど伸びる子だから」

「はぁ……」

「さて、問題は後任の人事よ。守屋准将。誰かいいのがいるかしら？」

「うってつけが一人」

「誰？」

「綾崎大佐です」

その一言に、会議室はざわめいた。

海洋冒険部とかけ持ちであり、海洋冒険部と海兵隊双方の教導隊教官（前者は潜水艦隊教導隊副長、後者は水上艦隊教導隊顧問官）と、双方共同の対潜水艦戦闘研究室の室長を兼務しているため、現在の所、この場には居合わせていないが海洋冒険部の参謀本部参謀総長に就いた経歴がある逸材だった。

元海洋冒険部潜水艦「はるな」艦長にして、故風祭少将を潜水艦戦闘で撃沈した唯一の男。少将と共に『海洋冒険部潜水艦隊の双璧』と賞され、潜水艦戦闘のみならず、あらゆる方面に精通したその作戦立案能力は、綾羅には遠く及ばないものの、世界的スタンダードで考えても「最高」の部類に入っていた。

南沙動乱の際も、１２隻もの反乱軍側潜水艦隊相手にわずか1隻で大立ち回りを演じ、既に水上艦隊では藤島以外に負けたことがないところまでいきついていた。

ただ、恋愛問題が原因で重職から外され、現在は閑職に甘んじている。

「はい。幾見中佐が大和に赴任する前まで、大和の公試や乗組員の熟練訓練も指揮していました。大佐の腕前からして、大和に関しては、幾見中佐より癖を知っているはずです。それに、原潜乗りとはいえ、あらゆる面において幾見中佐よりよほど信用できます」

「しかし、綾崎大佐は海洋冒険部との関係で問題が……」

異論が上がった。当然である。綾崎は対潜水艦戦闘の運用研究と、その教育の名目から、海洋冒険部から借りている身柄なのである。

よく言えばお客様。

悪く言えば半端者。

教育中心の公試でさえあれほどもめたのに、そんな人物に実戦において艦隊旗艦の運用を任せるのは、艦隊司令部としては不満があるのが当然である。

「大丈夫よ」
それを軽く藤島はいなした。
「坊やには悪いけど、あの子じゃ、この作戦、荷が重すぎるんじゃないかって。異論、出撃前だって出ていたでしょ？」
「それはそうです。幾見も一応、若手ではトップクラスの人材ではありますが、経験が浅すぎます。偶然にも大和の艦長でなければ、自分が出ている所です」
「でも、あなた達の中で大和を扱ったことのある人材がいない」
『南沙動乱』と長期戦における幹部級軍人の大量喪失のツケがこのような処に出ている。
彼等は扱い慣れた艦から離れることを嫌ったし、何より、大型艦は扱いが難しく、また、部下が余りに多くなるが故、職務・職責も増える。なにより艦隊旗艦艦長としての責務と技量も求められる。
だから皆、将来的に使える人材となってもらうために、ある程度技量があり、そして任務に忠実である若手に艦長を任せることにしたのだ。
綾崎と藤島に鍛えられたというか、イジメられていただけあり、腕はこの場に居合わせた連中と比べても、決して遜色がなかった。
選定の上でも文句はなかった。
とはいえ、いくら何でも急病までは幾見の責任とは言い難い。
「大和の癖を知っているのは、坊やの他には、ソロン島防衛に当たっている角田大佐、文句の出ている綾崎大佐に、後は私か……」
「閣下はだめです」
「だめ？」
「司令長官自ら御出馬とあっては、我々の立場がありません」
「そうです。自分は天城級の新型艦の艦長就任が決定しております。自分はその程度の規模の艦しか扱ったことはありませんが、しかし、長官が出られるのならば、僭越ながら自分が」
『その程度』といえども、天城級は全長２７０メートルの戦艦並の大型重巡洋艦である。それを『その程度』と呼ばせてしまうとこ

ろに、この艦隊の恐ろしさがあった。
「いえ、自分が！！」
「いえ！小官こそが適役であります！」
彼等は保身のために言っているのではない。上官を見殺しにしてよしと出来るほど、落ちぶれていないだけのことである。
陣中よりも矢面に。それが彼等のモットーだった。
彼等もまた、統合軍の誇るべき軍人達であった。
ただ、それだけのことである。
「でも、出来るだけ事情に精通した人材の方がいいわね」
彼等は皆黙った。意地が通るほど、戦場が甘くないことは、彼等とて解りきっていたからである。
「綾崎大佐で文句ないわね？」
「……はい」
「今すぐ赴任出来る？」
「現在、休暇中ですが、居場所は把握しておりますので」
「印税生活させてちゃ、もったいないものね」
藤島は、大佐が作家として潜水艦物を中心とした軍事小説や恋愛物から政治色の強い物まで、様々な著書を多数出版しており、印税によって居合わせた将官の中で一番の高給を取っていたことを皮肉ったのである。
「わかった。まかせるわ」

会議は人事の決定で終了するはずだった。だが、そこに一人の通信士官が入ってきたことで、事態は一変した。
彼はまず守屋に通信書を手渡した。守屋の顔色が変わる。
「准将。どうしたの？」
「大和からの極秘通信です。先程、硫黄島沖で英国船籍の輸送船が撃沈されました」
「……ＩＢＣも本気ね」
「大和の間近です。いかがなさいますか？」

「秋谷さんに大至急連絡を。これは大和一隻じゃ荷が重くなりそうよ」
指示を出しつつ、藤島は思った。
（今夜は長い夜になりそうね）

●帝都第３区高級士官官舎メゾン・ド・ソレイユ　３０２号室
プルルルッ
クラシックのかかった室内に、電話のベルが響き渡った。
「はい……はい……は？非常呼集？今から？九重基地？……２００までに……了解しました」
彼は時計を見た。
「あと３時間か」
「なにか、あったんですか？」
台所から作りたてのパイと紅茶をもって来た三船真名が、綾崎が手を伸ばした先にあるタバコの箱をダメとかっさらう。
「ん？ああ。３時間以内に遺書書いて九重基地に出頭しろだとさ」
艦隊司令部でないのが、綾崎には引っかかった。
「招集……ですか？」
真名の瞳が悲しそうに彼を見つめている。
綾崎は真名を抱き寄せると、やさしくキスをして、その耳元で囁いた。
甘い女の匂いに鼻腔をくすぐられる。
「なんともいえないが、ただ事ではないな。それにしても…」
「？」
「人使いが荒い」
「でも、お仕事は頑張らなきゃ」
「おかげで真名とエッチする暇もろくにつくれない」
「もう……」

●帝都　九重基地地下５０階（中央戦略指揮プロック内）戦略会

議室

九重基地と呼ばれるこの基地は、南沙島に多くの基地を抱える統合軍の最大の基地である。

基地と言うが、直径2キロの八葉蓮華の外側に五芒星を描き、最外縁にも円を描くというまるっきり中世欧州の城郭都市を思わせるその街並みは、万一の際の市街戦まで検討された挙げ句に作られている。決して美的センス云々の問題だけで語れるものではない。

戦略指揮施設を含む国防の重要機能が、地下５００メートルに達する迷路のような溶岩洞穴を破壊して作り上げた地下施設の中に収納されている巨大な基地。

幾層にも重ねられた特殊樹脂による装甲に護られ、核の直撃にも耐えるその強靱な地下施設の中、その中でも重要とされている『中央戦略指揮ブロック』

政府・軍要人の大多数を失った『南沙動乱』の教訓が活かされた基地にして米国のＮＯＲＡＤ以上とされる南沙帝國軍の最重要施設に指定されているのが、ここだった。

そこでは、深刻な顔をした将校達が顔をつき合わせていた。

会議の上座に大元帥の階級章をつけた軍服を着込んだ綾羅がいた。

綾羅は前述した業績からわかるように、ただの財界人でも軍人でもなかった。

彼女は世界史上に残る、あらゆる意味でもまさに『設計者』であり、『建設者』、そして『芸術家』であった。

彼女は無から有を作り上げたと言っても良い。

手の中のコイン一枚から経済的制裁だけで一国を滅亡させることもできる世界最大の企業を作り上げ、わずかの艦隊を一大艦隊へと仕立てた。

南沙、リムゲード、そしてヴィクトリー島、これらの繁栄は、彼女の設計と建設のあってのことであり、その意味で、彼女はそれらの制作者と呼べた。

混乱する世界経済の盲点に彼女は目を付け、それを逆手に取るこ

とで経済的に躍進し、『一国を防衛するに足りる』海軍の建設に関して、彼女は出来る限り少数で運営できる高速艦を要求した。普通の駆逐艦よりやや小型であるが、運動性を向上させ、極端にいえば軽捷な狼達をもって大型でミサイルが主力の犀の群を襲おうという発想を立て、その元で艦隊を創った。

狩野粒子という僥倖の下、その考えはものの見事に成功した。

さらに綾羅は人事の面でも見事だった。

人材の適材する所を一見の元に見破り、そこに配置し、その実力が発揮出来るように配慮したのである。そして、無能な者は容赦なく更迭した。

おべっか使いを排し、アーダベルトのような有能なる者は、それまで実力はあっても境遇に恵まれなかったとしても、一国の大統領の地位をもって報いた。

学防軍の運営においても、『影の総大将』と呼ばれた秋谷悠介に実権を握らせ、あくまで自分は『いるだけ大将』の地位に甘んじた。各部隊の指揮官は海兵隊そのものは栗林、外洋艦隊は藤島、航空隊は新田と、それぞれに掌握させた。

彼女にとって、それらは大した事ではなかったのである。

自分がやらねばならないことは他にある。これは決して、過信ではなく、現実的な判断が出来る彼女ならばこその見方であった。

それが、各種計画の実行という形で現れ、今日の世界となっている。

その最高傑作と言うべきが、南沙の隆盛だった。

まだ２４歳である。

自分では『老けた』といって２８歳の藤島の眉間に皺を寄せさせている『水晶を銀の彫刻刀で細工した』ようなまさに『芸術品』というべき美貌の仮面の内側にあるもの、それはまさに、人間以上の力であった。

「３０分前に米軍が付近を漂流中の乗員を発見。沈没もしくは拿

捕されたことは確実と思われます」
「なにがおこったというの？」
「不明です。ただいえることは、客観的に見て、ポセイドン号を含む5隻の船団が、複数の艦船によって攻撃もしくは拿捕されたということだけです」
「細かい情報がないとなにがなんだかわからないわね……藤島長官。情報分析と報告書の作成を急いで。それから、艦隊へはどのような指示を？」
「現在航海訓練中の艦はすべてソロンもしくは当基地に退避命令を発令させました。第1機動艦隊は帰港までに5日はかかります。ソロンは現在、事態が一段落つくまで、警戒シフトをしいています」
「うちで相手は荷が重いでしょうからね。新田長官、航空隊は？」
「偵察機を各方向に飛ばしておりますが、季節柄、狩野粒子雲が発生しており、早期発見は困難な状態です」
「やはり、ＩＢＣでしょうか？」
「この太平洋でこんなマネするのって、それくらいでしょ？」
「英国船籍ですからなぁ」
「まぁ、韓国やオーストラリア、米国が第3艦隊と大西洋艦隊の一部までわざわざ引っ張ってきて共同戦線はるって方針で動いてるし、なんとかなってもらわなくちゃ」
メイン・インテリジェンス・モニターに映しだされた国連軍とＩＢＣの展開戦力想像図を見ながら、綾羅はため息混じりにいった。
「いい加減、商売に響いているものねぇ」
「マギは全会一致で米国の戦略的敗北の判断を下していますが、陛下はあの連中で勝てるとお考えですか？」
マギとは、第六世代の有機コンピューターに、個人の人格を移植して思考させるシステムである『人格移植ＯＳ』を初めて搭載したＡｌｉｃｅの発展版。独立した人格を持つ三基の試作型スーパーコンピューターであり、三機は、それぞれ『バルタザール』・『カスパー』・『メルキオール』の名称で呼ばれている。

何らかの決定を行う場合、３基の合議の後、合議モードと呼ばれる多数決で決定するシステムであり、南沙基地の運営・管理のみならず、軍事目的以外の政策決定をも実施することがある。

大和搭載型のＡＬＩＣＥシステムを３つ組み合わせてさらに発展させたようなコンピューターを越えたコンピューターである。とはいえ、綾羅は戦略会議には参考程度としてしかマギの参与を認めていなかった。コンピューターの計測を覆す人間の恐ろしさを知っていたからである。

「まさか」

彼女はあっさりとそれを否定した。

「とにかく、アメリカがもう一回痛い目にあって、交渉のテーブルについてくれるといいってことよ」

そこに、参謀諸帯をつけた情報管理局所属の士官が入ってきた時、居合わせた将官達は、一瞬嫌な予感に包まれた。

通信書に目を通した綾羅は、一瞬考えるような顔をした。

「なにか？」

「１時間前にね……」綾羅はやや投げやりに言った。

「はぁ」

「韓国海軍がＩＢＣの別動隊と交戦状態に突入。ぼろ負けしたって」

「それでは……」

「戦略上は大した問題はないわね。国連側が不利に立たされていることに何も代わりはない。大した事はないと思うけど、情報の分析を。綾崎大佐はまだ？」

「ただ今、参りました」

入口に立った綾崎が敬礼して、控えていた秘書官（一応将校）に小脇に抱えていた大きな封筒を手渡し、短く何か指示を出した。

「遅かったわね」

「申しわけありません。情報管理局に出向いておりました」

婚約者との甘い一時は告げなかった。そのまま、綾羅と向き合う

位置の空席に着いた。
「そう。ご苦労さま」
「いえ。ところで陛下。実は一つ、願い出たいことがありまして、よろしいですか？」
「いいわ。人払いは？」
「結構です。単刀直入に申し上げます。可動戦艦全艦、「天城」級2隻、「氷川」「須磨」と輸送艦5、これらの護衛に当てられる艦、そして、二水戦をお貸し願いたい」
この綾崎の申し立てに、居合わせた将官は一様に視線を彼に集中させた。
無論、戦力の集中と戦果の徹底拡大という戦争の理論からすれば全く問題がない発言とはいえた。
だが、問題だったのは、彼の要求した艦船の規模である。
それは、主力部隊が訓練航海中である現段階において戦線投入可能な艦艇全艦の出動を願い出ていることを意味していた。
現在、綾崎の要求した部隊を動員すれば、残される艦艇はフリゲートが中核にまで減少してしまう。
南沙は急激な人口拡大と比例するように軍事的拡大を実施していたが、一時的と考えられていた人的プールの枯渇から脱却しきれず、やむを得ず、各地で『月月火水木金金』と呼ばれる猛訓練による編成訓練が沿岸警備隊を含めて実施している。が、技量に関しては妥協を知らない司令部の要求するレベルには到達していなかった。こと主力艦艇についてはその傾向が深刻だった。つまり、未だに実質的な意味での海軍力とはほど遠いレベルを脱却しきれていなかったのだ。
その中でダイヤより貴重な戦線投入可能艦艇の全力出撃を要求してきたのだ。
だが、反論は出なかった。
敵は少なくとも強力な艦艇を１００隻以上保有する世界有数の大

海軍国である。大和一隻ではいかんともし難い事態が目前に迫っていることを、彼らも感じ始めていたのだ。

「なぜ？」

だが、綾羅はその説明を求めた。訳は彼女自身が一番よく判っている。だが、あえてそれを聞いておきたいという悪戯心が彼女には存在していた。

「やつらには戦艦ばかりではありません。巡洋艦や駆逐艦もあります。それらがここ数日、行方をくらませております」

ご覧ください。といいながら、綾崎はスクリーンに何かを映し出すよう、指示を出した。

航空写真だった。軍港のもののらしい。港には大小の艦がひしめきあっていた。

「軍港ね。ヴィクトリー島の」

「はい。これは１０日前のものです」

写真が次々と変わっていく。位置は違うが、どうやら同じ２つの港を写したもののらしい。

「それぞれ良港として知られるネルソン湾とトーゴー湾です。１０日前、７０隻近い艦船が双方にありましたが……」

５枚目と最後の６枚目の写真に至ると、なぜか艦の姿が激減していた。

「４日前、米軍が最後に撮影したものです。衛星はすでに撃墜されているため、彼らが危険を冒して強行偵察を実施して撮影したものですが、ここ数日、こと駆逐艦クラスを中心に艦が港から姿を消しています。情報管理局に出向いたのは、この情報を引き出すためだったのですが、どうやら作戦行動中と思われます。結構な数です。大和単艦で行動するのは危険すぎます。確かに、大和は強力ですが、完璧とはいえません」

大和を単艦で参加させることには、当初から危険視されていた。だが、それが実行されたのは、護衛につくはずだった二水戦の旗艦「雪風」の機関がイカレてしまったからだった（突貫工事でなんと

か昨日になって修復がなっていた）

「それで、護衛用にってわけ？」

「はい。それと、いざというとき、攻撃にも参加してもらいたいのです。四方八方から魚雷ということがないとも限りません。この際ですからはっきり言っておきますが、他国軍の指揮下では大和はどんな戦いを強いられるか、わかったものではありません。昨日の米海軍の補充部隊が韓国海軍の楯にされたことをお考え下さい」

昨日の朝方、哨戒中のＩＢＣの部隊と、マーカスへ向かう途中の米韓の艦隊が激突、韓国側の１艦が撃沈された折、彼等は米軍を見殺しにした。

韓国海軍の指揮を任された指揮官は、大統領の一族の出というだけで軍法会議にかけられようともせず、韓国では「危機を勇敢に脱するよう、部下を見事に指揮した」英雄扱いされていた。

確か、金とかいったかな。と、綾崎はふと思い出した。

唾を吐きかけてやりたい気分だった。

「大佐。３日目からの写真はどうした」

「米軍のステルスやブラックバードは接近するだけで撃墜されるようになりましたので、中止されたのです。その日の内に、ヴィクトリー島付近に配置された米軍の潜水艦が緊急無電で小型艦多数発見の報告の途中に撃沈されております」

「そろそろ本腰入れ始めたってわけね」

「連中も尻に火がついたと判断すべきでしょう。ご炯眼。恐れ入ります」

「なぜでしょう」将官の一人が尋ねた。

「ビジネスよ」

「ビジネス？」

「連中は鉱物産業で生計を立ててるの。となれば、戦争状態が長引けば、取引ができないもの。干上がるわ。でも、独立をつぶされれば、産業はアメリカ、ユダヤ人に持っていかれる。失業の心配だけはないかも知れないけど、それじゃ困るでしょ？そろそろケリを

つけて、戦後処理をより有利に進めたいってハラね。きっと」
「一大決戦でケリをつけるとは。なんて前近代的な……」
「いや。そうでもしなければＩＢＣもアメリカも持たないのだ」
綾崎がその不信を否定した。
「すでにＩＢＣは大型艦の戦線への連続投入で備蓄してある石油の大半を消費している。タンカー襲撃も、結局はそのためなのだ。こと食料と医薬品は深刻だ。下手すれば国が崩壊する。まぁ、それは米軍も同じだ。しかも大統領選挙が近い。これ以上の痛手を要する長期戦になればクリントンは首だ。何とかして大きな戦果を国民に知らしめ、本戦争の正当性を納得させる必要がある。現在、米韓が中心となって大規模な軍事行動に出ているが、それもそのためと考える方が妥当のはずだ」
「韓国はまた損害を受けたわ。当初の１８隻から１５隻に。少し前にね」
「そうですか」
ふん。と綾崎は鼻を鳴らした。彼は音に聞こえた朝鮮人嫌いだった。
その時、インターホンが呼び出し音を立てる。綾羅がそれをとった。
「はい……ふむ……そう。わかったわ」
「どうしました？」
しばらく考え込むように黙っていた綾羅が口を開いた。
「大佐。あなたの言った通りよ」
「では……」
会議室が緊迫したムードに包まれた。
「聞け。たった今、大和が駆逐艦５隻と遭遇。交戦状態に突入。撃破には成功したが、対空迎撃火器統制装置の一部を損傷。左舷側の１２７ミリ以下の小型砲およびミサイルの運用に支障が出た。大和は修復を急がねばならない。そして、これで大和の単艦での戦闘はやはり無理だったことが確認された。実に、悪い結果でね……」

「……」

将官は不動の体制のまま、それを聞いていた。

否、一部を除いて大半が動けなかったのだ。

一歩間違えると、側にいるだけで殺されかねないほどの綾羅の「気」が、将官にもひしひしと感じられ、自然とアドレナリンが体内を駆けずり回る感覚に体を支配されていたからだ。

「藤島長官」

「はい」

「「天城」「赤城」他二水戦ならびに「氷川」等は現在どうなっているか」

「現在柱島基地にて待機中です」

「戦艦の戦線投入は？」

「長門級2は訓練中で不可能です。土佐はまだ実戦投入には不安があります。リルガミン級2、金剛級4が投入可能です」

「速やかに投入準備を。綾崎大佐」

「はっ」

「速やかに「リルガミン」等を率いて大和と合流せよ。臨時に貴官を勅命により四階級戦時昇進、戦死した海江田提督の後任として、大和以下で新規に編成する部隊司令官に任命する。勝って来なさい」

「はっ？」

全員が、我が耳を疑った。自分達が何を言われたのかわからなかった。

「夜戦艦橋において指揮をとっていた海江田提督は、敵艦の砲弾の破片を受け、戦死した」

綾羅はさっさとそれ以上の話をしなかった。

「綾崎大将、わかったか？」

「はっ」

「真田艦政総監」

「はい」

「大和修復を命じる。速やかに対処せよ」

「心得ました」
「秋谷長官。なにかあるか」
「二三、あります」
秋谷は相変わらずのポーカーフェイスで言った。
「まず第一に補給のことです。予定では大和の補給のみのはずでしたが、艦船がそこまで増えますと補給が困難になる恐れがあります。こと、人的損害が出た場合の補充および精密機器の損害に我々は十分な対応ができません。そして第二に」
秋谷はここで一区切りつけるように将官を見回した。
「国土防衛の問題です」
「危険かしら？」
「危険すぎます。我々の保有する迎撃可能な船舶が実質的に消滅します」
これらは皆、将官が最も恐れる部類に抵触した発言であった。
これに対して、綾羅はあっさりと言い切った。
「大丈夫よ」
「しかし……」
「攻撃理由がはっきりしないわ。論外よ。それから、補給に関しては大和が保有する全火器を最低5回フル稼働させる分まで考えておけ。といっておいたはず。いまさらやってませんはゆるさないわよ？」
「やってみせます」
このやり取りに安堵したものは多かった。だが、これらが皆芝居だと気づいた者は、そう多くはなかった。
南沙には当時8つの空港（軍用と民間用）が存在し、港も現在、25万トン級ドックを有する港湾施設の建設が進んでいる。
突貫工事の建設現場の騒音が響く柱島軍港のAバースでもやいを解いた「リルガミン」に司令旗が翻る。
「提督。そろそろ「リルガミン」へ」

真名との別れを惜しむ綾崎を参謀長となった山本が促す。
「固いこと言うなよ。もう少し位、いいじゃないか」
先ほど、真名に縫いつけてもらったばかりの真新しい大将を示す星3つのベタ金の襟章をした綾崎が渋る。なかなか袂を分かちがたい様子だった。
「ダメです。艦長以下乗組員一同、すでに出港準備を終えて、提督の御乗艦をお待ちしておるのですから」
「そんなこといわずに後五分だけ……」
「そういってもう十分も出港を伸ばしているのです」
「そこをなんとか」
「だめです！！」
山本もついにシビレを切らした。
「今生の別れってわけじゃないんですから」
「なるかもしれん」
「天下の綾崎提督が、そんな弱気でどうするんです！」
いつになく覇気のない綾崎のシリを山本が叩く。
「みんな提督を信じて行くんですからね。事と次第によっては……」
「承知しませんよ」とはさすがに言えない山本であった。
「悠矢さん」
と、婚約者の真名が言った。
「いってらっしゃい。私のことは大丈夫だから……」
「俺はちっとも大丈夫じゃないぞ」
「提督！」
キレまくる山本。
「真名さん。提督をお預かり致します」
そういって、綾崎と平行して昇進した真名に敬礼すると、首に縄を掛け、嫌がる綾崎を無理やりに引っ張っていく。
「は、離せ！」
二枚目もこうなると形無しだった。

「離しません！ったく、真名さんが出来てからってもの、いつもこれだ……」
山本はブツクサ呟くと、真名にむけて再度一礼していった。
「それではお元気でー」
「悠矢さんを宜しくお願い致します」
と、真名は頭を下げた。
「時々粗大ゴミですけど、一応、食べる物さえあてがっておけば、結構働きますから……」
艦に乗れば、山本が綾崎の女房役というわけである。
「こき使ってくださって結構ですよ。私はお手当さえしっかりいただければ……」
「真名……お前なぁ」
「悠矢さん」
と、真名は別れ際、綾崎のコートのポケットに、一本の8ミリテープを滑り込ませると、軽く口づけを贈った。
「これを私と思って、大和にいったら見てね」
「うっ、うん」
後ろ髪どころか前髪すら引かれる思いの綾崎だった。
「必ず帰ってくるー」
「ゴミの日だったら、ちゃんと出しておいてね」
「うん」
「歯、磨くのよ」
「うん」
「腹巻き、持った？」
「うん」
「生水、飲まないのよ」
「うん」
ほとんど修学旅行に子供を送り出す母親である。
「さぁ、提督。行きますよ」
「う、うむ……」

綾崎はいつまでも、デッキの窓から小さくなる真名を見送っていた。

リルガミン（以上、５０口径４６センチ砲搭載艦）
金剛・扶桑（以上、４０口径４０センチ砲搭載艦）
防空巡洋艦２（以上、第１１防空戦隊所属艦）
駆逐艦４・フリゲート艦６（以上、第二水雷戦隊所属艦）
補給艦２・工作艦１・病院船１

これが今回、大和以外に綾崎の指揮下に入った艦艇群である。全艦がエマモーター発電システム搭載艦のため、油槽船の補助はない。
大和との遭遇はそれから3日後の午後のことだった。
傷ついた大和に工作船「須磨」が接舷しつつあった。
綾崎は司令部のスタッフと共に大和の甲板を踏むと、巨大な大和の艦橋を見上げた。
（相変わらず、デカい）
綾崎が初めて大和に乗ったのは、まだ艦隊編入前だった。
ふと、艤装岸壁に浮かぶその巨体を初めて見たとき、腰を抜かしかけたのを思いだして苦笑いが浮かんできた。
「提督」
艦橋の方から走ってくる士官がいた。副長の奈良元だ。
「副長。幾見はどうだ？」
「はい。指揮シートに座らせろとわめいておりまして」
「そうか。氷川へ早いところ移しておけ。邪魔だ」
部下に対してもう少しとは思うが、綾崎は、荷物を従卒に任せると、そのまま艦橋へと足を運んだ。
修復と補給に大わらわの艦橋は、関係者が出たり入ったりを繰り返していた。
大規模な戦艦部隊を中心とする任務部隊が編成、艦隊旗艦としての新任務が与えられたため、運ばれてきた新データーのＮＡＴＵシ

ステムへの転送・調整・再確認、そして各班とのやりとりのためである。死にに逝くというのに、艦内は乗組員の若さ故の活気があった。

「あっ、提督！」

綾崎の姿を認めた士官の一人の声に反応した全員が立ち上がると、直立不動の姿勢で敬礼した。

「かまわん。続けろ」

答礼しつつ、司令席に着いた綾崎は、ＮＡＴＵを呼び出した。

「ＮＡＴＵ。久しぶりだな」

「提督。お久しぶりです。それから昇進おめでとうございます」

「なに。死んで元帥に特進しろってことさ。大和の搭載兵装を教えてくれ」

『はい』

パッとモニターにリストが現れたが、綾崎はそれをみて硬直してしまった。

「……ＮＡＴＵ、なんだこれは……」

『現在、ミサイル攻撃重視のウエポン選択がとられています』

「誰の指示だ？」

『幾見中佐です』昨日の人事のデーターがすでに入っているため、ＮＡＴＵは幾見を艦長とは認定していなかった。

「あの馬鹿めが……」

綾崎は軽いめまいがした。

自分が来たのが、本当に天命だと思い、ひそかに信仰している戦女神に感謝の祈りを口の中で呟き、そして理解した。なぜ、大和がたかが５隻程度の駆逐艦隊との遭遇戦で損害を被ったのかを。

このまずい武器選択が原因である。

３式を使用すれば、駆逐艦程度ならば遠距離で十分に大破させることができるのに、それより先にミサイルでは、どうしようもなかった。その選択切り替えがおこなわれても、チャージングタイムには、どうしても時間がかかる。何しろ砲弾は２トンの上の重量があ

るから。
なればこそ、艦長はケース・バイ・ケースで武器選択が出来なければならないと言うのに。あの馬鹿は……。
「あいつ、何を勉強していたのだ。これでは戦えないではないか」
(千里、お前の弟は迷惑かけてくれるよ)
歯ぎしりとも諦めともつかない態度でＮＡＴＵに綾崎は訊ねた。
「幾見から何か聞いているか？」
『水平弾道でミサイルをぶつけるから、データーインプットを頼むと』
「あのなぁ……」
ガンダムにミノフスキー粒子というレーダーを無効化するものが出ていたが、狩野粒子はそれよりも始末に終えない代物なのである。
特殊な磁力を含む狩野粒子は、時にジャイロを狂わせ、その上、熱源追尾システムもおかしくしてしまうのである。レーダー誘導からＴＶ誘導に切り替わる方法をとる、『ファイア・アンド・フォアゲット』方式のミサイルは、初期のレーダー誘導が使えなければ飛べないのだ。
となれれば、ミサイルは確実に過去の遺物となってしまう（皮肉なことに、これにより、ミサイル中心で進められていた核の配備も軽減されつつあった）
水面すれすれにまっすぐに飛行することなんて出来た話ではないのだ。
「弾道計算は可能なのか？」
『命中率は３３、２３５４％です。ただし、完全無風、相対速度０状態であることが必要ですが』
「戦闘速度を出して、反航戦やったらどうなる？」
『３％弱です』
「それでやろうとしていたのか？あの馬鹿は」
『みたいです』
「やろうとしたら、どうしていたつもりだった？」

『緊急権限として、砲撃戦闘を開始する予定でした』
「ＮＡＴＵに助けられっぱなしってわけかあの馬鹿は……ったく、もう一度締め上げてやろうか」

「提督」
真田が艦橋に入ってきた。
「大佐。どんなものだ？」
「はい。修復は順調に進んでおります。思ったより損害が軽微で助かりました。ただ」
「ただ？」
「夜戦艦橋の方の清掃が」
「そうか」
「硬化ベークライトの窓であんな事が起こるとは、正直意外でした」
「だめだったのか」
「いえ。海さんには悪いんですが、良く持ったと思います。命中した砲弾は、どうやらバルカンファランクスのそれだったようです。司令塔なら、トマホークの直撃にも耐えられましたけどね」
「それでやられたというのか、あの男は」
運がない奴だ。と、綾崎は頭を振った。
「加工方法を一から見直します」真田は言った。
「交換効率最優先だったのが拙かったんです。内側にまで達した衝撃……どうも内側の一枚、質が悪かったらしくて、命中したショックで一部が破片となって、海さん、それに頸動脈をやられたようです。現在、御遺体を氷川の方へ幾見中佐と移す準備にかかっています」
「そうか。奈良本と一緒によろしく頼む」
「シートは血塗れですので、全面的に交換します。縁起が悪いですからね。それと、以上のことに関する報告書です」
そういって、彼は報告をまとめたファイルを綾崎に差し出した。

「よし。補給の件だが、今回はＨＥＡＴと三式メインで積んどいてくれ。それから、１２番以下の弾薬は全力射撃で１０分程度まで抜いておいて欲しい。ミサイルは全部降ろせ。どうせ役にたたん。可能な限り対空砲への被弾時の損害を軽くしたい」

「わかりました。それから…」

「また、売り込みか？」

綾崎は顔をしかめた。真田の作ったものには苦労させられているのだから、無理もない。

「はい。こうなるを予測して……」

それは綾崎があぜんとする内容のものだった。

「よくもまあ、そんなアホみたいなものを……」

「つかえませんか？」

「……いや」

綾崎は少し思案していった。

「どれくらい持ってきた？」

「１８０発ほど」

「よし。積み込んでおいてくれ。もしかしたら使うかもしれん」

「使えますよ。ＨＥＡＴ弾よりも一」

「違うよ大佐」綾崎は苦笑しつつ言った

「一発の弾も撃たず撃たれずにことが済むのがベストだ。そうなることを祈っていてくれ。そう言いたいんだ」

真田は、一瞬あきれたような顔で綾崎を見ると、今度は真剣な顔でじっと見つめた後、敬礼を払い「失礼しました」と言った。

「だめですったら！！」

「ここにいても仕方がないだろう！？」

医務室に通じる通路を歩いていた綾崎は、そんなやりとりを聞いて、ふと、足を止めた。

「先輩にこれ以上借りを作るわけにはいかないんだ！」

（あの馬鹿……）

綾崎は、幾見のくそ真面目なセリフを聞いて苦笑した。
医務室を覗いてみると、ベッドに横になった幾見に副長が必死の説得を行っていた。
「幾見、いい加減にしろ」
ノックと同時に綾崎はそう言った。
「せっ、先輩！」
居合わせた副長以下、全員が敬礼を払った。
「はっきり言って今のお前は邪魔だ」
「ぐっ……」
「そんな状態でどんな指揮をとれるっていうんだ？」
「そっ、それは……」
「そんなに戦争が甘いと考えているなら、やめろ」
幾見は、下を向いて俯いてしまった。最早彼のプライドはズタズタだった。
新進気鋭の若手艦長として活躍して、今、総隊旗艦艦長の地位にある。
海江田の不運がうつったと兵達の間では哀れみを受けていたが、彼にとっては、むしろ侮蔑の方が幸せだった。
それがわかる綾崎は、幾見に近づくと、その肩に手をやった。
その肩が小刻みに震えているのがわかった。
「安心しろ。お前がつぶれてくれたお陰でうちが勝ったと言わせてやるさ」
「先輩……」
綾崎は幾見にそれ以上言わせることを制した。勢い、思いっきり強くその肩を叩く。傷に響く幾見は顔をしかめた。
「さっさと傷を直せ。今時盲腸なんて病のうちに入らん。かえって、しおりにでも手厚く看病してもらうんだな」
「はっ、はい」
「よし」
綾崎は満足そうに頷いた途端、「餞別だ」といって、あろうこと

か手術の傷口に拳骨で一撃を食らわした。
「ぐっ、ぐえええええっ！！」
幾見はベッドの上で蛙のつぶれたような悲鳴をあげた。
「開いたか？おお。大変だ。おい、すぐに氷川に移して丁重な処置を」
綾崎はこういう男である。

第三部　海賊行為　1

●罠にかかった雀

マーカス島沖東方３４海里　１９９６年９月３１日午後

この海域にＩＢＣが兵力を投入するに至るのは、それなりのわけがあった。

相次ぐ損害に尻に火がつく形となった国連軍は、ＩＢＣに大規模な陸軍が存在しないことに目をつけ、ビクトリー島への上陸作戦を展開する計画を立て、国連軍が確保している最もビクトリー島に近いマーカス島に日本の意向を無視する形で強制的に拠点を構築。そこに上陸作戦に必要な兵力と大量の物資を運び込み、来るべき上陸作戦に対する備えを着々とすすめていた。

反面、他国との交易の一切が止められたＩＢＣは、長引く戦争により、あらゆる物資が欠乏していた。

相次ぐ戦闘でマラッカ沖海戦の戦利品である物資も底をつき始めていた。

燃料不足で出港できない艦艇が続出するのみならず、医薬品も食料も国民にギリギリで配給している有様だった。

当然、国民の戦争への意思も低くなる。ＩＢＣ政府としては、どうやってでも国民の戦意のこれ以上の低下を防ぐ必要があった。さもなくば政府が瓦解してしまう。

従来のような日本向けの物資を南沙沖で略奪する方法は、南沙沖海戦とフィリピン沖海戦以降、物資の補給が滞りがちとなったため、同海域へ進出する恰好の口実となっていたスル紛争の火種が急速に弱まり、そして国連軍の艦隊がマニラ湾に入港した結果、極めて危険なカケとなってしまった。

ＩＢＣ大統領ゲーリック・アーダベルトは、そんなカケを認める

ほど馬鹿ではなかった。彼は、かつてリムゲード・インターナショナルの経営理事を担当していた時、自分の孫位の歳の少女から、人の上に立つ者のノウハウを可能な限り学び、そして実践してきたからこそ、今の地位がある男である。

こんな男が、そんな無謀なカケに出ることはない。

だからこそ、事態の打開を日本向け物資の略奪に頼ることは完全に不可能となっていた。

そこで彼等が目をつけたのは、マーカスに集められている国連軍の物資だった。

情報をまともに信じるならば、半年の長期戦を見込んで、食料も医薬品も燃料も、あらゆる物資が大量に集められ続けていた。

ＩＢＣにとって、格好の好餌であった。

そして、おまけの如く、彼らに入ってきた情報では、マーカス島沖に国連軍主力艦隊が早くても一月以内に入港するというのだ。

彼らは本気でここを攻略するつもりらしい。海上で阻止するしかない。

そう。国連軍の艦隊をここで完全に殲滅し、なおかつ物資が手に入れば、戦後の処理は容易かつ有利に展開できるようになる。彼らはそうふみ、一大作戦を展開することに決定。稼働艦艇を使い切る覚悟でマーカス島めざして艦隊を送り込むこととした。

アーダベルトという男が下した、史上空前絶後のカケであった。

ただし、この作戦は完全成功というわけではない。

大切な艦艇を多数喪失し、犠牲も半端なものでもない。アーダベルトはこの後、戦争の責任を取り、自らの信念に基づき辞職へと追い込まれる。辞職時の支持率が８７％以上というのが、彼の国家指導者としての能力を暗黙の内に語っていた。

彼自身が言っているが、この作戦で一番笑えなかったのは、この時国連軍がとった行動の全てが罠、しかも自分の師匠たる女性の仕掛けたものだったということである。

そう。この作戦は、実は彼らが国連軍の罠に引っかかった末のものだった。

確かに国連軍は、大量の物資をマーカスに送り込んでいた。だが、それはあくまでＩＢＣという猛獣を引き寄せるためのエサに過ぎなかったのだ。

彼らとて、相次ぐ戦費に最早予算が成り立たず、また物資も欠乏し始めていた。

なんとしても早急に講話を結ばなくてはならない点に関しては、皮肉にも国連の方が深刻だった。ＩＢＣに連戦連敗を重ねた今のままでは、戦後処理は圧倒的にＩＢＣ有利のまま迎えることとなる。

それだけはどうしても避けなければならなかった。

参加国国民の志気を高め、かつＩＢＣが彼らより可能な限り不利な条件での講話条約に調印させるためになにが必要か。

そこで彼らが考えたのが、『敵主力艦隊撃滅』である。

連戦連勝の敵第１艦隊を撃破し、ＩＢＣの戦力をそぐと共に、敵国民の志気を低め、反面、自国民の志気を高める。

そこであの手この手を考えている内に、彼らに一つの妙案が提出された。

新たに国連軍に加わった南沙の立案した「トライデント　オブ　スパロー（雀の三ツ矢）」作戦である。

第１艦隊という雀を捕まえるために罠を仕掛ける。その罠は彼らが最も望むものであることが望ましく、そして敵がそれに食らいつくためのこのこ出てきた所を、３本の槍と化した国連軍が撃破する。戦艦の数が不足している国連軍のことを考えれば、敵の目を分散させるよりも一ヵ所に集め、敵を包囲する形をとる方がよい。と彼女は主張したのだ。戦力の集中。戦果の徹底拡大という原則に従った極めて懸命な判断であり、大胆さに富んだ作戦として、その手を作戦を好む米軍には両手放しで受け入れられた。

しかし、さすがというべきか、彼女は、『万一、包囲網を突破された場合に関しては、私も保証の限りではない。これは余りに壮大

な博打となるであろう』と、作戦がどうあるべきかに関して提案したにすぎず、その成功までは保証の限りとはしなかったのである。
『万一の場合は、物資を敵に渡すことにより、戦後の対ＩＢＣ支援の負担を軽減することでも考えておくべきである』というフォローは、そのためのものだった。

上陸作戦も物資の集積も、すべてが欺瞞であった。
そしてＩＢＣという雀は餌に食らいついた。

マーカス突入を１０月２日の彼らの建国記念日に決定した「ネバーランド」作戦には、当時ＩＢＣが作戦に投入できた戦艦のほとんどすべてが投入された。
戦艦だけで合計２０隻。それ以下を含めれば７５隻となる。
各艦隊のオーダーを見ておこう。
「フェイズ１」
制海権奪取担当。
第２艦隊３６隻。第３戦隊，第４戦隊、第２水雷戦隊、第３水雷戦隊より成立。
第３戦隊（カーン戦隊）
戦艦　５隻
巡洋艦　２隻
第２水雷戦隊
駆逐艦　３隻
フリゲート艦　５隻
第４戦隊（ユマ戦隊）
戦艦　４隻
第３水雷戦隊
駆逐艦　５隻
フリゲート艦　７隻

「フェイズ2」
上陸作戦支援担当。
第1艦隊。第1戦隊　第8戦隊　第1水雷戦隊、第5水雷戦隊により成立。
第1戦隊（K・ジャネット独立艦隊司令長官直卒）
戦艦　8隻
駆逐艦　4隻
第1水雷戦隊
巡洋艦　2隻
駆逐艦　3隻
フリゲート艦　5隻
第8戦隊（クリストファー戦隊）
戦艦　3隻
駆逐艦　4隻
フリゲート艦　6隻
第5水雷戦隊
駆逐艦　6隻
フリゲート艦　10隻

対する国連軍は、はっきりいってオーダーどころの騒ぎではなかった。
それぞれの国の独立した指揮権の元、戦わざるを得なかったのである。
なぜか？当然である。彼らは合同軍としては満足な訓練をしていなかったのだ。
国連軍のオーダーを見ておこう。
米海軍
第87任務部隊（B・リーチ大西洋艦隊司令長官直卒）
戦艦　7隻
駆逐艦　6隻

フリゲート艦　１２隻
第８８任務部隊（第１１１戦隊、第２２４駆逐戦隊、第２２５駆逐戦隊）
戦艦　４隻
巡洋艦　３隻
駆逐艦　１２隻
第８９任務部隊（第１１２戦隊、第３３１フリゲート戦隊）
戦艦　２隻
フリゲート艦　５隻
第９０任務部隊（第２２９駆逐戦隊、第３３９フリゲート戦隊）
駆逐艦　６隻
フリゲート艦　８隻
第９１任務部隊（第３３４フリゲート戦隊）
フリゲート艦　４隻
輸送艦　３４隻
病院船　４隻

英国海軍（輸送船団護衛・マーカス島沖海戦には不参戦）
第２４任務部隊
駆逐艦　２隻
フリゲート艦　４隻

ドイツ海軍（輸送船団護衛・マーカス島沖海戦には不参戦）
第２艦隊
駆逐艦　２隻
フリゲート艦　４隻

フランス海軍（マーカス島防衛）
第３艦隊
フリゲート艦　２隻

コルベット艦　４隻

韓国海軍（敵艦隊撃破）
第３艦隊
駆逐艦　３隻
フリゲート艦　４隻
コルベット艦　８隻

豪州海軍（敵艦隊撃破）
第２艦隊
駆逐艦　３隻
フリゲート艦　５隻
コルベット艦　７隻

南沙帝国海軍（多目的）
第１１任務部隊（敵艦隊撃破及び制海権確保担当）
戦艦　４隻
巡洋艦　２隻
駆逐艦　４隻
フリゲート艦　５隻
補給戦隊
フリゲート艦　２隻
病院船　１隻
工作艦　１隻
補給艦　４隻

ＩＢＣでは、本格的な上陸作戦展開のための打撃部隊「フェイズ２」として、戦艦主力で編成された第１艦隊が用意され、遊撃部隊として、敵の退路を遮断するための「フェイズ３」が。周到なことに緊急時の増援部隊としてその後方に後詰め部隊「フォロー」が控

えていた。
「フェイズ1」参加艦艇は9月27日に。翌日にはそれぞれの旗艦の一部が故障したため出港が遅れた「フェイズ2」と「フォロー」が出撃した。
マーカス付近に展開が予想される国連軍の最新情報確認と時間調整を行い、9月31日に本格的作戦が発令され、全艦がマーカスを目指した。
彼らの指揮官ジャネット大将はマーカス島沖に国連軍が多数展開し、その中にはようやく投入が可能となった米軍の戦艦全艦がいることを確認していた。
出撃前にそれを教えられても、危険であるとは考えず、むしろ嬉しそうな様子だったという。戦艦対戦艦の勝負の予感に興奮していたようだ。その証拠に、彼は全艦隊に出撃前、
「5斉射目までの主砲弾は徹甲弾にせよ」
との命令を出し、各艦隊の艦隊航行序列の先頭をそれぞれ最も目視確認に優れた乗組員の乗った艦に変更させている。早期発見に心がけていたのだろう。

だが、双方ともに作戦が少しだけ狂うことになる。
国連軍は最終補給船団のマーカス入港が、数日前の嵐のためにマーカスへの入港が数日に渡り遅れ、場合によってはIBC艦隊の略奪に合う危険性が発生。
その穴埋めのために包囲網の一部が狂ったこと。
IBCは輸送ルート遮断のため、フェイズ3とフォローを遊撃艦隊として派遣し、うちフォローが運よく船団を発見したものの、包囲網の変更のため近辺に展開していた戦艦わずか1隻に全滅させられたこと。
そして、一日遅れでフェイズ2が出港したため、フェイズ1が敵に発見された現在、フェイズ1は独力で敵を撃破するか、あるいは退却する必要が生まれたこと。

無論、彼らとて時間差を埋めるためのあらゆる努力は払っていた。しかし、すでに戦は始まっていた。

●戦艦対戦艦　　９月２７日午後８時５２分

その日の夕刻から、マーカス沖の天候は悪化していた。波が高くなるというところまではいかないが、低い雲が次第に空を覆い、闇の世界へと変化していた。

雲を抜けて微かに差し込んでくる星明かり以外、洋上を照らすものはない。

大和を先頭に進む任務部隊の夜襲警戒進路は、マーカスからまっすぐ南下して一定地点で斉動Ｚ（一斉旋回回頭）を行い、再びマーカスに近づくというものだった。

『現在、マーカス南方２２８浬。速力１６ノット。次の変針点まで２３浬』

夜戦艦橋の司令席に陣取った綾崎は、航海長の報告に無言のまま頷いた。

（大丈夫だ）

と綾崎は思った。我々は夜戦訓練に励んできた。

乗員の技量は高く、砲と魚雷の命中率は、機械に頼らない最高のレベルに達している。特に夜間見張り員、レーダーの使えない太平洋における最高の「夜間索敵兵器」は、異常なまでの訓練と優れた光学装置によってその熟練度を神業に近いところまで高めている。日の光を嫌う夜型人間、昼は日の当たらない部屋で眠り、夜になって初めて動き出す変人どもだが、こんな暗闇では頼りになる。（綾崎は、自分の部隊と敵艦隊がほぼ直交コースに乗っていることを知らなかった）

そんな綾崎の期待を知ってか知らずか、大和の右舷側夜間見張りに立っていたのは平野茂一等兵曹だった。

夜遊びが祟り、体が完全に夜型となったため、学園での出席が絶望となった所を軍にスカウトされ、その圧力で何とか夜間の臨時テストを受けることによって進級することができた彼は、軍に感謝し、忠誠を捧げていた。
自分を単位不足と公安の取締りの恐怖。そして昼の太陽の恐ろしさから救ってくれた軍を愛していた。
総隊旗艦の見張りを任されるようになったのは、なによりその努力の賜物だった。

前方1時方向にはスコールが見える。だが、2時方向には一。
「ん?」
最初、それは島影のように思えた。闇によって空と溶け合っている水平線上に、何かの輪郭が浮かび上がった気がした。
(島か?)
平野は思った。しかし、彼は即断をさけた。慎重かつ任務に熱心な彼は1000倍という天体望遠鏡並みの双眼鏡の倍率を最大に拡大し、先ほど何かの影が見えた位置とその周辺を注視した。
再び、そして今度は鮮明に影が浮かび上がった。島ではない。その影の上には、縫い針よりも細い棒がまっすぐにつき刺さっていた。
(軍艦のマストだ)
その数が複数見えた。彼はとっさに叫んだ。
「敵艦らしきもの。距離1万3000、2時方向!」
それは爽快としか言い様のない感覚だった。『もぐら』とさげずまれた自分が闇の海で敵を発見したのだから。
大和の艦橋は突然慌ただしくなった。綾崎は戦闘準備を発令した。

一方で二水戦の旗艦「雪風」も敵艦隊を発見していた。
「敵先頭艦、戦艦らしい」
と、右舷から報告が入った。指向性レーザーを用いたデーターリンクシステムからは矢継ぎ早に命令が入る。綾崎提督もやる気らし

い。
田中は体内にはアドレナリンが駆け回っているのを感じた。こうでなくてはならない。俺たちはこのために訓練を積んできたのだ。
彼は隊内電話を掴んだ。それは、雪風が引き連れているゴロツキ共、第１０１駆逐隊（雪風、磯風、浜風）第１２１フリゲート隊（秋月、水無月、冬月、涼月、初霜）につながっている。
田中は張り詰めた声で叫んだ。
「右砲雷撃戦用意！目標、敵艦隊、全艦突撃に備えよ！」

午後９時丁度、α任務部隊はフェイズ３への進撃を開始した。史書は、この時をもって、第一次マーカス島沖海戦が始まったとしている。

●奇策　　午後９時００分
大和の戦闘準備は着々と進んでいた。綾崎達は夜戦艦橋から安全で正確な指揮がとれる司令塔へと移った。
誰もがすぐに大和の砲が火を吹き、二水戦が魚雷を発射するものと思っていた。
だが、綾崎はすぐには突撃命令を下さなかった。
「取り舵一杯、最大戦速。麾下の全部隊に発令。貴官等の突撃待て」
綾崎は周囲の期待とは正反対のことを命じた。
「なぜです！？」当然、周囲が食ってかかった。
「完全に奇襲となるのでごわす！」
「そうですよ提督！」
「ギャーギャーうるせぇな。今マトモにぶつかるよりもマシな戦法があるんだ」
「え？」
「見せてやるから黙ってろ」
綾崎は隊内無線を取ると、一戦（第一戦艦隊）の伊藤と二水戦（

第二水雷戦隊）の田中を呼び出した。
「双方ともにこのまま航行を続け、向こうが撃ったら反撃しろ。敵の気づかない時間がもっと欲しい」
はぁ？と、田中も奇異を覚えたが、綾崎の顔を見ているうちに、なにも説明されなくとも、彼の意図が読めた。彼ら船乗りとは、そういう所がある生き物だった。
「はっはぁ。いただくハラでしたか」
「そうだ」急激な変針をシートに踏んばることでやり過ごした綾崎は頷いた。
「わかりました。やってみます」
「ご武運を」
「感謝する」
「舵中央！」
「よし、敵のケツにくらいつけ！」

「始まりましたか？」
そんな時、ふらりと、艦橋に二人の士官が顔を出した。
一人は長身の男。そしてもう一人は黒髪の女性。特殊戦術班班長オットー・スコルツェニー大佐と特殊機動親衛隊親衛隊長神無月あやめ大佐だった。双方ともに武装していた。
「ああ。今始まるところだ。暇か？」
「船旅ってのがこれほど暇とは思ってませんでしたよ」と、スコルツェニーは首の当たりをゴキゴキと動かした。
「なら話は早い。喜んでくれ。仕事だ。左舷の第3と第5対空要員待避所にゴロツキ共を集めといてくれ。一仕事してもらう」
「ほっほぉ」スコルツェニーは顎に手をやりながら、感心したように言った。
「第一次大戦の再現を期待していたのですが、まさかねぇ」
「危険すぎません？」と、神無月。
彼等はすでに綾崎の意図を正確に読んでいた。彼等の頭にあるの

は、それを実行するための部下の配置であった。
「だからやりがいがあるのさ」
整形手術が必要ないと言われたほど、綾羅にそっくりな神無月の端正な顔を見ながら、綾崎は笑った。
「面白いだろう?」
横にいたスコルッエニーは、人の悪い笑みを浮かべて頷いて言った。
「我々は、まぁさしずめパイレーツという所ですか。ヨット部でも連れてくれれば喜んだでしょうなぁ」
了解しましたと、二人は敬礼すると足早に艦橋を後にした。

一方のフェイズ3は、その夜間索敵能力がわずか5キロという低さから、大和が転針を終了させたこの時点でも、まだ彼らを発見していなかった。
彼らはいざとなれば（国連軍と同じく）贖罪羊役の駆逐艦から、目見当をつけた方向へスターシェルを打ち上げるつもりだった。

大和は敵艦隊の完全に背後についた。それを可能足らしめていたのが、暗黒色の大和の塗装である。
昼間では異様に目立つ色にしたのは、誰の責任でもなかった。
普通、海兵隊水上艦隊の艦の塗装は、耐爆・耐熱の双方の効果が望めるＡＤＭＣ　Ｔｙｐｅ－０２（2型アンチ・ダメージ・マジック・コーティング）が施されていても、基本的に他国の海軍同様、濃灰色である。
この効果には以前から定評がある。コーティング溶剤を金属の表面に塗布すると、分子単位で金属に染み込み、その結合を数倍高めてしまうため、処理前の金属とは比べものにならないほどの強度が確保・維持できるからだ。
当然、その防御力も尋常なものではない。
だが、このコーティングの発展版、Ｔｙｐｅ－０１３は、事情が

異なった。
ＡＤＭＣ－０２の上に世界初のマッキー分子（多角形の分子。ダイヤよりも高い強度を誇る）を混入したのである。
これにより、大和（城型防空巡洋艦にも採用されている）は、その装甲を１０倍近くに強化していた。
だが、長所ばかりでもなかった。
黒色以外の色が出来ないのである。
それ以外の色にするには、その上に塗装を施す必要があるのだ。
とはいえ、こんな馬鹿でかい艦の塗装だけでも莫大な費用がかかる関係上、実現には至っていない。
当然、このような暗闇でこの色の与える効果は絶大だった。何しろ、戦車の殴り合いの距離である３キロを過ぎても、敵はこちらに気づいていない。
（やれるな）
綾崎は、にやりと凶悪な笑みを浮かべつつ指示を出した。
「面舵一杯。スコールを隠れ蓑につかう。敵の背後にくらいつけ。転舵終了と共に最大戦速発揮」
「宣候」
「冴子」
『はい』
司令塔のメインモニターの横のサブモニターに砲術長の冴子が映った。
「弾は三式を０距離で入れておけ。指示があり次第、撃て。場合によっては、史上最短距離での砲戦を味わわせてやる」
『了解』
「頼むぞ。うまくいったら」
『なんです？』
「あとで可愛がってやる」
『てっ、提督！』
真っ赤になった冴子が怒鳴る。

『セクハラです！！真名ちゃんにいいつけますよ！？』
「あいつはそんなヤワにはしつけていない」
うそおっしゃいな。恐妻家のクセに……。と、冴子は心の中で舌を出した。

このとき、フェイズ3は１０ノットという比較的低速で航行していた。旗艦は核融合機関を搭載していたから全く問題がなかったが、他のガスタービン搭載艦には、燃料に不安があった。
「見張りを厳にせよ」
旗艦ロスバッハの艦橋に陣取ったフェイズ3司令官ジャック・ランカード少将は艦長のハンス・スーツカ大佐に命じた。
「大丈夫です」
彼の答えは明確だった。
「なに。米軍の夜間監視能力だって、レーダーが使えなければ我々と大差ありません。よくて3キロ。人的損害を考えればそれですら満たさないでしょう。うまくやれば敵をそのままやりすごして一気にマーカスまで攻め込めます。全く問題ありませんよ」
かつて米海軍にいたスーツカの言葉である以上、周囲の不安を一掃するには十分であった。
なにより、彼等はこのような夜間の闇討ちを得意とし、数々の戦果を挙げてきたのだ。
フェイズ3はこの夜、輸送船団攻撃のための展開とみせかけつつ、夜陰にまぎれてマーカスまで接近し、翌日正午と正式にめどの立ったネバーランド作戦の本格的参加を目指していた。
そして、その監視の目は、艦隊を迎撃のため出てくるであろう国連軍を迎え撃つため、艦首より前方１８０度近辺に集中していた。後方から艦隊を攻撃してくるという、有りえない（セオリーであるT字型戦法を考えれば、敵が自分の頭をとるため、前からくると考えるのが普通）ことははじめから考えていなかった。

「舵中央！」
「最大戦速発揮！速力増大中、現在２５ノット！」
「よし、一気に４５まで入れろ。敵の左側をすり抜けるぞ」
航行灯ですら完全に消しながらスコールに潜伏して航行する大和の姿を敵はまだ発見していない。
艦首の波が高くなる。速度が増している証拠だ。
「面白くなってきたな」綾崎はモニターに表示されている敵艦との距離表示が段々と短くなっているのを見ながら笑っていった。
「さて。吉と出るか凶と出るか……全水密扉の閉鎖再確認。応急班および衛生班、即時待機。総員のバイタルパート内部への避難と対ショック準備、終了しているな？」
「完了しています」
「よろしい。シートベルトを締め直しておけ」
綾崎は４点式のベルトを締め直した。幹部達も臨時シートに腰を下ろした。
無論、臨時である以上、普段は壁に収納できるほどの安物で、ないよりまし程度だったが。
大和はすでに相当な自動化を実現している以上、余計な人材は必要ない。幹部達は艦隊行動用に付随してきたいわばオマケ。とまでは言わないが、いくらなんでも、彼等といえども、こうした状況下では、シートに座っていないと危険であった。
電磁推進艦の大和は本当に静かだった。ソナーでもこの静かさでは感知が極めて難しい。まして艦隊航行中では、各艦の出す推進音が邪魔でこれだけ静かな音はそう聞き取れたものではない。
「最大戦速速力４５ノット！」
「よし。突っ込むぞ！」
「３０５０…４０…３０」

第三部　海賊行為　2

●くり返されるべきもの　　午後9時20分

「ふぁぁぁあ」

何の変化もない海目がけてのつまらない監視に飽きた、フェイズ3最後尾艦に配された駆逐艦アナポリスの後部見張り員ウイリアム二等兵は、後10分に迫った見張り交代と、その後に用意されている睡眠の時を、夜光塗料の塗られた腕時計を見ることで今か今かと待ち焦がれていた。

「くそっ」

別に見つめていれば時が早く過ぎるわけではない。彼は双眼鏡を構え、あまり重視されていない後方の監視を再開した。

スコールのせいで月明かりどころか星明かりもない、こんな真っ暗闇では双眼鏡に黒い紙を張りつけたものを見させられているようなものだ。つまらないにもほどがある。

（なんだってこんなつまらんことをいつまでも……）

と、彼が舌打ちした瞬間、偶然にも何かの弾みで双眼鏡が動いた。別に彼にとってそれ自体は全く重要なことではなかった。何しろ、なにが変わるわけでもなかったのだから。しかし、

「ん？」

ピントがあっていないため、ぼやけているが、海のほんの一部だけがおかしい。

妙に白波が立っている。まるで船が航行しているように……。

（まさか）

彼は慌ててピントを合わせた。いくらなんでも見張りを任されている以上、彼にもそれがなにか分かった。大型艦がこちらへ目がけて航行しているのだ。

（きっ、距離は……）

彼は慌てて彼我の距離を確認しようとした。思うようにいかない。なぜか波以外の、肝心の船の姿が見えない。いや、でかすぎて距離感がつかめないのだ。スターライト機能とピントを調整し、距離がわかるのに十数秒かかった。ようやく確認して、そして茫然とした。戦艦だ。しかもすでに距離は1キロを切っている。彼は絶叫した。

「てっ、敵襲!!」

「なんだと?」

その声を艦橋で聞いたアナポリス艦長ローズバンク中佐は、

「詳しく報告しろ。おい。戦闘準備。それから旗艦に報告しろ」

と、副長に命じた。

「間違いありません!大型、とてつもない大きな戦艦一隻、急速に我が艦に接近中!おっ、応戦してください!!」

ウィリアムに替わって報告してきた見張り長からの声はパニックのそれだった。

「距離は!」

「５００メートル。さらに接近中!４０ノット以上発揮している模様!追い抜かれます!」

その途端、右舷をすり抜けた艦を目にしたローズバンクも、出来ることならパニックの中に加わりたかった。

「最後尾艦の横をすり抜けます!」

大和の速度は目茶苦茶に早かった。当時の戦艦のみならず、あらゆる艦艇の中で最も早かったといえる。

当時の艦は、１ノットを時速１．８５キロとしても、２８ノットの戦艦なら時速５１．８キロ、海上自衛隊でも米軍でも、最速３２ノットとして時速５９．２キロにすぎない。核融合機関搭載の電磁推進艦は、軒並み３８~４０ノットの高速を発揮できるが、その最新艦である大和は、計画当初３８ノットだったのを、船体のデザインがよかったため、その速度を最大限に引き出そうと開発局がいいように推進装置をいじったため、実に7ノットもの増速がなり、４

５ノット（時速８３．２５キロ）の発揮が可能となっていた。
１０ノットで航行中のフェイズ３は、時速約１８キロ。つまり彼らは、自転車で移動している際、横を走り屋にぶち抜かれたのと同じ状況に追い込まれたのだ。
速度差３５ノット。時速に換算して約６５キロの差である。
自転車で移動していて、時速８３キロで１キロ後方から突っ走ってくる車に追い抜かれるのが如何に短いものか。いくらなんでも分かるだろう。
時速５０キロとは、一時間に５００００メートルを進む。それを６０で割れば毎分約８３３メートル進むことになる。艦隊はフェイズ３のように単縦陣の場合、各艦の距離は２５０メートル。フェイズ３は全部で８隻で編成されているので、艦同士の距離だけで１７５０メートル。そして艦の幅を一律２００メートル前後と考えれば３３５０メートル程度。約４分で追い抜くことが出来る。とてもではないが、完全な戦闘体制を整えるには間に合わない。
常時レーダーを作動させえた時代ならいざ知らず、この時代のように目視が中心の警戒態勢では、奇襲に対する対応にはどうしても厳戒があった。
「やるぞ」
いいつつ、綾崎はインターホンを掴んだ。
「総員に告ぐ。緊急！左舷衝突防御！海賊の親玉。準備頼む」

「だそうだ。野郎共。衝撃に備えろ！」
「大佐。すごいことになりましたね」
「リンツ。喋ると舌を噛むぞ」

「間違いありません！敵です！現在ペリーの横２０メートル付近を本艦へむけ減速しつつも接近しつつある模様」
「なんでいままで気づかなかった！」
ランカードは真っ青になって誰彼構わずに当たり散らした。

「後方、砲撃戦準備急げ！」
「無理です！下手をすれば後続艦を巻き込みます！とてもではありませんが不可能です！」
確かにその通りだった。確かにソロモン海海戦に見られるように、数十メートルでの砲戦は歴史的に存在している。だが、実際にそれをやるには、味方艦の横２０メートルの距離はあまりに危険だった。現在のような単縦陣が災いしていた。旗艦が回頭すれば他の艦も続くことによって応戦は可能である。だが、回頭中に攻撃をうければこの距離だ。大損害ではすまない。しかも、大和のハリネズミのような対空砲が自分達を狙っていることがわかったとしたら、兵員達だって恐怖心に駆られてしまう。感覚が麻痺しては動けない。大和には敵兵を畏怖させる何が確かに存在していた。
艦隊の度真ん中に敵がいることを生かして攻撃することは出来る。だが、下手すればこっちは一撃のもとに撃沈される。しかも敵が損害を受け、爆発した場合、こちらも無傷ではいられない（魚雷の被害範囲が２００平方メートルといえば、少しでもわかるだろう）爆沈なんぞしてくれた日には巻き添えになって沈むしかない。

『触らぬ神に祟りなし』とは、こういうときにこそ、活用すべき言葉といえよう。
ロスバッハも、C、D砲を用いて攻撃することは出来た。だが、少しでも照準を間違えれば後続艦を吹き飛ばすことになる。
（だが、それは敵も同じだ）
ランカードは考えた。
敵は急速に艦隊を追い抜きつつある。ロスバッハの真横に来るのも時間の問題だろう。となれば……。
「攻撃は無用だ。敵を追い抜かせろ。ケツを叩く！追い抜かれた後続艦は最後尾艦から単横陣に切り替えさせろ」
「本艦に接近中！」
「右舷衝突防御急げ！司令、衝突を回避するため、舵を切ります」

「ああ。やりたまえ」
妥当な判断だと。ランカードは納得した。
「面舵一杯急げ！」
「敵、本艦目がけて転舵！本艦に接近中！」
「なんだと？」
ランカードとスーツカは思わず顔を見合わせた。
やつらなにを考えているんだ。戦艦でこんな、敵艦隊の隊列をすり抜けるような行動をとるだけでもわからないのに、さらに接近を試みているだと？俺たちは帆船時代の海軍じゃないんだぞ。このままではお互いに衝突してしまう。
「転舵急げ！砲術、全砲門咄嗟射撃！」
何か言い様のない振動がスーツカ達の足下から響いてきた。

午後９時７分、ロスバッハの右斜め後方に接近した大和は左に舵を切った彼女の右舷に自分の左舷を擦り付けるように接触。双方の乗組員の大半を艦内で煎り豆のように弾き上げると、彼女達は海上に停止した。
「うわぁぁぁっ！！」
艦橋で立っていた司令部の士官達はものの見事に右舷側に弾き飛ばされた。
シートに踏んばり、コンソール横の手すりに捕まって、ようやく耐え抜いた綾崎は、嬉しそうな声でインターホンめがけて叫んだ。
「さぁ。パイレーツ共、喜べ仕事だ！」

海賊行為　　午後９時０７分
今まで誰も聞いたことのないような不思議な音。衝撃と何かが擦れ、金属物がちぎれる音が、現場に近いだけはっきりと聞こえた。
「ぐわぁぁぁっ！！」

対空要員退避所にしつらえられたシートに腰を下ろし、シート備え付けのシートベルトをしめた、完全武装した2つの特殊部隊の隊員達ですら、銃を握ったまま、シートベルトも裂けろといわんばかりに弾き飛ばされそうになった。

「…ゴホッ。むっ、無茶苦茶よ」

と、スコルツェニーの横のシートに陣取っていたが、シートベルトに腹部をしたたかにうって、思わずむせ返っていた神無月がシートベルトを外しながら怒鳴った。

「こんなの聞いてない！ゴホッ」

『さぁ。パイレーツ共、喜べ仕事だ！』

綾崎も結構ノッているらしい。

「ノりやすさでも強引さでも陛下と張り合えるわ」

「あの方に比べりゃ、かわいいもんさ」

スコルツェニーはＭＰ－５のセフティーを外しながら部下に命じた。

「野郎共、いくぞ！」

「押忍！」

ジャカジャカと、セフティーを解除する音が響く。

「まったく……これより突撃する。目標箇所を速やかに占拠せよ」

「了解！」

退避所のドアの向こうは、閉める前まで確かに暗黒の世界が広がっていた。だが、いまでは鉄の城壁が世界を仕切っていた。

「すげぇ」思わず隊員から感嘆の声が上がる。

「感心している暇はないよ！敵が逃げる前に乗り込むんだ！」

神無月は真っ先にロスバッハの甲板へ飛び移った。

「くそっ、一番槍奪われたか」

スコルツェニーは舌打ちすると、その後に続いた。

「艦長！」

艦長席から前に放りだされ、したたかに顔を打ちつけたスーツカ

の所に、先任士官が駆けつけてきた。
頭がいまだにはっきりしない。軽い脳震盪を引き起こしているらしい。
「なんだ？」
「てっ、敵兵が乗り込んで来ています！」
「なんだと？」
彼のぼやけた頭でも、その事態の大変さが理解できた。彼は即座に暗号表と作戦指導書の処分を命じた。
「全砲塔を占拠されました！」
「艦橋のすぐ真下まで敵兵が来ています」
「排除しろ！」
「敵の数は５０名以上です。とてもではありませんが無理です」
「そういうことだ」
聞き慣れない男の声が艦橋に響いた。
「南沙帝国軍だ。速やかに降伏せよ。無駄な抵抗はなさらないように」
入口付近を見ると、数人の完全武装した兵士達が彼ら目がけて銃口を向けていた。
皆、自然と両手を上げ、すべての行動を止めた。
「司令官はどなたか？」
私だ。と、ランカードが宣言した。毅然とした態度が印象的だった。
スコルツェニーは、銃を下ろし、一礼の後に言った。部下も銃を降ろし、敬礼する。
「小官は南沙帝国軍陸戦隊特殊戦術班班長オットー・スコルツェニー大佐であります。閣下に速やかな降伏をお勧めいたします。無駄な抵抗はなさらないように」
「部下の命を保証してもらいたい」
「無論です」
神無月達が駆けつけた時、すでに事態は終結していた。

フェイズ3の完全降伏。しかも無血での。
『一番の手柄を奪われた』と神無月は後に悔しがったが、『一番槍の名誉と引換さ』というスコルツェニーにやり込められたという。

『……というわけで、現在、ロスバッハはナンサ軍の指揮下にある』

その放送を、フェイズ3の将兵は茫然としながら聞き入っていた。
こんな馬鹿なことがあるか。こんな負け方があるか。と、彼らはやり場のない怒りと悲しみに支配されていた。
『こんな負け方は確かに屈辱だ。だが、我々には生きてこそ出来るなにかがある。無駄死にはご免だ。諸君。今、我々の夏は終わりを告げた。春が来るまでには相当な時間が必要だろう。そして、乗り越えるべき秋も冬も、まだ来ていない。その無聊のときを、祖国と共に乗り越えるため、今、この一時の無念を、どうか耐えてくれ。いずれ春がくるを信じて』

「一段落つきましたな」
「ああ」
山本の顔も見ずに生返事をした綾崎は、ふと、出撃前の綾羅との会話を思い出した。

『親衛隊を貸してほしいですって?』
『はい』
『ふぅ~ん』
綾羅はすべてを見通した上で楽しんでいるような笑みを浮かべつつ、綾崎を見つめた。
この方には勝てないな。と、綾崎は思った。
『事が済んだら、艦籍簿、いい意味で改訂が必要そうね』
『出来ればの話ですが』
『謙遜しなくて結構よ。自信、あるんでしょう?』

『まぁ』
『いいわ。こき使ってくれて結構よ。でも』
『はっ？』
『スコルツェニー大佐も行きたがるわよ？あの人も暇だ暇だ言ってたから』
『心強いですな』
『うふふっ』

「後は大佐達の監視下にあるロスバッハに南沙までの船旅を楽しんでもらおう」
「しかし、こんな手があろうとは思いもしませんでしたな」
「両刃の剣だ」
「同じ手が二度も通用するはずがない……ですな」
艦籍簿が手に入りました。と、山本が一つのファイルを綾崎に手渡した。
「暗号表や作戦指導書はだめか」
「だめでした」
「そうか」
ペラペラめくると、数多いＩＢＣ所属艦の名前が連なっており、艦の後ろに行動不能と書かれた艦が多いのが目についた。
「所で、提督」山本の声は深刻だった。
「ん？」
「後で、少しお話が」
「ここではだめか？」
山本は沈黙をもって答えた。
「わかった。こいつの分析を急がせろ」
「敵が少ないほうがいいですな」と神。
「そうだな。さて。フリードリヒ級１隻手に入れたぞ」
と、綾崎は嬉しそうに言った。
「前から欲しがってましたものね。フリードリヒ級」

「ああ。何しろあれは……」
と、綾崎は長々とフリードリヒ級の素晴らしさについて演説を始めた。
当然周囲は白けた雰囲気に包まれる。
「ねぇねぇ」
艦橋の通信オペレーターが隣の同僚をつっついた。
「なによ？」
「綾崎提督って、まさか」
「なに？」
「軍艦オタク？」
「みたいね……」二人は白けた視線を綾崎に送った。
「真名ちゃん一生苦労するよ？あれ」
「よし、今度あいつが大和と舳先を並べることになったら、あいつに旗艦をおいてみよう。いい仕事ができそうだ」
と、綾崎は大笑いした。
はぁ～っと周囲からは力の抜けるため息が出る。
知らぬが仏とは、よく言ったものである。

『提督』
ＮＡＴＵが外部通信報告の一環として綾崎に報告してきた。
ブスッとした顔で、目に涙がうっすらと浮かんでいた。
傍目には相当に怒っているように見える。
『ロスバッハのスコルツェニー大佐からです。ランカード提督が面会を求めているそうです』
「わかった。長官公室に通せ。失礼のないようにな」
『わかりましたっ！！』
ベーッ！と舌を出した後、ＮＡＴＵには珍しく、ブチッと乱暴に通信が切れた。
「なんだ？」
「ヤキモチ焼いてんですよ」

「何に？」

「提督が姉妹艦のロスバッハに色目使うからです」

一般の通説に従えば、１９８０年代から９０年代初期にかけて、ＷＢＦＣは、日独系のビリオネアー会員の依頼を元に、最大にして最後の建艦計画『ファウストの三姉妹』の元、それぞれ『アトロポス』『ラキシス』『クローソー』とコードネームが与えられた巨大戦艦三姉妹を生み出す計画を打ち立てた。

姉２人の建艦担当者は希代の建艦の天才と呼ばれたリー・ディードリッヒ。

実用的核融合機関を発明し、ドイツ有数の電気機械メーカーの理事にして『原子力発電学の鬼才』と呼ばれたジークフリード・ビュルクネル。層間装甲の実用化に貢献した、ドイツ最大の死の商人にして自らも装甲研究の分野において世界的第一人者を自負しているハンス・エヴェルス等、世界的な天才達がこぞって手を加えた（彼等の理論は後に生まれる三姉妹それぞれに応用はされている）ことにより、『低コストで夢が現実に！』を売り物にしたＷＢＦＣの戦艦達の例に漏れず、一隻１５００億円（当時・一隻２５０～１００億が当時の相場）のコストで完成にこぎ着けるはずであった。だが、オーナー募集に希望者は現れなかった。ＷＢＦＣの最後を象徴するような出来事だった。

その水泡と化した計画を引き継ぐ形で建造された『大和』がそのまま自分となっているＮＡＴＵの身としては、自分の開発コードネームが『クローソー』だったこともあり、自分よりも姉（真実は彼女が長女である）の方が優れていると言っているともとれる綾崎の演説は面白くなかったのだ。

「……」

大和の甲板を踏んだランカードらフェイズ３司令部は大和の艦橋を見上げた。

「ヤマト……ですな」

「ご存じですか?」と、歓迎に出向いた副長の奈良元が尋ねた。
「いえ。艦橋の形が日本海軍の大和によく似ていたからです。うわさで同型艦が建造が進んでいるとは聞いていましたが、まさかこんなに巨大な艦とは予想もしませんでした。」
ランカードは自嘲気味に笑みを浮かべた。
「しかも、それがこうして、敵になるとは、よもや夢にも思いませんでした」

ランカード達は、綾崎達の待つ、大和の艦橋の下にある長官公室に通された。
入室と同時に、双方で敬礼が交わされた。
「ＩＢＣ独立艦隊フェイズ3司令官Ｊ・ランカード少将です」
「水上艦隊第１１任務部隊司令官綾崎悠矢大将です」
二人は面識があった。かつて綾崎が海兵隊代表としてＩＢＣの見学に行ったとき、互いに酒を酌み交わし、戦略談義に華を咲かせたことがある。
「あなたでしたか」
「意外でしたな」
二人は近寄って握手を交わした。
「まぁ、あのときも、あなたには勝てないと思っておりましたが、案の上でした」
「私とて…」
綾崎は軽く笑みを浮かべた。
「まぁ、何にしろ、閣下の艦隊は我々の指揮下に入っていただきます」
「やむを得ませんな」
「では、これからの貴官らの処遇についてですが」
まぁ。座りましょうといいつつ、綾崎は山本へ振り返り、説明を求めた。
「はっ。自分は第１１任務部隊首席参謀山本透中佐であります。

率直に申し上げます。フェイズ3は我々の監視下の元、南沙帝国新湊基地まで航海していただきます。目的は、基地にて行われる武装解除のためです。終了次第、艦船はともかくも貴官等は全員、祖国への帰途についていただくことになるでしょう。航海はすでに国連の許可を取りつけておりますので、途中で攻撃を受ける恐れはありません」

彼らは国連軍に戦争のルールとしてすでに国連にいくつかの提案を行い、そして認められていた。そのうちの一つに、こんなものがある。

『南沙帝国軍が捕獲した艦を無制限に南沙まで曳航することができる』と。

これにより、彼らは米軍に引き渡す事なく、南沙まで彼らを運ぶことができたのだ。

「我々は捕虜ですぞ?」と、フェイズ3司令部の一部から声が上がる。

「我々は貴官等を捕虜として扱いません」

綾崎はきっぱりと言い切った。

「貴官等はあくまで船乗りです。船乗りには船乗りにふさわしい扱いがあります」

綾崎は目の前で手を組んでフェイズ3の司令部の将官等を見つめた。

「船乗りとして扱うことです」

「というと?」

「貴官等にフェイズ3艦隊を柱基地まで運んでいただく。船乗りとして」

「なっ……」

言葉がなかった。大胆にも程がある。

「途中で逃亡するなり、反撃に撃って出るという危険性を考慮しないのですか」

「船乗りにも信義はあります」

綾崎は言った。

「最善を尽くし破れた者に礼儀を払う。そう。我々は貴官等の信義に訴え、そしてお願いしているのです。最後の最後まで信義を守る誇り高き船乗りであってほしい。と。となれば、わかるでしょう？誇り高き船乗りが信義を破ると？」

これが綾崎の策だった。あくまで威圧的ではなく、外面からの強制に頼らず、相手のプライドに頼る。ここで仮に彼らが裏切れば、彼らは礼を仇で返したと永遠に謗られることとなる。それは「栄光ある誇り高き船乗り」集団であるＩＢＣ独立艦隊乗組員にとって耐え難い謗りだった。できるわけがない。

「信じてます。同じ船乗りとして」

「わかりました」

ランカードは言下に言い切った。

「ＩＢＣ独立艦隊フェイズ３は、武装解除のため、新湊までの航海を実施いたします」

「頼みますぞ」

「南沙までの航海は、お任せください」

ランカード達が去った後、山本は綾崎を初め、幹部を全員、長官公室に招聘した。その顔は深刻そのものだった。

「どうした？」

「親衛隊がロスバッハに侵入した際、手に入れたものです」

山本はそういって、ファイルを一冊、綾崎に差し出した。

『ＩＢＣ主力艦艇仕様書』と書かれた赤本だった。

「機密文書だな」綾崎は中身を開かずにタイトルだけを見た。

「処分される寸前で親衛隊が上手く止めてくれたんです」

「それで？」

「我々の把握しているフリードリッヒ・デア・グロッセのデーターに、とてつもない間違いが発見できました」

そういって山本はプロジェクターを作動させた。

「……」

誰もが言葉を失った。悪夢を見ている心境だった。

「山本中佐、なんでゴワス。そのデーターは……」

神少佐が震える声でようやくそれだけを言った。額に冷や汗が流れていた。

「そのファイルにあるデーターです。敵に対する欺瞞とするには、出来過ぎています」

「……俺達は一体」

モニター越しの田中がつばを飲み込んでから続けた。

「化け物退治にでも行かされるというのか？」剛胆な田中の声も震えていた。

「建造が１９９６年です。恐らく、ＩＢＣがロスバッハ級をフリードリヒ級と偽っていたのでしょう。本当のフリードリヒのデーターは、間違いなくこちらにある通りのはずです」

「俺達にこんな化け物相手に戦えと言うのか！？」

「もう戦いは始まっています」山本は無感情な声で言った。

「やらなければ、我々が死ぬだけです」

「ふむ……」綾崎は斜め読みするファイルから視線を外さずにいった。

「『フォン・ヒンデンブルク』だな」

「はっ？」

「以前にＩＢＣへ視察に言ったとき、艤装岸壁に入っていた戦艦、艦尾に名が刻印されていて、それが『フォン・ヒンデンブルク』とあった。前にフリードリヒと紹介された艦、つまり、我々が今まで知っている意味でのフリードリヒに似ていたので、二隻しか建造されていなかったはずなのに。あの三隻目は何だ？と、真田大佐と一緒に首をひねった覚えがある。そう。我々がフリードリヒ級と称していたのは、『フォン・ヒンデンブルク』級だったのだ。つまり」

綾崎は少しだけ視線を上げて言った。

「我々は騙されていたのだ」

「どういたしますか？」
「そんなこと」綾崎は楽しそうだった。
「やるに決まっているだろう？奴らの戦艦が化け物なら、こっちだって十分以上の化け物だ。人類史上最大級、空前絶後の戦艦同士の激突だ。いままで騙してくれた落とし前、きっちりつけて、さらに大スペクタクルが味わえるんだ。楽しいじゃないか」
綾崎の手の中のファイルのページが止まった。綾崎は食い入るようにそこを見た。まるでフリードリヒの驚異なんて眼中にないとでも言わんばかりのその態度は、指揮官がこの様子なら、きっとなんとかなると、幹部達に安堵のため息をださせるに十分なものだった。
しかし、それでも幹部達個人の恐怖は拭いきれなかった。
「まさに悪魔だな。この戦艦……」
奈良本が吐き捨てるように呟いたが、それは居合わせた幹部達の気持ちを代弁しているような言葉だった。
「しかし、提督」冴子が言った。
「兵達の間では、大和とフリードリヒでは話にならない。この戦、勝ったようなものだ。と楽観視が出ています。どうしますか？」
「報せるしかあるまい？」
「戦意が低下するかもしれません」
「後々で恐慌状態を来されるより余程ましだ。だが、まだウチのほうが楽だ。大和級に対する認識は、恐らく今の我々が見るフリードリヒよりも余程余裕があるはずだ。それに比べればな。おい」
綾崎は山本に指示を出して、プロジェクターにあるページを映しださせた。
「彼奴らは、大和の対抗艦として、フリードリヒを作り上げたんだ」
プロジェクターに映しだされたのは、戦艦の推測図だった。
『推測データーファイル・ナンバー１１１：仮称１１１号艦。基準排水量８万トン。全長２８０メートル。主砲４９センチ砲３連装砲塔３基。他の諸データーは別項参照のこと』

「敵艦隊を拿捕したですって？」
水上艦隊司令部はちょっとした混乱に陥っていた。
「はい。第１１任務部隊はＩＢＣ独立艦隊第４艦隊「フェイズ３」８隻を発見。これを奇襲。ほぼ無傷で拿捕に成功しました」
「死者は？」
「双方ともにありません」
「いない？」
意外と言えばこれ以上の言葉がない。全く無血でケリがついたというのか？
「衝突によるケガ人はでましたが、それ以上は全く」
「大したものだ」
「それから……」
「なに？」
「押収した機密文書の中に、フリードリヒ級の正式なデーターがありました」
「正確って、ちょっと……どういうこと？」
「我々がフリードリヒとして把握していたのは、まったく、別の艦だったのです。綾崎提督はフォン・ヒンデンブルク級であろうと」
「詳しく説明して」
「フリードリヒ・デア・グロッセは、従来、７万５千トン、全長２８５メートル、４９口径４２センチ連装砲塔４門の通常動力艦と考えられていました」
「違うのか？」と、居合わせた幹部から疑問の声が出る。
「違うから大変なのです」
「そうだな……」すまない。と、その幹部は頭を下げた。
守谷は手元のコンソールを操作し、プロジェクターに大和から送られてきたデーターを拡大投影した。
「……」
「大和もそうだが、こんな化け物じみた艦を作るっていうのは、

一体何があるというのだ？」
「大和と同じと言うことです」
「？」
「大和だってミサイル時代にも生き残れるキャパシティを保有した艦として設計されたが故に、あんなに巨大化したんです。フリードリヒも恐らく同じでしょう。あのサイズならば、大和や蒼龍と同じく核融合炉を搭載しているはずです。そして、リムゲードが建造に絡んでいるとするならば、電磁推進機関で航行するものと考えられます」
守谷は深刻な顔で藤島に進言した。
「我々は、フリードリヒの性能を本来の半分程度の他の戦艦のものと勘違いしていたのです。同艦に対する速やかなる対応の変更を進言いたします」
「変更？」藤島はやや呆れ顔で言った。いまさら何が出来るというのだ？
「たとえば？」
「戦略を変更し、フリードリヒと戦わない方法を模索する。もしくは現在研究中のウォルフ・パック戦術の採用などを」
「ウチが戦わなくても国連軍の誰かが戦う。となれば、後々響くわ。それに、もう戦いは始まっている。この戦争、小手先だけでどうこうなる状況は、最初からないわ」悠理はそっぽを向きながら言った。
「我々が持っているカードは少なすぎるのよ」
「しかし……」
「単艦で渡り合わせる戦術は、そう簡単に上手くいくのじゃないわ。まだ私達はその損害に十分な対応がとれない。だからお蔵入りになったんでしょう？あの戦術」
「……はい」
「綾崎に任せましょう。大和は、そんなに簡単に潰れはしないわ」
「大丈夫でしょうか」

「スペックの上なら」藤島は全てを制するようにやや大声で言った。
「大和の方が優れている。あとは、乗組員の腕と運だ」
藤島は澄んだ声で言った。
「信じるのよ。綾崎と、私達の子供達を……」

『ＩＢＣ艦隊の一部が国連軍に拿捕された』というニュースは、瞬く間に世界中に知れ渡った。無論、マスコミにもである。
国連軍を通じて、フェイズ３が拿捕されたことが発表されたのは、日本時間の午前３時。発表場所のニューヨーク現地時間正午頃だった。
緊急に催された国連多国籍軍スポークスマンの発表に対し、集められたマスコミは、負け続けの国連軍が再度大敗を喫したものと思い、怒りと絶望の中でカメラやマイクを向けた。
「私は、皆さんに信じられないようなことをお知らせいたしなくてはなりません」
（今度は何人死んだんだ？）
と、ニューヨークタイムスの記者は心の中で舌打ちしつつ、マイクを向けていた。
（こんどは２万か３万か）
だが、スポークスマンの声は意外に明るかった。
「国連軍の一角を担っている南沙帝国海軍のことはすでにご存じとは思いますが、彼らは、昨日、現地時間午後９時７分、ＩＢＣ独立艦隊第４戦隊、『フェイズ３』８隻と接触、これに強襲をかけることにより、この戦隊を拿捕することに成功しました。この戦闘における戦死者は双方ともにおりません」
それは国連軍初の勝利宣言だった。彼はようやくにして出せた勝利宣言を自分が読めたことに感動していた。
「いない！？」記者の一人が大声で言った。

「サー。そんなことはないでしょう。我々米軍は南沙海峡でＩＢＣの戦艦一隻を沈めるのにフリゲート艦８隻を沈められた勘定なのに」

「事実です」スポークスマンはきっぱりと言い切った。

「彼らは帆船時代の海軍顔負けの手段で敵を拿捕したのです。今、南沙から派遣されている広報担当官シェーア少佐がご説明致します」

スポークスマンの斜め後ろに立っていた見慣れない軍服に身を包んだ銀髪の髭面男が一歩前に出て、マスコミに敬礼した。

「自分は南沙帝国軍務省外務局副長ジェームズ・シェーア中佐であります」

ハキハキとした声と、背筋に針金でも入れているかの如きピンと伸びた背筋がスポークスマンよりも威厳を感じさせた。先祖は貴族だったに違いない。

「サー。本当なんですか?その、無血拿捕ってのは」

「間違いありません」

スクリーンに一枚の図が写し出された。戦況報告図のようである。

「時間はすべて現地時間です。我が軍は敵が１５ノットで航行している所を、夜間索敵能力に優れた人材の活用により、敵の倍近い距離から発見することに成功。スコールを隠れ蓑にして敵の索敵限界スレスレを縫うように敵艦隊の背後に付き、一気に敵の倍以上の高速で敵艦隊の背後から艦隊の真横を、数十メートルの距離でつき抜け、先頭にいた旗艦にチャージ。待機させていた特殊部隊を旗艦に乗り込ませたというわけです」

「どうしてそんなことが可能だったのですか?」

「現地の司令官の報告では、我がほうの旗艦が外部を黒色にしていることによるカモフラージュ効果が、曇空による暗闇にうまく溶け込んでくれたこと。旗艦速力が極めて早かったため、低速で航行中の敵艦隊に、敵艦隊が対応する前に割り込むことが可能だったこと。敵の索敵能力が前面に集中しており、後方を軽視していたことにより、強襲が容易だったこと。敵艦隊に割り込んだとき、彼我の

距離を可能な限りつめていたため、双方ともに攻撃が不可能だったため、旗艦同士が接触するまで双方ともに一発も撃てなかったためとのことです」

「予想通りということですか？」

「現地司令官の思惑通りには言った。そう言うべきでしょう」

何しろ、我々すら知らない作戦でしたからね。と、シェーアは低く笑った。

「サー。現地司令官のお名前と、艦隊に所属しているすべての艦の名称を教えてください」

「それは出来ないのです」

「なぜです？」

それでは完璧な記事になりません。と、マスコミの一部から非難が飛んだ。

「我々は艦の名称をここで明らかにすれば、その艦の性能、弱点など、我々に不利になることがすべて敵に知れてしまいます。どうかそれだけは功績に免じてご勘弁ください」

第四部　遭遇戦！　1

『ＷＹ２より大和！！左舷、貴艦より約６０キロ！！マスト５本発見！！先のマストはモンタナ級！！左舷への射撃を継続中！』

スピーカーを通じて戦闘艦橋に響いた報告。この瞬間、大和艦内のなにかが、永遠に凍りついた。

「なにっ！？敵戦艦部隊だと！？本当か！？」

「確かに敵戦艦のマストです！」送られてきたデーターを解析していたオペレーターが緊張した声で報告してくる。

「ようやく偵察艦隊を片付けたばかりだというのに」

「なにため息ついてるんです！艦長！艦隊決戦です。しかも相手は戦艦ばかりです！」

「一発敵主力撃破の大和の悲願がついにかなうんです。まさに天祐ですよ」

「そうでごわす！ここで死ぬも本望。武士の本懐でごわす！」

そんな風に盛り上がる司令部の連中を尻目に、綾崎は沈みがちだった。

「レーダーはだめか……。ハリアーを全機上げろ」

綾崎は司令シートに腰を降ろしたまま、ため息をついたが、さすがに艦長としては筋金入りといえた。矢継ぎ早に命令を下す。

その間にも、艦橋の雰囲気は慌ただしいものとなった。いち早く事情を察した隊員達が命令を受けるよりも早く、持ち場へと駆け出したのだ。

（船乗りはかくあるべきなのだ）

綾崎はそれを見て、うれしく思いつつ、短く指示を出した。

「合戦準備。配置につかせろ」

「了解！全乗組員へ、合戦準備。くり返す、合戦準備！総員配置につけ！」

側に控えていたオペレーターがマイク目がけて怒鳴る。同時にキ

ーンキーンという戦闘配置を告げる警告音が響きいた。
「参謀、二水戦に回線2を開くように指示を」
「了解」
「総員、戦闘配置完了！！」
「よし。取り舵２０。進路１－３－５に合わせろ。機関室。速度３０ノットへ」
「航海、了解。取り舵２０」
「機関室了解。速力３０ノット」
「さて。太平洋戦争のやり直しだ。戦闘！」
「了解！戦闘発令！」
『全砲塔試動確認！問題なし！各部セフティー確認！各部水密扉閉鎖確認終了！全戦闘システム作動確認。大和、戦闘準備完了！』
「よし。ご苦労」
綾崎はそういいながら、司令席の前のコンソールのいくつかを作動させた。
司令塔の艦長席と司令席は、コの字型にコンピューターやモニターなどが所狭しと並び、各所に配置された幹部達と、顔を見ながらリアルタイムで会話ができると同時に、艦全体を正確に把握できるようになっている。司令席は同時に全艦艦長とも同様の会話が出来るように出来ている。
コの字型の角の部分にある、砲術指揮所からの通信を伝える１０インチモニターが呼び出し音を立てて、映像を映し出した。
「提督」
当然ながら、砲術長の冴子である。
ただ、この場合、冴子は画面に出ている暇はないため、画面には
『Ｓｅｎｄｅｒ
Ｍａｉｎ Ｇｕｎｓ Ｃｏｕｎｔｒｏｌｌ Ｃｅｎｔｅｒ
Ｃｈｅａｍ Ｎｏ－０１，０２，０３，
Ｔｏｔａｌｌ Ｒｅａｄｅｒ
Ａｌｌ Ｇｕｎｓ Ｃｈｅｆｆ Ｓｔａｆｆ』

と表示されていた。綾崎が脇のスイッチを操作すると、これが南沙語に変換される。いざというときには、やはり母国語の方が理解が早い。それに、部隊の運用するシステムは、英語と南沙語が同時に映しだされる方が多いのである。

この場合は、綾崎がそうなるための混成モードに切り替えておかなかったために発生した状況であった。

ピッ

『　発信先

主砲指揮所

第1、第2，第3分隊

総指揮官

砲術長

天城　冴子　少佐

ＳＯＵＮＤ　ＯＮＬＹ

』

という表示がなされる。

『提督。現在データー入力中。弾種はＨＥＡＴでよろしいですか？』

「うむ。さっさとアタリをつけてくれ」

『了解』

「試射している暇はどうやらなさそうだ。最初の一発が戦況に与える影響はデカい。お前が頼りだ。頼むぞ」

『はい。了解しました。目標、敵1および2番艦、照準急げ！！全主砲長、弾種、ＨＥＡＴ装填急げ！！』

「所定データー入力！射撃準備急げ！」冴子の号令が飛ぶ。

「はいっ！！」黄色い、張りのある声が返され、ＣＩＣの横に置かれた主砲射撃指揮所（ＭＧＣＣ）に配備されているオペレーターがそれぞれのコンピューターのキーを打ち始めた。

ピッ

未装填

安全
の表示が、
実装
火
の表示に切り替わる。

ＭＧＣＣには砲術長１人と副長１名、さらにオペレーターが６名の８名が詰めており、全員が女性である。彼女達が円形のＭＧＣＣの外側を向く形で設置されている戦闘機のコクピットのような、コンピューターや計器類の固まりと向き合い、主砲の照準や情報管理にあたっている。

当然、一人一人の責任は極めて重く、データー一つ間違えればそれだけで取り返しがつかないこともありうる。

その真ん中には、文字通り主砲の一切を管理出来、主砲のトリガーもここで引くこととなる砲術長専用シートがある。

目視射撃となると、砲術長は、巨大なヘルメットの様な砲術データー管理バーチャルシステム、つまり、２５メートル測距儀と幾重に施された安全装置を介して視覚を同調し、あまつさえ各種データーですら、同じく、幾重にも施された安全装置を介してＮＡＴＵシステムからのデーターを視覚で取り入れるシステムで砲術指揮が出来る。

このシステムの最大かつ唯一の利点は、有視界戦闘においては絶大な能力を発揮できることである。

この海戦で大和が叩き出した、命中率８０％（旧海軍でも３０％）という信じられない数値も、まさに冴子とこのシステムがタッグを組んでこそ成しえた数値と言える。

「ＮＡＴＵ、やれて？」

『５万５千で初弾発射可能です。いかがなさいますか？』

「やるに決まってんでしょ？やるに」

『了解』

「ＮＡＴＵシステムとのリンク安定しています」
「砲身平均温度１２度。問題なし」
「各主砲長は速やかに砲身内部点検を開始、確認後、速やかに結果報告を。くりかえします――」
「ＮＡＴＵシステムからのデーター入ります」
「砲術長、第１、第２、第３砲塔、問題なし。弾種ＨＥＡＴ、装填完了しました。トリガー回します」
「レーザー探索システム照準、だめです！敵艦、ＡＬＣを施している模様！」
「照準を続けて。一発でも当たればそこで照準が出来る」
「はいっ！」
ピピピピピピピ……ビーッビーッビーッ
『だめです！射撃不能！』
彼我の距離の表示が、凄まじいスピードで前後していた測距儀と直結されているターゲットスコープから、突然、敵味方間の距離の表示が突然消えると、『ＮＯ！！』の文字が点滅した。
「ナツ、どうしたの！？」
『敵が急変針しました。現在諸データー修正入力中！』

その間にも任務部隊は敵を撃滅するため、まるで猟犬のように海原を走り回っていた。

ほぼ直進する大和以下の戦艦群はもとより、「天城」「赤城」に護られた二水戦は、見事なまでの単形陣を組みながら大和から右方向へと離れていった。
「二水戦、離れます！」
「よし」
「第４斉射まで各戦艦はそれぞれの主砲必中距離に敵が入り次第連動射撃を行え。第５斉射以降は大和が全艦の統一射撃を行う。打ち合わせ通りだ」

「艦橋見張りより艦長。二水戦司令、田中大佐から発光信号です」
その模様を眺めていた綾崎に、見張りが告げた。
「読んでくれ」
「はっ。『かくて我らは戦いを求め、夢想すら及ばぬ静寂を縫って船を進めん。願わくば戦いの後、再び巡りあわんことを。二水戦司令、田中雷蔵』以上です」
「……なにしてるのかと思えば、んなモンひねっていたのか。あの親分様は」
綾崎は、ブルドックを彷彿とさせるヤクザの親分みたいな傷だらけの司令官の顔を思い浮かべて苦笑した。
「返信しますか？」
「そうだな……」
綾崎は少し考え込んだ。おや？そういえば、もう一つ連絡しておくべき場所があったか。
「艦橋見張り。発光信号で返信だ。文面は……『こきやがれ。ばかやろう』だ」

【アイオワ】
ウインシスコンが１０分ほど前に戦線から脱落した。
大西洋艦隊より派遣された戦艦部隊１６隻のうち、すでに2隻が沈められた計算になる。
現在、リーチ提督指揮下にある戦艦は現在では3隻。ウィンシスコンの前に既に1隻が脱落していた。残り１３隻は、後詰めとしてマーカス島に停泊中である。合流まで2日はかかる。
彼らはここをしのがねば、アーリントン墓地へ行くしかなかった。
「第8斉射、弾着します」
英国移民であり、イングランド気質の強いリーチは、同じように英国紳士然と構える部下と共に双眼鏡を構え、その成果を見守った。
『一体、大西洋艦隊とは米国艦隊か英国艦隊か』と冗談が飛ぶほど、彼らは、ほぼ完全な英国海軍の気質を持っていた。勇猛果敢に

して冷静沈着な彼らは、こんな時でも自分達のスタイルを崩そうとはしなかった。

射弾は敵先頭の2隻に集中。2番艦キング・ジョージ5世級らしい戦艦は甲板で派手な爆発が発生したが、1番艦モンタナ級は、後甲板でわずかな火災が発生した程度だった。変化はほかに何もない。

天候の影響で普段より強力なピッチングが発生している上に、レーダーが使えない状態ではこの程度だろう。

むしろ、生き残った3隻が、ほとんど損害を出していないこと自体が奇跡に近いのだ。これは再起を期して反撃するしかない。でもどうやって？

「提督！！」

マイクやカメラを手にこちらに駆け寄ってくる数名の男達。ＣＮＮの特派員のシャーロット達だった。無論、彼らのカメラはリーチの姿を全世界に流している。

「大分押されているようですが、勝ち目はないんですか？」

「あってほしいね」

彼はぽつり、とそう呟いて側にいた参謀長に呟いた。

「参謀長、今日のところはだめのようだな」

「まったくです。なかなか良い仕事をしたと思ったのですが」

「ふむ」

リーチは主隊の状況を確認した。残存戦艦はアイオワ、ワシントン、ミズーリ。

ウィンシスコンはついに沈んだという。

彼は思った。ふむ。午後のお茶の時間まではもつと思ったんだが。

「提督！このままいけば我々は！？」

シャーロットがすがるような目で彼に詰め寄ってきた。

おそらく、この場に居合わせた全員が彼と同じ気持ちだったろう。

「仕方あるまい」

と、彼は呟くように言った。ここで艦隊を全滅させるわけにはいかない。

「参謀長。ミズーリの艦長に、残存艦艇の指揮をとるように伝えてくれないか。本艦は……ああ、旗艦としての勤めを果たさなくてはならないからな」

「提督……」

と、シャーロットが緊張した声で言った。手に持ったマイクが震えている。

「すまんな。なるべくなら、君達には歴史を撮らせてやりたかったのだが。どうやら我々同様、本当に歴史の一部となる運命のようだ」

「いっ、いえ」

シャーロットは頬を紅潮させて言った。

「むしろ光栄ですよ！提督！」

リーチは軽い笑みを浮かべ、大きく頷くと、参謀に先ほどの命令――自分たちをアーリントン墓地へと連れていくための命令――を発信させようとした。

「失礼しますが、では提督！あの世で逢いましょう」

シャーロットはそれを遮るように、敬礼しつつ大声で言った。

「？」

リーチは彼が何を言ったのかわからなかった。

「我々には、戦場特派員としての責務があります。最後の最後まで、戦場を撮り続けるというね。これから防空指揮所にあがって、敵の姿を撮ってみます」

「ああ。そういうことか」リーチは笑みを浮かべて言った。

「ベスト・ショットを期待しているよ。もっとも、私はそれを見ることが出来ないだろうけどね」

シャーロットが背を向けた瞬間、スピーカーから通信士の声が聞こえてきた。余程慌てているらしい。

「つ、通信室より、ちっ、長官！長官に入電であります！」

声が震えてうわずっており、手順として定められている通信参謀への電文通達も忘れている。重要な内容なら、もう艦内に筒抜けに

なっている。
（まぁ。もう沈む船の中でなにをしてもいいか。最後位、多目にみてやろう）
リーチはそう思いながら、インターカムをとった。
「リーチだ。読み上げたまえ」
リーチは静かな、それでいてどこかに光のさしてくるような声で言った。
「いっ、イエス・サー、よ、読みます」
艦内は一瞬、静粛に包まれた。誰もがその内容に釘付けとなった。皆、リーチと同じ希望を抱いていたのだ。
通信士は震える声で電文を読み上げた。

「宛、米国艦隊司令官、発、Ａ．Ｋ．Ｄ統合軍第１１任務部隊司令官。
本文。我、之ヨリ戦闘ニ加入ス。イマシバラクノ健闘アレ。以上！」

彼らは来たのだ。

「主よ……」
リーチは地獄の門の前で主に救われた気がした。乗組員も同様だったらしい。負け軍の艦とは思えないほど、艦内は沸き上がっていた。
だが、司令塔だけは、次の報告を聞いた途端に凍りついてしまった。
大和は恐らく自分達から９万メートル。敵とは４万メートルの上の距離が開いている。彼らがその距離を縮めるのには時間が必要だ。それまでに敵が我々を叩かないという保証はない。
予想はあたった。
弾着がきわめて正確にアイオワを揺るがした。

「被害報告！」
「艦尾に命中１、炎上中！」
「第３４兵員室消滅！炎上中！」
（今しばらくの健闘は、どうやら無理のようだね。大和の諸君）
そう考えて、リーチは、いや。と、否定した。
（軍人たる者、最後の最後まであきらめるべきではない。そうだ。私はまだ戦えるではないか）
見張りの報告が入る。
「敵先頭艦、急速回頭、全速発揮の模様！……敵発砲！我々目がけてではありません！」
『ＣＩＣより艦長、熱源トレーサーに反応あり、サーチ限界ぎりぎりです。熱源反応、２－５－９より６－２－７へ！！そうです、南沙人が発砲したんです！砲戦距離、現在測定中！』
「敵艦、右舷方向へミサイル発射！」
狩野粒子は気象条件により、妨害装置として使用できる場合と出来ない場合があり、通常の戦闘では、奇襲攻撃を受けた際にはチャフとして狩野粒子を大量散布することで、この条件を自軍の回避に有利に働かせる工夫がなされるのが普通である。

Ｑ：狩野粒子がレーダーを狂わせるのはなぜか？

Ａ：不明。
『地磁気や海流の流れと密接に影響しているのが原因』とか、様々な説があるが、とにかくわからないものはわからない。電波という電波がみんな使えないのだ。使えるとしてもせいぜいが強力なレーザー位でしかない。これはファイア・アンド・フォアゲット方式の完全な否定であり、戦闘範囲の縮小を意味する。なぜなら、ミサイルそのものが魚雷程度の役にしか立たないのだ。つまり、概略位置にしか打ち込めないのみならず、電波の逆探知で敵に位置をすぐに知られてしまうのである。

しかも、近接信管が作動する以上、これらは容易に撃ち落とされる。

だから、どうしても砲弾のぶつけ合いになる。対艦攻撃はこの時代、艦艇で行うことが当然のようになってしまっていた。航空機は費用対効果の面でもの凄く割の合わない物となってしまっていたのだ。

この原因を説明しろと言われても、私は一介の歴史学者兼作家でしかない。この戦いから数年が経ようとしている現在でも、狩野粒子の影響に関しては百家争鳴の状態なのだ。この先は筆者には説明できない。

だから、読者各位はとにかくも『海面ではミサイルもレーダーも満足に使えない』ということだけ理解しておいてもらいたい。

だからこそ、この時代、最も強力な通常兵器が戦艦となった。

彼らが熱源トレーサーで大和の位置を捉えることが出来たのは、最早幸運と言うべきであった。

「早すぎる！」

幹部達は、その砲撃距離がどれだけ遠いものかわかっていた。

「何を考えている！？」

「こちら艦長、南沙人は一体、いくつで発砲したのかね」

スコットが艦内通信機をとって訊ねた。

『まってください……今、測定完了……何ぃ！？本当かこれは！？』

ＣＩＣ長の狼狽した怒鳴り声が聞こえてきた。

「いくつなんだね」

『はっ、はい……風向きの関係で熱源探知が効く位置に大和はいます。我が軍から敵の目をそらせようとしていのかもしれません。ですから、概略位置で割り出す事は出来るので、そうした末で出したものですが……』

極めて無口な彼がこんな長口調になったのが、スコットのカンに

触った。
「はっきりしたまえ」
『はっ、はい。でっ、では報告します』
「……えっ！？」
スコットは、一瞬自分が聞き間違えたと考え、訊ね返した。
「なんだって？」
『だから！』
幹部達全員、そしてもう一台、シャーロットとは別に待機していたカメラが、彼に視線を集めていた。
「本当かい？」スコットは狼狽した声で訊ねた。
「本当に、本当に間違いないんだね？」
「艦長」
「間違いないんだね？」リーチの声も耳に入っていないのか、スコットはインターホンに訊ね返していた。
「……そうか。ご苦労。任務を続けてくれたまえ」
インターホンを戻し、スコットはリーチに言った。
「南沙人が発砲しました。あと２５秒で弾着します」
「そうか。砲戦距離は」
リーチは敵艦隊の方角へ双眼鏡を向けた。こちらに背を向けることも構わずに、敵はあらぬ方向へと突き進み、砲弾を放っていた。
「砲戦距離、１６万２千フィートです」スコットの声は硬直していた。
「そうか、１６万２千か……」
随分遠いね。と、感心したように言ったリーチは、その自分の口から出た言葉の意味を理解するのに、数秒を要した。
１６万２千フィート、メートル法に換算して約５万４千メートル。
「なんだって？」
彼も又、自分の耳を疑った。そんな距離はミサイル戦の距離ではないか。
「２度、精測をやらせました。その結果です。間違いありません」

「艦長、それは……」
「そうです。彼らは16万2千フィートで発砲したんです」
シャーロットはすでに防空指揮所に上がり、見張りの報告をすぐ間近で聞いていた。
「カメラ急げっ！最大望遠だっ！」
「わかってる！」
カメラのミッキーは、カメラを回しっぱなしなのを忘れて、超大型のズームレンズに交換すると、敵のいる方向目がけてピントを合わせた。
「畜生！よく見えるぜ！」
思わず叫んだ。煙を吐き出しつつ進む先頭艦はモンタナだろう。
彼は思った。畜生。あれほどの大型艦がこっちにあればなぁ。
「こちらCNNシャーロットです。ついに別動隊が合流を果たしました！これより、その模様を中継したいと思います！！」
カメラはズームを調整しながら、彼らのはるか後方にいる大和の姿を捉えようと努力した。
しかし、撮れるものは、雲の中に見え隠れする胡麻粒ほどの航空機の姿がやっとだった。
（南沙人の観測機だ）
シャーロットはそれが何か理解できた。
彼は、遠くで光を見た気がした。
「雷か？」
マイクのキースがシャーロットに尋ねた。
「いや……」
シャーロットは厳粛な顔でそれを否定した。
「おい！あれ！」
白い雲に衝撃波による穴を穿ち、全てを突き破って、隕石の様な紡錘形の物体が敵艦隊に襲いかかろうとしていた。

シャーロットは、唾を飲み込みつつ言った。
「……来るぞ」

大和の主砲弾が到達した。
それまでとは明らかに規模の違う極彩色の水柱が、モンタナとキング・ジョージ5世の周辺に上がる。
主な狙いはモンタナのようだ。モンタナの艦橋付近の左右に１００メートル以上の紅色の水柱が高々と上がった。
初弾狭叉だった。
「相当、いい腕をしてるね。大和の砲術長は」
「はい」
戦史でもまれな初弾夾叉を目にして、リーチは感心したようにいった。
モンタナも必死で打ち返す。
リーチ達は４、５番艦の散漫な砲火を浴びるだけで済んだが、そのめくら撃ちに近い射撃は敵の明白な狼狽を証明していた。
急速回頭中の敵艦の命中率は、先程とは比較にはならないほど乱れていた。
キング・ジョージを巻き込んで６本の水柱がたった。
「畜生！マザーファッカーめ！！どうだ！？」
シャーロットはマイクを握りしめつつ、水柱が収まるのを見守っていた。
数秒後、砲声とは明らかに違う爆発音が辺りに響く。
「……やった……」
シャーロットは言葉を失った。
キング・ジョージは、水柱からいつまでたっても出てこなかった。
代わりに出てきたのは、３番艦のイリノイだった。
「一撃で撃沈かよ……」
敵の砲弾はすべて近弾。大和にとっては全く問題とならないほど

離れた場所に落下した。
『敵2番艦、撃沈、確認しました！』
ナツの報告を受けて、ワッと艦内の至る所で歓声がわく。それを尻目に、綾崎は先ほどから通信機を通じて各所とやりとりしていた。
「よし。回頭中の艦を狙え！やばい所で叩かれないようケリをつけよう」
『敵、最後尾艦、発砲！着弾まであと４６，２秒、敵各艦、煙幕展開中！』
「取り舵２０、速度３ノット下げ。急げ！」

猛烈な水柱が最後尾艦ライオンの後部甲板付近に立ちのぼった。
「今のうちに損傷艦の退却を開始させたまえ」
既にＩＢＣも米軍も、弾薬欠乏と損傷多数をもって戦線から離脱し始めていた。
出せる限りの速力で逃げにかかるもの。喰い留まって敵に砲火を浴びせるものの二つにその場に居合わせた艦を分類することは可能だった。

予定通り、大和の統率射撃が第５斉射から開始されてからは、南沙側の一方的戦闘となった。
「逃げる敵は逃がしてやれ。刃向かってくる奴だけ片付けろ」
そんな綾崎の指示に従い、喰い留まるメインとオハイオ、そして旗艦のモンタナが、脱落するライオンとルイジアナの退却支援のためにその場に喰い留まって、状況が速力が落ちた彼女達にとって、すこしでも有利となるようにと、文字通り決死の努力を続けていた。
「見事なものだ」綾崎はポツリと言った。
「ああゆう死に方をしたいものだ」
砲戦距離はすでに３万メートルを切っていた。
再度構え直した双眼鏡ごしに見たルイジアナは、炎上しつつ、洋上に完全に停止していた。

大和が搭載していた試作型射撃支援用バランサーが功を奏していた。荒波の下でも波からの影響を排除し、命中率を上昇させるというシステムである。これが大和と敵艦との命中率に格段の違いを与えていた。

「冴子、５番艦への射撃を中止しろ。他を叩け」

「やってます！４番艦への射撃、弾着まで後１０秒です」

『敵レーザー波感知！本艦を狙っています！』

「よっし。ようやく本腰をいれなさったな。敵さんも」

綾崎は手をこすり合わせるようにして喜びをあらわにした。

「敵に不足はない！派手にやろう！」

「なんとか助かりますな」

「そうだね。ところで艦長。戦闘は可能かね？」

「はい。なんとか」

「よし。おおいにやろうじゃないか。後々叩かれないためにも」

「イエッサー！」

艦長はやられっぱなしだったことに酷くプライドを傷つけられていた。ようやく訪れた報復のチャンスをミスミス逃すような真似は絶対に認めたくなかった。

「敵は隊列を乱しつつあります。弾薬は欠乏気味ですが、やれます」

「任せるよ」

その声をかき消すかのように、砲声が轟いた。

以降の戦闘は国連軍の一方的勝利となった。

水雷戦隊は防空戦隊と二水戦に壊滅させられていたし、戦艦に話を限定するならば、ニューハンプシャーは、苛烈な戦闘に殉じた艦の中でも、もっとも悲惨な最後を遂げた艦と言えよう。

不運にも、米軍に一番目立つ位置にいた彼女に向け放たれた砲弾は３艦合計１８発。全て４０センチ砲。加えて全艦がほぼ斉発に近

い射撃を行った。
命中弾は実に１０発に及び、回頭中を喰われた彼女は一瞬にして炎に包まれ、１発が煙突の根元に奇妙な形で命中。その爆発の衝撃波でボイラー室が爆発限界の圧力に耐えることを求められ、そして、ボイラーがすべてほぼ同時に限界圧力を越えて破裂。
中央構造物すべてがその瞬間吹き飛び、乗員の大半が、何が起こったのかもわからないまま死亡した。
ニューハンプシャーが爆沈したのは、それから１分後のことである。

『敵艦爆沈！残りは逃走中です』
「ふむ。戦闘中止！！司令官より艦隊全乗組みへ！ただ今の戦闘、ご苦労だった！」
一度、そういってマイクを切ると、すべての幹部を呼び出した。
「聞け。ただ今の敵はなんとか撃破出来た。だが、まだ油断できない」
勝ち戦にうかれつつあった幹部達は顔を引き締める。
「フリードリヒ以下、残余の敵がいまだ発見できない。恐らく、勝ち戦に酔いしれている所を叩く腹だろう。国連軍は戦力を半減させている。従って、認めたくないが、打撃力ではほぼ世界最強を誇るであろうＩＢＣ第一艦隊第一戦隊を、場合によっては我々海兵隊だけで相手にしなくてはならなくなるだろう。苦戦だ」
「……」
幹部達の間で声を発する者はだれ一人としていなかった。
「兜の尾をしめておけ。ただ今の戦闘でイカレた所があるか？」
「航海、操舵に異状無し」
「機関、正常。全力発揮可能」
「砲術、異常ありません」
「ＣＩＣ、異状無し」
各部署の幹部達は次々と異状無しを告げていく。

「よし。戦闘体制のまま待機してくれ。気を抜くな。以上だー
見張りを厳にせよ。来るかもしれん」
「了解！」
少し考えてから、
「ナツ、現在アイオワに接近中だが、いざという時がある。全速
で離脱できるようにしておけ。それから、飛行、補給が終わり次第、
ハリヤーを全機再発艦させ、偵察にあたらせろ」
『はい』
「艦長。アイオワのリーチ提督からです」
通信オペレーターが無線を転送する。
「南沙帝国軍水上艦隊第１１任務部隊司令官綾崎悠矢大将です」
「アメリカ合衆国大西洋艦隊司令長官、エドワード・リーチ大将
です。助かりました。正直、感謝しておる所です」
「いえ。被害はどうですか？」
「ほとんどの艦が損害を受けておりますが、戦闘遂行能力に影響
は出ておりませんので安心してください。そちらはどうですか？」
「問題はありません」
「ふむ」
「戦艦で戦闘可能なのは？」
「アイオワ、ミズーリ、ワシントンですが、さらに後詰めが合流
予定です」
「多少は心強くなりますが、基本的には苦戦になりますな」
「敵の主力艦隊のことですな？」
「はい。もしかしたらがありますからね。戦闘準備をお早めに」
「了解しました」

第四部　遭遇戦！　2

韓国および豪州海軍、米軍に護衛された輸送船団が集合地点に到達したのは、その日の午後８時頃だった。

米軍の輸送船団は、戦艦中核の後詰め部隊に護られた輸送艦１０隻と、病院船マーシー。南沙側は、フリゲイト艦２隻に護られた輸送艦諏訪、豊川、病院船氷川と浅間の３隻である。

接触と同時に、国連軍乗組員の必死の努力により、敵が来襲する前にと、補給作業が繰り広げられた。

その中で、諏訪は綾崎達があまり招きたくない連中を連れてきていた。

南沙ＴＶのクルーである。

「拒否する」

それを知った綾崎は、言下にそう言い放ち、大和への上艦を認めようとはしなかった。

しかし、

「総司令部の許可は取りつけております」

と、アナウンサーである桜井良江が綾崎の前に一枚の紙を突きつけた。

「……ったく」

それは、確かに許可証だった。

「だが、いいか？」

「はい？」

「本艦は基本的に機密艦だ。この機に乗じて艦内をうろつこうなんて馬鹿な考えだけは起こすな」

「大丈夫ですよ」

「四六時中監視をつける。もし、進入禁止区域に立ち入った場合、即座に射殺する。これは許可証に記された通りだから、文句はない

な？」

「はっ……はい」

「ライブ中継も基本的に禁止だ。ＣＮＮと共同という形だが、こと艦橋付近での撮影したものは、戦闘に差し支えがあるので放送を禁止。した途端に同じく殺す。撮影したテープは、すべて我々に差し出し、その検閲を受けること……護れなければ帰れ」

「やります！！」

「よし」

綾崎はそういうと、先任士官に、「監視しろ」と言って、艦橋へと戻っていった。

「綾崎提督って、怖いですねぇ」

「殺気だってんだよ。みんなそうさ」

「そうですか？」

「ああ」

「あっ、艦長」

夜戦艦橋に戻ってきた綾崎を見つけた女性士官の一人がそう呼ぶと、みんなが立ち上がって敬礼してきた。

「ご苦労」

答礼した綾崎は、正直な所、人によって「提督」とか「司令」とか「艦長」とか呼ばれ、自分がどんな地位にいるのかこんがらがっていた。

「任務部隊司令官兼大和艦長」

これが正しい役職である。

故に彼は司令席につくか艦長席に着くか、それすら迷っていた。

日本の海軍軍人なら、羨望を持って見られる立場にありながら、徹底した実力重視主義者であり、地位などは向こうからやって来るのが普通であったため、あくせくした経験などしたことがない。だからこそ、こうした「立場」というものに妙な迷いを見せる所が、

この男にはあった。

「なんだ？」

司令席へ腰を下ろしながら訊ねた。

「ＷＷＹ２が漂流中のボートを発見しました」

「米軍に通報しろ。こっちにはヘリがない」

「はっ……アオイよりウッドペッカー一」

「まだ、敵さんは発見できないのか？」

「難しいですな。この天気では」

艦長シートに腰を下ろしていた山本が曇りがちの空を睨んだ。

どんよりと曇った天気は見ているだけで陰鬱な気分になる。

「おかしい」

「なにがです？」

「敵がこない」

ハァ？という顔で山本は綾崎の横顔を見た。

「……いいじゃないですか」

「補給してる時ってのは、敵にとって奇襲をかける上で最も有利な状況のはずだ。それをなぜ攻めてこない？」

「そういえば……」

「妙だろう？」

綾崎は、先程からいつ敵が攻めてくるか、それが心配でならなかったのだ。

「気象室はこの先の天気をどう？」

司令席のリクライニングに背を任せながら訊ねた。

この司令シートは、後々まで子供達の憧れの的となった場所である司令塔の司令席ではない。

防眩処理の施された司令塔は、通常の戦艦のそれよりも極めて広く、またカッコよかった。設計段階でデザインにも近未来的要素をふんだんに盛り込んだのだから当然である。

司令艦橋は、８００ミリの重層装甲と、司令塔としては普通考え

られないほど（通常の艦橋並み）の大きな合計７９０ミリの厚さを持つ数十枚の超硬質防弾特殊防眩プラスティック（ほぼ同厚のＶＨ鋼に匹敵）の後ろに、最前列に監視要員用のシートと５０センチ双眼鏡。その後ろに各種通信要員が凸型に配置（ＷＡＶＥは装甲が一番厚くなっている後方に配置）され、それに取り囲まれるように、ほぼ中央部に艦長と司令官用のシートが配置されていた。

司令と艦長のシートは、ＮＡＴＵシステムや、ほかの部署との情報伝達も、コンソールをいじることにより、伝令を用いずに出来る近未来的なもので、司令塔そのものが、ほぼＣＩＣを兼ねたものとなっていた。

実際の所、大和の艦橋は飾りに等しく、天辺の測距儀を取り付けておくための塔に居住場所をくっつけた程度の概念でしかない。情報戦に主眼がおかれる近代戦に対応する戦艦として作られた大和である。情報が一番集まりやすく、また他に対しても指揮が飛ばしやすいというコンセプトで作られるべき主要指揮所は、この司令塔なのである。故に、大抵のことはここでなんとかなった。

いざというときは、ＮＡＴＵシステムを通じて必要な情報が大型のモニターに映しだされる。不便は大してなかった。あれば余程である。

この万能の、そして水上艦隊の指揮官が座す司令シートに綾崎が座ったのは、この時、先に山本が艦長シートを偶然にも占領していたためだけ。

ただ、それだけだった。

「荒れるそうです」

「晴れて欲しいが」

「魚雷の運用がほとんど不可能になる位の荒れ模様になると……」

「続くのか？」

「１日は」

「ふむ」

綾崎はロスバッハより押収した艦籍簿をペラペラと捲り、そこに

書かれている２００隻近い艦船のデーターを睨んだ。
「戦力が絶対的に不足している」
デスクに艦籍簿を投げ出す。
「少なくともまともにぶつかるなら、俺の手だけでも戦艦が後５杯、重巡が１２杯欲しい」
「贅沢です。そんな戦力、米軍でも持ち合わせておりません」
「うちならさらに無理。夢物語だな。貧乏は身に染みる」
もう投げやりだ。
「リルガミン級だって2隻ようやく組み上がったばかりなんですよ？」
南沙には現在、戦艦が大和をあわせて１５隻存在する。
山本の言ったのは、今年の8月に４６センチ砲搭載艦として、リルガミン造船所で完成したリルガミン級のことだ。
全長２８０メートル。基準排水量8万トン。４６センチ砲搭載艦。ちなみに建造費は一隻２５００億円、大した電子装備を搭載しない、純粋な意味での「戦艦」である。ＩＢＣの発注に従い建造していたが、完成した時点で対ＩＢＣ宣戦布告となり、キャンセルとなり、南沙軍が買収した。
同様にして「長門級」３隻（長門・陸奥・陸前）が存在するが、こちらは１９８０年代に先帝がＷＷＢＦＣに2隻を発注し、技術確保のため、そのコピーを1隻自前で建造した時のものである。小型の３０センチ搭載艦の甲斐クラスも計画には乗っているが、現在の南沙の軍事向け建造ドック２３ヶ所は全て埋まっており、空母2隻、駆逐艦以下多数の建造が進んでいるため、２１世紀を迎えなくては完成は望めまい。
「あと1年参戦が遅かったら、今頃大和級2隻にリルガミン級３隻で敵さんをお出迎えしてやるってのに」
「１１２号艦と１０３号艦ですか？」
「そうだ。軍事予算１０兆円も浪費して作り上げる代物だ」
景気のいい『金満』南沙が創る帝国海軍の獰猛達の姿が、一瞬、

山本の脳裏を掠めた。
「しかし、敵は艦籍簿の内の３０％はすでに損傷艦となっております」
「腕だ」綾崎は真顔で言い返した。
「結局戦争は数だが、それにも増してまず腕だ。連中は戦艦ってものを骨の髄まで知り尽くした海の男達だ。それを相手にするには腕の立つ乗組員のいる戦力的にサシの勝負に耐えられる艦が不足している」
「世の中、そううまくはいきませんな」
「いって欲しいと思うのが人情。そうだろ？」
「確かに……」

補給が完了するのを待っていたかのように、国連軍は暴風圏内に突入した。
戦艦は良かったものの、小型艦はピッチングに木の葉のようにもまれていた。
「随分派手に荒れるねぇ」
リーチは揺れる艦内で器用に紅茶を飲んでいた。
「それほど大きくはありませんので、あと数時間で脱します」
「そうかね」
リーチは視界の悪くなった舷窓を見た。
「きっと、大和とは鯨だろうな」
「はっ？」艦長席に座っていたスコットが聞き返した。
「鯨、ですか？」
「私が初めて戦艦を見たのは１２歳の時だった。アラバマだったよ。あれを初めて見たとき、私には巨大な鯨に見えた」
「成る程」
「あれはスクープだ。ＣＮＮのキャスター君は怒っているだろう」
「ええ。最終決戦まで姿を見せない。でしたからねぇ」
「まぁ、独占中継なんだから、それくらいは我慢してくれないと

ね。しかし、取材をやめないとこのまま帰るっていうのには、正直参ったよ」
「心強い味方ですからね」
「そうあって欲しいよ」

暴風域を抜け出したばかりのこの日の夜は早かった。
こうこうとした月の下、補給が終わった補給部隊が護衛部隊に守られて離れていく光景が、厭に陰鬱に思えてきた。
既に夕食も配られ、一部では配置交替が行われていた。
その頃、綾崎は総司令部に提出する戦況報告書の作成に追われていた。
「艦長。補給に関する報告に参りました」
そういって、冴子が司令執務室に入ってきた。
「うむ」
キーボードから目を離さずに綾崎は生返事をした。
「ご苦労。要点をかい摘まんで報告してくれ」
「はい。現在大和が搭載しているのはＨＥＡＴ弾１２００発、ソフト・ポイント１８発。ＡＣＴ弾１８０発。３式弾２７発。それと９式弾２７発となっております。装薬はその倍を備えております」
「主砲は後どれくらいもつんだ？」
「限界は４００発ですから、あと斉射が３３０回です」
旧大和の砲歴は２００発である。
今の大和は、それよりも7口径延長させている以上、従来の砲ならば、よくても１５０発も撃てばそれでオシャカになる。それでは困るのは誰の目にも明らかなことだ。
故に、長期に渡る砲撃支援の使用に耐えさせるため、主砲は旧大和の様なニッケル・クロムではなく、その装甲（多重層状装甲）の原理を応用したセラミックやチタン、耐熱強化繊維などを幾重にも重ね合わせた複合金属を採用。しかもライフル砲ではなく滑空砲を採用しているので、比重的にも２０％ほど従来より軽くすることに

成功。さらに滑空砲は、製造の手間がライフリングを削る必要がないため、コスト的にも３０％ほど安く済んでいるなど、利点だらけの優れ物である。

だが、それでも４００発が限界なのだ。

●自衛隊　　沖縄県嘉手納基地　午後９時２１分

またジェットの爆音が聞こえてきた。

「大入り満員だな」

「Ｆ－１５、へぇ！ありゃ新田原の連中だ。何があるっていうんだ？」

武器整備要員の中村三尉は、受け入れ態勢にかかるために駆け出しながら、同僚に尋ねた。

「ＩＢＣが日本近海に展開する可能性が高いからって、出撃体制を整えているらしいがね」詳しいことはわからん。と同僚の島袋三尉は肩をすくめた。

「海自は八八艦隊を出撃させたっていうじゃないか。早期警戒機もここから出るらしいぞ。こりゃ戦争だよ」

「ヴァチカン条約、どうなるんだ？」

「Ｆ－１５もＦ－２も、長距離攻撃向けだ。南沙に攻め込む気かも」

「この混乱に乗じて？馬鹿いえよ。知ってるだろう？南沙の連中の俺達に対する考え」

「自衛隊論争か？」

南沙統合軍法務局で自衛隊が正規軍かそうでないかについて論争があると『セキュリタリアン』などで報道された。正規軍でなければ捕虜として扱う必要はない。ゲリラでも市民軍でもなければ彼等は南沙転覆を目論むテロリストである。捕虜にとる必要はない。軍法に基づき、その場で射殺できる。

この考えが南沙側で圧倒的多数であることを知った自衛隊幹部は、一様に南沙への武力行使には消極的となった。もしやれば生きて帰れないのだから当たり前である。

「殺されに行くような物だ」

「だけどよ?南沙まで攻め込める位置にある基地って、ここしかないぜ?それに、この不況下だ。南沙が欲しいっていうのが政治屋さんの本音だろうよ」

「ケッ!南沙だってすぐに食いつぶされるぞ?あのバカどもにな!」

それを遠目で見ている人物が、基地の外から吐き捨てるようにいった。

「全く、ジエータイめ。いつまでウチナワに居座る気だ!」

「お爺さん。そんなこといってもダメですよ」

「紀子さん。ワシはただ、静かな生活を取り戻したいと思ってだな……」

「はいはい。太田知事と同じでしょう?５０年前がどうのって」

もうウンザリという顔の嫁が夕食の後かたづけをしながらいった。

「大体、元文さん。自衛隊と米軍相手に商売してるんですよ?」

「だったら一般人相手にしたって……」

「反自衛隊って、本音はそこですよね」嫁は内弁慶で醜い本音をきれい事で覆い隠す義父の態度が嫌いだった。

「そうそう。それで跡地利用して大儲けしようって」と孫は茶化すようにいうと、縁側に出た。いつもより大きな爆音がする。

「Ｂ－５２じゃ。ほら見ろ。米軍まできおったわ!紀子さん。あんたー」

「すげぇ!ＡＷＡＣＳだ!!２機もいる!」

「やだわ。本当の戦争みたい」

●午前４時

「えっ？」

大和の昼戦艦橋にあがってきた人物の顔を見るなり、艦橋前に配置されていた警備兵は、寝不足の眼を丸くした。自分が寝ぼけて幻覚でも見ているのではないかという疑問が脳裏に浮かんだ。

が、一応敬礼だけはした。相手からも返礼がくる。

「おっ、お早うございます」

「おう」

『８時前には起きない男』の異名をとるほど綾崎は朝に弱い。

その男が何と、夜も明けない午前４時前に艦橋に顔を出したのだ。

「こっ、コマンダー、オン・ザ・ブリッジ！！」

警備兵の一言に、当直についていた乗組員達が、えっ！？という顔をして入り口に視線を集めた。

「ご苦労」

「てっ、提督。シフトはまだ……」

「航空参謀、夜明けまで後どれくらいだ？」

綾崎は挨拶もそこそこに、もう少しで始まる警戒配置にハリアーをいかに配置するか、艦橋でＮＡＴＵを相手に試案を重ねていた航空参謀の新田祐司少佐に訊ねた。

「はっ？３０分少々です」

「夜明けと同時に周辺海域への索敵を出す。２時方向に重点を置き、各艦の航空機も出させろ」

「なぜです？」

現在の世界は狩野粒子の影響で、レーダーも熱源探知システムも全うには機能しない。

そんな中で有効な兵器とは何か？つきつめれば、人類は兵器のレベルでは、すでにある程度の進歩を終え、むしろ退化へと向かっており、この段階で既に大まかに言って１９３０年代のレベルといっても過言ではなかったのだ。

でなければ、こんな戦争は数に勝る米軍の圧勝で幕を閉じているはずである。

有効なのは大口径の砲と魚雷。無論、それを扱うソフトもまた大切である。しかし、いかに優れているとはいえ、綾崎のようなソフトは、イレギュラーというより、最早犯罪である。

「２時方向にプレッシャーを感じる。敵はそっちから来る」

「はぁ！？」

（なっ、何を陛下みたいに）

新田はあきれ顔で綾崎を見た。

『あの辺に敵がいる』士官候補生時代から、綾羅が訓練に参加すると、不意に部隊長にそう進言することがあった。

『なぜか』と訊ねられると、決まってこう言うのだ。

『プレッシャーを感じましたから』

これに関して綾羅は明確な答えを出していない。『殺気』に近いという程度でしかない。しかし、その的中率たるやほぼ１００％、信頼されていた。

従って、気になった新田は、「これはもしかして」と思いつつ、思い切って綾崎に訊ねた。

「プレッシャーとは？」

「口では説明できん」

いいから飛ばせ。と命じられ、新田はしぶしぶながらハリヤー出動準備を命じた。

ギュィィィンー

午前５時過ぎ、夜明けと同時に大和からＷＹナンバーで始まるハリヤー３機が爆音を轟かせて甲板から離艦していき、うち１機が大和を追い抜いていく光景を、綾崎は昼戦闘艦橋で紅茶を飲みながら、ぼんやりと眺めていた。

「全機、離艦に成功。問題ありません」

「こんな朝っぱらからご苦労なこった」

自分の命令で飛ばせておいて、この言いぐさである。

「提督も珍しいですね。こんな早くから」

「珍しいんですか？」
不意に、山本の背後で女の声がした。
南沙ＴＶの桜井達だった。綾崎は彼女のマスコミ人としての感情に先走った無責任な報道態度が嫌いだった。
「おはようございます。やっぱり皆さん、朝が早いですね」
朝がからっきしだめな綾崎にとって、それは嫌みでしかなかった。
「まぁな」
「で、どうしてこんな朝早くから飛行機飛ばしているんですか？」
「勘、だな」
これがプレッシャーに対する綾崎なりの見解である。綾崎自身、よくわかっていないのが現実なのであるから無理もない。
「勘？」
「うん。なにか、こう、来るなっていうのか」
「はぁ」
桜井は、怪訝そうな顔をして綾崎のぼんやりとした顔を見た。
「多分」
綾崎は、そういってマグカップを2時方向へと向けた。
「あっちだな」

「かっ、艦長！！」
オペレーターの悲鳴同然の報告が入ったのは、その時だった。
「ん？」
「ＷＹ1より緊急！！2時方向に発砲煙を確認！！」
「なんだと？」
その報告に、綾崎はマグカップを持ったまま氷りついた。

第五部　最後の平穏

「かっ、艦長！！」
オペレーターの悲鳴同然の報告が入ったのは、その時だった。
「ん？」
「ＷＹ１より緊急！！２時方向に発砲煙を確認！！」
「なんだと？」
その報告に、綾崎はマグカップを持ったまま氷りついた。
「提督の予想通りになりましたね」
「嫌みか！！」
綾崎は桜井を一喝した。
「好きで来いなんていったわけじゃない！！」
綾崎は厳しい口調でそれを否定した。
「ＷＹ１より報告、ミッ、ミサイルですっ！！」
「ミサイル？」
「敵、対艦ミサイル発射の模様！！」
「艦橋から出ろ、ＮＡＴＵ！！」
先任士官により桜井達が艦橋から追い出されるのと同時に、綾崎はＮＡＴＵを呼び出した。
「対ミサイル戦必要あるか？」
「必要ありません。弾道はすべて本艦隊の前方および右舷に集中。ただし、命中する確率は１０％未満と推定されます」
「なに？」
モニターにＮＡＴＵが解析し終わったミサイルのルートが映し出される。
それは、国連軍を丸く取り囲むかの如く突き進んでくる。
「弾道が高すぎます。また、現在の狩野粒子濃度から考えて、ミサイルのレーダーは使用不能となっている可能性は、８９，８９２％です」

「どういうことでしょう？」
「……針路を塞ごうとしている？」
綾崎は、じっとモニターをにらんだ末、インターホンをとった。
「全艦乗り組み、緊急、全艦緊急停止っ！！各艦艦長は、艦をミサイルの爆発した海面に乗り込ませるなっ！！」
綾崎は、そこで一息ついてから言った。
「聞け。海流に気をつけろ。敵は機雷を弾頭に詰め込んだＫＫ－２３を使用した模様。各艦、ＫＫ－２３型のデーター開け。各員、音響爆雷対策と平行して、掃海作業準備、急げ！！」
綾崎は各方面に簡潔な指示をだすだけで精一杯だった。
「どういうことです？」
「敵も考えたものだ」
綾崎は、モニターから眼を離さずに山本に言った。
「まぁ、詳しいことはすぐにわかるが、ＫＫ－２３型機雷散布ミサイルは知っているか？」
「ええ」
バ バーン！！
バ バーン！！
大和を始め、国連軍主力各艦の鼻先をかすめるかのように、つまり、大和の場合、ＮＡＴＵにより迎撃の必要なしと判断されたミサイル群は、海面で自爆した。
この頃、まっとうに作動するミサイルとは、まっすぐ飛んで、時限信管で爆発する程度のものである。

「機雷がくるぞ。機関フルリバース！！」
「機関了解、フルリバース！！」
グ グッ
大和は、他の綾崎指揮下の艦と共に、つんのめるように急停止した。
「ソナー室より艦長、前方に小型の不審物多数ー」

ズズゥゥンー
ドガァァンー
派手な爆音がソナー室からの報告を中断させた。
残存艦艇をかき集めて数十隻の大部隊となっていた米軍中心の国連軍本隊の方からであった。
「見張りより艦長、米艦隊方面で大規模な爆発あり、詳細不明」
「引っかかったか。ソナー、航海にデーター回せ。香取、操舵は任せる。腕に期待させてもらうぞ」
綾崎は、操舵席についた優男、香取翔少佐に振り返りざま言った。
香取は、綾崎が潜水艦隊から引っ張ってきたのだが、綾崎はその操艦技術を大いに気に入っており、この後も香取は山本達と一緒に、綾崎と共に世界の海を暴れ回ることとなる。
「任せてください」
「まっ、お前にとっちゃ、朝飯前だな」
「そうです」
ウィンクまでして平然と答える香取だが、これほどの大型艦ともなると、小回りは期待するだけ無謀だった。
ソナーが知らせてきたデーターでも、それははっきりしていた。
とにかく、艦ぎりぎりの所に小型機雷がひしめき、さらには綾崎の懸念通り、時限式の音響機雷が、ソナーを狂わせる。
潮流に乗って艦に接触する程度ならともかく、磁場発生口にでも入り込まれた日には、大和の命運にも関わる一大事である。
香取の舵を握る手にも汗がにじみ出る。
「艦管理指揮所より艦長、掃海作業準備完了しました」
「よし、すぐに始めろ」
大和のマルチミサイルランチャーが、妙に間の抜けた音を立てて火を吹いた。
打ち出されたのは、１００グラムのＢーコンポが入った小型爆雷１００発が収まった掃海爆雷である。
そして、それと同時に対空砲が海面めがけて一斉に火を吹いた。

ズズゥゥン
「米軍の下手くそめ。また引っかかったか」
「提督、リーチ提督からです」
「おう。つなげ」
綾崎は、推測をありのまま、リーチに話した。
つまり、敵は第一目標であるマーカス島攻略のため、我々の合流タイミングを狙って、その針路に機雷をばらまいた。針路上の機雷を掃海してからでなければ、危なくてこれ以上の進撃は不可能であろうと。
事実、国連軍は、やっと補給した弾薬の1割と、触雷して沈没もしくは航行不能となった艦船5隻を浪費した挙げ句、掃海だの損傷艦の救助だの、合計4時間以上の遅れをもって、敵IBC追撃戦を展開するはめになったのである。
日は暮れ、天気は曇りがちになっていた。

●変わる世界
このタイムロスが、戦局に多大なる影響を及ぼしたことはいうまでもない。
追撃につぐ追撃の末、マーカスまで後4時間という所で、国連軍は米海兵隊の守備隊2千名と、IBC海兵隊3千5百名との間で戦闘が開始されたことを知った。
あまりの展開の素早さに、綾崎すら「裏で早瀬か秋谷さんあたりが指揮でもとっているのでは」と、本気で疑ったほどの神速だった。
これはある程度間違いなかった。
その答えを出す前に、考えておかねばならないことがある。
ファーランドの開発を推進したのはどの組織か？
リムゲード・インターナショナル・コンツェルン。
そう、綾羅の会社である。詰まるところ、彼女が（そして彼女の会社が）存在していなければIBCはどうなっていたのか、皆目見当もつかないのが本当のところである。

その彼女だからこそ、この戦争には本当は反対だった。
投資の元が取りづらくなるのだから当然である。元を取れなければ、一体何のためにあんな莫大な額を投資したのかわからなくなる。

まだ投資をロクに回収していないのだ。
このまま下手に彼らに潰れてもらっては困る。早期に終戦させる必要がある。しかも、国連軍参加国に、賠償請求権を放棄もしくは軽減させることを認めさせるような勝ち方でなければならない。勝ちすぎも困るが、それでも彼らにはある程度勝ち続けてもらわなくてはならないのだ。
それが綾羅の考えだった。
綾羅は、後々の戦後交渉をにらみ、裏取引で予備役となっていた早瀬をＩＢＣに派遣して、サイパンとテニアン、そしてマーカス攻略を指揮させていたのである（しかし、これは独立戦争後、実に３０年目にして初めて公開されたことであり、当時は知る余地はなかった）
早瀬の適切な作戦の元に展開したＩＢＣ海兵隊に対して、後方守備戦隊の仏海軍も、上陸阻止のため果敢にも抗戦を挑んだが、相手が悪すぎた。旗艦を撃沈されたのを始め、島を捨てて撤退を余儀なくされる損害を被っていた。
その戦法は、後々までＩＢＣのみならず、各国軍の手本となった戦い方であった。

「いそげっ！！」
米国戦艦の艦長達は、真っ青になって部下を叱咤していた。
とにかく早くしないと、マーカスが陥落してしまう。
守備隊から発せられる救難要請は、３分ほどは司令部から発せられていたが、司令部壊滅が他の部隊から報告された後、２時間前に最終となった通信まで、１６回発信場所が変化し、３５人通信兵が代わった。

それまでにわかったことは、司令部が艦砲の集中砲火で戦闘開始と同時にほぼ全滅し、命令系統が混乱。各部隊は独自の判断で独立した抵抗を続行しているが、マズル・フラッシュを的に砲撃を加えられ、大半の部隊が艦砲射撃の餌食となり、生存した全部隊は奥地のジャングルに撤退。上陸部隊に対する組織的反撃は絶望となっている。物資貯蔵施設および港湾施設は、完全に敵の制圧下に置かれ、すでに物資の輸送船への積み込みが開始されている。など、国連軍にとっては芳しくないことばかりだった。

かといって、玉砕覚悟の突撃を命令するわけにもいかなかった。米軍は、硫黄島の日本軍をやるつもりはなかったのである。だが、これにまったく痛みを覚えないせいか、綾崎はリーチにきわめ冷静な進言をした。

「いまこそトライデントの雀取り作戦を展開するべきである。敵はマーカスという一カ所にほぼ集中している。となれば、その一カ所に集中している敵を3本の槍となって叩きつぶす好機だ」と。

そう。まさにその時であった。

彼等に招かれざる客人達が訪れたのは。

マーカスまで後2時間の海域だった。

歴史は紙よりも薄く、絹糸よりも切れやすい。世界はその上に存在している。

歴史が今、変わりつつある。それはとりもなおさず、世界が変わることを意味していた。それを知ることが出来るものは、この海域には存在していなかった。

●火事場泥棒　　沖縄県嘉手納基地付近

「そうだ。ＡＷＡＣＳを含めた大規模な部隊が発進した」

●シャチ　　南沙国帝都柱島基地

「間違いないな?」

「はい。間違いありません。撃沈は確実です」
「ふむ……」
対潜警戒部隊が、南沙の沖合に潜む潜水艦を確認。警告の末に撃沈したというのだ。
「ノイズ・パターンの照合結果からして、間違いなく自衛隊の通常動力艦です。現在、航空隊が警戒部隊を」
彼の報告を遮るように、デスクの引き出しの中の電話がベルをならした。藤島は自分の特別ＩＤカードを使ってデスクを開けると、もう一枚、別のカードを使って電話をとった。統合軍中央指揮所からの報告だった。
「はっ。……はっ？はい。わかりました。各部隊に至急伝達いたします。はい。はい」
「いかがいたしましたか？」
「自衛隊が侵攻する動きを見せた。守谷准将、大至急、幹部を召集。展開中の各部隊に自衛隊からの攻撃に備えるように伝えろ」
「はっ」

第五部　フリードリヒ・デア・グロッセ

●求めざる来訪者　　午後５時５０分

「はい。気象観測室です……あっ、提督。はっ？日没ですか？後４５分。午後６時２５分頃と推定されます」

「そうか。ご苦労」

便所から戻ってきて、司令艦橋で狩野粒子のノイズを何とかしようと苦心惨憺している女性レーダーオペレーターの斜め後ろで、スクリーンを眺めつつ、彼女から借りたインターホンをもどした綾崎は、考え込むように再度スクリーンを眺めた。

レーダースクリーンは狂い続けていた。何がなんだかわからない。反応はある。だが、それが必ずしも敵とは限らない。いつも悩まされ続ける厄介者が存在しているだけかもしれない。動くものもあるが、風に乗って厄介者が動いているだけかもしれなかった。

（狩野粒子雲か……）

綾崎は考えた。

こいつさえなければ、ＩＢＣの独立戦争なんてなかったろう。あったとしても、ミサイルの撃ち合いでケリがついていたはずだ……くそっ。なんだってこんな厄介者が生まれちまったんだ。人類の苦心の産物がみんな無効だと？

みんなこいつのせいだ。この悪魔が現れたおかげで全てが狂っちまった。

どうしてくれるんだ。

そんなに俺達人間に殺し合いをさせたいのか？

「あの……今日は、いつもより狩野粒子濃度が高すぎます」

レーダー担当の女性オペレーターが、モニターを見て考え込む綾崎に気を利かせるつもりで報告した。

「どう思う？」

綾崎のインテリジェンスに溢れた精悍な顔を見てしまった彼女は、あわててモニターに向き直って言った。顔が赤くなり、心臓の鼓動が聞こえる気がした。

「あっ、はい。敵が奇襲をかけてくるには、絶好の機会と考えます」

「そうじゃない」綾崎は苦笑した。

「狩野粒子をどう考えるか。と聞いたんだよ」

「嫌いです」彼女ははっきりと答えた。

「私の仕事の邪魔ばかりするんです。それに」

彼女は、一瞬言葉を躊躇った。

「かまわん。言ってみろ」

「これさえなければ、こんな戦争、起きずに済んだんじゃないでしょうか」

澄んだ瞳が眼鏡の奥で優しく光る、文学部の後輩の言葉が彼の耳に痛かった。

（こんな女まで地獄へ引っ張っていくのか……）

「同感だ」それだけしかいえなかった。

後少しすれば、真面目なＯＬにでもなって、結婚して……そんな人生が歩めるだろうに……。どうして人生を間違えたんだ？

「ご苦労だが、監視を怠らないでくれ」と言って、綾崎が司令シートにつこうとしたその時、全ては始まり、全ては変わった。

「あらっ？」先程のオペレーターが奇妙な声を上げた。

「どうした？」

「やけにはっきりとした反応があらわれました……２４、南南西ポイント２－０－５より８－４－６へ」

熱源トレーサーを作動させた彼女は、綾崎に振り向いていった。

「砲弾です！」

「なんだと！？」

天空からの望まざる客人達は、衝撃のマントを纏いつつ、突然の

来訪をみせた。
天空まで一気に駈け上り、先端を灼熱の紅に染め上げつつ落下してきた彼らの行き着く場所は一緒だった。そして、その目的までもが一緒だった。
破壊と殺戮、そして死をもたらす。
彼らはそのためだけに生まれ、そして来訪してきた。

１０メートルほどの小さな水柱が、壁の如くＳダコタの右舷に立ちのぼったかと思うと、一瞬にしてそれは１００メートルはあろう巨大な水の壁となって彼女の周辺に立ちはだかり、Ｓダコタに激震と海水の洗礼を与えた。彼らは彼女の姿を崩れゆくその身の中へと隠した。
艦橋見張りから報告が入る。
「敵砲弾飛来。射撃位置不明。Ｓダコタ右舷に集中。敵艦位置不明」
「一体なんだ！」
スコット艦長が叫ぶ。誰も答えようとしない。もとい、答えられないのを知って、茫然とするリーチ提督に視線をむけた。
「まさか。こんな時に……」
リーチは呻くように言った。
「提督！一体これは」
「来たのだよ」
「は？」
「敵だ」

現地時間１９９６年１０月２日、午後５時３０分。
史書は、この時を持って第２次マーカス島沖海戦の火蓋が切って落とされたと伝えている。
周辺は鮮血の如き紅から、絶望の色へと衣装替えしつつあった。

大和の艦橋は、その水柱が収まるまで、水を打ったように静まり返っていた。

「ＷＷ１から報告！戦艦８乃至９、巡洋艦６乃至７、駆逐艦１０乃至１１、さらに後方に大規模な敵部隊存在せりも艦種等、一切不明！！」

「大艦隊じゃないか……」

「よくもまぁ……」

皆、呆れと驚愕に支配されつつあった。

「機関前進、第２戦速！ジクザク航行開始！急げ！」

「艦長、やつら一体……」

「映画のクライマックスが近いんだ」

比較的抽象的な言い回しを好む綾崎だったが、これでも部下は意味が判ったのだから大したものである。

「では！」

「そう。悪役の親玉、フリードリヒが、ついに来たんだ」

「あの悪魔が！？」

「そうだ」

「どうするんです？」

「決まってる」綾崎は楽しげな笑みを浮かべて言った。

「やるのさ。戦闘開始だ！砲雷撃戦闘用意、総員戦闘配置につかせろ」

綾崎はいいながらコンソール横の戦闘指揮装置の起動用スイッチを入れた。

それまで必要最小限度のデーターしか表示ししていなかったモニターに各種データーが表示される。

同様の処置が各隊員の手で行われていく。それまで真っ暗だった司令塔内部は、計器類の薄い灯りが、艦の外の視界を妨げない程度に、まるでイルミネーションでも灯したように明るくなった。

メイン・モニターはマスト・トップの測距儀と同調し、敵艦の姿が映しだれされており、１０ある右のモニターには艦内の状況を示さ

れていた。
「了解。戦闘発令。くり返す、戦闘発令！」
オペレーターが総員戦闘配置報知機のスイッチを鳴らしながらマイクに叫んだ。
「敵主力部隊出現！！総員砲雷撃戦闘用意！繰り返す一」
「各種センサー、作動良好。コンバット・モード引き上げ！」
「ＮＡＴＵシステム、各部回路接続良好。戦闘前最終チェック、完了！ＮＡＴＵシステム、コンバット・モードに引き上げます！」
『敵、狩野粒子を散布中の模様、粒子濃度上昇中』
「第一戦速まであげろ。取り舵一杯。砲術、弾種、目標選定急げ」
「宣候」
『了解』
それぞれの報告を聞きつつ、綾崎は知らず知らずのうちに一人言を言っていた。
「さぁ、ショーのお時間だ！！」

『戦闘発令！繰り返す、戦闘発令！総員戦闘配置につけ！』
警戒配置下、各所で思い思いに休憩についていた隊員達は、その艦内放送に、思い思いの方法で答えた。
誰ともなく喚き散らす者、達観したようにため息を漏らす者。家族や恋人の写真をポケットから取り出して今生の別れと見つめる者……。
人それぞれだったが、刻はそんな彼らを無情にも追い立て続けた。
フィーンフィーンフィーン
『敵主力部隊出現！！総員砲雷撃戦闘用意！繰り返す一』
「わかってらぁ！一々繰り返すな！」
「水密扉に挟まれるなよ！ここはもうすぐ閉鎖されるぞ！」
「訓練通りにやれば大丈夫だ！落ち着いて行動しろ！」
「みんな、生きて逢おうぜ！」
「先に逝ったら、待っててくれよ！？」

「心配すんなって。歳とってもいれてやるって」
「ぬかせ！」
彼らの中には、こうして冗談を言い合えるのは、これが最後となった者も多数いた。
戦闘配置を告げるサイレンが鳴り響き、各所の水密扉が自動的に閉められ、指揮官達が大声で部下を叱咤し、兵員はコマネズミのように走り回る。
ノーマル・スーツに身を包んで駆け回っているのは、応急班か、砲塔要員もしくは機関要員だろう。
「始まったか」
「そのようですな」
医務室で軍医長と共にコーヒーを飲んでいた菅原義男は、第３種軍装の上にライフジャケットを身につけ、椅子を立った。ヘルメットをかぶる手が少しよろけた。
「大丈夫か？」
「ええ。御陰様で」
「何でも、綾崎さんからの退艦命令、拒否したんだと？」
「あいつのいうことも、わらないわけじゃないんですけどねぇ」
彼は笑っていった。
「階級は離れたけれど、同期のよしみ、俺にも死に場所位、選ぶ権利を認めて欲しいっていったら、さすがのあいつもね」
その達観した眼に、軍医長は「覚悟」という名の不安を感じた。
「提督、なんと？」
「無駄に死ぬな。とだけ」
「そうか」
「いざというときは頼みます」
その言葉は、軍医長に対するものか、看護婦として乗り込んできた彼の妹のことか、彼は判りかねたが、
「心得た」
とだけ言った。

彼らはそれだけで分かり合えた。
軍隊とは、そういう組織である。

「舵中央！！」
急に針路を変えたため、傾斜がかかった司令席のシートに掴まりながら、綾崎はグライムズに向けて言った。
「ここにいてもいいが、どうする？ここなら、敵との距離が近いから、先ほどよりも大変興味深いことになるだろうが、一歩間違えれば、君もまた、歴史の一部となることは間違いないだろうね」
グライムズは、緊張した面持ちで、「サー・有り難うございます」といった。
これから展開されるであろう巨艦同士の死闘に胸を踊らせていたのだ。
子供の頃から憧れていた艦隊決戦に……。
『敵陣解明しました。モニターに出します』
メインモニターに映ったその陣形は、逆Ｖの字形の突撃形態をとっていた。一方で、こちら側は陣形らしいものどころか、指揮系統ですら落ち着いていない。
「敵の方が有利か」
山本が心配そうに尋ねてきた。
「大丈夫でしょうか」
「フリードリヒは米軍にくれてやる。こっちは影に徹するべきなのさ。まぁ、なんとかなる。砲術！」
『はい！』
「こちらも狩野粒子を散布する。その中でも出来るな？」
『可能です』
「試射をさっさと終らせろ、後は打合せ通りだ。頼むぞ」
『主砲射撃は５万で実施したいと考えますが』
「舵中央！」
「ＣＩＣ、狩野粒子散布開始。冴子、わかった」綾崎は冴子の腕

にかけてみるつもりだった。もし外れても、敵にそれなりの混乱をもたらすことが出来る。悪くはない。

「やってくれ。完璧にな」

大和の煙突の間近からポンッという音と共に、十数個の筒状の物が上空へ向け発射された。

筒は高度３００メートル付近で破裂し、周囲に白い霧を発生させた。

高濃度の狩野粒子である。

「ところで提督。奴等、なんだってこんな所へ？」

「マーカスで仕事が終わったんだろ」

「じゃぁ」

「陛下がな？この作戦で守備隊にうちが指名されそうになった時、装備や補給を楯に拒否したんだが、あんな所護っても、無駄死にするだけだって言ってたよ」

「では、守備隊は」

「そろそろ全滅だな。敵の狙いはマーカスの物資略奪にある。その物資っていったら、そんなに奥地に置くことは出来ない。フェイクである以上、すぐに移動する必要があるからな。それに何よりも」

綾崎はアームレストに置かれた紅茶の空き缶をダスト・ボックスに放り込んだ。

「運は敵にある」

「はっ？」

「海岸線上で上陸阻止戦闘なんてやるだけ無駄。犠牲が大きすぎる。無論、守備側は物資を楯に戦闘ができないわけじゃないが、物資集積地の海岸線での戦闘を余儀なくされて、艦砲でドーンだ。昨日の暴風雨の影響や、補給の問題から何やらで、輸送船も停泊したままだろうから、それが楯にされる恐れもあるし、それに……」

綾崎は一息ついて続けて言った。

「食料や医薬品といった敵が本格的に狙いつつある物資の本格的

補給は、ここ数日間の嵐の影響で予定が大幅に狂ってしまった」
「はい……」
「昨日、主力船団がマーカスに到着したばかり。嵐の後の混乱した港湾施設の復旧作業の関係で、荷を降ろし始めたのは今日の朝からだ。この件に関しては天は敵に味方したというわけだ」
「……まさに、皮肉ですな」
「そう。皮肉なのだよ。米海兵隊にとっては特にな。肝心の護るべきモノは船の中、護る術がない。それなのに戦わなければならない。戦艦の砲で吹き飛ばされても。だ」
「そんな負け戦に部下を派遣するのを、陛下は嫌がったってわけですか」
「トライデントって名称には2通りの意義がある」
綾崎は冷静に山本に話した。
「一つは、我々が3つの部隊に分かれて敵を撃滅する。もう一つが、万一海上で阻止できなかった場合、さらに2段階に展開した部隊が段階的に物資を搭載した輸送船団めがけて攻撃を展開する。不可能に近いがな」
「では」
「陛下は海上で敵を阻止できないことを最初から見通していたのさ」
「なんと!!」
「陛下はある意味でマキャベリの信奉者だ。勝ちがどこに来ても、とにかくすでに我々は国連軍の一角として従来なかった程の立場を確立している。世界の誰めがけても恥ずかしくないな。となれば、我々にとっての最後の勝利という雀も、このまま戦っていれば、いずれ転がり込むという寸法だ。最後に笑っていられればそれでいい。陛下がよく口にされる言葉だ」
「よく考えていますねぇ」
「でなければ、俺の上司は勤まらんよ」
と、綾崎は楽しそうに嘯いた。だが、その笑みはすぐに凍り付い

た。
ぎょっという顔でモニターを見る。
「ＮＡＴＵ」
『はい』
「敵の数はこれだけか？」
『今のところ、これだけしか発見されておりません』
「……」
「提督？」
「この戦、やばいかな？」
綾崎は指揮官としてあるまじき発言に、慌てて首を振って新たな指示を出した。

再度、激震が４万トンの戦艦を揺るがせた。
「なんだあの化け物は！？」
実は、フリードリヒが参戦したのは、これが初めてだった。それは同時に、見たことも聞いたこともないような巨大な戦艦の初陣を意味した。その姿を見た国連軍の兵士達に驚くなという方が無理だった。
悠々と地獄の火焔を吐き出しつつ、まるでその姿を見せびらかすように航行するその戦艦を見て、『こんなの詐欺だ！』とミズーリの見張りの一人が叫んだのも無理はない。
全長３３０メートル。基準排水量１４万トンに達する巨艦。というより怪物。人類が建造した最大の艦である。基本的な艦形はビスマルク級の拡大版で、ビスマルクをほぼ１，４倍した艦だと思えばイメージ的に間違いない。
雨後の竹の子のように国力が増大したＩＢＣが『世界最大級の戦艦』として彼女の建造に取りかかったこと。そして、彼等が最も建艦推進を進めようと思わせるに至ったのが、リムゲードが発注者不明のまま秘密裏に建造を続行していた仮称『１１１号艦』の存在が明らかになったからだった。

その初期仕様書（大和は基本設計そのものを６３度、細かいところまで入れたら計５００回以上書き換えている）を入手した彼等は、自分達の持ち駒の中に対抗できる艦が存在しないことに驚愕し、そして恐怖した。

超機密艦として、建造を担当したリムゲード内部でもＷＷＢＦＣ内部でも知る者がほんの一握りだった『１１１号艦』の初期段階計画（ＮＡＴＵと核融合炉搭載のために肥大化する前の設計。５０口径４６センチ砲搭載艦型、既にリルガミン級として完成）を上回る規模の戦艦を国威をかけて建艦することは、まさに彼等の意地以外の何者でもなかった。

それはまさに空前絶後の戦艦の誕生を意味していた。

それこそが戦艦を国の象徴とするＩＢＣの精神の昇華だと信じられたのだ。

結果として誕生したそれは、５０口径５１センチ連装砲塔４基８門、両舷合計１８基の１２７ミリ高角砲、３０基に達する７６ミリ両用砲を基本武装として備え、最大速力３５ノットで走る正真正銘のモンスターだった。

これを就役以来指揮していたのが、スコット・ローズバンクだった。

彼はＩＢＣが結成された当時からの幹部で、家柄も英国貴族に繋がる由緒正しいものだった。今、彼は人生の絶頂期にいた。今の世界は、否定され続けていた戦艦の活躍できる千載一遇の世界である。その中において、最強の戦艦を指揮できることの興奮に、彼は包まれていた。彼の戦艦、彼の艦隊、そして彼の祖国は、今、栄光を掴もうとしているのだ。

一方、気の毒な国連軍の兵士達は、その化け物を見た途端、悪魔に心臓を捕まれた気がした。一撃でも被弾すればタダでは済まない化け物じみた主砲の一撃を目の当たりにしたのだ。『一撃で敵が逃

げ出す』と言われたフリードリヒの主砲は、まさに悪魔の産物だった。マーカス島に展開していたフランス海軍の駆逐艦3隻を、まるで紙細工のようにひきちぎり深海へと葬り、マーカス島の米国海兵隊を地獄へと導いた。

それが国連軍を狙っている。

国連軍将兵の命運は既に決したように見えた。

この時、南沙軍はどこにいたのか。実は、主力部隊とは別のコースを取らされていた。いわば哨戒任務である。だから、フリードリヒを含む第一戦隊とは一番離れた場所にいた。

モニターに映しだされた光景に、綾崎達が畏怖と同時に見せ場を奪われたと怒りを感じたとしても、無理はなかった。

「敵旗艦との距離は？」

落ち着かない様子でハイエが訊ねた。

「試射はまともに食らい付いています。今すぐにでも旗艦をしとめにかかれますが」

「命中は期待出来んな」

「俸給分の仕事はやってみせます」

「そういうことだ」

スコットが言った。

「長官。小官は後3分待つことを進言いたします」

その言葉を聞いて、ジャネットが言った。

「大口径砲というのは面倒なものだな。スコット君。手間のかかる女だ」

無理に射撃してぎりぎりまで寄せてはいたが、無駄弾の数を心配したスコットは、これ以上の無駄弾の射撃をやめさせようとしたのだ。それがジャネットにはわかっていてもなかなか納得のいくものではなかった。

この戦いは、艦隊決戦という視点に立てば、フリードリヒ・デア・

グロッセの初舞台なのだ。なんとか栄光で飾ってやりたかった。

「大和だ！大和を呼び戻せ！」

フリードリヒの巨体を目の当たりにしたリーチは、大声で命じた。

大和と合流した当初のオーダーでは、大和は既にフリードリヒに反撃の一撃を喰らわせているはずだった。しかし、今、大和は主隊に参加していない。

引き剥がされたのである。

なぜかといえば、ここに過日の会議における韓国海軍が絡んでくる。彼等の司令官が、日本人（彼等は公式の場にてチョッパリと呼んだ）と共に戦いに出るのがイヤだ。というわがままを言い出したのだ。

韓国海軍はこの戦いでは１５隻・第2位の参加兵力を持っていた。１２隻・第４位の参加兵力（後方待機を考えると、彼等こそが第２位なのだが）の南沙なんぞ信用できないし、第一、『チョッパリ』なんぞ存在しているだけで不快である。と主張してきたのだ。

リーチ提督は当初、『チョッパリ』の意味が分からず、それが彼等の言うところの『ジャップ』と同義であることを知った後、彼等に窮地を救われた他の米海軍将校と共に失言を咎めた。

すると、韓国軍の司令官は、腰が折れるのではないかと思うほど、丁重な御辞儀をして、その非礼を、『米海軍将校に』詫び、肝心の綾崎達には一言も詫びなかった。

リーチは『大の朝鮮人嫌い』『複雑で、極めて扱いにくい人物』と南沙上層部から聞いていた綾崎提督との一触即発を危惧したが、彼はそれについては何も言わず。ただ、韓国海軍をいざというときには見殺しにするとだけ言って、半ば自発的に別働隊となってくれた。

『視野が狭すぎる』

彼が捨て台詞の様に呟いた言葉がリーチに重くのし掛かろうとしていた。

「ナンサ人は８０キロ南にいます。時間相当かかります！」
「韓国海軍、離脱していきます！」韓国海軍の１５隻が敵艦隊とは反対側の方角に突き進んでいる。どう見ても逃げだそうとしている。
「何だって？」
「韓国海軍司令官より入電！」通信兵が報告してくる。
「読み上げたまえ」嫌な予感がした。
「はっ。ワレ、任意ノ方角ヨリ攻撃ヲ独自ニ開始セントス」
「……わかった」リーチは怒りに肩を振るわせながら言った。
「我々は綾崎提督に学ぼう」
リーチは全軍に向けて命令を下した。
「韓国海軍を誤認攻撃してもよい。彼等は裏切り者だ」
リーチは韓国海軍をそう見なしたのだ。

●怒りと絶望　　南沙島櫻森航空基地酒保
『暗闇の太平洋は、まさに地獄と化しています！』
「すごいことになったわね」
「映画みたい」
第１０２戦闘飛行中隊を中心に、航空隊の隊員達が酒保に据え付けられたオンボロの２０インチのテレビに見入っていた。その中には、警戒飛行から帰ってきたばかりの詩織の姿もあった。
ノーマル・スーツのままなので、ヘルメットだけ脱ぐと、後はフアスナーを降ろす程度だった。９７の中では空調システムと同調しているため、適度な温度が維持されているが、ここではやや熱かった。しおり達は全員、ノーマル・スーツの上着部分をはだけるか、机の端にある空調システムにエアー・コネクターを繋げていた。
「一矢君、無念でしょうね」
「だからここにいるのよ」しおりは栄養剤入りのドリンクのストローを口にしながら言った。

「見てて辛いもの」
「そりゃそうね」

『馬鹿！』

病室に入るなり、しおりは半泣きになりながら、普段の無口な彼女からは考えられないような台詞を幾見に叩き付けた。

『病気で前線から戻ってくる艦長なんて聞いたこと無いわよ！』

『海江田提督戦死』『幾見艦長人事不省』、それを聞いたとき、卒倒しそうになったしおりの最大限のつよがりだった。

作戦行動中の部隊の詳細が他の部隊に伝わることはむしろ希である。だから、幾見が負傷したと考えたとしても、だれもしおりを非難する資格はなかった。

それを知っているヘルガは画面に視線を戻した。カメラの横をすり抜けようとした駆逐艦が真っ二つにへし折れて爆沈した。

（生存者、いないな）不思議とヘルガには解った。

「和美は？」

「鷹嶺さんとこ……大和、出てこないわね」

「沈んではいないらしいけどね。何？まだ諦めてないの？和美」

坂井和美は、訓練生時代に鷹嶺に一目惚れしたものの、相手にしてもらえず、いわば失恋したのである。

「諦めてはいるみたい」

「自衛隊、ウチへ攻めてきているっていうのに」

「噂でしょ？」

その時、エマージェンシーを告げるサイレンが基地中に鳴り響いた。

『緊急！緊急！未確認飛行物体多数接近中！総員戦闘配置！繰り返す、総員戦闘配置！！』

「こんな時に？」しおり達は全員、席を立った。

『不明機は日本側から進入。後5分で絶対防空圏内に侵入！』

『総員傾聴せよ！』スピーカーから殺気だった声が響く。

『１８１１をもって我が軍はこれを敵と判断す！戦闘準備！！迎撃戦隊順次出撃、これを迎撃せよ！』

「いくよ！」しおりはヘルメットを被りながら部下に叫んだ。

「了解！」

酒保からブンカーまでは走って1分程度。しおりは走りながら各部のチェックを始めた。

スピーカーから命令が聞こえてくる。

『警戒待機中の第１２１航空団、壬生狼、順次発進中！！敵は日本国航空自衛隊、敵機はＦ－１５主力と推測される！繰り返す－』

戦争とは、ファンタスティックな面をそれなりに持ち合わせているが、大抵の場合、カオティックなものだ。

ＩＢＣ側で、それを味わわされたのがリシリューの乗組員とするならば、対する国連軍の戦艦乗組員の中で、恐らくそれを一番に味わわされたのは、この海戦においては、ウィンシスコンの乗組員達だったかもしれない。

彼らは第1戦隊の最後尾に位置していた。

「第４斉射、スムーズに発射完了」

「第3斉射の弾着観測完了」

副長から報告が入る。

「敵1番艦に3発命中するも弾かれました」

艦橋に歓声は上がらなかった。皆、その報復がなにより怖かったのだ。

「角度が甘いんだ！修正させろ！」

ダニガン艦長が構えた双眼鏡の視界にフリードリヒの姿が映る。

それは米軍の戦艦部隊の猛攻を受けつつ、悠然と航行していた。

（バケモノめ！）

「敵弾来ます！」

見張りの悲鳴に近い声を聞いたダニガンは、思わず天井を見上げた。

いまさら舵を切っても間に合わなかった。
（最後の瞬間……て奴かな）
ダニガンは、敬虔なクリスチャンである自分が主への祈りもままならないまま、死ぬことに妙な興奮を覚えた。

その轟音は、さらなる攻撃を加えようとしていたアイオワの艦橋にいた人々さえ驚かすに足りる強烈さだった。それまで、明かりといえば、吊光弾と炎上する艦艇、時間の射撃によって発生する閃光ぐらいでしかなかった海上が、一瞬、猛烈な光に包まれたのだ。
リーチは眉をしかめ、頭を抑えた。
一瞬遅れて、轟音がやってきた。耳で感じるというより、落差の大きな滝で体を水で打たせた、という感覚に近い。
自艦がやられたと考えた艦長が叫んだ。
「各部被害知らせ！」
彼の鍛え上げた乗組員の反応は早かった。
「本艦の被害なし。被害艦は本艦ではありません！！」
「了解」
リーチはその間に艦橋の艦隊内部に通じた通信装置の受話器を電話員から渡してもらっていた。
「トムキャットよりウッドペッカー、本艦後方より閃光と衝撃波あり。そちらで状況解るか？」
リーチは耳を澄ませ顔をしかめる。通信は大混乱だった。各艦の艦長が、先程の衝撃波について説明を求めようとして騒ぎまくっていた。
『なんだ？何が起きた？』
『ウッドペッカー、ウッドペッカー、応答せよ』
『潜水艦だ！潜水艦の攻撃だ！！』
（何という悪態だ）
と、リーチは思った。これは、私が何とかしなければ……その時、
『スーパーマンより、落ち着け！！』

と、聞き慣れたアーノルドの声がした。

『ただ今の衝撃は、ジュエリーマウスの爆沈によるもの。ジュエリーマウスは現在攻撃中のスカンクにより撃沈された模様だ。我々はジュエリーマウスの仇討ちをするべきなのだ。そのときにこのような醜態はさらすべきではない！』

第五部　大和

「やけにあっさり沈んだな」
ウィンシスコンの撃沈報告に、大和の司令部は、それほどの驚きを見せはしなかった。
「敵の腕か、連中の運、いずれでしょうな」
「さてな……」
綾崎はいつもの癖でタバコに火をつけた。
山本はその癖を快くは思っておらず、顔をしかめた。
これで綾崎の滅棒は決定していた。
ここで彼が煙草を吸えない理由はいくつかある。
ＮＡＴＵがコンピューターであるが故に嫌煙家であるとか、コンピューターにとってヤニが厄介者であるとか、軍法で禁止されているとか。真名に禁煙を言い渡されているとか。
ＮＡＴＵが気を利かせて煙感知器をオフしてくれていなければ、この時、戦う前から大和艦内には火災警報が鳴り響いているはずであった。
なのに彼は煙草を吸う。理由は「煙草を吸わないと頭が回らない」ただ、それだけ。部下にとっては死活問題だけに、彼らは見て見ぬ振りをする。
「俺が言えることは……」
綾崎は紫煙を吐きながら言った。
「連中と同じ運命を辿らないという保証が、この場に居合わせた誰にもない……無論、我々にも……ただ、それだけさ」
「では、我々も」
「そう」綾崎は笑みを浮かべながら言った。
時計の横の作戦経過表示に新たな表示が加わった。
「陛下の予定通りに事は進んでいる。だから、仕事をしよう」

この時、意外な報告がジャネットの耳に入った。
「何だって？」
「はい。敵の通信を傍受いたしました。情報通りです。ヨコスカを出港した輸送船団が付近を航行中です」
「ふむ……」少し考え込むようだったジャネットが突然言った。
「フェイズ１を回そう」
スコットはチラッと上官の顔を見た。
「フェイズ２だけで敵戦隊を叩けるだろう？スコット君」
「ええ。不可能ではありません」
スコットは落ち着いた声で訊ねた。
「しかし、戦力の分散は……」
「わかっている」ジャネットは遮った。
「しかし、水雷戦隊の様子が芳しくない。このままでは国連軍を突破してもその後に船団を守ることは不可能になりかねない。奴ら、絶対に間に入って絶望的な抵抗を試みるだろう。我々に与えられた本来の任務を忘れてはならない」
正論だった。本国からの命令は忠実にこなさねば。しかも、日本からということは、食料が多数ということは容易に想像がついた。戦略上、ＩＢＣにとっては、物資さえ手に入れば、後は敵戦艦なんてどうでも良いのだ。
作戦担当のハイエ参謀は、即席とは思えない巧妙な作戦を立案、見事にフェイズ１を離脱させた。船団は１０ノットの低速である。フェイズ１は３０ノット発揮が期待できる以上、追撃は可能なはずだ。少なくとも１時間以内に敵輸送船団を捕捉できるだろう。
これはＩＢＣにとって、戦艦と同じくらい貴重なものだった。彼等はそれがどんなものか、考えはした。しかし、それが国連軍の囮だったとは、考えもしなかった。適度にタイミングが良すぎるのだ。
国連軍の幹部達は、敵部隊の一部が進路を変更したとき、『かか

った！』と驚喜した。この敵の動きは、その戦力が半減すること、つまり、敵の戦力分散、味方の戦力集中を意味していた。

リーチ提督ならずとも、この作戦を立案した人物に勲章でも授与してやりたい気分だった。リーチは即座に麾下の部隊を敵主力部隊に向け、突撃させようとした。大和が間に合わないのが予想外だったが、接近戦なら、たとえあの化け物でも何とかなるとふんだのだ。

だが、これをぶち壊してくれたのが韓国海軍だった。

後々まで『国連軍のお荷物』と滅茶苦茶に叩かれ、『無能提督』と米海軍公式記録にも記された韓国海軍の司令官が、あろう事かその付近の海域に展開しておりあまつさえとんでもない通信を発してくれたのだ。

『現在、マーカス島沖南南西２３海里。敵艦隊の姿なし。視界に入る一面の海原に存在するは我らのみ。感慨深きもの有り』

この馬鹿げた、作戦を根幹から破壊させる名文は、彼等の間近（彼等はその存在に気付いてはいなかった）にいた、作戦開始当初から一切の侵入が禁止されているこの危険海域へ命がけで展開し、欺瞞電文を流した米海軍の駆逐艦乗組員をして、怒りを通り越して呆然とさせたほどの無策ぶりだった。

当然、リーチも綾崎も、全ての幹部が頭を抱えた。

ミズーリの艦長なぞは、怒り狂って、リーチに韓国海軍への発砲を進言した程だった。

それを傍受したジャネットは慌ててフェイズ１を呼び戻した。タイムロスはどう見積もっても２０分。結構な時間だった。だが、ハイエはこれすら活かそうとした。彼等は新たな行動に出た。

主力艦隊の背後に新たな敵艦の反応が出たのは、それから数分後、フェイズ１が回頭し終わった時だった。

フェイズ２の『丁字戦法』を逆手に取る絶妙な艦隊行動によって脇腹に食いつかれ、ほぼ一方的に叩かれる形となった国連軍は、断末魔の悲鳴を上げていた。

戦闘開始から丁度３０分。何とか一矢報いようとする国連軍だが、ＩＢＣの方が数枚上手だった。この段階までは、誰の視点からも、まさに国連軍はインド洋や東シナ海で味わった敗北をまたも味わうしかないと思われた。

これまで誰も見たことのない様な巨弾がＩＢＣ独立艦隊へ飛来したのは、その時であった。そう。昨日、フェイズ４を撃退したあの巨弾である。

事態は変化の兆しを見せ始めた。

亜成層圏から駆け降ってきた灼熱する矢の数は９本だった。その全てが変針しつつあったフリードリヒの周囲に落下した。１４万トンの戦艦は、その巨体を激しく振動させた。鮮紅色の水柱が立ち上り、彼女を包み込んだ。

それは、彼女の放つ砲弾よりも巨大な砲弾の飛来を告げていた。

熱源探知の報告が入った。

『熱源探知に引っかかりました。推定、真方位２－７－５より敵弾飛来、本艦を夾狭。発砲せる敵艦らしきものは探知不能。狩野粒子濃度レベル５、高すぎます。射距離……恐らくは５万以上、精密計測限界外』

「一体なんだ!?」

ジャネットは叫ぶように言った。誰も答えようとしない。否、答えられないのを知って、スコットに視線を向ける。

「艦長!」

「まさか……」と、スコットはうめいた。彼は、発生した水柱の色を目にして、強い衝撃を受けていた。

「なんなのだ。あれは?」

「Ａ．Ｋ．Ｄです。しかも、あれだけの砲となると、彼等、いや、世界でも一隻だけでしょう」

「はっきり言え!」

「あれは、１１１号艦です」

スコットの判断は正しかった。α任務部隊は、ロスバッハを拿捕した時の速力で駆け戻って来たのだ。

フリードリヒに砲戦距離5万で砲弾を放ったのは、『１１１号艦』のコードで建造された大和だった。

大和はあまりにも巨大な艦だった。

全長３８０メートル。全幅５５メートル。基準排水量１９万トン。公試排水量２２万トンに達する船体の外観は、見るものに、彼女が大和級をほぼ3倍にした巨大戦艦であることを思い知らせる。

この巨艦を操るのに要求されるべき人員は６０００名。しかし、徹底した自動化のテスト艦でもあった大和にその数は許されなかった。建艦時からの要求は３５００名。建造価格の暴騰すら許した背景には、この徹底した自動化のデーターの回収があった。

艦の建造時に必要人員が2分の1で済むということは極めて有効な売り文句だった。しかも、それは同時に『自動化』への新たなる技術的成功も意味していた。

クライアントの要望のほぼ全てを具現化した大和は、２０世紀のリムゲードが産んだ最高傑作として、歴史書に名を載せる様な艦として作られた。

大和が小早川綾羅の押し進めたリムゲードの『センチュリー計画』の産物となり得たのは、まさに大和のこうした裏があったからである。

フリードリヒの艦橋には、スコットの地獄を覗き込んできたかのような声が響いていた。

「ヤマトです。１１１号艦です。リムゲードはあれを完成させていたんだ」

「本艦の対抗馬とされたあれか？」

ジャネットが驚いたように訊ねた。

「しかし、奴は5万で撃ってきたし、速度も30以上出している。聞いていた話とは違うぞ。せいぜい49センチ砲9門搭載の27ノット艦だったはずだ」

「簡単な話です」とスコットは言った。

「奴らは、全部のデーターを偽造していたんです。かつてのヤマトと同じように。それが可能だった何かがあるんです」

綾羅の恐ろしさを知らなかったとしても、スコットの推測は概略において当たっていた。大和は、南沙と蓬莱学園とで脈々と受け継がれてきた建軍以来の建艦技術を受け継ぐ建艦技師達の頭脳と、リムゲードの最新鋭テクノロジー、そして艦政本部の奇才達の暴走の産物というべき艦だった。よく言っても悪く言っても、恐るべき兵器。

主兵装も20万トン級戦艦に相応しいものだった。彼女は、艦載砲としては空前の55口径56センチ3連装砲塔を備えていた。主砲門数、計9門。本来は12門の搭載が予定され、いざとなれば簡単な工事で砲塔搭載が可能であるが、この段階では、予算削減とハリアー搭載のため、1砲塔分のスペースが開けられていた（このため、排水量が本来20万トン級なのに、19万トンにまで減少していた）

この他にも、前述したとおりの重武装を装備している。古典的な意味で考えるならば、大和は人類史上最強最悪の凶器そのものだった。

スコットは訊ねた。

「どうしますか？」

「決まっている」ジャネットは風車に向けて突撃する騎士のような真顔で答えた。

「戦うさ。相手が化け物ならこっちだって十分すぎる化け物だ。簡単にやられやしない。フェイズ1には予定通り、フェイズ2の各艦も同様だ。ヤマトとの距離を縮める。全艦突撃せよ」

「了解」
スコットは英国の騎士を思わせる風貌に笑みを浮かべた。彼にとっての巨艦巨砲とはまさにこれであった。
彼は、制帽を正しく被りなおすと、艦内各部に命令を出し始めた。

大和の５６センチ砲弾３発は、フリードリヒとの間に割って入ってきたネルソンへと落下した。
全弾が第１煙突基部、右舷高角砲塔群、後部檣楼へそれぞれ命中。周辺の２５０ミリ近い装甲を食い破って艦内に突入。炸裂した。このうち、一番のダメージを与えたのは高角砲塔群に命中した一発だった。砲弾は一基の高角砲に命中すると、砲弾エレベーターを通じて垂直にその中に突進。まずそこに収められていた数千発の高角砲弾を豪爆させた。
猛烈な爆発とともに、火薬庫周囲の構造物が空中へ吹き飛んだ。厳重に封鎖されていたはずの水密扉がいくつも吹き飛び、他の区画へ熱エネルギーが侵入し、さらなる損害を彼女に強要した。
ネルソンの報復は彼女が傷ついた直後に果たされた。
彼女の放った４発の内、２発が命中したのだ。
猛烈な振動が走った。綾崎はそれを手近なものに掴まることでやり過ごした。
「各部被害報告！」
『艦首甲板に命中弾、第１６、１７，２５，２６兵員ブロック消失、近接ブッロックに火災発生。右舷１２１番砲に直撃、砲塔消失。自動消火システム作動中。人的損害なし。応急班急行中』
綾崎は、煙草を揉み消すと、フンと鼻を鳴らして言った。
「非防御区画に兵員を配置してなくて正解だったな」
「はい。それに対空砲の弾薬を抜いていたこともです。ミサイルランチャーがあれば今頃どうなっていたか」
綾崎が軽く頷いた時、大和の主砲が再び火を吹いた。

「グルネル隊、敵水雷戦隊を駆逐中！」
「カーン隊、突撃します！！」
「ネルソン、大和を砲撃中！」
ＩＢＣは熟練の腕をこの時とばかりに発揮し、より優勢を確保していた。

「第２１水雷戦隊、交戦状態に突入！」
「指揮系統が混乱している、誰か何とかしてくれ！」
「サル語でわめくな！英語でしゃべれ！」
「敵も混乱している！数からして勝てる！」
「舌を動かす暇があるなら撃ちまくれ！」
対する米軍は敵の旗艦たるフリードリヒの撃破のため、のらりくらりと奇妙な動きを見せつつ、後続艦を引き離していく彼女に全砲門を集中するという、砲戦における最大のミスを犯していた。
結果は最悪だった。
多数のほぼ同口径の砲弾が集中射撃を続行しているため、弾着修正が出来ないのだ。
弾着は乱れる一方。そのことに真っ先に気づいたのは、ミズーリのアーノルド艦長だった。彼はリーチに進言した。
誰が撃った弾がどこに当たったか、まるでわからない。これでは悪戯に命中率を下げるだけだと。
彼の進言が受け入れられたのはいうまでもない。
米軍はアイオワがフリードリヒを。後続艦が２番艦以降を叩く形に目標を変更。その途端、彼らは驚愕した。
暗闇の中にいるはずの後続艦の数が半分以下に減っているのだ。
決して撃沈したり、脱落させたわけではなかった。

「敵艦隊、２番艦に火災発生！」
「こっちだって経験値が上がってるんだ！火災を目標に射撃を集中しろ！」

敵も味方も夕日を背にしようとしていたが、米軍、そしてA・K・D、なによりＩＢＣのそれぞれがそれを考えていたため、どうしても平行線上の混戦になりがちとなってしまった。
そしてお互いに夕日めがけて突進するという奇妙な戦闘が繰り広げられていた。辺りは薄暗闇が支配する夜に変わりつつあった。

「左舷で発砲炎確認！」
「なにっ！？」
索敵を開始させたその瞬間、アイオワの左舷に水柱が立ちのぼった。
敵がいるはずのない左舷からの攻撃に、米軍はさらなる驚愕を強要された。

現地時間午後６時丁度。
国連軍は、敵の罠の中に陥っている自分達に気づいた。
「左舷に戦艦３、本艦へ向けて射撃中！後続に駆逐艦多数！」
ミズーリの見張りが大あわてで報告してくる。
「なんだと！？」
アーノルドは双眼鏡で左舷を見る。確かに戦艦の発砲炎が見えた。
しばしの沈黙の後、艦橋に低く響いた声に、皆が我に返った。
「ツープラトーン攻撃だ」
その呻くような声に、周囲の者達はあっけにとられた。
艦長のアーノルドが、地団駄を踏んで悔しがっていた。
「やつらは別動隊を編成していたんだ」
フリードリヒの射撃に気を取られている間に、妙に距離の離れていた後続艦が段々と別動隊として俺たちの背後に回っていたんだ。
フリードリヒの奇妙な運動は、俺たちの弾を回避するなんてもんじゃなくて、タイムラグクロスアタックをかけるためのものだったんだ。俺たちは退路を塞がれた。
「撤退しますか？」

若いアナポリス出たての士官が尋ねた言葉に、アーノルドは激昂した。

「馬鹿野郎！出来るもんか！」

彼らはすでに敵目がけて踏み込みすぎていた。間合いを詰める間に、敵が包囲網を完成させている。

敵に損害を与え、包囲網を崩さなくてはならない。

アーノルドは命じた。急ぐべきだ。

「リーチ提督に通信をつなげ」

「暗号ですか？」

「やってる暇はない！平文でたくさんだ！」

「敵。発砲！」見張りの報告が入った。

「わかってらぁ！こっちが撃つんだ。敵だって撃つわ！」

南沙統合軍陸戦隊第２機甲師団第２大隊第２中隊長のＡ・アーノルド少佐の従兄弟は、そう叫んだ。

「ちっ違います！」

「なんだ！ザーメンでも撃ってきたのか？」

女性隊員から「セクハラ大王」と陰口を叩かれ、にも関わらず結構人気の従兄弟とこの男は、こうした所はそっくりだった。

「てっ、敵別動隊に増援多数が加わった模様！」

「旗艦から通信。フリードリヒへの射撃一時中止、敵別動隊の撃破に全力を投入せよ。幸運を祈る。以上です」

「なぁにが幸運だよ」

おい。やれ。といいつつ、アーノルドは思った。

（フリードリヒは大和に押しつける気か）

『第５斉射、発射完了』

「リーチ提督には、もっと艦隊戦について勉強してもらわなくては……」

『別動隊は単独をもって本隊の背後に取りつくフリードリヒ以下でなる敵部隊を撃破せよ』と書かれた通信文を綾崎は握りつぶした。

「気楽に言ってくれる」
敵主力戦艦部隊、例え戦力が半分以下でも、戦艦主力の相当な驚異を、俺達だけで相手しろだと？戦力比いくつあると考えているんだ？
すでに、モニターの上で解る限りでも、国連軍の主力の戦艦達のいる部隊（第１、第３戦隊）のみならず、主隊にへばりつくように、小型艦で編成された支援部隊（米第２、第４戦隊、豪州海軍全部隊）が列を作って大和から離れていった。
原因は命令の不徹底である。主隊が動いたため、別働隊に攻撃目標を変更したと考え、ただついていった艦もいたし、南沙軍が単独で敵艦と渡り合うことになったと戦後まで全く知らなかった部隊も存在していた。
しかも、リーチが綾崎達の支援にどの部隊を割り当てるとか、目先の敵に捕らわれて全く考えていなかったことも災いした。
南沙軍は孤立状態で、敵主力の主力部隊を相手に戦わなければならない状況に追い込まれたのである。
敵は戦艦だけで８隻は存在していた。
１９対１２の勝負。火力差では３５対２４の勝負だった。
「言うだけなら、気楽なものです」
山本も苦々しげに言った。
「全くだ。冴子。目標をフリードリヒに移す。照準合わせ次第、撃て」
『終わってます。目標、フリードリヒ、発射！』
ズドォォンという、粘っこい音が耳に入ったその時、ＮＡＴＵの報告が入った。
『ネルソン級戦艦の撃沈を確認しました』
ワッと歓声が上がる。
ネルソンは大和の砲弾６発を全身に浴びた。Ａ砲塔前楯に命中した初弾により、３００ミリの装甲を粉砕され、砲塔そのものを海へ弾き飛ばされた。第２弾と第３弾は艦橋基部に命中し、それにＡ砲

塔と同じ運命を辿らさせた。残りの６発はすべて舷側水面下に命中し、その装甲をひきちぎると、キールをへし折った。爆発のエネルギーが艦内を駆け回り、防水扉を次々に吹き飛ばした。そして、数千トンに上る浸水がその後に続いた。長距離航行を念頭に置いていたため、装甲が薄い英国戦艦であるネルソンにそれに耐えることは、少しばかり酷であった。

ネルソンは最後の時を迎えた。

●日本人同士？　午後６時１５分

「まったく」

部下とこれから酒でも飲みに行こうと話していた鷹嶺は、不機嫌そうな声で呟いた。

「やっと帰ってきたらまた出撃だと？」

『兵隊と産婆と葬儀屋に失業の心配はないですよ』

僚機として右斜め後方を飛行していたヤケ気味の久遠機から文句が来る。

「くそっ。編隊全機へ。狩野粒子弾の補助が後５分で来る。目的はＡＷＡＣＳの制圧だ。せっかく自衛隊さんが持ってきてくれたんだ。しっかり受け取ってこい。鉛弾のおつりは辞退しろよ」

『了解』

『了解です！』

「和美、秋元達の所へ戻れ」

『えっ？でっ、でも』

『俺達教導団は排他的なんだ』

『生徒の出る幕はない』

この部隊、旧ＩＢＣ海軍航空隊独立第１３教導航空団、通称『壬生狼』、こと、現在空に上がっている中核は一番隊及び三番隊。この戦争における航空戦最強部隊の名を欲しいままにしたエリート部隊である。

惰性でついてきたような和美は彼等に逆らうつもりはなかった。

『りっ、了解。御武運を！』
「お互いにな」
和美の機がバンクした途端、星とは違った航跡を描く光がいくつも見えた。自衛隊も珍しく相当に戦力を出しているらしい。
狩野粒子濃度はそれほど高くはない。
「ソロモンよりカリン、ソロモンよりカリン」
鷹嶺は和美を離したのは間違いだったかもしれないと心配した。もし、他の部隊に誤認されたら、責任問題程度ではない。
『こちらカリン』
「しおり、今、和美をそっちへ派遣した。誤認しないように」
『了解』
『2時方向光りました！識別信号なし！』
「全機、ＫＤ弾（狩野粒子散布弾）用意。発射と同時にいつも通りにやれ。的の取り合いでケンカするなよ」
『了解……ん？』
香坂が急に変な声を上げた。
「どうした？」
鷹嶺は香坂のこうした時の変化に対する敏感さを信じていた。思わず突撃の指示を出し損ねる。
『隊長、バンドを８７９，３３に合わせて下さい』
「８７９，３３？」彼はバンドを合わせた。
『こらっ！聞こえてんのか？このガキども！』
「ガキ、だぁ？」同じようにバンドを合わせた各機の間に、まるで紙に水がしみこむように、誰に向かってという気が瞬間的に浸透した。
『こちら航空自衛隊新田原基地所属第３０１戦隊！とっとと道を空けろ！このボケ！』
（自衛隊のエリート部隊か）
アグレッサーを担う部隊となると、少しばかりやっかいだな。と、鷹嶺は警戒して高度を上げた。だが、すれ違ったにもかかわらず、

鷹嶺達に上をとらせ、無視するように下を通過しようとした。鷹嶺はこいつらは素人同然だと判断した。

『こいつら全くの一週間ですな』一週間パイロットのことである。一週間で戦死するほど技量の低いパイロットのことを指す。

「逃すと後が厄介だ。ここで残らず始末しろ」

目標は別らしい。おそらくは誘導部隊だろう。にしても自衛隊側の行動は酷すぎるほど稚拙だった。

「こちらA．K．D軍航空教導団、人の縄張りでなにしてやがる！そちらの飛行目的を知らせ！」

『ガキが偉そうに教官気取りか？うちに帰って寝てろ！』

『こっちはＩＢＣから帰ったばかりで気がたってんだ！貴様等こそ悔い改めてとっとと帰れ！宿舎じゃお前らの古女房がマタを濡らして待ってるぞ！』

休暇を潰されるのを何より嫌う久遠が怒鳴り声をあげた。

ギャーッハッハッ！と無線の中に笑い声が響く。

『くっ。久遠君！』紅一点の沖田が思わず止めに入る。

『……あっ、ＩＢＣ帰りだと？』さっきの威勢はどこへやら。声と同時に歯が鳴る音がする。

『ということは……みっ。壬生狼！？』

パイロットの声は悲鳴に近かった。

「だったらどうした？全機へ。戦争を教えてやれ」

美味しいところは総取りの鷹嶺であった。

●誤解

「すげぇな」

ネルソンの最後を目にした防空指揮所で見張り員を束ねていた原田中尉は、感心したように呟いた。

「おい！見ろよ！あの駆逐艦！艦橋が吹き飛んだぞ！」

「おい！あれあれ！あの戦艦！」

原田が大声で喚声を挙げる部下を叱咤しようとしたその時ー

ズズゥゥゥン

後方（米軍のいる方角）から鈍い轟音がとどろいた。

訓練によるものか、彼らはとっさに身を屈めた。

「何だ！」

「わかりません！現在捜査中！」後方見張りについていた部下の一人が叫ぶが、それはすぐに悲鳴になった。

「なっ、なんじゃありゃぁ！！」

原田は何事かと思い、後方に駆け寄り、双眼鏡を構えたが、彼も視界に入った光景に茫然とした。

Ｓダコタの艦首がありえない角度で海上に突き出されており、海面へ次々と人間をこぼしながら急速に海中へ沈もうとしていたのだ。

艦橋にもその轟音は轟いていた。

「被害報告！」

被弾したものと誤解した司令部の一人が叫ぶ。

『本艦に損害なし。先ほどの爆音は本艦後方からのものです。現在捜査中』

ＮＡＴＵのその言葉に、綾崎はインターホンを取り、見張りへと繋いだ。

「艦長より艦橋見張り、後方の状況わかるか？」

『さっ、Ｓダコタ……』

「はっきり報告しろっ！！Ｓダコタがどうしたっ！？」

『Ｓダコタ、爆沈！Ｓダコタが爆沈しました！！』

フリードリヒ撃破のため回頭中の大和からみれば、Ｓダコタは真後ろ、第３戦隊の４番艦の位置にいた。

彼女が第一二射を放った瞬間、大角度で落下してきたバンガードの６発の３８センチ砲弾が命中。その内の一発が第二砲塔天蓋を貫通して主砲弾火薬庫に突入し、そこに収められていた装薬と砲弾を誘爆させたのだ。

それとほぼ同時に、今度は大和から見て左方向の水平線上で一瞬閃光が閃くと、しばらくして粘りのある低い音が響いてきた。

戦艦が炎に包まれていた。沈むのは時間の問題だろう。

「やったね」リーチはその光景を見て、感無量という声で言った。

「Sダコタは、敵と差し違えたのです。彼らは決して無駄には死ななかったのです。決して……」答えた参謀長は涙を押さえることができなかった。

Sダコタの砲術長は、彼の従兄弟だった。

Sダコタの放った最後の砲弾は、皮肉にもバンガードが彼女に命中させた数と同じ六発が命中した。その内の二発が、バンガードのガスタービンの排気口付近に命中。そのまま排気口をふさぐ形でそこに飛び込むと、そこで炸裂。排気口を吹き飛ばし、ただでさえ戦闘速度で航行を続けるための出力を得るために加熱気味の機関の内圧を臨界点をはるかに越える所までもっていき、それを一気に爆発させた。

元来、WWBFの企画の中でも装甲は薄く、長距離の後続距離を稼ぐための配慮ばかりが目立っていた英国タイプの派生であるバンガードに耐えることは出来なかった。爆発の瞬間、バンガードは海上で一度飛び上がった。

数秒後、艦を構成していたあらゆるものが周辺へ飛び散り、艦のあらゆる場所から炎と艦と人間のカケラを噴き出した。

さらに数秒後、被害はついに弾火薬庫に拡大し、その中にあった装薬、砲弾を誘爆。バンガードは再度海面から跳ね上がった。

主砲はねじ曲がり、艦橋、煙突その他のほとんどの構造物がこの爆発で吹き飛ばされた。原形を留めないまでに破壊されたバンガードは、そのまま浮かぶ鉄クズと化し、松明のように炎上し続け、砲弾命中から１３分後に横転した。

「よし」リーチ提督は炎上するバンガードを見つめつつ叫んだ。

「盛大な照明が出来たぞ。諸君、ありったけの砲弾を敵に打ち込

んでやりたまえ」

それに答えるようにアイオワの主砲が火を吹く。無論、その間にも彼女の周囲には無数の水柱が立った。

第五部　後方

大和は彼らのバンガード撃沈に見惚れている暇を与えられなかった。彼らは純粋に殺戮を繰り広げようとしていたのだから無理はない。

主砲射撃指揮所の冴子から報告が入る。

「目標、右舷十二度、フリードリヒ。距離１万４千。射撃解析値計算中。主砲斉発」

綾崎は頷くとひときわ大声で命じた。

「撃ち方続行せよ」

射撃はこれによって始まるわけではない。場合によっては何十分もかかることもある。だが、「砲術の天才」の異名をほしいままにする冴子と、自動化を徹底した大和の射撃システムには、そんな心配は無用だった。

綾崎の命令とほぼ同時に、スピーカーから彼女の声が響く。

「了解。各砲塔射撃解析値伝達確認。砲戦距離三千九百、発射！」

暗黒の世界に姿を変えた世界に閃光が走る。砲口から吐き出される赤い物体。薄明かりの中に長く吐き出される炎。轟音。１９万トンの船体を揺るがす鳴動。

射程からいって、３０秒足らずで少々で着弾するはずだ。綾崎は見えなくなりつつある敵に双眼鏡を向けた。水平線上で閃光がきらめく。敵も撃ち方を始めたらしい。

さっきより敵が接近しつつある。

「面舵一杯！機関室、左舷側出力を１０％あげ、右舷を６０％下げろ」

「了解！」

パッ

メイン・モニター横の警告モニターに

危険　ＷＡＲＮＩＮＧ

警告
急傾斜　傾斜角度１７度
の警告が出るのと同時に、急傾斜警報のブザーが艦内に轟き渡る。
この間は大和は主砲弾の装填が望めない。さらに傾斜は実に二十度近いものとなった。こんな無茶な操艦をやるのは綾崎くらいだった。
彼はまさに潜水艦顔負けの操艦を実行したのである。
敵初弾は転舵を完了した４秒後に弾着した。
大和が急激な変針を行ったため、すべて左舷側至近弾となったが、海面には百メートルはあろう水柱が連続して立った。
綾崎はその中で艦管理指揮所からの報告を聞いた。
「本艦に被害なし。敵弾はすべて近弾」
（ふむ。なかなかだ。冴子と替えてもいいくらいだな）
急激な変針をやり過ごした綾崎は、敵艦の周辺に水柱が立つのを目撃した。

●南沙　帝都郊外　九重基地地下　中央戦略指揮所
南沙の保有する軍事衛星は偵察・攻撃・通信と種類がある。
太平洋に展開していた米軍の衛星が片っ端からＩＢＣにより撃墜されながらも、その存在を維持しているのは、戦争全般においてＡ.Ｋ.Ｄが制宙権を掌握していたためである。
軍事衛星のうちの第１監視衛星『闇魔』が日本からマーカス島へと向かう船団を補足したのは、第２監視衛星『照魔』が同じく日本から南沙島へと向かってくる航空機の集団と、その誘導役と思われるＡＷＡＣＳを補足するよりも、２０分ほど遅かった。マーカス島付近の厚い雲と、彼等の視点がマーカス付近に集中していたためである。
彼等は迎撃戦闘機の発進・誘導などを展開。敵補足から１０分後、敵の数倍の戦力を空へと上げた。
その対応で大騒ぎのスタッフの隅で、第１衛星からの受信データ

ーの解析が進められていた。
「どうなの？」緊急体制に突入する中、その報告を受けた綾羅が訊ねた。
「お待ちください。照合中です」
無機質なキーを叩く音がすると、モニターに映しだされた円を描く点が段々と拡大されていき、それは艦船の姿となった。
『艦船データー照合中』の表示がなされ、そして判明した艦のデーターに変換され、その所属艦隊などの詳細も映しだされる。
「陛下、間違いありません。海自のイージス艦『こんごう』級です。その他の艦船のデーター収集進んでますが、部隊再編成が行われた形跡がない以上、イージス艦所属となると、これは自衛隊の八八艦隊です」
「自衛隊？」
綾羅はしばらく考えると、クスリと笑い、振り返りつつ、軽やかに歌うような声で秋谷達にいった。
「読みは当たったわね。自滅しなさったわ」
「そのようです」ニヤリと笑う秋谷。
「まったく……」割に合わないような顔の新田。
「不要の仕事増しやがって……」
「そういわないの。さっ。予定通り、Ｒ－２４発令。事実関係の報告を国連本部および安全保障理事会に送ります。日本側ロビイストは押さえてあるわね？時間との勝負よ。急いで。それから、各員、監視は怠らないで」
「了解」
「わかりました」パッと駆け出したのは、綾羅の側に控えていた外務局のスタッフだった。
綾羅も秋谷達に「頼むわね」というと、そのまま指揮所を出ていった。
「警戒態勢、緩めるな！……さっき撃墜したので遭遇機は何機目だ？」

号令をかけた航空団司令の新田は、そのままの姿勢でオペレーターに訊ねた。

「都合、１９機目です。ポイントＷ－４で秋元、広瀬隊がＡＷＡＣＳ護衛機との戦闘中。もう1機はすでに鷹嶺隊が制圧しました」

「相手は指定飛行禁止区域に無許可で侵入。再三に渡る我々の警告を無視。問題はない。……そうだな？」

デスクに座った秋谷が訊ねた。

「間違い有りません」新田が言い切った。

「レーダー等はすべて自衛隊側が先に撃ったことを示しております」

「よろしい」

「Ｗ－４域、秋元大尉から通信です。敵４、降伏セリ。武器放棄確認。ワレ、コレヨリ降伏機ヲ誘導スー以上です」

「広瀬隊に監視させろ。秋元には戦線復帰を命じろ」

「了解」

状況は一方的に南沙側がイニシァティブを握っていた。

既に鷹嶺達に秋元・広瀬隊が合流、鷹嶺の指揮下にはいっていた。彼等は戦争経験が豊富であり、自分達の尊敬する『教官』である鷹嶺の指揮を仰ぐことが最も生存に近いことを知っていたのである。

『広瀬。加藤隊と接触次第、敵を引き渡して戦線へ復帰しろ。加藤隊へ連絡』

『了解』

『香坂。須藤と村田をつれてＡＷＡＣＳの制圧にかかれ』

『了解。須藤、村田。続け！』

『残りは敵機の退路を塞ぐ。秋元と和美は４機つれて香坂隊のバック・アップ。ヘルガは5機をつれてライト。久遠、６機でレフトの敵にかかれ。のこりは俺についてこい。夜戦だ。無茶するな。一番撃墜した奴は酒保で俺がおごってやる』

『了解！』

『忘れないで下さいよ！？』

「敵退路予想空域へのＫＳ（狩野粒子散布）ミサイル第２陣、到着予想時刻まであと１０秒！」

「竹上隊，太田隊、指定ポイントに到達！」

「野村、工藤隊、発進位置にて待機中！」

「鷹嶺隊、敵本隊の駆逐にかかっています！」

「さっさと始末させろ。秋谷さん。現在、我が方から都合４０機が投入されています……しかし、馬鹿ですな。あいつら」

ちなみに二人とも階級は上級大将で同じである。

「馬鹿はどこまでいっても馬鹿だよ」にべもない秋谷。

「ご苦労なことですよ」

彼は既にＦ－１５とＦ－２部隊の編成を頭の中で描いていた。イーグルは幸いにしてほぼ半数以上が無傷で降伏している。戦況は圧倒的にこちらが優勢なのだ。

１中隊は組める。これはいい。要撃部隊としてぴったりだ。

「わざわざＡＷＡＣＳを２機もを持ってきてくれるとは……」

「ああ……」

秋谷はシートに座りながらじっとモニターに映しだされていく状況を見ていた。

友軍機が自衛隊機を圧倒していく所もあれば、誘導されて基地へと向かってくる自衛隊機もある。混乱する自衛隊に比べ、友軍の行動に全く無駄はない。

「鷹嶺の指揮か」

「はい。実にいい指揮官です」

感服物という声で新田は頷いた。秋谷も異存はないらしい。

「引っこ抜いた甲斐はあったな。降伏機の運用は可能か？」

「ぬかりなく」

「狩野粒子散布！一部で無線及びレーダー使用不能！」

「ヘルガ隊、威嚇射撃開始！飛行禁止区域内です！……敵２機、

反撃に出ました。……命中！反応、友軍機のみです！」
「敵に再度警告しておけ」
「了解」
「馬鹿め……」

プシュッ
気密式の自動ドアの向こう、指揮所の外では親衛隊員が待っていた。
綾羅は敬礼に軽く答えただけで、相手の顔も見ずに横を通り過ぎた。相手は後ろからついてくる。
「黄色が吐きました」
「よくやった」
「日本政府内閣調査室の調査員です。Ｒ計画に接触を試みていました」
「白のホシは？」
「全て吐かせました。九重基地の全見取り図を米国に流されるところでした」
「処分は？」
「すでにフカのエサです」
「相変わらず仕事が速くて助かるわ」
「それが我々の勤めですから」

綾羅が自衛隊機の正式な降伏の報告を受けたのは、それから１０分後の事である。自衛隊側戦線投入機３５機の内、降伏１４、撃墜２１。統合軍側戦線投入機計４５機。５機喪失であった。

●砲術
「弾着、今！」
成果としては極上とは言えなかった。大和の砲弾はフリードリヒの周囲を狭く囲む形で落下した。夾叉だ。甲板上にいくつもの爆発

が見えるが、フリードリヒの重装甲を考えると、できる限り先に、もっと命中弾を。そしてより多くのダメージを与えておきたい。何とかならないかな。

「第１０斉射、発射！」

スピーカーから報告が入り、周囲は再び閃光と轟音に包まれる。大和の左舷前面が水柱に包まれ、景色が一変した。フリードリヒの砲弾が落下したのだ。

「速いな」綾崎はフリードリヒの弾着修正の素早さに感嘆した。水柱を形成していた海水が滝のように甲板や窓を叩いた。

「遠弾ですな」冷や汗混じりの山本が言った。

「避けるのには限界があるが、それでもあいつら、未だに方位修正が出来ていない」綾崎は冷や汗混じりの呟きを漏らした。

「どうせなら、そのまま下手でいてくれよ」

綾崎が永遠に下手でいてくれと願った相手は、自らの射撃結果を知って怒り狂っていた。

フリードリヒのマストトップに置かれた主砲射撃指揮所で砲戦指揮を執っていたアルトゥール・バイスベッガー少佐だ。ＩＢＣ海軍でも有数の短気者で知られる彼は、砲術長専用のハイパー・ターゲット・スコープを睨み、額に青筋を立てていた。

「なんたる有様だ！帰国したら砲術学校で再教育だぞ。苗頭３，下げ４００，急げ！」

彼は強いて言えば自分に怒っている様子でわめき立てながら、方位を敵艦の進行方向へ１０．３５度修正し、仰角を砲弾が４００メートル手前に落下するようにした。それまでの射撃は酷いものだったが、さすがに艦隊旗艦の主砲を任される男だけあって、その射撃修正は的確なものだった。

射撃班の将校や下士官達は、「バイスルベルガーの演説」と呼んでいる砲術長の怒号からから従うべきものだけを引き出し、それを管制システムにインプットした。

第十斉射の命中弾は、フリードリヒの左舷付近に集中していた。
C砲塔前楯に一発が命中。角度が浅いため、装甲に弾かれた。甲板にも4発が命中したが、甲板下の装甲板に阻まれて、それほどの被害を及ぼさなかった。
残りはすべて近弾となり、水柱をあげた。そしてそのまま水中弾となり、艦の水線のほぼ中央を叩いた。
舷測をつき破った砲弾は二つの区画を貫通し、核融合炉を護る内部防護壁に命中すると、そこで遅動信管を作動させた。スペースド・チタニウムの複合装甲を張り巡らしたそこは、その程度で壊れるほどヤワではなかった。だが、そこに通じるまでのそこかしこの区画を吹き飛ばしたことは確かだった。

「なによ!?まだだめなの!?」
冴子は25メートルという冗談のような大型測距儀に映しだされた映像を見て、怒り狂っていた。
「あいつ、なんて装甲なの!?」
冴子はフットレストを蹴飛ばして叫んだ。
「もう最ッ低!!常識ないんじゃない!?苗頭1，下げ50、急げ!」
「了解!」
「祥子、第1砲塔、上下修正が甘い!」
「はっ、はいっ!」
皆、冴子の命令を全面的に受け入れていた。『大和の御局様』を怒らせる度胸は彼女達にはなかった。
『砲術長、敵艦の新規データー入りました』
冴子の目の前に
『　緊急
ＥＭＡＧＥＮＣＹ』
のサインが点滅する。ＮＡＴＵから緊急報告である。

「何！？」
思うように敵艦が沈んでくれないので、冴子はいい加減いらついていた。この主砲、一発主力艦轟沈が売り文句だったんじゃないの！？
『敵艦は私と同じ層間装甲を採用している模様。装甲厚不明』
「何ですって！？……ええいっ！次々発、弾種変更！弾種ＡＣＴッ！」
「しかし、艦長から許可が下りていません！」
「弾種とかは私に任せるって言ってたでしょう！？」
「はっ、はい！！」
「砲は私がトップなのよ！」

「うわっ！！」
その衝撃は突然にやってきた。
綾崎が天才的な感覚により避けられると判断した砲弾は、約４０度の角度で大和の後部を並んですり抜けていった。通常なら直撃で大損害が見込まれる腕だ。
操舵手の香取の操艦技術と、綾崎の指揮、この二つがあって初めてさけられたとしかいいようのない砲弾だった。
だが、その内の一発が後部檣楼基部に命中したのだ。
爆発音と衝撃の後、数十秒後、バキバキ。ガッシャンという、自動車事故のような奇妙な音が艦内に響いた。
「なんだ？」
「艦管理指揮所から報告！」サブ・モニターに副長が出る。
「後檣基部に命中弾、後檣崩壊、右舷第７０３、７０５番砲損壊しました！」
直撃に何とか耐えたものの、自然の風と艦の速力が産み出す合成風力に耐えきれなかった結果とも言えた。落下した後檣は対空砲塔群の上に落下し、下にある最新鋭の高価な対空システムを叩きつぶしていた。

大和は後檣に後部指揮機能を収めていない。すでに真剣に撤去が考えられているほどの箇所だった（そこで果たすべき指揮機能は、その真下にあるバイタル・パート内の艦管理指揮所に収められていた）

●無知・無恥　　日本・東京　首相官邸

同時刻

「なっ、なんだと？」

「ですから……」

「君はあの飛行機一機、いくらしたと思っているのかね！」

「降伏した全自衛隊機は南沙軍の指揮下にあります。戦争でもして勝ちでもしないと、返還を望むことは出来ません。派遣部隊の半数以上が戦死もしくは行方不明となっております！」

「全滅の判定を下すべき状況です！」

報告に来た方は相手をなぐりつけてやりたい気分だった。パイロットの価値は考えてもらえないのか？あんたの命令で死にに逝ったんだぞ？

大体、民自党から政権奪取のためだけに『地獄不況』を作り上げた張本人はあんたじゃないか。この地獄だけじゃまだ足りないのか？

一方で、航空自衛隊から派遣された幕僚から説明を受けた村山首相は真っ青になっていた。

降伏したＡＷＡＣＳの最後の通信を分析すると、本隊誘導を任務とした３０１部隊全機が一瞬にして撃墜されたというのだ。残存機も生存しているのか同様に撃墜されたのかわからない。

沖縄から発進した部隊、ＡＷＡＣＳ２機、Ｆ－１５イーグルが２５機、Ｆ－２が自衛隊現有の半分に達する４機、残りはＦ－４が６機である。

彼の頭の中には、死んでいった隊員達のことなんて微塵もなかった。

「我が国は専守防衛を……」
「A・K・Dの指定した絶対飛行禁止空域に無許可で侵入したのは我が国の方です」　何を聞いていたという態度で彼は続けた。
「先に発砲したのも我が国です」
「先に撃たせれば良かったではないか」
「いまさら言って何になるんです！絶対飛行禁止空域への侵入も、接触機への発砲も、全て内閣総理大臣命令として発したものでしょうが！」
「しっ、しかしだねぇ……」
「派遣した２０３戦隊、３０１戦隊、３０６戦隊計３５機、８８名は事実上全滅です！一機、一人も帰ってきません！どうするおつもりなんです？この損害を国民にどう説明なさると！」
「どっ、どうすればいい！？」
「だからあれほど示威行動なんて辞めて下さいっていったんです！申し上げたでしょう！？夜間に爆音を聞かせれば縮み上がるだろうなんて、そんなの無理ですって！東京条約で自衛隊は一切派遣できませんし、当戦争における対艦攻撃目的の航空機の使用そのものが、既にヴァチカン条約によりできなくなっているんです。ＩＢＣを狙ったなんて言い訳は立ちませんよ！？」
「さっきテレビで飛行機が映っていた！あっ、あれは何なんだ！？」
既に述べたように、この戦いに関して、航空機は観測・救難・連絡程度しか使われていなかった。
「あれは観測機です！そんな屁理屈は通るはずがないでしょう！？」
「なっ、何とかしろっ！」
「どうやってです！？すでに外務省にはＡ・Ｋ・Ｄから、侵入機についての説明を求める声明が届いているんですよ！？安保理も、対日問題緊急会議の開催を先程決定しました！」
彼は一息ついた後で言った。

「A・K・Dは返答次第では対日宣戦布告も辞さないと通達しています。今、彼らと日本が（首相が就任演説で指摘したとおり）冷たい戦争下であること、そして日本より世界的重みがあるのは彼らであること、そして」

彼は一息ついて冷たく言い放った。

「彼らが核保有国であることを御忘れなく」

「かっ、会議だ、閣僚会議だ！国会だ！」

「間に合いませんっ！」

「首が惜しかったら、君がなんとかするんだ！そのために給料を払っているんだぞ！」

「そんな事言われても！」

「だからワシは最初から自衛隊なんて違憲だといっていたんだ」

「……失礼します」

バタンッ

「畜生め。テメエの首の方を心配しろってんだ」

彼は毒づいて同僚の姿を見た。彼と同じように顔を真っ赤にしていた。

「２０３は一番新しい部隊だ。新兵のみで編成されていると言ってもいい。Ｆ－１５の最終ロットで組み上げられた最終型だ。機種転換したばかりの３０６なんて、Ｆ－２だぜ？」

「試験運用だっていって、導入されたての戦闘機にＡＷＡＣＳも喪失。このままじゃぁ、海自だってどれだけの損害を被るか解ったもんじゃない。どうするつもりだ。あの馬鹿」

「どうするよ」

「どうするったって、どうしようもあるまい？被害総額から言っても国民に隠し立てするには限界がある。いや、無理だな」

「違う違う」同僚は手を振って否定した。

「俺達の首だよ」

「民自党の綾崎さんと秋谷さんの所にでも言って、なんとかいさめてもらうしかないな」

「ああ。にしても、これでこの政権崩れたな」
「当然の報いさ」
彼等は既に、次期首相となるだろう人物へのお伺いを考えていた。

●

発砲炎により、目視はかろうじて可能なレベルに過ぎなかった。
だが、ボンヤリと浮かぶ光によって、命中弾が得られたのは解った。
「いけますね」
スコットは明るい声で言った。
「ああ」ジャネットは嬉しそうに答えた。
「少なくとも、あの厄介者である南沙人には勝てるらしいな」
「あれさえ叩けば」スコットはにやりと笑って上官の顔を見た。
「そうだ」ジャネットは安堵の色を浮かべた。
「この戦、我々の勝ちだ」

「なかなかやるなぁ」
「しぶといにもほどがあります」山本はいら立たしそうに言った。
「速力はさがっとりますから、損害は与え続けているはずですがね」
右舷で閃光が走る。
「艦橋見張りより、主隊、敵戦艦1撃沈！」
「ほう」
「戦艦2、針路変更、本艦へ向かっています！」
「リルガミンが応戦開始！」
主砲が閃光を放った。

「主砲着弾二十秒前。次弾装填急げ！」
冴子の命令がスピーカーから響く。
命中してくれよ。原田は祈るように砲弾の行方を見つめた。
その時、

『最っ高です！』弾んだ砲術長の声がスピーカー越しに響いた。
艦長となにか会話を交わしていたのだろう。
『春風通りで対立チーム潰して以来の快感です！あーっ、もう感じちゃう！』
原田はそのキている発言に、思わず横にいた砲術班の女性観測員の顔をまじまじと見つめた。
「あいつ、昔、なにやってたんだ？」
「あの……以前、レディースの頭張ってたとかなんとか……」
「あいつ、やっぱりな」
呆れつつも、原田は艦長に報告のため、艦内電話をとった。
途端、左舷で水柱が立ち、大量の海水が防空指揮所に叩きつけられる。
原田は太い命綱を縛りつけた手すりにしがみついて今日何回目かの衝撃に耐えた。
一瞬、そのまま外に持っていかれそうになる。そうなれば約６０メートルの高さから甲板目がけてダイビングしなくてはならない。助かるはずがない。
「大丈夫か！？番号！！」
床に転がった状態で原田は叫んだ。
まだ水が引かず、簡易プールのようになった防空指揮所に配置されている部下の安否を尋ねる。
彼の部下は、むせびながら自分に与えられた番号を叫ぶ。全員いる。
彼はなぜか急に愉快になった。
「ふわっはっはっ！！この程度でこの原田修中尉様をくたばらさせるなんて不可能なんだよ！」
「はっ、はい。小村桜上等兵、一生中尉についていきますぅ……」
んっ、とその声が自分の背後からしていることに気づいた彼は、自分が先ほどの観測員の上に乗っていることに気づいた。原田は何を言われたのかわからず、小村に手を貸しながら訊ねた。

「上等兵、なんか言ったか？」
周囲の部下達はニヤニヤと意味ありげな顔でこちらを見つめている。
「あっ、あの……」
小村は真っ赤になって、つい口から出た言葉の説明に困り果てていた。
「わかった！」
じっと小村を見つめていた原田は、きつい視線で小村をにらんで言った。
恐らく、この時の彼のセリフ程、人を驚かせるセリフも珍しいであろう。
「えっ？」
「貴様、上層部から派遣されたボーナス査定員だな！」
小村は脱力感を感じながら思った。
（だめだこの人……）

第五部　ＰＡＳＴ

害虫駆除　　午後６時３０分

「駆逐艦キョンファ爆沈！」
「フリゲート艦ナッシブル自沈！」
「韓国海軍旗艦キムチ通信途絶！」
「駆逐艦ユッケ航行不能！」
「フリゲート艦プサン、脱落します！」
「朝鮮人なんてどうでもいい！ノースランドはどうなっているか！」

戦艦同士の殴り合いの横で、国連軍の第２戦隊とＩＢＣ第１水雷戦隊が激烈な死闘を繰り広げつつあった。

この交戦は実に偶発的なものであった。

主隊の背後を突こうと迂回中の国連軍第４戦隊が、第１戦隊の側面をガードしようと動いたＩＢＣ第２戦隊と偶然にも遭遇、交戦状態に陥ったのだ。

最悪なのが、先行しすぎていた韓国海軍が、敵味方わからない旗艦艦橋への流れ弾のため、さっさと司令部全員が戦死。命令系統が混乱し、艦隊がちりじりになりかけた所へ、後続の豪州軍の部隊が接近。ＩＢＣと誤認して射撃を開始。さらに増援の加わった双方が彼らを巻き添えにして戦闘を開始したのだからたまらない。

最終的に、この海域には、戦艦以外の戦闘艦の実に７割、両軍併せて８６隻が集結した上で砲火を交えることとなり、後に『マーカスの殴り合い』もしくは『マーカス乱戦』と呼ばれ、全体から見た『第２次マーカス島沖海戦』とは別の戦いとして戦史にも残ることとなる敵も味方も入り交じっての大乱戦。

そんな戦闘だった。

「韓国海軍、脱落します！」
「第３４駆逐隊、通信途絶！」
通信兵の声は、報告ではなく、むしろ悲鳴だった。
相次ぐ戦友の死に耐えられないのだ。
「くそっ！」
ＣＩＣが役に立たないので、艦橋で指揮をとっていた米第２４駆逐艦隊司令スレイン少将は苦々しげに報告に聞き入っていた。
「駆逐艦グレイビル艦橋に命中弾、艦長以下、司令部総員戦死！！」
「フリゲイト艦アール、通信途絶！！」
状況は、ほぼ最悪の域に達していた。
何しろ、先手を打たれた上に狩野粒子の濃度が高すぎ、熱源追尾システム採用のミサイルは、粒子の雲を敵と誤認してあらぬ方向へと突進してしまう。レーザー誘導システムを採用しているミサイルも、敵味方のレーザー攪乱幕のため、思うように機能してくれず、ビジュアル・トレース型も容易に迎撃されてしまう。レーザー火器管制システムも、敵の対レーザーコーティングを見抜くことが出来ない。
目視による砲撃と、攪乱幕が薄れて、対レーザー・コーティングが剥離した艦の目がけて砲撃もしくは雷撃を加えるしかないという、弾が切れるまで敵に向けてあらゆる武器をぶつけ合う戦いが展開されていた。
『あの時は、飛べば鍋の蓋でも武器にしたい心境だったよ』と、生き残った国連軍兵士は語ったが、まさにそんな戦況だった。
「司令、戦況は？」
旗艦に乗艦していたＣＮＮのマーチが、スレインにマイクを向ける。
「五分と五分……さ」

相当の強がりだった。
「勝てるんですね？」
「なんとかな」
スレインは、ため息混じりについ本音を漏らしてしまった。
「正直言わせてもらえば、ナンサの水雷戦隊がいてくれれば、本当に心強いんだがなぁ……」
「A・K・Dは、なぜこの戦いに参加しないんですか？」
彼も戦艦対戦艦の戦いとこの乱戦を別物と認識していた。
「距離的に無理なのさ。何しろ連中は戦艦同士の殴り合いの真っ只中にいる。指揮系統もウチとは別だ。こっちに手を貸せって方がドダイ無理なのさ」
彼は極めて冷静に判断が下させるタイプだった。
「それにしても腹立たしいのは、海自の連中だ」
「海自？」
「聞きゃぁ、あいつら、金でA・K・Dに肩代わりしてもらってるなんていうじゃねぇか。そんな腰抜けのあのクソッタレ共が、俺には腹立たしい」
この放送はCNNを通じて日本にも流れていた。
ズガァァンッ！！
どこかに一発くったようだ。
「くそっ！！こんな地獄に俺達がいるってのに！みんな太平洋の安全と平和のために戦ってるってのに！あいつ等一体なにやってんだ！」
再度爆発が艦を揺るがす。
「国連の爪弾き！金だけだすエコノミックアニマルめ！叔父貴が言ってたが、あいつらは本当に人間じゃぁねぇ！」
怒り狂ったスレインは、ありったけの罵りを叫ぶと、指揮下の艦に、一つの奇妙な指示を出した。
「敵をジャップと考えろ！人間じゃぁねえから、害虫駆除のつもりでやれ！命中率が格段に上がるぞ！」

彼は後にこの台詞を自ら撤回する。南沙の軍人の一部に日本人が存在していたことを、彼は忘れていたのである。

●忍者　　午後6時25分（現地時間）

「大分、叩かれとるのぉ」

二水戦は敵の戦艦部隊と対峙するため、完全な隠密航行をとっていた。

彼らは、戦艦部隊の補助に回っている敵水雷戦隊と、あわよくば戦艦を叩こうとしていた。

「敵も同様です。むしろ、敵の方がダメージが大きいように見えますが」

「うむ。それに、敵はこの距離になるまで我々をほとんど探知しておらん」

田中は満足そうに言った。

「天祐だ」

田中は会心の笑みを浮かべながら頷いた。

「『辻斬り』をやるぞ。魚雷装填、終わってるな」

「はい！」

「よし。右舷急転雷撃戦始め！全軍突撃せよ！」

水雷長の岡本大尉は、暗視望遠鏡から解析されたモニターと、コンピューターが割り出した敵艦の状況を元に敵艦に狙いをつけていた。防空戦隊はまだ攻撃していない。発砲炎で位置を明らかにするのを避けるためだ。砲雷撃戦は旗艦の発射が最初だから、二水戦の戦闘は岡本の指示によって始まることとなる。

敵の位置は悪くない。しかも、砲戦の騒音でソナーはグチャグチャ。むしろ絶好の位置とタイミングというべきだった。

敵はほぼ雪風と同方向に進むつもりのようだ。

（やれるな）

岡本は低く笑うと、コンピューターが割り出した横腹をみせつつある敵艦の未来位置を発射管操作装置に入力させた。

「右魚雷戦。同航」

「目標、敵戦艦部隊」

「方位角右三五度。敵速二七ノット、距離八千。深度十メートル。第一雷速」

彼の指示に基づいて雪風に装備された魚雷発射管が生き物のように旋回した。

操作は的確だった。雷撃準備はほんの十秒たらずの間に終了した。

「発射準備よし！」

岡本は独特の抑揚をつけた調子で艦長に報告。艦長は間髪いれずに

「発射始め！取り舵いっぱい！」

と命じた。同時に、船体の傾斜を感じた岡本が発射ボタンを押した。

「発射！」

リニアの作動音が連続して発生した。特殊炸薬五百キロの怪物は、リニアカタパルトによって数十メートル飛ばされると、スクリューを回転させながら漆黒の海面に向けて踊り込んだ。

モニターの一部が魚雷到達までの時刻を告げる。

「次発装填急げ！」

ランチャーは次の発射に備えて旋回を開始しつつあった。

後続の艦も次々と魚雷を発射した。その数五隻合計で三八本。後方にまで神経のいかないＩＢＣにとっては十分な脅威だった。

「左舷に駆逐艦発見！」

それは二水戦が魚雷を投下開始直前という時のことだった。

「敵艦位置確認いそげ！」

「敵戦隊、急旋回、進路変更しました！」

「サーチは出来てるんだろうな！」

彼は魚雷発射が実施されたとは考えもしなかった。彼らの戦術は、

平行雷撃戦闘が中心なのだ。南沙側の『カマイタチ戦法』は彼らのテキストには載っていなかった。

「現在入力中！ソナー使用不能！」

「ライオンが発砲！」

そしてほぼ同時に別の見張りからも報告が届く。

「敵も発砲しました！」

それは恐るべき流星雨だった。文字通り雨あられと砲弾がこちらへ向けて飛んでくる。

数秒後、閃光が右舷に発した。脱落しかけていたライオンの方だ。全艦が炎で出来ているかのようにライオンは燃え上がっていた。

（炎が鬣のようじゃわい）

ライオンには、天城と赤城の両艦から実に３００発の１２７ミリ砲弾がたたき込まれた。

彼女の甲板は瞬時に地獄絵図の真っ只中と化した。

連続した爆発が艦の至る所で発生し、灼熱した弾片がはね回る。艦橋も煙突も穴だらけとなっていたが、だが、戦艦たるライオンを仕留めるには役不足だった。

戦艦はしぶとい生き物なのだ。

「敵先頭は駆逐艦。その後方に駆逐艦もしくはフリゲイト四乃至五、巡洋艦二。急速に会頭しつつあり」

司令塔に入っていなかったら、彼等も命はなかったろう。

「先頭艦をやれ！旗艦だ！ブチ殺してやれ！」

ライオン艦長のクラウンは、殺気立った声で叫んだ。

「直ちに発射しますか？」

「無論だ！敵は少ないほうがいい。妨害を排除せねば……」

「大分、分が悪いな」

「はい」

「どうしたものか……」

綾崎は時計を見た。午後六時二十五分。
「二水戦がどこまでやれるかだな」
双方激しい砲撃を加えているが、ＩＢＣの砲撃は執拗を極めた。
レーダーが効かないものの、彼らの腕がモノを言ったためだ。
見張りが叫ぶ。
「敵、急速回頭中！左舷後方へむけ射撃開始！」
「見つかったな」綾崎は呟いた。
「親分さん。頼むよ。ここが正ね……」
彼がそこまで言った時、外が突然明るくなった。暗闇に慣れた眼に強烈な痛みが走る。
「何事だ！」
「吊光弾です！」
上空に双眼鏡を向けた士官が悲鳴となった報告した。
「敵、吊光弾発射！向こうからはこちらが丸見えに違いありません！」
「こんなことってあるかよ」
「照明弾、本艦付近を照射中！」
綾崎は、突然空中に現れた光により照らし出された周囲を見て愕然とした。
何しろ、空中に舞っている吊光弾はおそよ三発。
うち一発が大和の頭上で光っている。
「なんてことだ」
「二水戦、ダンス開始！」
「よし、とにかく弾に当たるなと伝えとけ」
「まずいですな」
「まずすぎる！」
彼は左手の拳を握り、司令席のひじ掛けを強くたたいた。
喉の奥から、罵りに近いものが漏れる。だが、同時に右手は制帽の鍔を掴み、それをまっすぐに被り直していた。彼もなかなかに複雑な人間だった。

「楽しくなってきたな……」
綾崎は冷笑を浮かべると、ＮＡＴＵに吊光弾の破壊を命じた。
ＮＡＴＵは３Ｄ探索システムを作動させ、すぐに目標を発見してデーターをゴール・キーパーに送った。
ＶｏｏｏｏｏＭ！！
ゴールキーパーが２５ミリ機関砲弾を吊光弾に叩きつけたのは、綾崎の指示から5秒後の事である。
「敵もやりますな。セオリーをきっちり守っている」
「うちもやりたいんだけどなぁ」
「なんでやらないんですか？」
「冴子達が嫌がるんだよ」顎に手をやりながら綾崎は言った。
「そんなものに頼らなくても十分だ。とか、スターライトシステムを照準に組み込んでる関係上、あまり強烈な光ってやつが厄介だからとかなんとか」
「はぁ。なるほど」
「今頃大変だぞ。砲術の連中も」
「そして、我々もですな」

吊光弾に照らし出された大和は、ほとんど袋叩きの状態だった。
今まで米軍を狙っていた戦艦達までが、一斉に大和目がけて砲火を開いてきた。
綾崎達が、敵ですら驚嘆したほどの必死の回避運動を展開したにもかかわらず、このお陰で大和は少なからぬ損害を被っていた。
「第一砲塔に命中弾1あるも損害なし！」
「航空甲板に命中１！格納庫炎上中！」
「航空格納庫に注水急げ！燃料タンクが誘爆するぞ！」
バイタルパート内部への損害は皆無であったが、それ以外の場所は徹底的に破壊されつつあった。炎と爆風の中で、彼らは勇敢であるべき者に相応しい義務を果たそうとしていた。

「くっそーっ！」
コンマ数秒で視覚を護られた冴子だったが、目の前がブラックアウトしていた。
あと少しでロック・オンできた敵はどこにも見えない。
『　光量調節中　』
の表示だけしか今は見えない。あともう少しだったというのに、こんなことってあるのか？あっていいのか？
「さっさとしてよ！」冴子は苛立たしそうに言った。
「ここで何もできなくちゃ、意味がないのよ！」

爆発音の後の激震が乗組員達を揺るがせた。
「袋叩きじゃねぇか」
「敵に嫌われてるんですかねぇ」
綾崎も山本は激震と轟音の中で必死の嫌みを言い合っていた。
指示は出し尽くした。後は当たらないことを祈る程度しか何も出来なかった。
「お前、何かしたんじゃないのか？」
「提督こそ」
「俺が何したって？」
「敵の女横取りしたとか」
「恵に横恋慕している奴いるんじゃないのか？」
「真名さんじゃないんですか？」
「エストかもしれんなぁ」
「ああ。成る程」
ふと、結構気になる娘の顔が山本の脳裏に浮かんだ。
「恵の奴、どこへいったやら」
「まだ見つかっていないのか」
「はい」
平恵（たいら・めぐみ）は、世界でもここくらいしか存在しないだろう駆鼠隊『キラーマウス』の隊長。猫を率いて各施設・艦船の鼠退治を任務に活躍

している、若干１２歳で学園入学を果たした才媛。現在１４歳で山本にお熱。これにより四角四面の性格の現在２７歳の山本は、『通常戦闘に限定すれば』評価が高くとも、最後には『あれでロリコンじゃなきゃあなあ』と皮肉な陰口を叩かれている。

だが、肝心の彼女は現在、大和艦内で行方不明とされている。このことに関しては、三船真名及びエスト・カストナーと共にそれぞれ後述する。

「二水戦、魚雷到達まであと１０秒！」

そんな冗談を咎めるように、魚雷の到達時刻を調べていたオペレーターが報告してきた。

綾崎はこちらに向けて砲撃を続ける敵艦隊の姿をツァイスに捕えた。

「このまま行けばあの南沙人をやれるぞ！！」

炎上する大和を会心の笑みを浮かべながら見ていたバルバロッサ艦長のクメッツ艦長は子供のような無邪気な声で言った。

（あの厄介者がいなくなれば、こっちの勝ちだ）

彼は会心の笑みを浮かべつつ、なにかジョークの一つでも言おうとした。

二水戦の放った魚雷が命中したのはその時だった。

フリードリヒの背後から大和とフリードリヒの間に割り込んで突撃しようとしていた第３水雷戦隊の左舷において、それぞれの艦に巨大な水柱が立ち上がった。

「！！」

強い衝撃と共にクラウンは床へ打ち倒された。鼓膜が破れそうな轟音が発生し、デッキに大量の海水が降りそそいできた。

（魚雷だ）

床に転がったまま、クラウンは直感的に事態を悟った。すぐに立ち上がろうとした。ライオンは傾斜していた。雷撃で舷側に穴が開

いたのだ。

（いかん）彼はようやくの思いで立ち上がると叫んだ。

「機関室！速力を下げろ！応急班、ダメコン急げ！総員ー」

そこまで言いかけた時、船体に再び強烈な震動が走り、艦のほぼ中央部に超特大の水柱が立ちのぼった。さっき水柱が立ちのぼったあたりだった。

ようやくの思いで立ち上がったクラウンは再びはね跳ばされ、意識を失った。

意識を失う寸前、彼はどこか遠くから悲鳴が聞こえたように思った。それは悲鳴ではなく、流入してくる海水の圧力に耐えられなくなった竜骨のあげた破壊音だった。

「命中！命中！！」

二水戦旗艦雪風の艦橋に見張りの報告が飛び込んできた。

報告というより歓声に近かったが、田中は敵艦隊に瞬時にして発生した損害に眼を丸くした。アナクロな兵器だが、これほどの損害を与えられるものとは……。

彼の驚きは無理もないものだった。

今まで大和目がけて悠々と砲撃を放っていた艦隊はひどい有様だった（この時点では田中は敵主力艦隊に魚雷を命中させたと誤解していた）

九四式電気魚雷は、弾頭に５００キロのハイパーＢコンポ改とジェル状になった超高効率燃焼科学薬品を詰め込み、爆発と同時にメタル・ジェットのみならず、消火困難な火災を敵艦に発生させる。その貫通力は、ＶＨ装甲で実に１０００ミリを越えるという。

これをモロにぶつけられた敵は、いうまでもなく大損害を被っていた。

一番近くにいたライオンには二本が命中した。つまり、水線下にＴＮＴ換算で2トンの爆弾（従来の魚雷と炸薬が違う）がめり込み、艦内で爆発したということだった。しかも、時間差的に命中したそ

れは、一発がもう一発が開けた破孔に飛び込む形で爆発。熱エネルギーは、あとに続く海水とともにキールをへシ折った。キールの折れた船体はくの字に折れ曲がり、大きく傾斜していた。

後続艦クインシーはもっと酷い損害をうけた。一気に五本の魚雷がほぼ同時に舷側で炸裂したのだ。魚雷命中の瞬間、沸き上がった水柱はその姿を覆い隠し、水柱が消えた時、この艦は左舷側に横転し、海中に姿をけしつつあった。

三番艦ヴィンセンスはなんとか魚雷攻撃を回避した。だが、高速を発揮していたため、沈み逝くクインシーを避け切れなかった。船体こそ無事だったが、大切な舵がやられた。舵が根元から折れ、操艦は不可能となった。

四番艦サンティエゴは2発が命中し、破滅的な火災を艦内に引き起こした。爆沈したのは魚雷命中から十秒後のことである。

哀れを極めたのは、後続の駆逐戦隊だった。

長命を第一に建造されたＩＢＣの駆逐艦は、比較的頑丈に作られていたが、それでももたなかった。調停深度を戦艦用に合わせていたため、大半がその船腹の真下を通過した途端に、信管が作動してそこで爆発されたのだからたまったものではない。舵やスクリューをへシおられるもの。そのまま海上に跳ねあげられて横転するもの。船腹に穴をあけられて沈むものが続出。

彼らはまさに主力部隊の楯となってしまったのだ。

「３水戦、被害甚大！」

夜戦艦橋に悲鳴となった見張りと通信兵の報告が入る。

「駆逐艦ヘルム、サヨナラを連打しています！」

「駆逐艦バークレー総員退艦命令発令されました！」

「サンディエゴ通信途絶！」

ＩＢＣは大混乱に陥った。敵水雷戦隊発見の報告からわずかのことだった。

突撃準備を整え、今まさに突撃せんとしていた水雷戦隊が、ろく

に反撃の機会も得られないままに壊滅してしまったのだ。本来なら、ここで彼らは撤退するべきだった。だが、それは不可能だった。味方はいまだ激しい応戦を繰り広げてくる敵に背を見せることになる。

「生き残った艦に溺者救助を命じろ」

ジャネットは短く言うと、スコット艦長に尋ねた。

「さて。これで戦艦同士の本格的戦闘が再開されたわけだな？」

「はい」の声は心底楽しそうだった。

「やるかね」

「あっ、あの、司令長官閣下」

彼等の背後で、おずおずとした若い声が聞こえた。一人の士官学校出たての若者だった。

「何だね？お若いの」

「はっ、出過ぎたマネとは思いますが、司令塔にお移りになられた方がよろしいかと思いまして」

「大丈夫だよ」

「しかし」

「たとえ全身を頑丈な鎧で護っていてもね」

ジャネットは見習士官を制止しようとする士官を止めて言った。

「当たるときは当たるのさ。わかったね。お若いの」

見習士官が何か言おうとした時、雷を束にしたような爆発音が響いた。彼等の真上だった。窓にはまった防弾ガラスが割れて飛び散る。轟音の後に悲鳴が聞こえた。艦橋に煙が立ちこめる。

スコットは咳き込みながら報告を聞いた。

「昼戦艦橋付近被弾！詳細不明！」

彼は主砲射撃指揮所につながる送受話器を握って訊ねた。

「艦長だ！そちらの被害は！？」

『衝撃で負傷した者が何名か。問題ありません。砲撃続行します』

「よろしい」彼はうれしそうに言って送受話器を元に戻した。

「提督！」誰かの悲鳴がその時聞こえた。

その時になって初めて彼は、艦橋に血の臭いが漂っていることに

気づいた。
天井をつき破って飛び込んできた破片によって何人かが床に転がっていた。
先程の見習士官も何か得体の知れない肉の固まりになっていた。
そこで彼はもっと信じられない。否、信じたくない光景を眼にした。
司令シートにすわっていた彼の上官に必死の形相で衛生兵がとりついている。
「閣下……」彼は呆然としながら上官の元へと歩いた。
ジャネットの腹部には、するどく尖った破片がつき刺さっていた。
「……大丈夫だ。この戦闘が終わる位までは生きられる」
そういって笑ったジャネットは、まさに海の男であった。
「当たるときは、当たるのさ……」

●　イギリスポーツマス海軍基地高級士官バー
「うわっ！」
爆音がスピーカー一杯に響いた。
ＩＢＣ戦艦部隊の背後で閃光に照らされた水柱が乱立する。
「やったか！？」
燃え盛り、そして爆発する軍艦、その中で失われていくあまたの命ｌ。
ＳＯＮＹ製の２９インチＴＶが映し出す光景は、まさに地獄絵図だった。戦争を知らない世代の軍人達は、その光景にしばし言葉を失った。
『おい！どうなってんだ！？』
燃え盛る巡洋艦が写し出された。
『別動隊だ！ナンサが雷撃を食らわせたのさ！』
『戦果は？』
『わからん！だが、敵は相当に戦力ダウンしたことだけは確かだ！』

『視聴者の皆様！こちらＣＮＮ特派員のボブ・シャーロットです！ただ今、アメリカ海軍戦艦「アイオワ」から世界の人々にこの地獄絵図をお届けしております！』

「面白くないな……」

アイリッシュウイスキーをストレートで飲んでいた将校の一人が呟いた。

「何がです？」

『ほんの少し前、南沙軍の水雷戦隊が敵に魚雷攻撃を慣行！これに見事成功しました！』その声は流れが彼等に向いたことから来る歓喜を含んでいた。

「滅多にないことじゃないですか」

『ＩＢＣの被害は、ご覧いただければわかるでしょう、甚大なものです！』

カメラは最大望遠で燃え盛る駆逐艦達を撮り続けていた。

海上に新たな閃光が走る。

また一隻、駆逐艦が爆発した。

「滅多にない。だからさ」

『敵も味方も距離を狭めつつありますが、ＩＢＣの有利はどうやら崩れ始めたようです！米軍は反撃に撃って出ております！』

「気にくわん」

「ネルソン提督、何がそんなに……」

「考えてみろ」

その士官は、ウイスキーを一気に飲み干すと吐き出すように言った。

「俺達は一体なんだ？」

「英国海軍軍人です」他に答えようがなかった。

「そうだ！７つの海を制した栄光ある大英帝国海軍の末裔だ！」

彼は相手をかみ殺さんばかりの勢いで叫んだ。

「それがどうだ！？こともあろうに船乗りなら一度は憧れて当然の艦隊決戦に一体、俺達の誰が参加している！？この船乗りの晴れ

舞台に！！くそっ！英国海軍軍人としてのみならず、一介の船乗りとして、これほど面白くないことが他にあるか！」彼はそう言って乱暴にグラスを仰いだ。

「しっ、しかし、確か、提督の御子息が……」

「ミナセはサブマリナーだ」

彼はグラスにウイスキーを注ぎながら言った。語気の荒さと言い、本質的な剛胆さを感じさせる手つきだった。

「いくらあいつが天才でも、今度ばかりは出番はあるまい」

●東京　新宿

一人の女性が、街頭テレビをぼんやりとみていた。

今をときめく人気歌手小野寺綾美だった。目の前では舞台の準備が、通行人を無視するがの如く進んでいる。彼女は私服の警備員達に護られながら、花壇の縁のブロックに腰を下ろしていた。

決して売れていないわけではなかった。一昨年、そして去年の歌謡大賞受賞に代表されるように、世界的にも評価は高い歌手だった。今まで売り出したＣＤはアルバムで５枚。全て１００万枚を割っていない。当然評価は高い。そのためか、他の歌手の作曲まで幅広く手がけていた。

そうだからとは言わないが、彼女は仕事は選ぶ方だった。

今回のように、番組へ『偶然にも』飛び入り参加するというそのわざとらしさがいやだったので、今回の仕事もする気になれなかったのだ。プロデューサーが彼女のかつての恩人でなかったならば、絶対に引き受けはしなかったろう。

何か起きて番組が変更になってれればいいと思う。

大体、既に新聞のテレビ欄に『小野寺綾美、街頭でのメッセージ』なんて書いてあるではないか。何が偶然にもだ。そんなことをする暇があるなら、私にだってやらなくちゃならないことがあるんだ。

新曲がまだ書き切れていない。どうもうまくいかないあれを何とかしたいという焦りの気持ちもあった。だから、今回の出演である

程度のカームダウンをするつもりだったのだ。それすらも上手くいかない。

彼女は自分がスランプに陥っていることを認めていた。

見上げたテレビにはくそ真面目な顔をした評論家が、キャスターの横に座って、「事故は起こす奴が悪い」とか偉そうなことを言っていた。綾美はその評論家が飲酒運転の末に追突事故を引き起こし、平謝りに謝って示談に持ち込んだことを、ふとしたことから知っていた。

「非文化的よねぇ」

相変わらずの低俗でインテリジェンスのかけらも感じさせないつまらない番組ばかりが映しだされるのは、見ているだけで苦痛だった。

「小野寺さん」

振り向くと、マネージャーがマクドナルドの包みを持ってやってきた。彼も仕事の進み具合にには相当に焦りを感じているらしい。もっとも、自分のせいだから、文句を言う筋合いでもないが。

「ご注文のシェイクと照り焼きチキンバーガー、買ってきました」

「ご苦労様」

形だけの笑みを浮かべて、生真面目一辺倒のマネージャーから包みを受け取る。

テレビでは交通事故関係の特番をやっていた。高速道路での乗用車数台の玉突き事故。黒こげになった車やおびただしい血がべったりと張り付いたシート、あろうことか『スクープ』というだけあって、血塗れの人間の姿まで映しだしていた。

日頃、人権がどうのこうの言う奴がこんなものを流してよいのかというような、酷いシーンだった。

「酷いものですねぇ」マネージャーは思わず顔を背けた。

「視聴率が稼げれば、棺桶から死体を引きずり出すことだって平気で出来るのよ?マスコミって」

画面から目を離さずに、包みからハンバーガーを取り出して口を

付ける。
ギョッという顔で、マネージャーは綾美の行動を見た。テレビでは血塗れの人間が道路でのたうち回って苦しんでいた。通行人の間からも、うめき声が漏れていた。そんな中、彼女は画面から目を離さずにハンバーガーを口に運んでいたのだ。
「あっ、綾美さん？」
「なに？」
「あっ、あんなの見ながら、よっ、よく食べられますね」
物静かで清楚な外見とは全く違った、剛胆な、悪く言えば無神経な行動だった。
それでも綾美はハンバーガーを食べ続けた。
「そう？」綾美は不思議そうな顔をして、残りを口に放り込んだ。
「そうですよ」
「これは売り物じゃないもの。あの程度、子供の遊びよ」
「はっ？」
「ごめんなさい。少ししゃべりすぎたわ」
忘れろという意味である。マネージャーは正確にその意を理解した。
「いっ、いえ。あっ、出演、あと２０分です」
「わかった。大丈夫」
シェイクに手を伸ばした時、パッパッという音がして、ニュース速報のテロップが流れた。
「？」
シェイクのストローに口をつけかけた綾美は、ふと動きを止めて画面を見た。
『マーカス島沖において国連軍とＩＢＣ軍の主力部隊同士が交戦中。マーカス島守備軍は全滅』
「……やだ」
画面が突然切り替わって、ニュースキャスターの安藤優子が映しだされた。

御丁寧にニュース速報という飾りのついたデスクに座っている。
『突然ですがここで番組を変わりまして臨時ニュースをお伝えします。ＣＮＮによると、国連軍とＩＢＣ軍の主力艦隊同士がマーカス島沖において接触、交戦状態に突入したとのことです。この状況は現在、ＣＮＮによって放映されております。これからは、その映像をお送りすることとなります。なお、現在放映しておりました特別番組『衝撃、これが交通戦争の実状だ』は後ほど、日を改めまして改めて放映させていただきます』
なんだなんだと、通行人も足を止めて画面に見入っていた。
綾美も同じだった。
「蓬莱が出てるのよね、確か」
「えっ？ええ。綾美さんの母校でしたよね。でも、あそこはＡ．Ｋ．Ｄに」
「まさかね、まさか、考え過ぎよ……」それは、誰に言うでもなく、まず自分に言い聞かせている口調だった。
『えーっ。お判りいただけますでしょうか？マーカス島はここ、日本の領土です。現在、この辺で戦争が行われているわけです。なお、外務省は先ほど、国連安全保障理事会の決定に従い、領土の使用許可を秘密裏に出さざるを得なかったとコメントしており、今回の日本の領海内における戦闘はやむを得ないものと黙認しております。では、ＣＮＮの映像をどうぞ』

第五部　決戦！　1

先程、敵戦艦を喰いそこなった代償として、敵水雷戦隊に大損害を与えた二水戦は、今度という今度こそ敵戦艦を喰おうとして、再度、ジャネット達へと近づいていた。

「今度はそううまくはいかないわね」

「惜しいことをしました」

「そう言うな」

「二水戦の連中、激怒してましたから」

撃沈できた戦艦が一隻も存在しなかったことが判明した後の二水戦の交信内容は、悪口雑言の限りを尽くしていた。

「最大の見せ場でコけたんだもの。仕方ないでしょ？」

暗闇の中で女の声がはっきりと聞こえた。天城艦長兼防空戦隊司令金城一恵中佐だ。

水上艦隊前線指揮官の中でも、司令部幕僚入りが囁かれていることからもわかるように、能力の面では定評があった。

「田中司令に通信だ。防空戦隊はこれより予定通り独立部隊として、貴官等の突撃の支援を実施する。以上だ」

「了解」

「艦長、赤城と砲撃、同調しました」

「よし」

「二水戦の田中司令から通信です」

「読め」

「はっ。幸運ヲ祈ル。以上です」

「期待されているわけか……レーダーはともかくも、見張りには手を抜いていないだろうな」

「大丈夫です」

天城の副長は、返事の代わりに艦橋の横の張り出しで大型望遠鏡を構えている見張りを指さした。シルエットだけしか見えないが、

それでも彼が如何に任務に精励しているかは、いわれずとも解った。
彼女が満足そうに頷いて何か言おうとした時、その艦橋見張りから報告が入った。
「見張りより艦長。敵戦隊、敵戦隊発見！距離１万２千、左舷１１時方向、右舷２時方向へ向け航行中！駆逐艦クラス３隻！」
「艦長！？」
２時方向は大和がいる。誰もが敵の意図に気付いた。
「大和を狙う気か。連動射撃解除、赤城にも独立射撃でやらせろ。冴子ばかりに活躍してもらう理由はないものね」
「了解」
ビーッビーッビーッ
３５ノットで航行する天城の各所で射撃開始の警告音が響く。
「全主砲、射撃指揮所により統一指揮！各部回路接続よろし、各砲塔連動問題なし。各砲徹甲弾装填完了。第一射準備良し！！」
「距離一万八千、速力二二ノット乃至二三ノット、後続四隻！！」
一恵は、頷き、そして左手を大きく振って命じた。
「出会い頭だ！一撃でカタをつける！！砲術長、やれるか！？」
「たった今、すぐにでも」
「よし、撃ち方始め！！」
片舷に向けることが出来ることの可能な９門が射撃データーに従って砲の仰角をとっていた。
一恵の命令を受けたＣＩＣ横の射撃指揮所では、砲術長が照準望遠鏡のゴム製アイピースに顔を押しつけていた。集光度が高いため非常に良く見えるその視界には、高速で突き進んでいる敵艦の姿がはっきりと映しだされていた。彼の照準に問題はないということだ。
砲術長は、全砲塔を同時に発砲させるトリガーを掴む指に力を込めた。同時に、回路に電流が流れ、九基の砲塔は１秒間隔で高速徹甲弾を吐き出し始めた。
敵戦隊の先頭艦、クリープランドの見張りが天城の存在に気付いたのは、まさにその瞬間だった。

「真方位０－１－５、敵艦！！」

見張りはマイクにめがけて叫んだ。この哀れな艦の艦長は慌てて回頭し、主砲を目標へと旋回させようとしたが、彼が何かをなそうとした時は、全てが遅すぎた。

毎秒１キロ以上を進む高初速１２７ミリ砲弾は、クリーブランドめがけて雨霰と襲いかかってきた。この艦は駆逐艦としては十分以上の性能を持っていたが、１２７ミリ砲弾を雨霰とたたき込まれることなぞ想定もしていなかった。

一秒ごとに一八発が襲いかかってくる砲弾は、乗組員達、こと彼らを指揮すべき立場にある人々を、初弾で無意味な肉塊に変えてしまった。天城の射撃は十五秒後に一度停止したが、それまでにクリーブランドの主立った構造物は、二百発以上の命中弾を浴び、徹クズの固まりと変わっていた。統一射撃すべき砲もまともな射撃装置が全て破壊された後では何もできなかった。

天城は損害を確かめる間もなく、後続艦に照準を合わせた。

天城と赤城が完全に射撃を停止したのは、攻撃開始命令から一分後のことである。

この遭遇戦は南沙側の圧勝であった。

天城が戦隊を本来取るべきコースに戻した時、第四水雷戦隊所属艦は全艦が炎上していた。これは、ロクな救援も出せずにＩＢＣ第四水雷戦隊が全滅したことを意味する。

この意味は大きかった。ＩＢＣ側がさらなる敵艦の位置、先程彼らを徹底的に痛めつけた憎い存在のさらなる行動が全く把握できずにいることを意味するのだ。

事態はこれで大分変わった。

●ミニッツ

「転舵！大和から離れろ！ハウとザイドリッツに、大至急、旗艦の援護にまわるように指示を出せ！」

スコットの命令はただちに実行され、大和の相手を行うこととな

ったハウの艦長は、せめて一矢報いようと、無謀だが、だが果敢に大和への接近を試みた。

彼らは、まさに勇敢な海の男達だった。

彼女の乗組員達は、「俺の部下に欲しい」と、綾崎がシートから身を乗り出したほど、操艦も砲撃も絶妙な技量の持ち主達だった。

冴子は命中弾を得るために、香取は砲弾を回避するために苦心惨憺するハメになるほどだった。

「やりますな」

「ああ。大したものだ」

山本の眼には、肘掛けに肘をおき、顎を手に乗せ、まるでくつろいでいるかのようだった綾崎は、そのまま黙ったように見えた。

彼女が2千丁度で回頭。横腹を見せたことが、少なくとも彼女にとっては命取りとなった。

「そこっ！」

それは、冴子が望んでいた瞬間だったのだ。彼女は叫び様にトリガーを引いた。

一方、必殺の火焔に照らし出された司令塔で轟音を聞いた時、山本は

「……失せろ。蚊トンボ」

という、その残虐ともとれる、背筋が寒くなるような綾崎の呟きを聞き逃さなかった。

彼はだまっていた。しかし、その口には冷酷な笑みを浮かべていた。

ハウは、必死の応戦を試みて、何発かの命中弾を得たが、すべて大和の装甲に弾かれた。

そして報復の時を迎えた。

ハウがどうやって沈んだか、今もってわかっていない。

あえて推測を行うなら、3発が水中弾となって水線下の装甲を貫通。A砲塔の弾火薬庫に飛び込んだ。そして、2発がガスタービン

付近に飛び込み、それを誘爆させた。１発が絶妙のタイミングでＣ砲塔の側面をつき抜け、そこで爆発した。

艦橋にも数発が命中（この時、横を航行していたザイドリッツの見張りが、艦橋が吹き飛ばされるのを目撃している）

巨大な爆発が周囲を真っ白にする。３万８千トンの戦艦は船腹をみせる形で横転。最後の爆発をみせるとそのまま沈んでいった。

生存者はいなかった。

●ザイドリッツ　午後６時３６分

ハウの撃沈の閃光は、ザイドリッツ艦橋にいた者達の言葉を奪った。

まさか――ハウが水柱の中に消えて逝く光景を目撃した彼らは、自分たちが何か妙な夢でも見ているのではないかと感じた。主砲発射からわずか２０秒足らずで戦艦一隻が消滅してしまうなんて。奴等がやられたら、次は――

「ハッ、ハウがやられました！」

茫然とした彼らを現実に引き戻したのは、彼らよりほんの少しだけ現実的な、任務にすがり付くことで正気を確保しようとした見張りの報告だった。

クメッツは即座に応戦を命じた。明確なダメージが与えられなくても、砲撃の命中率を下げることができる。

（大丈夫だ）

彼はザイドリッツの主砲の放つ轟音を聞きながら確信した。

こっちはドイツ戦艦のコンポーネンツを徹底的に応用しているから耐久性能がある。英国戦艦をモデルとしたハウほど脆くはない。

大丈夫。

大和はハウを仕留めると、間髪をいれずにザイドリッツへと狙い

を定めていた。
「やれます！」
神は興奮した口調で言った。
「勝利は目前です！」
「まだだ！」綾崎は苛立たしそうに言った。
「あんな小物をいくらつぶしたところで意味はないぞ！」
「はっ！」
冷静になれ。といいたいのだ。まだ戦局はどうとでもかわるのだ。勝ちにおごればどうなるかわかったものではなかった。
『第２４斉射、目標、敵４番艦、弾種ＨＥＡＴ、発射！』

大和が必殺の火炎を吐き出した時、フリードリヒとザイドリッツ双方からの砲弾、計１４発が相次いで大和の周辺に着弾し、内３発が大和を直撃した。
一発が第３砲塔の天蓋に命中して弾かれた。二発がようやく消火の終了したばかりの後部飛行甲板に命中、航空関連の構造物を完全に破壊した後、甲板の下に張られた傾斜式舷側装甲版に弾かれた。
甲板が数メートルにわたってめくれ上がった。破片が飛ぶ。
「被害報告！」綾崎はその衝撃に耐えつつ命じた。
『右舷第４３兵員室損壊。人的損害なし。航空格納庫全滅、ヴァイタル・パート内部に損害なし』
山本は小さくため息をついた。背筋に冷たい汗が流れていることに気付く。
横から綾崎のため息が聞こえた。
「おお、なべてこの世は美しき場所なればこそ――」
彼は思った。そりゃぁね？敵にキングジョージ５世級がいるからって、何もワーズ・ワースを持ち出すことはないでしょ？提督。

遂に夕闇が世界を包み込んだ。
戦闘は最終局面に向かいつつあった。３０ノット以上の速度で突

進し、主砲を撃ち合う戦艦同士の砲戦。それは初弾発射から３０分で絶頂に達していた。

主砲威力の増大と発射速度の向上。そして両者の高速発揮が戦闘のテンポを恐るべき早さに高めていた。

しかし、戦闘は、綾崎達がどう頑張った所で、圧倒的にＩＢＣ優位の中で展開していた（初めの頭数からいって違うのだから、無理もないことだが……）

さらに最悪なことに、この時、ほとんどの者がお互いに課された任務を忘れていた。ここで双方は悪戯に戦力を減少させるべきではなかったのだ。

だが、人の心理はそれをすべて忘れさせていた。

目先の敵を排除したいという欲望と、生き残るために敵を叩いておきたいという焦燥感と恐怖感。その人の心理こそが、ここまで戦闘が激化すればなんらかのケリがつくまで、そしてそれが一方の撃破でなければ、収集がつかない所まで追いやっていたのである。

それが、双方の悲劇を増大させる結果となっていた。

この時点で、すでにＩＢＣのネバーランド作戦は成功し、そして国連軍のトライデントの雀捕り作戦は失敗していたのだ。

無論、ジャネットもそれがわかっていた。だが、ＩＢＣ側、つまり、物資を搭載した輸送船団を無事にファーランドまで脱出させるための囮となった第１艦隊以下の彼等は、深く戦場に入り込みすぎていた。撤退する頃合いは、永遠にやってこないのではないかと思わせるほど、全く兆候を見せてはくれなかった。

「そんな馬鹿な！」

クメッツは茫然とした。彼らはザイドリッツが４千、フリードリヒが１万から砲弾を放った。大和の周囲に水柱が立ち上る。命中は確実だった。

だが効果はないに等しい。深海から浮かび上がってきたような漆黒のその戦艦は、ほとんど水平弾道で放たれた１６インチと２１イ

ンチ砲弾をすべて弾き返した。
彼は全身の血の気が引けたのを感じた。
「化け物め！まだ平気なのか！」
「敵艦発砲！来ます！！」
大和の周囲が閃光に照らされ、この優美かつ凶悪な戦艦の姿を闇から浮き立たせた。雷鳴を数万倍にしたような轟が発生。九つの砲口から必殺の巨弾が吐き出された。
その光景は、クメッツの眼にはっきりと焼きつけられた。彼は閃光の中に浮かび上がった敵艦の姿を生涯忘れまいと思った。

この戦闘におけるザイドリッツの評価は、『奇跡』の一文字で片付けられることが多い。
それほど簡単にやられたからか？
否、沈まなかったからである。
大和の砲撃はザイドリッツに集中。そのすべてが命中した。
初弾は煙突を粉砕し、海上に吹き飛ばした。二弾、三弾は後檣付近に命中し、後部指揮機能を完全に破壊した。四弾、五弾は艦橋基部および昼戦艦橋に命中、昼戦艦橋より上を倒壊させ、爆発時の余波をもってザイドリッツ司令部の大半の者を殺傷した。
第六弾はC砲塔の前楯に命中、砲塔ごと海上へ吹き飛ばした。第七弾はD砲塔直前に命中し、弾き飛ぶと、そのままターレットを直撃、D砲塔を使用不能にした。
残り2発は艦尾舷側を直撃、艦内の備品をズタズタに引き裂いた。
しかし、これだけの破壊をもたらされても、ザイドリッツは沈まなかった。無論、戦艦としての彼女は、死んだも同じだった。
ダメコン対策が万全なドイツ戦艦の中でも強靱なサバイバビリティを誇るザイドリッツは、その強靱さ故に死に切れなかったのだ。

「うっ……く」
司令部の誰かが楯になり、戦死を免れたクメッツは、よろけなが

ら起き上がり、そして死々累々たる艦橋の様子に茫然とした。ほとんどの者が人間とは思えない何かに変化している。彼の他にも助かったものが5、6名いたが、司令部として機能するのはほぼ不可能だった。まだ生きている艦管理システムから次々と入ってくる被害報告から、自分の艦が虫の息であることが判った。

彼は生き残ったものの、周囲のあまりの状態に茫然としている水兵を叱咤してフリードリヒへ回線を繋がせ、そしてジャネットに戦線離脱を告げた。

（なんてことだ）

彼は吹き飛ばされた制帽を被り直そうとした。左の指先がどうもおかしい。彼はおそるおそる左手を見た。

中指と小指がなくなっていた。

●神業と加護　　午後6時　分

「敵艦沈黙！」

その報告を受けるまでもなく、綾崎が砲撃目標をフリードリヒに変えようとした、まさにその時ー

「ん？」

綾崎が不意に後ろを振り向いた。

「どうなさいましたか？」

「敵だ」綾崎は後ろを向いたままで言った。

「はっ？ええ。その通りです。第3戦隊を叩こうとしているのでしょう」

敵が後ろにいることを言っているのだろうと勝手に解釈し、綾崎が不意にそんな事を言い出したことに不審を感じながらも、山本はモニターを指して説明した。

彼はこの時さすがにシートには座っていなかった。彼は参謀である。座っていたら仕事が出来ない。

モニターは第3戦隊の横腹めがけて突撃する敵戦隊の姿を捉えて

いた。
「まずい！」
モニターに一瞥もくわえずに綾崎は叫んだ。
「冴子、第３砲塔連結解除！９時方向、錨頭２，発射角１５ミル、弾種九式、発射から１０秒後に信管作動調整、散布界は広げておけ！発射まで３０秒くれてやる！ＮＡＴＵ、対魚雷迎撃爆雷を７時から１１時の方向にばらまけ。距離３５０、１５秒後きっかりに発射しろ！爆雷着水次第、同海域距離３０００へ向け照明弾５発発射！急げ！！」
その顔は真っ青になっていた。
『なぜです？』冴子もＮＡＴＵも、その理由がわからなかった。
「生きていたら教えてやる！やれっ！」
『りっ、了解。早苗、第３砲塔、連結解除、弾種変更急げ！』
『爆雷、発射準備中』
「よし」綾崎はそういって、ほっとため息をつくと、呟いた。
「迂闊だった……」
「提督、どういうことです」
「決まってる」
主砲発射の爆音が轟いた。フリードリヒを狙ったものだ。
「敵は必ず姿を見せてくれるとは限らないだろう」
「はい」
「それより第３戦隊で一番我々よりなのは？」
「はっ、米第４５駆逐隊です」
「通信、駆逐隊の司令官に大和の方角に少し注意を向けろとだけ通信を出せ。平文で構わん」
「了解しました」
『爆雷散布準備完了、発射します』
大和の全武装を統括するＮＡＴＵは、きっかり１５秒後に爆雷の発射を開始すべく対処した。短い警告音の後、ポンという音と共に、爆雷が散布された。

「くそっ！だから夜戦は厄介なんだ」
綾崎は苛立たしそうに肘掛けを叩いた。
「敵も色々考えますな」
山本は彼の言葉の意味を理解していなかった。「何かある」位の認識でしかなかった。
「戦場では柔軟さは必須条件さ。無い奴は死ぬしかない。にしても」
綾崎はふと思いついて軽やかな声で言った。
「グライムズ」
「はい」グライムズが姿勢を正して一歩前へ出た。
「夜戦とよく似た戦闘とはどんなものがあるか」
「潜水艦戦闘です」
「双方の共通点を一つ述べろ」
「はい。敵が見えず、どこから敵がくるかわからない」
「その下で指揮官に求められる条件」
「常に自分の置かれている状況を把握し、適切な行動がとれる」
「よし。香取、取り舵２０度、第３砲塔発射と同時に」
グライムズは、こんな時でも自分の事を気にしてくれる綾崎の気持ちが嬉しかった。彼は心を込めて敬礼した。
「取り舵２０待機了解」
『第３砲塔砲術長より艦長、九式発射準備完了。指示通り調整完了。砲塔独立射撃です』
こちらは弾種の変更があったので、１０秒遅れの発射となってしまった。
「急げ」
『了解……てーっ！！』
爆音が轟く。
『艦橋見張りより艦長、フリードリヒ、発砲！』
「艦長、第４５駆逐隊司令からです」
「うん」

「ドウイウ意味カ一以上です」
『提督、爆雷着水します』
ババァァァン！！
フリードリヒとほぼ同航戦闘に入りつつあった大和の背後で、今までとは異質の爆発音がした。
「なんだ！？」
『艦橋見張りより艦長、９時から１０時の方向の海面において大規模な爆発発生』
「何が引っかかったんだって、まさか提督！？」

「何であんな海域へ？」
原田は、不思議そうな顔で双眼鏡を構えて爆雷の着水を見守っていた。
轟音がして第３砲塔が火を噴いた。
「主砲まで、しかも九式だと？」
あの爆雷は接触もしくは近接する物体がなければ、爆発せずに沈んでしまう。
しかも九式は滑走路破壊弾ではないか。何があるというのだ？
なぜ反対側に撃つ？
「爆雷、着水！」
部下の声に、原田は双眼鏡を構えなおした。
ババァァァン！！
「何！？」
着水したばかりの爆雷は、すぐに次々と爆発していった。
彼らの視界に、巨大な水のスクリーンが突然発生した。
「何が引っかかったんだ！？」
彼の部下達も騒然となる。
あの海域には第３戦隊しかいないはずだ。
「誤射か！？」
原田は息をのんだ。だとすれば大事である。

「魚雷だ！総員、海面に注目！雷跡に注意！流れ弾がくるかもしれん！」

「畜生！アメ公めトチ狂ったか！？」

「誰が撃ったんだよ！」

「知るかよ。撃った奴に聞けよ！！」

彼の部下は見えない敵からの攻撃に、あからさまの混乱を見せた。

大和にとっても魚雷攻撃はきわめて被害の大きい攻撃である。

米軍のマーク４６魚雷程度なら、外部装甲にクラックが入る程度で対魚雷防御は十分なされていた。だが、彼らは自分たちの艦隊の有する９４式魚雷の桁違いの破壊力を知っていた。その恐怖が先行しすぎていた。彼らは魚雷の発見に躍起になった。

その一方で、別な恐怖を感じている人物もいた。

まさか。原田は背筋が寒くなった。

綾崎提督はそこまでわかる人なのか？これでは天照陛下並ではないか。

（まさかな……。偶然だ）

戦女神の加護。そう。偶然さ。

そう考えて自分の中の疑問を否定しようと、原田は針路を変えたため傾いた床とうまくバランスをとりつつ、双眼鏡を構え直し、静まりつつある水のスクリーンの方を見た。

バッ！

タイミングとしてはよかった。先程の九式が、丁度信管を作動させて内部に詰め込まれている小型弾頭を広範囲にばらまいた所だった。

まるで花火のようだった。

「滑走路破壊弾なぞ……何がいるというんだ？」

ビーッビーッビーッ

「総員対閃光防御！！」原田は叫びつつ、視線を少しずらそうとした。

（偶然はそうは続かない。綾崎提督、ヤキが回ったかな？）

フフッと口がゆがんだ原田だったが……。
「なにっ!?」
パッ。と、スクリーンの向こう側で光が走った。
小規模な爆発が連続して発生しているのだということは、すぐにわかった。
そして、照明弾が光を放った。
その光景に、原田は思わず呟いてしまった。
「嘘だろ?」

『艦橋見張りより、9時方向にて爆発発生!』
「提督!!」
ギョッとした神が思わず叫んだ。
『照明弾光りました……敵戦隊、敵戦隊発見!!駆逐艦もしくはフリゲート艦発見!!数4隻!!敵艦に間違いありません!!本艦と反航!!2番、3番艦、炎上中!!』
「先頭艦を狙ったのだがぁ」
フッと笑うと、綾崎は通信兵に振り返っていった。
「第45駆逐隊司令官に通信だ。貸しにしておく、もっと背後に気をつけろ。平文でいい」
「りっ、了解」
『第3戦隊、発砲!!交戦状態に突入中です!!』
「フリードリヒからもくるぞ。準備いいか?」
「提督、さすがです!!」
山本、のみならず、神やグライムズ、そしてなんとNATUまでもが、感服というか感動した表情で綾崎に視線を送った。
綾崎は軽く手のひらを振ると、何でもないように言ってのけた。
「なに。一度やってみたかったのさ……ガキの頃からね」

とはいえ、やられたほうはたまらない。
必死の思いで危険を省みずに敵の勢力下に強行進入、敵の背後を

突き、魚雷発射、これでフリードリヒら第1戦隊の驚異が減る。勲章ものだ！さあ、後は敵のもう一つの敵の部隊に魚雷を投下したら戦局が変わる！この俺達が歴史を変えるんだ！と、戦隊内部が湧いていたら、敵は見透かしたように魚雷を迎撃してくれた。あまつさえ、逃げる頭にショット・ガンを喰らってしまったのだ。

このショット・ガンがただ者ではない。

九式弾。別名滑走路破壊弾ともいう。

モンロー効果による熱ジェット噴射により、滑走路の分厚いコンクリートをズタズタに切り裂くための小型弾頭が約１０００発詰まった砲弾が広い散布界も功を奏して、先頭艦2隻を完全に包み込む形で襲いかかってきたのだ。

分厚いアスファルトで出来上がった滑走路を食い破るだけの破壊力に、駆逐艦やフリゲイトの薄い装甲が耐えることは出来なかった。

艦内、こと艦上部構造物では、貫通した9式弾が至る所でジェット噴射を浴びせかけ、艦内の設備ごと、人員を焼き払っていった。

歓喜から絶望まで、これほど短いことがあろうか。

否、人によっては、己に何が起きたか、わからない者さえいたろう。

ズガァァァン！

閃光と爆音、そして激震が艦橋に満ちた。

「ぐわァァァッ！！」

「きゃぁぁぁぁっ！！」

オペレーターのようにシートベルトでシートに体を固定していなかった者は、たちどころに煎り豆の様に弾き飛ばされた。この戦いでは彼らは実によく転がった。戦闘が終わって、司令部の者で医務室で打撲・捻挫・擦り傷による治療を受けた者は7割に上ったという。

「被害報告！」

床に仰向けに転がった神が叫んだ。

「何だ？何が起きた！？」
あまりのことに、さすがの司令部も混乱した。
『司令艦橋に命中弾１、損害ありません。他はすべて遠弾』
彼らの８０センチ手前で５１センチ砲弾が炸裂したのだ。
「よっ、よく無事だったなぁ」
皆、冷汗をかきながらお互いに顔を見あった。
「目標をフリードリヒに変更する。冴子、照準急げ」
衝撃でしたたかに脇腹を打ちつけた綾崎は、外見上は平静を保ちつつ、対応を命じた。防音材を経由しても、耳がキーンとする。
「距離を開く。面舵一杯」
『了解。目標、フリードリヒ、距離５千、主砲発射！』
３基の３連装砲塔から３本の赤黒い物体が吐き出された。
距離からして、弾着は３０秒後だ。
『砲術長より全砲術、弾着まであと……２２秒。次発装填急げ』
「敵艦発砲！」
見張り員がストップウォッチを押して報告してくる。
「機関左舷最大発揮待機しつつ、現出力から３０％下げ、右舷最大、出力カット準備しとけ！香取、舵を思いっきり左に切れ。冴子。しばらく砲が使えなくなる。砲塔を右へ旋回しておけ」
『無茶しないでください！ただでさえ忙しいんですから！』
綾崎の右へ左へとひらりひらりと敵の攻撃を交わす操艦は、敵をつねにトレースする必要のある砲術にとって厄介以外のなにものでもなかった。その度に計算のどこかが狂うのだからたまったものではない。
「これも給料分の仕事だ」
『安いのに』
「言わない約束だろ？」
彼は冴子のこのような暴言を許していた。彼女は自分と御同類なのだということをわかっていたのだ。だから、いつも艦長ともめ事を引き起こしてばかりいて、昇進が遅れていた冴子は、綾崎のこと

を気に入っていた。
「こっちが一発も撃っていないっていうのに、ボカスカ撃ちやがって！」
「そう簡単に当たりはしない！」綾崎が誰かがあげた不平を窘めた。
「当てさせやしない。大和の真骨頂、見せてやるから黙れ！」
キーンキーンという主砲旋回と急旋回警告のブザーが艦内中に鳴り響いた。
「真骨頂？」
操舵担当の香取が不思議そうな顔で綾崎の後ろ姿を見た。操舵に関しては大和を知り尽くした自分よりも貴男の方が詳しいとでも言うおつもりですか？提督。
大体、さっきの命令は何ですか？似たようなこと、何度か言いましたが、機関室に何を？
彼はいつもより大和が小回りを利かせている理由を、自分の腕と過信していた。
「ＮＡＴＵ、全砲術長宛、弾薬庫内部、エレベーター、一時閉鎖。弾薬転ばせるなよ！」
『了解』
その間にも、大和の左右には盛大に水柱が上がる。完全に夾叉されていた。
命中しないのが不思議なくらいだった。
そして綾崎は旋回の途中、舵中央が報告された所で新たな命令を発した。
「頃あいだ！機関右を切れ、左全開！香取、舵を右！冴子、撃てたらさっさと撃て！」
左に旋回すると見ていたフリードリヒを欺くように、大和は慣性に悩まされつつも、大きく右に旋回し、８の字スラロームをやってのけた。
大和の左舷に９つの水柱が立ちのぼった。

「嘘だろう!?」

大和の信じられないような転舵を見た敵味方の兵士達は、一様にそんなことを口にした。そして何より驚いていたのが、その舵輪を握っていた香取本人だった。

「こんな動きが出来たなんて……」

「ツイン・スクリュー・タイプならいつものことだろう?舵中央だ」と後ろも見ずに綾崎が言った。

「了解。しかし提督、あれは潜水艦ですよ?」香取は舵指度計を睨み、舵輪を廻しながら、言った。

「こいつは、戦艦です」

「俺に言わせればな、差こそあれ、みんな同じだ」

「はぁ……」

香取は、ひょっとして、この人は化け物なんじゃないかと、考えてしまった。

第五部　決戦！　2

●迫り来るもの　午後６時４１分

「目視射撃。弾種自由。第一戦速。最大戦速即時待機」

綾崎が大和の射撃に必要な命令を伝達した。

各部署が自動的に任務を果たし始め、報告が一斉に流れ込んできた。

「目視射撃開始、目標、敵一番艦」

『目視射撃開始、目標、敵一番艦。宣候』

『第一戦速、最大戦速即時待機。宣候』

『主砲、主砲射撃指揮所に連動』

『直結確認。従動よろし』

『各砲選定中』

『現在データー探索中』

『主砲発射体制。各員、耐爆、耐閃光防御に備え。各部水密扉閉鎖』

巨大な船体すべてに鳴り響くブザーと共に、主砲射撃指揮所の砲術オペレーターの警告が響き渡った。

砲術長の警告が鳴らすブザーは連続短音３回。一拍おいて長音１回。長音が鳴り終わるまでに、主砲の爆風に影響を受けそうな部署の者は艦内の退避所へ逃げ込まなければならない。無論、ブザーが鳴っている間にも主砲発射準備は着々と進められていた。

「主砲次発発射準備。弾種ＡＦＣ！」

主砲射撃指揮所の砲術長（冴子）が発した命令は、スピーカーとコンピューターを通じて、３基ある主砲塔のすべてに伝えられた。

３人の砲術長は、砲塔後部にある自席の前にある統制コンソール

で主砲射撃指揮所から伝えられるデーターによってそれぞれの砲が正確に作動しているかを確認した。

一基あたりほぼフリゲート艦ほどの重量がある砲塔内に機械音が響き渡った。その数の大きさの割には少ない人数。１０名ほどしかいない重装甲に囲まれた鉄の部屋で、油圧装置や水圧装置などによって命令を伝えられたシステムが作動する。

ロックを解除された砲尾の一番後ろにある蓋の砲尾栓がすべて上に向けて開いた。

各砲に取りついている下士官達が、砲身内部を目視で異物の有無を確認し、異状無しを報告し、素早く砲尾の周囲から身を離す。

彼等は全員、耐圧・耐衝撃・耐爆・耐熱の効果のある高高度迎撃戦隊（Ｆ－０『ヴァルキリー』及びＦＨ－９９『セイバーフィッシュ』）パイロット用の『０装備』通称『ノーマル・スーツ』、言い換えれば宇宙服に身を包んでいる（後に全パイロット標準となる）

一着４００万円の高額なノーマル・スーツを彼等が身につけている理由は、砲弾発射時の急激な衝撃にある。急激な減圧と衝撃を考えるともこんなものでもなければ、絶対に耳を中心に後遺症を持ってしまうのである。

兵が貴重な財産となっているＡ．Ｋ．Ｄ軍では、乗組員の生存性には神経を使っていたのである。

その間に、各砲身の後ろにあるエレベーターが、装填レールの上に、徹甲・焼夷・爆風の各効果が従来のＨＥＡＴ弾の倍を誇るという、後に『放射能を出さない原爆』とまで言われた新型弾、ＡＦＣ（対要塞破砕）弾を運び上げていた。

砲弾がレール上に寝かされると、後方から先端に円盤が取りつけられたラマーが水圧装置によって押し出され、砲弾を砲身内部へ押し込み、仕事が終わり次第、後退する。

砲弾の装填が終わると、装薬用エレベーターから装薬が装填レールに乗せられ、ラマーによってそれも砲身に押し込む。装薬の装填が終了したラマーが完全に後退した。

再度下士官達が確認に走り、再び異状無しの報告を叫ぶと、警告音と共に砲尾栓が閉じられ、ロックがかかった。

3人の主砲長と各砲塔担当の砲術班員6名、そしてNATUはロックの確認をすべて統制コンソール上の警告灯で行い、砲術長である冴子のヘッドセットに砲撃準備完了を告げた。

装填時間は18秒。旧型大和とは比べ物にならないほど装填時間が短縮されているのは、完全に自動装填装置が作動したからだった。

報告を受けたNATUは自らが算出した発射解析値を各砲塔に伝達した。

命令をうけた水圧装置がうなりをあげ、砲塔を旋回させ、毎秒12度の割合で仰角を与えた。

「全砲塔射撃準備完了。データーリンク正常！」

「砲塔旋回監視装置正常に作動中！」

「トリガー回します！！」

檣楼の真下、CICの横にある主砲射撃指揮所。各種器材と優秀なオペレーターを備えたそこは、主砲発射に関するすべての指揮を行う場所だ。

無論、砲の発射に関して必要なデーターが主砲射撃指揮所だけで得られるはずがない。目標までの距離はもちろん、風向、地球の自転による影響、弾薬の製造されてからの年月から考えられる質的変化等々……無数のパラメーターを決定する必要がある。こうした計算は、艦の活動に関するあらゆる計算がそうであるように、艦の主要防御区画内にある巨大なMCR（メイン・コンピューター・ルーム）に生息するNATUによって行われ、二つの数値一砲塔の旋回角度と砲身の鎌首をもたげる角度一の二つに集約される。

すべての数値は人知の及ぶ限り計算され尽くそうとしていた。集中射撃管理装置に陣取った冴子は、目視砲撃用ターゲットスコープ越しに敵艦を睨み、いつもの癖で、汗がじっとりと滲んだ手でトリガーを弄んでいた。

距離2万7千の敵に対し、旋回終了と同時に半ば出会い頭の居合い切りの一撃を食らわせる。彼女はそれを命中させなくてはならない。

重荷だった。

その一瞬に、彼女の一撃に、帝国海軍の伝統を持つ（少なくとも、冴子はそう信じている）海洋冒険部の創設以来、蓬莱の水上艦乗りが営々と築き上げてきた砲戦技術のすべてがかかっていたのだ。

距離を示す数値がターゲットスコープ上をうろちょろする。照準がまだ定まらない。定まらないで撃てば外れる。まだかまだかと心ばかりが早る。

ピンッ！

冴子の待ち望んでいた音がヘッドフォン越しに聞こえた。

「発射！」

彼女は反射的に叫び、そしてトリガーを引いた。

（いけ！わたしの息子達！）

冴子の命令は電気に置き換えられ、分厚いラインメタルで守られたケーブルを通り、9門の砲身へ、その砲身の中に収められた巨大な砲弾の発射信管へと到達し……。

海と空が引き裂かれた。

その効果は絶大だった。

ＨＥＡＴで打ち抜けない装甲に苛立っていた冴子が、綾崎の指示をえる前に無断で投入を決定したのだが、少なくとも冴子の苛立たしい原因を根本から破壊する効果があった。

要塞攻撃用に開発されたその砲弾は、敵艦の装甲をまるでテッシュペーパーのように破壊し、そしてその中で3千度という高熱を発生させた挙句に爆発。灼熱の嵐を艦内にまき散らした。

●歴史の傍観者　　全世界　午後6時30分頃（現地時間）

硫黄島沖　海上自衛隊所属イージス艦「こんごう」食堂

「おい！ついに主力同士の殴り合いだってよ！」そんな声が各所で響く。

食堂にいた全員が、食事をとるのも忘れてＴＶに見入っていた。

放送はＣＮＮのもので、ＴＶにうつる戦艦達も、米軍かＩＢＣのものばかりだった。大和がまだハウを撃沈していない時の頃、大和が初めてテレビに出た時の世界の様子を見ておこう。

『米軍は現在奮戦中です！まるでジュトランドに来たようです！』

ＣＮＮの報道は、衛星回線を通じてここでも見る事が出来た。

テレビもしくは通信回線は、ハイパー・レーザーに変換することで狩野粒子下でも繋げる。無論、衛星があれば、だが。というのも、ハイパー・レーザー方式を採用さえすれば、その驚異はある程度なくなるからである。ただ、最大の問題はハイパー・レーザー・パルス発生装置が非常に高価でかつ大型であること。ミサイルへの転換はほとんど行われていない。そんなことをするくらいなら、超接近戦でケリをつけた方がまだマシだからである。

テレビの黒人レポーターは、興奮した口調で戦況を報道していた。

「なんか、映画みてるみたいだ」

「９０年の長門の一件を思い出すよ」

彼はあの事件の時、目の前で戦友３人を失っていた。

「全く、連合艦隊の時代に戻った気分だ」

「お前が大和に乗って敵をぶっ潰すってわけか？」

「そういうこった」

「日本海軍の驚異、世界中にアピールできるな。カッコイイだろう？」

『現在、戦闘開始から一時間少々が経過。国連軍は敵戦艦６を撃沈しましたが、我が軍も差し違える形でＳダコタ以下、３隻が沈没！ニュージャージーが現在炎上中です』

炎をあげながらも、ニュージャージーが必死の応戦を繰り広げる姿が大写しで映し出される。

『立ちのぼる水柱が凄まじいです！』

「おやっ？」

どんぶり飯を食べていた隊員の一人が、画面の映しだす暗闇の中に何か信じられない物がいた気がして、もう一度画面を見直した。

「どうした？」横で飯を喰っていた隊員が訊ねた。

「いや、向こうに何かとんでもないものがいた気がしてな」

「なんだ？」

「いや、大和……大和が見えた気がしたんだ」

「大和？リルガミン級だな」彼も、じっと目を凝らしてみた。

しばらくして、何も見えないぞ。と言おうとした時、薄暗闇の中、１キロ程先に立ちのぼった水柱の中に、一瞬閃光が走り、閃光に照らし出されて、見たこともないような巨大な戦艦の姿が、最大望遠で映し出された。

『我らが戦友、ジ―、いえ、Ａ・Ｋ・Ｄも奮闘しております！彼らはすでに戦艦４隻、そうです！！国連軍側の戦艦撃沈スコアの大半を担っております！！目下、３隻の戦艦を相手に交戦中です！彼等は、敵水雷戦隊撃滅など、最大の戦果をあげております！！』

画面が乱れる。それが直ると、轟音がスピーカーを響かせるかと思うほどの勢いで轟き、不意にカメラが切り替わった。

どうやら、その艦の上空を旋回中の弾着観測機からの映像らしい。

漆黒の戦艦が必殺の火炎を吐き出す瞬間ー。

「おっ、おい、あれ……」

それを見ていた隊員の一人が我が目が信じられないという顔でＴＶを指さした。

「大和だ……」

「うそだろ……」
また画面が切り替わる。
その砲弾を浴びた戦艦が巨大な水柱に包まれる。
水柱の中で巨大な閃光が煌めく。
水柱が収まった後には、そこに浮いていたはずの戦艦は、艦首がすこしだけ浮かんでいるだけで、急激に沈みつつあった。
食堂はその瞬間、歓声に包まれた。

「ずいぶんと、派手ですな」
「ああ」
八八艦隊司令部の幹部達は、大和の姿に驚きを隠せないでいた。
「まさか、噂は本当だったのですな」
「まさかとは思ったがなぁ」
「まさか、大和とは……」
「しかも、ありゃ、７万トンなんてものじゃないぞ」
「基準排水量に換算して１５万トン以上ですね。恐らく」
「化け物だな」幹部の一人が呆れとも羨望ともつかないため息混じりに呟いた。
「ステニスクラスよりも巨大な戦艦……か」
「あれが自衛隊にあったら、すごいのに……」
「三船司令、どうなさいます？このままいきますか？」
「行くしかなかろう」３０代半ばと思われる、海将の階級章をつけた男は、さも当然という顔で言った。
「物見湯山の旅ではない。それに、放っておくとマスコミが煩い」
彼らは先程、マスコミの代表から、飯がまずいという批判から始まり、もっとスピードを上げろだの、乗組員の態度が悪いだの、なら出ていけといいたくなるような様々な批判を受けた挙げ句に飯を食っていた。
旨いわけがない。
「しかし、我々は何のために行くのですか」

「わからないかね」
「判りません」
「さらし者になりに行くんだ」
「さらし者？」
「形だけでも出動して、東京条約そのものの無効化をはかりたいんだろうよ。村山さんは」
「んな無茶な！」
「それでも、やるんだ」三船は言った。
「命令は絶対だ」
「……いやなものですね。でも、皆で考えた彼等との共同戦線の構想が無駄になった方が痛いですね」
「ああ」
三船は、少しだけため息をつくと言った。
「義理の弟の実力とやら、直に見たかったなぁ」
少しだけ自慢だった。自分が活躍できない分、まだ見ぬ義理の弟の活躍にその不満を転嫁させようとしているのだ。
「はっ？」
幹部達は一様に、その言葉の意味を理解しかね、一斉に三船の顔を見た。
「オレの妹の婚約者が、今の綾崎とかいう奴なんだよ」
「なんと」
「民自党の綾崎敏夫の息子だ。お偉いさんのおぼっちゃまがあそこの幹部って訳だ。そう思ってなめてかかっていたら、本当に痛いメにあったな。畜生め」

●母と子　　東京　某家庭

ＴＶを見ていた少年が叫んだ。
「お母さん、大和だよ！ほらっ！」
少年は瞳を輝かせてＴＶに齧り付く。

「かぁっこいいなぁ」
「でも、本当かしらねぇ」
母親は特撮映画と考えているらしい。
「すっげーっ！」
子供は眼をランランと輝かせてテレビに釘付けになっている。
「ほらっ、もう勉強の時間よ？」
母親は実際の戦争よりも息子の受験戦争の方が心配だった。

●とある父親と子　　英国　潜水艦隊司令部高級士官向けバー

「おおっ！」
ハウが水柱をあげて沈む瞬間は、ここでも目撃されていた。
誰となく感嘆の声があがる。
しばらく雑音とノイズが入り、薄暗いどこかの艦内に十代後半の日本人女性が映され、きれいなキングス・イングリッシュでシャーロットに答えた。
『はい。こちら大和のサクライです。現在の所五分五分の戦況を維持している大和ですが、予断は許されません。現在……』
こんなことが素人の彼女に判るわけがない。彼女はマスコミの人間として、周囲の雰囲気だけで状況を伝えていた。

「あっ、あのガキ！」
それを見ていたネルソンは絶句した。そこに映っていたのは、シートに腰を降ろし、命令を発する、かつての彼の教え子の姿。そして、その斜め後ろに立っているのは、紛れもない彼の息子だった。
「おおっ！わが息子よ！」
ネルソン提督のその叫びに酒場が一瞬静まり返り、ああほんとだ。というような声がそこかしこで聞こえた。

「二水戦。防空戦隊、突撃体制に入りました！」

「よし、頃あいだ！突っ込むぞ！通信、全軍に発令、目標フリードリヒ、天祐を確信しつつ、全軍突撃せよ！」

「了解！」

「ＮＡＴＵ！自動消火システムに異常があれば報告！」

『左舷第１４７区画に火災発生、自動消火装置作動中。各所の科学消化剤が欠乏気味です、速やかな補充を要請します』

「担当者を急行させろ。こっちが苦しいときは敵も苦しい！耐え抜くぞ！」

南沙ＴＶは、ＣＮＮとの合同ということで、聞き苦しくない同時通話が出来る通訳を置いていた。そのため、その報告もセリフも（綾崎達は望んでいないにしても）そのまま全世界に流れていた。

「……敵も本気だなぁ」

司令付き従兵（伝令から雑用まで何でもこなす）として司令席の側に立っていたグライムズが感心したように一人言を言った。視線は暗黒の海上から離れていない。

「海軍とはそうあるべきだ」

綾崎は司令シートに肘を付きながら視線をまっすぐ外に向けながら言った。

「サー。申しわけありません」

一人言を聞かれたグライムズはバツが悪いように敬礼しながら詫びた。

「いいかね？グライムズ君」

綾崎は怒ってはなかった。

「状況は決していいとはいえない。だが、最悪というレベルには達していないのだ」

「サー」

「確かに駆け引きは大切だが、可能性がある限り、戦い続けるべきなのだ」

「英国軽騎兵のように？」

グライムズとしては、よく出来た冗談だと思っていた。

「英国軽騎兵のように、あの六００騎のように、だ」綾崎は強い口調で言った。
「それが出来ないなら戦争などしてはならん。軍人になぞなってはならん」
「サー。よろしいですか？」
「何だね？」
「自分は父に、あの突撃は軍人として最悪の判断だと教わりましたが」
グライムズは、自分の父親がこのやりとりを聞いていたとは、露ほども知らなかった。
「最悪の判断だ。確かに」綾崎はどこか楽しげだった。
「だが、その愚かしい判断こそ、彼らが果たすべきを求められた義務だった」
「絶対服従ですか？」多少不服そうに尋ねた。
（青いな）
綾崎は、かつての自分をみる思いで目を細めて彼を見つめた。
「そこまで単純ではない。だが、君も一度実戦を体験したならば、理解できるようになる。そういうものだ」
「サー。わかりました」
彼は確かに理解した。
今いろいろ考えていても仕方がない。
今、僕は戦場のまっただ中にいる。敬愛する父や綾崎と同様の理解が得られる場所の度真ん中にー。
だが、それすら、生き延びることが出来たら。という条件が付く。
彼は背筋に軽い震えを感じた。
腹の奥底に冷たい感覚を覚える。
もし、生き延びることが出来たら……。
そう。僕はまず、生き延びなくてはならないんだ。
そんな不安が、やはり綾崎にも理解できるのだろう。
「固くなるな。死ぬときは死ぬしかない」

「さ、サー」
綾崎はいつもそうだが、こういう時なにかいっても、言われた方にとっては救いにならない。
「さてグライムズ君。ここでテストをしてあげよう」
綾崎は、妙に楽しそうな声で言った。
「かの偉大なるネルソン提督は、どうすればよいかわからない時、どうしろと言ったかね」
グライムズは考えるより先に答えを言っていた。
「突っ込めと言われたはずです」
「君ならどうするね」
「自分なら突撃し、敵を撃滅いたします！」
グライムズは即座に言い切った。それは父に事あるごとに教え込まれた教訓だった。
綾崎は、その血気盛んなグライムズのセリフに苦笑を堪えながら言った。
「見敵必戦……か。ま、さすがは大英帝国の海の男の血を引いているというべきか。だが、それは死を覚悟するべきではないかな？」
「軍人とは、信じる者のために死ぬものです。栄えある海軍軍人という、その己が勇者として死ぬことを求められる身ならば」
綾崎はこの言葉が一体誰のものか気づいていたが、くそ真面目な顔をして言うグライムズの言うことを黙って聞くことにした。その方が、周囲に与える影響もデカイと判断したのである。
「なすべきことをなすだけです」
「冴子、右3ミル修正しろ。風に流されているぞ。ＮＡＴＵ、データーを再検討しろ。風向きが変わる。機関室、あと2ノット出せ。香取、取り舵１０度だ」
綾崎は、懐から煙草を取り出し、火をつけた。自分の命令がグライムズの言葉をとどめていることに気づき、言った。
「……すまん。続けてくれ」
綾崎は最小限度の指示を出すだけで黙ってそれを聞くことにした。

「信じるもののために死ぬことは恥ずべきでもなく、恥ずるべきでもありません。それに……」

グライムズは彼が尊敬する目の前の提督の台詞を、さらに拝借した。

「自分は海軍軍人の端くれとして、自分の果たすべき義務を心得ています」

グライムズは断言した。

「どんな状況でも、自分の信じる者に対して忠誠を示す手段を、一つは心得ているということです」

司令部は一瞬、全員がそれに注目した。いや。ＴＶというメディアを通じて、これを見ていた世界中のすべての人々が、だ。

「なにかね？」

「グライムズ・バルバロッサ・サー・ネルソンは、勇敢な死に方を知っている。そういうことです」

「信じる者のため、勇者の如く倒れる。それが、軍人に可能な最後の忠誠の証なのだからな……」

未熟者のくせに。という感がなかったわけではないが、綾崎は感心したようにそのセリフの後を続けた。山本はそれを聞いて感涙していた。

グライムズは腰に手をやると、不服そうな顔で言った。

「ひどいですよ提督。自分にこの偉大なる言葉を教えてくださったのは、提督ご自身ではありませんか。自分は座右の銘にまでしたのに、それを自分にいわせるなんて！！」

「そうだったな。後で著作権料、徴収するぞ」

「アイリッシュウイスキーのとっておきのが」

「そうか。生きて帰るだけの価値はあるな」

「真名さんのお酌で」

グライムズは龍の逆鱗に触れるか否かの冗談を言った。

「エストが泣くぞ」

しかし、綾崎もさしものもの。彼が同じイギリス出身の看護婦、

エスト・カストナーと近頃いい仲なのを、当然のように知っていた。
「えっ？」
純なグライムズは顔が赤くなるのを押さえられなかった。
「いいのか？あんないい娘泣かせて」
クックッと、綾崎は喉の奥で笑いながら言った。
「いっ、いえ、あの、その……」
「エストが駄目でも、さっさといい女の一人くらいみつけろ。お前だっていい素質を持っているんだ。童貞のまま死なせるには惜しい」
「よっ、余計なお世話です」
グライムズは赤面を堪えながら言い返した。
「なんなら、エストとの修羅場のおまけ付きで女紹介してやるぞ。一年からＯＧ、教師まで、看護婦、ＯＬ、婦警に軍人なんでもござ いだが？……ん？」
「どうなさいました？」
「いや。なにか左から……まずいかな？取り舵一杯、応急班待機急げ！」
綾崎はこのやり取りがＴＶで流れていることを忘れていた。おそらく帰ったら『誤解した』真名の平手打ちの百発や二百発では済まないだろう。
彼は殺気を感じていた。左からの攻撃に備えさせるのは当然である。
「どうだ？」指示し終わると、心底楽しそうにグライムズの顔を見た。
「いっ、いえ。結構です」かわりに真名さんください。とはさすがにいえないグライムズだった。
「だが……」
綾崎は慈しむような視線を彼に向けた。
「英国海軍軍人の心意気か……さすがはネルソン提督のご子息というべきだろう。提督もこの状況下でさっきの君のセリフを聞けば、

喜ばれただろうなぁ」
綾崎は大きな笑みを浮かべて頷いた。

彼がグライムズと初めてあった時、彼にはグライムズが、純粋な瞳をもった、線の細い頼りないガキ位にしか見えなかったが、この時は何故かとても頼もしく見えた。
正直、ネルソン提督の紹介状を持って、英国から単身、片道切符で乗り込んで来た時には、その親子揃っての無謀さに、さすがの綾崎も唖然としたものだ。
『綾崎悠矢閣下でいらっしゃいますか?』
オフィスに、真名に連れられて訪ねてきたグライムズは、彼が引っ張ってきたトランクの付属物のように見えた。
ぎこちない（今ではハーフと間違えられるが）日本語で訊ねられた時、綾崎は彼が誰なのかわからず、せいぜい、推定年齢１５として『１５年前、外人の女と責任をとるような問題を起こしたかな?』と、首を傾げる位だった。
『僕は英国海軍潜水艦隊司令官、ドム・キングリッジ・サー・ネルソン男爵の息子の、グライムズ・バルバロッサ・サー・ネルソンです』
自己紹介された時、綾崎は少し疑ったものだ。何しろ、ネルソン提督は、綾崎が『間違って人間に生まれてきた熊』と陰口を叩いたほどの、髭面の豪快な外見の持ち主。とてもではないが、線の細いグライムズと提督では、親子とは見えなかった。
『ネルソン提督の?』
『父から紹介状をもらっています』
綾崎はこの後で「きちんと士官学校で学ばせるべき」と、当然ながらネルソン提督（父）に文句を言った。弟子なんてロクに持ったことがない綾崎には、出自からして、追々英国海軍の重鎮となるべき彼の息子を鍛え上げるのは、正直重荷と思えたのだ。
それに対してネルソンはこう言った。

『型どおりのことしか教えられない士官学校に送るより、お前の方が息子にとってプラスになる。お前と同レベルに引き上げろとはいわん。お前の才能は天賦以上のものだ。だが、俺がお前に息子を預けたこと。それに関して俺の眼が間違っていないことを、お前には証明して欲しい。仮に息子が途中で死んでも俺はお前を恨みはしない。もしそうなら、息子はそれまでの男なのだ。俺は息子を信じている。お前と同じように』

綾崎は恩師の決断に応えようと、グライムズを徹底的に鍛え上げていた。

戦略から戦術まで、戦闘フィールドは水中から宇宙まで。艦艇乗り込みの時は必ず側に置いて、次々と質問を浴びせかけ、答えられなかったり、間違っていると部下の面前であっても平気で怒鳴りつけた。

教育の幅も軍人としてのそれに留めなかった。

幹部候補生に混じらせてプロトコールから一般・専門の垣根を取り払った教育を施し、さらにはスコルッエニーらに依頼して白兵戦闘術、知り合いの教授に頼み込んでイギリス文学まで学ばせていた。

綾崎にはこの程度でグライムズが駄目になることはないという不思議な確信があった。

だからやった。

これからも鍛えるつもりだったが、本当にグライムズはこれに一度もネをあげずに頑張っていた。

綾崎には、これに教師として答える必要があった。

彼はそうしてきた。今まで、そして、これからも一。

その教師たる綾崎が、山本に楽しそうな声で話しかける。

「参謀長。聞いたか？」

「はっ？」

「未来のグランド・フリート司令長官閣下はかく語りきだ」

「……はい。まことに卓見ではありますな」

綾崎がなにをいいたいのかを察した山本は、わざと顔を引き締め、グライムズに向けて敬礼の真似事をしてみせた。
その頃、英国海軍の士官酒場では……。
「未来のグランドフリート司令長官閣下に！」その夜の乾杯の音頭は、彼のためにあったといえよう。
後にグライムズ・ネルソンが「英国海軍軍人の心意気を世界に知らしめた」として、英国で絶大な評価を得たのは、このためである。だが、これを聞いていた父、ネルソン提督が感涙に咽いでいたこと。そしてその部下達が提督の息子に関する自慢話に徹夜でつき合わされるハメに陥ったことは、当時、綾崎達には知る由もなかった。

「綾崎提督！」
桜井が彼にマイクを向けた。
「提督。どうです勝ち目は？」
「あって欲しいねぇ」ほとんど他人事のように言ってのけた。
「やばいんですか？」
「敵は部下に欲しいくらいだ」
「厳しいと？」
「そういうことだ。所で、特番か？」
「はっ？はい。この戦況はすべて全世界に報道されています」
「本艦は特別任務の元に動いている。我々が出す命令は一切流すな。もしやったら……」
「やったら？」
「挽き肉にして砲弾につめてやる。フリードリヒにデリバリーして、連中へのインタビューができるようように…な」
目が本気だった。
「はっ、はい。マイクの扱いには注意します」
「よろしい。８時までにはケリがつくと思う。どういう形でもね」
『左舷より砲弾！本艦を狙っています！』
ＮＡＴＵが息せき切って報告してきた。

『8発！命中まで13秒、回避可能性11％、回避手段を！』

綾崎はそこで左手をあげ、マイクを切るように指示を出す。桜井は素早くマイクを切った。

「取り舵やってるな！？左停止！右最大、来るぞ！応急班待機急げ！」

それはナツが取れる最良の方法と合致していた。ナツが綾崎の命令を補正する必要は、実の所、この海戦において一度もなかったのである。

そこで映像は一度切れた。

【横浜三船家】

じっと、制服姿のまま、律儀に正座までしてテレビに見入っている男がいた。その手に握られた正宗が、小刻みに震えていた。

海上自衛隊幕僚長三船俊郎海将である。

先ほどから、自衛隊に対してありとあらゆる連中が彼らの存在を思い出す度に呪いに近い罵りを浴びせ続けているのを、必死に耐え抜きながらＴＶを見ていたのだが、彼には、そのことでなけなしのプライドを傷つけられた他の自衛隊員にない、別の意味である男に憎しみの目を向けていた。

ちなみに余談ではあるが、この後数年間、自衛隊が海戦に参加しなかったことを理由に、世界中からは「腰抜け」とか「卑怯者」と非難が殺到。

『日本は本当に国際社会の一員としての資格があるのか』と各所で本気で論議され、米軍の一部が「韓国とはやるが連中とは嫌だ」といって、海軍は毎年恒例の「リムパック」を、反対者多数をもって中止。海兵隊と陸軍は日本での演習を取りやめにし、2年後には『ファーランド』と国名を変更したＩＢＣを加えたＡ．Ｋ．Ｄ軍との演習に主体を移行するに至った。

また、自衛隊自体も、訓練航海に出た幹部候補生達が「なぜ海戦に参加しなかったのか」と問いつめられ、日本へ帰港した途端、絶

望のあまり辞表を提出するなどという、内部瓦解寸前状態に置かれることとなる。自業自得とはいえなくもないが、やむを得ぬことなのだ。

「房枝」

「はい」

「あの、今映った大和の艦長が、真名の……」

「ええ。真名の旦那さまですわ」

『房枝』と呼ばれた女性は、うっとりとした眼でそれに答えた。

真名とその弟の母、その兄にとっては継母となる女性である。

「まだ結婚しとらん！」

「この前電話で、真名がプロポーズされたから、近いうちに一緒に来るっていってたじゃありませんか。同じですわ」

「気にくわん！」彼は叫んだ。

「だめだだめだ！！あんな男！！」

「あら？あなた、以前、真名のお婿さんは、大和の艦長くらいでなきゃだめだっておっしゃってたじゃありませんか」

「なにがなんでも気にくわん！」

「いい男ですわ。真名も目が高いですわね」

三船が何か言おうとしたとき、『緊急情報』という文字がテレビの画面の隅で点滅した。

『南沙支局からの報告によると』

「あら？何かしら」

「これ以上ロクなことがおこらんでいてほしいが」

三船のその淡い望みは無惨にも打ち砕かれた。

『航空自衛隊が南沙へ武力侵攻。南沙統合軍航空隊と交戦。先程全滅が確認。Ａ．Ｋ．Ｄ政府は全軍に対日報復行動準備を発令』

「全滅だと！？」

「やだっ！」

「房枝、電話だ」彼は慌てて席を立った。

「どちらへ？」彼女も席を立ち、夫に従う。

「航空自衛隊の新井君の所だ。これはえらい騒ぎだぞ！」
「はい！」

第五部　ＰＡＳＴ　２

【東京・山の手・綾崎家】

質素な和風の居間で、四人の親子が中継を見ていた。

「物騒ねぇ」

「全く、厄介なことだ」

と、剛腕と有能さで知られる国会議員は呟いた。

（後の処理で、わが国はとんでもないことになるぞ……）

その通りになるのだが、それが後に彼に政権への道を開けてくれたのだから、皮肉なことだ。

「変えていいわね？こんなの見るものじゃないわ。折角、久しぶりの一家団欒の席なのに……」

そういって、娘の一人がチャンネルを変えた。株式市場の情報が流れていた。

「私、気にしてないから」

「そう？」

「大丈夫よ。ね？お姉ちゃん？」

妹の方が、姉ににこりと微笑む。

「あの馬鹿がいれば、本当に一家団欒なんだけどね」

平然と実の弟をコキ降ろす姉。

「もう。紫音たら」

「あれはすでにウチの子ではない！」と、父は低く怒鳴った。

「頑固なんですから」

「ホォ～ント」母と子達は同時に笑った。

「はい。一杯どうぞ」

現在、トップアイドルの座に君臨している娘、氷室光波は、何十万ものファンを魅了する笑みを浮かべながら、父のコップにビールを注ごうとした。

今日は久しぶりの家族の団らんが持てた。
滅多に出すことが出来ない、兄の話もだせた。
これが光波には嬉しかった。

とはいえ、彼女は兄の姿をほとんど覚えていない。
今、兄が何をしているのかも知らない。
酷い話だと思う。
父が政治家だから、母親も選挙活動で。１０歳年上の姉も、海外留学だのクラブ活動だので留守がちだった。
彼女の幼い日々は、人には「寂しいでしょう」と同情を買うものだったが、それでも彼女は寂しくなかった。
全ては兄がいてくれたからだった。
幼い私にとって、兄は父として、また母として存在していた。
幼稚園の送り迎えの時、「行きたくない」と泣きわめき、兄を困らせたこともあった。何かにつけて私は兄に甘えていた。
にもかかわらず、兄の顔を写真を見なければ思い出せない。
本当に酷い話だ。
はっきりと覚えているのは、兄が家からいなくなったあの日の事。
３月半ば。早咲きの桜が綺麗な花びらを散らしていたあの日の事。
兄を最後に見る事が出来た、１０年前のあの暖かい春のあの日の事。
兄はその日、なぜか荷物を持って玄関から出ていこうとしていた。

『あれ？』
当時７歳の私には、少し前と同じく、１５の兄が『じゅけん』とかで、また旅行に行くのだとしか考えられなかった。
約束したのに、あの時はおみやげを買ってきてくれなかった。
今度こそは……。
『お兄ちゃん』
あの時、お兄ちゃんはなぜあんなに嬉しそうに笑ったんだろう。

『なんだい？』
『あっ、あのね……』
何がいいかな。
本当に酷い話だ。知らなかったとはいえ、どうしてあんなこといったんだろう。
『おみやげ、忘れないでね』
兄のあの唖然とした顔。怒ったんだろうな。でも、優しさは変わらなかった。
そんな私を怒るでもなく、
『何がいい？』って聞いてくれたんだから。
あのとき、私、何をお願いしたのかな。
思い出せない。
でも、
『きっと、買ってきてあげるよ』
といってくれたお兄ちゃんの笑顔だけは覚えている。
そうして出ていったお兄ちゃんの後ろ姿は、何故か悲しそうだった。
お父さんもお母さんも、誰も顔も見せなかった。
お姉ちゃんは部屋で泣いていたけど、あんなにしっかりしていたお姉ちゃんが何で泣いているのか、わからなかった。

『お兄ちゃん、いつ帰ってくるのぉ？』
お兄ちゃんが家を出ていったのを知ったのは、いつまでたっても帰ってこないことを不思議に思った頃だった。
もう、外では鯉のぼりがあがっていた。

『あの子はもう帰ってこないのよ』
『なんで？』

紫音お姉ちゃんはそう言って俯いてしまった。

『悠矢っ！私はあなたをそんな風に育てた覚えはありませんよ！』
そういってお兄ちゃんを叱りつけていたあのしっかりしたお姉ちゃんの、その悲しそうな声と、そして、その言葉の意味が、その時の私には判らなかった。
随分教えてとせがんだ気がする。
『お父さんと喧嘩して家を追い出された』
という事をようやく納得したのには随分時間がかかった。
信じられなかった。
否、信じたくなかったのだと思う。
なぜあの優しいお兄ちゃんがいなくならなければならないのか。
それから暫く、私は小さい頃、お兄ちゃんに思いっきりわがまま言って買ってもらった小さなうさぎの縫いぐるみを抱きしめて泣きじゃくっていた。
私が父を嫌い始めたのは、その頃からだったかもしれない。
私は幼かった。
何もかもが幼かったのだろう。
だから、皆、どこかで辛い思いをしていることを知るまで、時間を必要とした。
私は他人に迷惑をかけ続けて大きくなったのだ。

でも、本当に心配だった。もう一度会いたかった。
アイドル・コンテストの選考会に、お父さんに黙って応募したのは、もしかしたら、まだどこかで父を許していなかった私の反骨精神の現れだったのかもしれない。
それを知って激怒した父の言葉を、私はたいして気にもとめなかった。
あれがお兄ちゃんだったら、どうだったろう。
反対されたら、多分、やめていたろう。
やめていたら、私はどうしていたろうか。
そんな私に「アイドルにならないか」という今の事務所からの申

し込みがあった時も私は一気に父を説得してしまった。
『お前があんなに我を通そうとしたのは初めてだった』と、このことを思い出すと皆言うが、それは私の小さい頃をほとんど知らない周囲の無知の現れだ。
本当の私は思いっきりわがままな面もある。
泣き虫だけど怒りっぽさもある。お嬢様ではない。ふつうの女の子だ。
それを知っているのは、お兄ちゃんだけだ。誰もそれをわかってくれない。
その頃の私はみんなが嫌いだった。
本当の私を知っているお兄ちゃんに会いたかった。
はっきり言っておこう。私はお兄ちゃんを愛していた。
こういうのを、『プラザーコンプレックス』というのだそうだが、それの何が悪いのか。私だって我を貫きたいことだってある。
私はただ、あの甘い、過ぎ去ったあの頃に戻りたいだけ。
だから、スカウトに素直に乗った。
『なんでこんな声も出ない！』と音楽指導の先生に怒鳴られても平気だった。
アイドルになれば、テレビとかに出て有名になれば、何かの弾みでお兄ちゃんの事を知る事が出来るかもしれない。
お兄ちゃんの方から連絡があるかもしれない。
私は内心にその希望を秘めて、全てを賭けた。
私の人生はそこから変わった。
アイドルとしてのハードな生活は、意外と性分にはあっていた。
毎日充実している。走り回って、歌って……。
ろれつのうまく回らない声でアイドルの物まねをやる私に音楽を教えてくれたお兄ちゃんは、『人にはその人にしか出来ないことがあるんだよ』といっていたけど、近頃、これが私のやるべきことなんだと思えるようになっている。
そういえば、『私、歌手になる』といっていた気がする。

でも、私も女の子だ。時折、独りぼっちになると、やっぱり寂しい。

私は友達がそんなにいない。

アドレス帳も、仕事関係がほとんどだ。女子校のお友達が数人だけ。携帯電話なんて仕事用の無線機と大して変わらない。

一番の友達も、高校に入る前に無くした。

三船真名。

自衛隊の偉い人の娘で、優しくて面倒見のよい可愛い娘だった。

この娘ほど、私は気を許した他人を、そうは知らない。

その彼女は、よく自分のお義兄さんのことを話してくれた。

やはり父親と同じく自衛隊にいるという。

彼女とお兄さんは腹違いなんだそうだ。男の子のことから、男の人には言えないようなことまで、私達はいつもお互いに話していた。

そこまで話せるほど、私たちは仲が良かったし、気を許し会っていた。

だけど、私は彼女にお兄ちゃんの事を話したことはない。

なぜだかよくわからない。

彼女が私の大切な「お兄ちゃん」を奪い去るようで怖かったのだろうか。

その彼女も、中学卒業間近の頃、自殺未遂をした。と噂になった後、『ごめんね』と一言書かれた手紙一枚残して転校してしまった。

高校に入って、お友達が出来ても、彼女ほど打ち解けたとは思えない。

『政治家の娘』というのは、華やかに見えて実は寂しいものだ。

みんなどこかで接し方に一線を引いてしまう。それがわかるから、私はあまり友達を作ることがなかった。それは『自衛隊員の娘』という真名も変わらなかったろう。

だから私たちは友達になれたのかもしれない。

私は、真名を失ってから、ほんの一握りのお友達にしか、気心を許していない。男なんてもってのほかだ。言い寄られると、嫌らし

い下心が見えて嫌悪感ばかりが走る。
男は不潔で嫌なものだ。
売り出してやるからとかいって、胸とか触らせろとか、イヤらしいことを脂ぎったディレクターとかに迫られたり、させられて泣き寝入りした経験のある娘達を、私は何人も知っている。
私は政治家の父の影響でそういう経験はないが、お兄ちゃんと、たった一人の彼を除いて、男という生き物はみんなそうだろう。
私の唯一幼なじみの男の子、秋谷叔父様の三男の幸信君。近頃ではよく真面目なトーク番組で活躍している。本業はまだ私と同じ高校生。今、大学受験を控えている。
私は彼の夢を持っている瞳が好きだ。
最近会ってないけど、お兄さんの悠介さん（南沙の政治家なの）みたいなダンディな大人の男になってほしい。
『それって、恋ね』と綾美さんに言われた時は驚いたけど。
綾美さんのことを説明するのを忘れていた。
綾美さんは、私の大先輩。デビューと同時にミリオンセラーを叩きだした、世界的に評価の高い素晴らしい美声と美貌の持ち主。不思議と、お兄ちゃんと似た印象を持っていたから、私の方から近づいた。
今では真名ほどではないけど、気心が通い合っているほうだ。
このガードの堅さが、意外と売り物になると事務所の近藤さんはいうけど、どうなんだろう。

「おっ。すまんなぁ」
満面の笑みを零しながら、それをさも有難そうに受ける親馬鹿の父。
「お父さん嬉しいでしょう。久しぶりにお姉ちゃんも帰ってきたし」
「そうだな。で、紫音。アメリカの方はどうだった？」
「戦争のおかげで大混乱。おかげでデビアスとウチの親会社が凌

ぎを削っています」
「発展途上とはいえ、リムゲードがなぁ」
父は政治家らしく、感慨深げに唸った。
「でも、ダイヤ以外の貴金属類の流通の世界では、ここ数年で世界のトップシェアを完全に掌握していますから」
「ＩＢＣが戦時体制突入でヴィクトリー島の重工関係そっくりもっていかれたって聞いたときはもうだめだと思ったがなぁ」
「アメリカとＩＢＣ双方に協約があったみたいです」
「協約？」
「北米の方をアメリカの武器供与拠点としておいて、ヴィクトリー島の方をＩＢＣの拠点とするって。両国間でもう認められているそうです」
「二枚舌ビジネスか」
「そうでもしないと後々、投資が回収できませんし、重工の方はどっちの国にとっても大切な武器供与企業ですからね」
「よくやるよあの会社。トップが誰だって？」
「ジム・シェーア。すっごい有能な人だけど、あの人、実際は人形みたいな人ですから。陰で操っているのがすごいのよねぇ……」
憧れちゃう。という、珍しい紫音のため息。
「そんなにすごい人なのか？」
「南沙皇帝ですよ？役職１０も２０も兼務してて、それでも完璧にこなせるんですもの。やっぱり、上には上がいるものですよねぇ」
「でもお姉ちゃん、ほんとによくそんな大きな会社の幹部になれたわね」
「実力よ。実力」
紫音はリムゲード・ジュエリー・ジャパンの総支配人の地位を若干２６歳の若さで手に入れていた。おかげで引け目を感じるのか、男とは縁がない。
「その実力で、早く身を固めてくれると嬉しいんだが……」
「当分無理ですね」

「きっぱりというな。きっぱりと」
「お兄ちゃん、もう結婚とかしてるのかなぁ……」
その光波の一言に、父は顔をしかめたが、紫音はアラッ？という表情で光波の顔をじっと見つめた。
「知らなかった？」
「えっ？」
「真名ちゃんから連絡ないの？」
「えっ？」
光波は怪訝そうな顔で紫音に訊ね返した。
「どういうこと？」
「紫音」
プルルルップルルルッ
都子、つまり紫音達の母親が箸をおいて何か言おうとした時、電話が鳴った。
都子が電話を取ろうとすると、それを敏夫、紫音達の父が制した。
「いや、俺が出る。多分、俺だ」
「はい」
都子は軽く頭を下げると、紫音達の方に向き直った。
「あの子のこと、何か知ってるの？」
「心配？」
「当たり前です」
都子はきっぱりと言い切った。
「私の子ですもの。悪いことしてるとは思っちゃいませんけどね」
「お父さん、聞いたらタダじゃすまないことしてるわ。あの子」
「悪いことでも？」
「お父さんに取っちゃね」
「何何？」
紫音は軽くグラスに入ったノンアルコール・ドリンクを飲み干してから言った。
「軍人」

「軍人？」
「軍人って？」
「A・K・D軍にいるのよ。あそこの幹部になってるんだって。確か、今、大佐とかいってたっけ」
「あっ、それ敏夫さんが聞いたら怒るわ」
都子は納得した様に頷いた。
彼女の夫は、軍服着てる奴は皆嫌いというタイプの男だった。
「その、大佐って、すごいの？」
「まぁ、エリートね」
「すごい！」
光波は純粋に喜んだ。
「やっぱりお兄ちゃんだ！」
「随分、派手に活躍してる見たいよ。ほら光波、『ラーディッシュ』って映画、この前観に行ったでしょ？」
「うんうん」
「あれって、実話を元に脚色つけたんだけど、ほら、いたでしょ？一人だけ日本人の人」
「うん。すごくかっこよかった」
１９９２年２月１日、イギリス海軍士官学校の学生を乗せた潜水艦『ラーディッシュ』が、北大西洋上にて氷山と激突した。深度５００メートルで航行不能となりつつも、４５時間後、なんとか自力浮上に成功して生還したという『ラーディッシュ事件』を取り扱ったものである。
「あれ、名前、あいつだけ変えてあるんだけど、実はモデルがあの馬鹿息子なんだって」
真相は、綾崎が９０年の忌まわしさから逃れようとして、司令部に無理をいって変名した末のことだった。
「あら」
「えーっ！？」
「よく知ってるわねぇ」と、世俗の情報には疎い都子。

その時、ズカズカと父が戻ってきたため、皆は話を中断した。
妙に機嫌が良くない。
「あの……」
「あの村山の馬鹿めが！！」
彼はすっかり気の抜けたビールを一気に飲み干した。
「お父さん、何があったの？」
「よりにもよって、A．K．Dへ自衛隊を武力侵攻させたんだ！国民に……あまつさえ我々にまで黙って！」
「えっ？」
「国連で叩かれるのが怖いからって、自衛隊を形ばかりでも派遣しておけば恰好がつくなんて考えたらしい。東京条約を白紙に戻そうとしてな。それだけのために派遣した。そいつの矛先をA．K．Dに向けちまったんだ！」
「条約では、派遣は出来ないようになっていると？」政治家の妻らしい都子。
「連立政権、もうだめね」と、紫音。
「ああ。海自はともかくも空自は全滅だ。さっき、事実関係を確認したA．K．Dが国連安保理に徹底抗議した。同盟関係を裏切っての侵略行為。明白な東京条約違反だとしてな。完全な国際問題だ。安保理が動議に入った以上、対日制裁を承認するのも時間の問題だ。最悪の場合」敏夫はそこで一息ついた。
「武力制裁」紫音がそれに続いた。
「そうだ。これで連立政権は確実に崩壊する。国民の意志のみならず、世界の意思に反したとして……。政権はもうだめだ。わが党だってどうなるかわかったものじゃない！まったく、連立政権作るときにはあれだけ苦労して、崩壊するときはすぐだ！」
敏夫は深刻そうな顔をして俯いた。
「何のために頑張ったのか……」
「あっ、あの、お父さん？」
光波は、ビールの瓶を持って父親の側に寄った。

「ん？」
「わっ、私ね？難しいことはよくわからないんだけど、でも、せめて今くらい、休んだ方がいいわ。つぶれちゃうよ？」
「……」
「秋谷の叔父様も言ってたじゃない。お父さんはこれから必要な人だって。だから、ね？」
「……すまんな」
苦笑しつつ、彼はグラスにビールを注いでもらい、口を付けた。
それを横目に見ながら、つまらない番組に飽きた紫音がチャンネルを変えたその瞬間、
『綾崎提督！！』
その一言に、ブッ！！と、折角のビールを思わず噴き出してしまった。
「なっ、なに！？」
『どうなんです？勝ち目は！？』
『あってほしいね』
その声は、彼の家族には嫌でも聞き覚えがあった。
「なに？どうしたの？お父さん？お母さんも？お姉ちゃん？」
ただ茫然としてＴＶを見つめている父母、そして姉の様子に、光波はなにが起きたのか判らなかった。
画面には、ビシッと制服に身を包んだ士官が映し出されていた。
「へぇ～っ！かっこいい！」
光波はいかにもなことを口にした。
本当に、彼女は綾崎が誰か、この時わからなかったのだ。
「あっ……あの！！！」父は声がうわずっていた。
「どうしたの？」
「あの馬鹿息子が！！」
普段、冷静沈着常時平然がモットーの父が、珍しく怒鳴り声をあげた。
「ええっ！？」

「ま。いいんじゃないですの？」と、母は意外と冷静だった。
「生きてるんなら、それで」
真名の母も、綾崎の母も、強かった。

【広島県呉・某温泉旅館】
入口には「大和会・武蔵会御一行様」とあった。
彼らは大和と武蔵に乗ったかつての乗組員達の生き残りだった。
彼らは年に一回、こうやってかつての苦労を分かち合うために会合をもっていた。
彼らは酒も飲まず、蟹も牡蠣も口にせず、それらが冷えていくことも気にせずにただテレビに見入っていた。
そこには、彼らが夢見て果たせなかった戦艦を砲撃する大和が、現実の姿で映し出されていた。
『よし！頃合だ、突撃する。間合を詰めるぞ。通信、全軍に発令、天祐を確信しつつ、全軍突撃せよ！』
かつて、悲壮な全滅戦を発令した彼らの将軍が言った台詞を、大和の艦長は勝ち戦で言っていた。
「戦っとる……」
「大和が……」
「武蔵が……」
「わしらの夢が……」
彼らは泣いていた。
幾度と無く、無数の日々、敵戦艦を撃沈するという夢に焦がれてきた彼等だ。
しかも大和に乗っているのは、当時の彼等と少しも歳が違わないような若者達。
かつての無念を五十年目にして果たした気がしたとしても、無理はあるまい。
閃光が走る。ハウがまるで分解されるように構造物を吹き飛ばされ、横転した。

ほんの数十秒の出来事だった。
彼らは年を忘れたように歓声をあげた。

一人で留守を守っていた真名は、じっとテレビを見つめていた。
今、自分の最愛の男の無事が確認された。ほっと胸をなで下ろす。
三船真名ー。
天才児として、そして類い希なる美貌の持ち主として、その人生は光り輝くはずだった。
だがそれは、中学2年の秋、初恋の先輩に純潔と共に散らされた。
その後も関係を強要された真名は、親の勧めに従い山本を頼って逃げるように学園に入学。そこで出会い、彼女の傷を癒してくれたのが、綾崎だった。

『砲撃を続行しろ！こっちが苦しいときは敵も苦しい！耐え抜くぞ！』
例え自分がいなくてはろくにご飯も食べられない生活無能力者でも、仕事をする時は真剣そのものだ。
（うーん。やっぱりプロの仕事をする男の横顔ってカッコイイなぁ）
とか考えながら、真名はその姿に惚れ惚れしつつ、テレビを見ていた。
しかし……。
『なんなら、女紹介してやるぞ。女子高生から教師まで、看護婦、ＯＬ、婦警に軍人なんでもござ いだが？』
グワチャッ！！持っていた湯飲みが手の中で砕けた。
真名にとって綾崎の唯一許せないのが、この点だった。
冗談とはわかっている。しかし、そうわかっている上でも許せなかった。
「まったくもぉ～っ！！」
自分でも苦笑してるんだか怒ってるんだかわからなくなる。思わ

ず口もとがほころんだ。
『回避可能性１１％、回避を！』
スピーカー一杯に爆音が聞こえてきた。
大和の周囲に水柱が立ちのぼり、その間で閃光がきらめいている。
直撃。それも従来とは規模が違う。完全包囲網下での集中砲火を受けたのだ。
水柱の中、煌めいている閃光は、間違いなく大和が被弾したことを示していた。
真名はとっさに目をおおった。
「おっ、おい……ウソだろ……」
シャーロットは、茫然自失の声で水柱が立ちのぼる大和の方を見つめて言った。
さっきまで砲弾をぎりぎりで避け続け、悠然と砲撃を続けていた大和は、水柱の中にとらわれたように出てこない。
「そんな……」
真名は怖くて目が開けられなかった。
左手の薬指のリングが、小刻みにふるえる。
ザァァァァ
水柱が段々と収まっていく。
『なにっ！？』
その途端、水柱の中から赤黒い物体が残光をきらめかせながら飛び出していった。
『神様！』シャーロットの歓声が聞こえる。
真名は思わず顔を上げた。
大和は沈んではいなかった。各所から煙を吐きあげつつも、戦闘を続けていた。

第五部　決戦！　3

●信ずるもの　　マーカス島沖現地時間午後６地４０分

「第１砲塔、使用不能」

全身血塗れとなった参謀が席から立ち上がった艦長へと報告した。

艦長の大切な古くからの部下の一人だった。

「各部の浸水が激化しております。本艦はこれ以上、僚艦に追従することは不可能です」

「総員退艦も間にあわんな……」

艦長はかろうじて艦隊の位置を示し続けているディスプレーを見た。

横陣を敷く敵艦隊に対してくさび形に突っ込む艦隊は、かろうじて維持されていた。

敵が近い分、命中率が敵味方共に高くなっている。

爆発と激震が艦を揺るがし続けていた。

「第２砲塔に誘爆の危険性が発生！！」

「注水急げ」

「後部艦橋に命中弾、副長戦死！！」

「右舷対空砲塔群に命中弾２！！」

「左舷の装甲が剥離しました！第２機関室に直撃、第２機関室応答しません！」

各部から、自分の艦の断末魔の悲鳴が聞こえてくる。

「ハルツバッハのカーン司令です」

不意に通信士官が報告した。

「おう」

「速ヤカニ退避ヲ開始セヨ。貴艦ハ義務ヲ果タシ終エリ。以上です」

「了解。返信だ。貴信了解。ワレ、コレヨリ任意ノ方角ヘ避退ヲ開始スル」

「はい」
通信士官が通信機にとりついた。
ぼんやりと目の前で砲火を開く敵艦の姿を見ながら、艦長はさらに命じた。
「操舵、取り舵１０度。速度維持」
「艦長！？」
艦橋にいて生き残った部下は皆驚愕の面もちで艦長を見た。
それでは敵艦に突っ込んでしまう。

その光景を目撃した第3戦隊のカーンは、唖然とした声をあげた。
「どっちに行くんだ？それでは……、おい、方角を変えるように言え！」
「はっ！」
通信士官が通信機を動かして、すぐに彼はカーン目がけて悲鳴のような声を挙げた。
「ビスマルクより返信、ワレ、ヴァルハラへ向ケ避退シツツアリ、貴隊等ノ助力ニ感謝ス……以上です！！」
声にならない声で呻いたカーンは肘掛けを叩くと、絶叫まじりで命令を下した。
「全艦へ発令。全砲門をビスマルク前方へ向けろ、突入を支援せよ！！」
とっさに命じた彼は、恐らく敵指揮艦であろうアイオワ級戦艦へとよろめきながらも突撃していくビスマルクをやりきれない表情で見ていた。
限りなく近い未来の自分の艦を見ているようで嫌だった。

「敵艦、突っ込んできます！！」
「なっ、何を考えてやがる！！」
やられる方の艦長は真っ青になって叫んだ。
（俺達は帆船時代の戦艦に乗っているんじゃないぞ。こんなチャ

ージがあっていいものか！）

後に『カーン・チャージ』と命名された第2戦隊の捨て身のチャージを横腹に受けた彼等は、一様にその無謀さに驚き、そして狂戦士と化した敵に恐れおののいていた。

「咄嗟射撃！沈めてしまえ！」

「前面に敵の水柱が立ち上ってとても……」

「やるんだよ！！」

砲火は一気に彼の艦に集中してきていた。

ただでさえ炎上を続ける彼の艦がまた傷つけられる。

彼は脳裏のどこかで、自分が長生きできそうにないことを感じ取っていた。

「艦長……」生き残った幹部達が蒼白な顔で艦長を見つめていた。

「すまんな。死出の旅路、つき合ってくれ」艦長は深々と部下に頭を下げた。

「いっ、いえ！」

１０代の頃から彼に付き従っているスタッフ達は、尊敬の眼差しを彼等の上官へと向け、敬礼した。

「光栄であります！！」

彼等は皆、妙に晴れやかな高揚感に包まれていたのである。

艦長はこの段階にあっても持ち場を離れようとしない乗組員達を、満足そうな顔で見回した。

「すまん。だが私は、貴官等と共に戦えたことを誇りに思っておる」

これは、第３代目海洋冒険部外洋艦隊司令官を勤め、戦艦ビスマルク艦長となった男にして初めて言えるセリフだった。

「満足だよ。敵とはいえ、後輩共があれほどの活躍を。そして世界の檜舞台に上れるだけの力を持っていると納得できたのだから」

「一声、かけてみたかったですな」

死にに逝くというのに、艦橋に笑い声がこだました。

命中弾と爆発は、まだ続いていた。

「被害報告！」

またもシートからはじき飛ばされかけた綾崎は、シートに再度腰を下ろした。

俄に口の中にで血の味がした。

『左舷２番対空レーダーシステムダウン！右舷鋲鎖庫破損！右アンカー脱落！バランサー装置修正作動中！第４０１および２０２区画の自動消火装置がシステムダウン！補正不能！同区画を閉鎖します！艦首方面に浸水警報が発令されました！！』

『艦管理指揮所です！右舷第２区画浸水！応急処理が済むまで速力を下げて下さい、２０ノット以上出すと危険です！』

「ダメコンいそげ。機関、速力を下げろ」

大損害だった。油断したわけではない。フリードリヒとニューメキシコが連携プレーを展開したため、フリードリヒの砲弾をよけたところへ５１センチ砲搭載艦ニューメキシコの砲弾８発が飛び込んできたのだ。直撃だった。

しかもそれらは、偶然ながらも大和の脆い部分に見事に配分されていた。

急旋回を行うことで、被害は確かに最小限度といえるまでに食い止められていたが、『悪いけど、あの時はね、幾見中佐辺りが指揮とっていたら、俺達全員戦死してたね』と、操舵手の香取大尉が述べたように、潜水艦で得た操艦のノウハウを、大和の優れた旋回性能があれば発揮することが可能であることを、綾崎が知っていたからこそ、出来た技だといえた。

良く言えば天才的。悪く言えば無茶苦茶な荒技だ。

その無茶苦茶さこそ、大和を救ったのだ。

大和を襲ったのは、ニューメキシコが最後に放った砲弾だった。

この時、ニューメキシコはすでに多数の命中弾を浴び、浸水が激

化。戦線離脱をはかりつつあったのだ。そこで行きがけの駄賃がわりに、大和への砲撃を実施。これを命中させたのだ。

その真ん中にいた炎上するアラバマが邪魔で、ナツも綾崎もその砲弾が回避不能ギリギリに来るまで気づかなかったのが、大和の失点だった。

「二水戦、突入！魚雷発射！命中まであと４分！」

「第一戦隊、敵部隊と交戦中！突破次第本艦と合流予定！」」

「米軍、戦艦１隻を撃沈！」

「敵５番艦沈黙！」

「米軍の攻撃で敵別働隊３番艦沈黙、６番艦、横転しました！」

「豪州海軍苦戦しています！」

司令塔にいるオペレーター達は、混乱しつつある各艦、もしくは各戦隊が全国連軍向けに発してくる通達を報告するのに手一杯で、オーバーワークどころの騒ぎでなくなっていた。彼女達の可憐な声は、もう完全にかすれていた。

だが、事態は彼女達に水筒の水を飲ませる暇すら与えてはくれなかった。

「米軍第３戦隊が総崩れです！敵が第３戦隊を突破しようとしています！！」

「なんだと？」

綾崎は応急処置の指示を副長と連絡をとりながらやっていたが、オペレーターの報告に、不意にその手を止めた。

「第３戦隊が総崩れだと？」

第３戦隊は、戦艦主力の、位置的には大和の背後に存在する敵別働隊からの攻撃防御の要の位置にいた。それを敵は食い破ったというのか？

「続報、米軍第２戦隊旗艦が爆沈！第２戦隊は、戦様の建て直しのため、一時離脱！」

これは国連軍の完全な敗北を意味していた。

「まずいな……」

「いかがします？」
「ん？」
「一度離脱して再起を計るという手もありますが？」
「佐藤少佐」
綾崎はややきつい声で、今まで戦闘記録を取り続けていた次席参謀に言った。
「姑息なんだな」
「違います」
彼はそれをきっぱりと否定した。
（嘘つけ……貴様は一度も前線に立ったことなんかないくせに…）
「戦略と戦術では勝利のあり方が違います」
「フム……」
「このまま離脱すれば、残りを米軍に任せて勝利をモノにすることが……」
綾崎は一瞬、佐藤に殺意を覚えた。
皆、口にこそ出さないが、疲労の色は確かに濃くなっていた。
綾崎とて、それははっきりとわかっていた。
「離脱すべきです！」
「戦うべきです！！ここで逃げることは出来ません。絶対に！！」
山本はキッパリと言った。彼とて休めるのなら、休みたい気持ちはある。
が、皆が激戦に耐え抜いているのだ。
「戦うべきでゴワス！！」神参謀は叫んだ。
「ここで引けば、我々は世界中の笑い者でゴワス！戦略的勝利も、ここで引けばいつ得られるかわかりません！ここが正念場なのでゴワス！」
サポート役として戦略や戦術にも精通し、上官をもり立てることでは水上艦隊有数のこの九州の快男子は、一気にまくしたてた。
「やるべきです！！」
「わかった。考えてみる」

綾崎の返答はあっさりしていた。
「冴子。砲塔が加熱した場合は任せる。好きにやってくれ」
「敵別働隊、本隊と合流を目指す模様です。敵は米第3戦隊の陣中突破に成功しつつある模様です」
「……えっ！？」
その意外なモノに、敵の通信を傍受しようとしていた女性通信参謀士官は、思わずヘッドレストを構えなおした。
「何ですって！？」
「どうした？」
「敵艦同士の交信が傍受できましたが……妙なことを言っています」
「言って見ろ」
「はっ、はい」
彼女は、口ごもりながら、メモを読み上げ、文面を報告した。
敵に日本人が中心となって編成された艦が存在すると、小耳に挟んでいたことも影響していた。
だからこそか、その報告が真実ではないことを祈っていた。
「ビスマルクのヒムロ艦長から戦隊司令官のカーン少将宛の通信です」
「ヒムロ？」
「ご存じで？」
神が訊ねた。
「確か海洋冒険部外洋艦隊の3代目の司令官だ。同士を集めてＩＢＣに帰化したと聞いているが……」
「あの……」
「すまん、続けてくれ」
「はい。ワレ、ヴァルハラへ向ケ避退シツツアリ、貴官等ノ助力ニ感謝ス……以上です」
その報告終了と共に、バンッという音がした。

綾崎が肘掛けを叩いたのである。
唇を強く噛み締め、きつく握られた手は小刻みに震えていた。
「……そうか」
ようやくそれだけ言えた綾崎は、制帽をかぶりなおした。
山本は眼を閉じ、心の中で死にゆく彼らの冥福を祈った。神は唇を噛み締めて彼らのいるはずの方角の海へ向けて敬礼した。
「提督、米軍より報告です。敵戦艦……ビスマルク級と推定されますが、ニュージャージーに体当たりを敢行したとの報告が」
「うむ……」
閃光の後、米軍の方角でねばっこい爆音が響いた。
「防空指揮所より報告!!米軍方面で大規模な爆発発生!!詳細不明!!」
「提督!!」
「引くべきですぞ!」
「考えて見ると言ったはずだ。だが、その代わり」
「は?」
「佐藤少佐。速やかにここを出て自分の任務を果たしたまえ」
「いっ。いえ!自分は!」
佐藤が口ごもった時、さらなる報告が入った。
「米軍より報告!!ニュージャージーが敵艦と一緒に爆沈しました!」
第3戦隊旗艦が沈んだ。敵は背後からもくるかもしれない。
「やったか……」
「そんな……」
グライムズは、信じられないことを聞いたように思わず言ってしまった。
「そんな馬鹿なことが……」
「馬鹿なことではない!!」
爆音ですら圧するような綾崎の罵声が艦橋に響いた。
「何が馬鹿なことだ!!」

「サッ、サー？」
グライムズのみならず、居合わせたほとんどの隊員が、綾崎がそこまで激したのを見たのは初めてであった。
グライムズは、生まれて初めて殺気というものを感じ取った。
「あれが軍艦乗りだ」
グライムズから視線を戻した綾崎は言った。
その殺気に押されて、ただ口をパクパクさるグライムズに、綾崎は再び言った。
「いいのか悪いのかは知らん……だが、よく覚えておけ。あれこそが軍艦乗りなのだ！！生きて還れたら、絶対に忘れるな！！」
綾崎は蒼白な顔をしている佐藤を睨み付けると、厳しい声で命じた。
「佐藤少佐。これは命令である。速やかに持ち場に着け」
「いっ、いえその……」
「なぜだ？」
綾崎は殺気のこもった声で尋ねた。
「貴様、なぜここにいる？」
「あっ、あの！」
「代わりに答えてやろうか？ここが一番安全だと踏んだからだろう？」
「いっ、いえ！自分は！」
「先任士官！！」
「はっ！！」
艦橋入口に立っていたミハイル・ハルツバッハ中尉が一歩前へ出る。
「スマキにして甲板に放り出しておけ。軍法に基づき司令権限を持って佐藤少佐を軍務放棄で処刑する。猿轡を忘れるな」
「はっ！！」
ミハイルは持っていたロープでわめき散らす佐藤を一気に縛り上げてから、米俵のように軽々と担ぎあげると、艦橋を出ていった。

「回避！取り舵だ、取り舵！」

「何でもいい！逃げろ！衝突するぞ！」

カーン・チャージを横腹に喰らった第３戦隊が大混乱に陥っていたことは前述したとおりである。

その中の一隻が火だるまになりながら友軍の戦艦に特攻を敢行するなど、誰が考えたろう。ただでさえ混乱しがちな混戦の中で、彼らがさらなる混乱の中に陥ったとしても、それは決して異様なことではない。

今まで猛烈な砲火を開いていたニュージャージーは、接近する敵艦から逃げるために舵を切っていた。だが、敵艦の方がやや速かった。

ニュージャージーは、艦尾Ｃ砲塔真横に艦首を突き立てられ、そのまま真っ二つにされた。敵艦もろとも彼女が爆発したのは、接触から１０秒後の事である。

「戦艦でカミカゼやる奴がいるのか！？」

慌てたのは第３戦隊の後続艦である。単縦陣形をとっていた彼らは、その間間をすり抜ける敵艦に大損害を受け、そして与えていた。だが、彼等の先頭艦が爆沈したのである。あまりのことに対応が鈍った彼らに待っていたのは、友軍同士の衝突の危険性であった。

この時、二番艦が先頭艦の爆発の余波を受けて艦首を損傷。戦闘速度を出していた彼女の体内に大量の海水が進入。隔壁を突き破ってしまった。三番艦がつんのめるようにして停止した２番艦を回避するのは、少しばかり難しすぎた。

激戦はさらに２０分以上にわたり続いた。

カーン戦隊は、そのまま第１戦隊の退却路確保のため、大和の照準を少し狂わせる程度の射撃を行った後、さらなる混乱を敵に与え、撤退の時間稼ぎをするために米軍第１戦隊と交戦状態に入った。

というより、国連軍もＩＢＣも、大和とフリードリヒの戦いのす

さまじさに、手を出すことを躊躇ったのだ。
双方ともにすんでの所で砲弾を避けあっている。まさに決闘だった。
『あの時は観客になりたかった。観戦武官として、ナマでもう一度見ることが出来るなら、いくら金を払っても惜しくないよ』
と、戦後、国連・ＩＢＣ双方の軍人達が語り、そしてこの時の僅かの戦闘シーンだけのビデオが爆発的に売れた程の激戦。それが大和とフリードリヒの最後の戦いだった。

「第１戦隊、敵戦艦部隊を駆逐中！」
「防空戦隊、フリードリヒに射撃集中！」
「二水戦、第３射、発射完了。命中まで４分」
「１１７区画消火完了しました」
『艦管理指揮所より艦長。全艦内の消化剤の補充完了！』
『機関室より艦長。融合炉安定。電磁推進機関の冷却装置作動良好。全開いつでもどうぞ！』
『高射砲長より艦長。あと２００メートルよせて下さい。いい加減我々にも撃たせて下さい！』
『砲術より艦長、ＨＥＡＴ弾が欠乏気味です。後５斉射分が限界です。指示をお願いします』
皆、一層の奮闘をみせるようになった。
『本当に死ぬ気だったのさ』と、後に山本は語っているが、皆その時の心情は同じだったのだ。
「高射砲長、射撃できる砲をすべて動員しろ。香取、３００メートル近づけろ。ＮＡＴＵ、照準合わせられるか？」
『可能です』
「ありったけぶつけてやれ。敵もそろそろ傷だらけのはずだ」
『了解。右舷射撃可能全砲塔動員、射撃まで時間かかります』
「頼むぞ。冴子、弾が切れたらＡＣＴ、三式の順で撃て」
『了解』

一通り指示が出終わった所で、綾崎は少しためらいがちにグライムズに尋ねた。
「グライムズ君」
「サー」
「怖く……ないか？」
「いえ！」
「そうか……」
「いざという時は、大和を枕に討ち死にします。怖くありません。むしろ名誉なことと誇れます」

戦争は将校達だけで成り立っているのではない。
地獄には兵達の方が近かった。
「軍曹、消化剤、最後です！」
「よし！補充タンクにぶち込め！太田、御手洗、倉庫に行って予備を持ってこい！」
炎熱と煙の中、防弾・耐火処理済みの特殊防護服に身を包み、必死の応急処置に挑む彼等は、すでにその数を半減させていた。
「分隊長の弔い合戦だ！！」
「おうっ！」
つい5分前まで分隊を指揮していた任官されたての新米少尉は、爆風と共に、消え去った。
部下をとっさにかばっての死だった。
少し前まで、「新米さん」と馬鹿にしていた部下で、今、彼を馬鹿にする者はいなかった。
「ん？」
その内の一人が、火災を引き起こしている区画の入り口の床に、何かか転がっているのに気づいた。
それが炭化した人間であることに気づくのに、少し時間がかかった。
一瞬、胃液が逆流した。

水密扉まではいずり出たものの、そこで力つきたのだろう。救いを求めるように伸ばされた腕が印象的だった。

彼はそれを直視しないように破孔へとホースを伸ばした。

区画を示すブロック・ナンバーは０２５、高角砲のある区画だ。

確か相原がいた分隊があそこの配置のはずだったな。

彼はその炭が相原でないことを祈りながら、部下に檄を飛ばした。

「火災さえ消えればだいぶ違う！バック・ドラフトに注意しろ！」

ついに分隊指揮官となった軍曹はそう叫ぶ。

眼に汗が入った。くそっ痛ぇじゃねぇか。

終戦の後、綾崎が一番手柄としたのは、彼等応急班であった。

●急変　　マーカス島沖現地時間午後７時０５分

前面に閃光が輝いた。

退避にかかっていた、というより漂流していたニューメキシコが二水戦の魚雷を受けて横転。沈没したのだ。

「あの戦艦、余計なマネを！」

綾崎が吠えたその時、フリードリヒが急激に舵を切ると、その右舷が一瞬、爆発したように光り、海面目がけて多数の破片のようなものを放りだした。

無論、双方共に戦闘をあきらめてはいない。

フリードリヒに敵水雷戦隊を近づけまいとした第３水雷戦隊の残存部隊は、既に城コンビの猛撃を受けて満足な反撃もままならないままにスクラップと化していた。

彼女達は巡洋艦の驚異を排除すると、フリードリヒに照準を再度合わせなおしていた。通信設備の一部や装甲の薄い副砲を使用不能にするなど、艦のあらゆる箇所に破壊をもたらせていた。だが、当然反撃も来る。赤城の後部に閃光が走る。１２７ミリ砲の一つが吹

き飛ばされた。弾薬が誘爆したらしい。派手な爆発が大和からも見えた。

「ほぅ……」

海面に、今まで見たこともないような水のスクリーンが発生した。対魚雷迎撃用散布爆雷が発射されたのだ。

魚雷が次々と爆発していく。一瞬、水の屏風が出来た程だった。

「敵もやるわ」綾崎は心底楽しそうだった。

「二水戦および防空戦隊に命中弾、各艦に損傷有り」

「田中司令、損害は？」

『おお。綾崎の。いや。少々油断したわ。いやなに。少しやられただけじゃ。沈むような船はおらん』

史上有数の活躍をした水雷戦隊の指揮官は、そういって笑った。

彼は綾崎の命令に忠実にして、己の技量の限りを尽くした戦いを展開していた。

その難易度は、下手をすれば綾崎のそれよりも高かったろう。

「そうか。速やかに離脱を、もう魚雷攻撃は効かないだろうからな」

「そのようじゃ。二水戦、これより離脱する！」

田中は敬礼した後、通信を切った。

「金城」綾崎はそのまま回線を天城の金城につないだ。

『赤城の5番砲が破壊されました！砲塔要員総員戦死！弾薬庫が誘爆、艦尾ブロックに大規模火災発生、現在消化中！』

「よろしい。よくやった。撤退を許可する。すみやかに二水戦と合流。指定ポイントに待避せよ」

『了解、防空戦隊、戦線離脱します』

一恵が敬礼したのと同時に、フリードリヒの方に閃光が再度走った。

大和が放った砲弾が、フリードリヒのC砲塔の前楯の一部に命中したのである。

ターレットがおかしくなったことは想像に難くなかった。

●反撃！！

「C砲塔基部に命中弾、ターレット損傷！！」
「射撃は可能か？」
「はっ、はい」
「なら撃て」
彼らはここが正念場であることを知りすぎていた。
フリードリヒの砲撃は、炎上が続く大和（フリードリヒも同様だったが）という恰好の的が出来たことにより、格段に命中率が上がっていた。大和の被弾はこの数分間によるものが大半であったことからも、それが解るだろう

「敵艦発砲！！」
「取り舵！！」
敵の発砲が速すぎる。敵味方共に距離をやや詰めすぎたか？と考えた程だった。
『第2砲塔A薬庫、在庫切れ！B薬庫に切り替え、時間かかります！』
『第1砲塔、砲塘内部加熱、危険水準達しました！』
「冴子、対処は任せる」
『はい』
長時間に及ぶ砲撃で、さすがに大和も疲労の色を濃くし始めていた。
やや焦りを感じ始めた綾崎が、さらなる攻撃続行を命じようとした時、フリードリヒに奇妙な異変が見えた。
「何？」
フリードリヒの艦尾で盛大な水柱があがったのだ。
先程、阻止されたと思われた魚雷が、機関の不具合から通常速度

より半分くらいの遅さで航行したのが幸いした。迎撃爆雷と兄弟達の爆発の嵐をかいくぐった彼は、目標に到達して盛大なまでの破壊をもたらしたのである。

艦尾に近い所での爆発であった。

「被害報告！！」

激震のショックで転んだスコットが叫ぶ。

「艦尾に魚雷命中！」

フリードリヒの艦橋にいた人々は、火災発生や応急注水を知らせる報告が入るものと、身を固くしていた。

だが、何も入らない。

「外れたんだ！」

参謀のナルディが歓喜を露にした声で叫んだ。別の参謀であるリンデマンも、ほっとため息をついた。

所が、スコットだけは暗い顔をして、電話に飛びつき、何事か確認した後で、

「やられた」

とうめいた。ジャネットは努めて平静な表情を保ちつつ訊ねた。

「何をかね？」

「舵です」

スコットは吐き出すように言った。

「主副とも爆圧でねじ曲がりました。折れてくれたなら左右の電磁機関のパワーバランスを逆調整することで無理矢理操艦出来ますが、先程、急旋回のために切った状態の角度のまま、取り付け軸部から歪んでます」

「なんと」

スコットはジャネットに頷いた。

「そうです。本艦はもう、大きな円をかいて旋回する以外、何もできません」

そして止めの一言が、電話でどこかとやりとりしていたリンデマ

ンの口から漏れた。
「不運はまとめてくるらしいな。どうやら、我々の運命を決するのはそれだけではないらしい」
「何だって？」
スコットはリンデマンに訊ねた。
「どういうことだ？」
「権限を越えたと申し訳なく思うが、注水の命令を出しておいた。もう、間に合いそうにないけどね」
その一言に、全員が青くなった。
「C砲塔に暴発警報が出たそうだ」

「やったか？」
突然、フリードリヒの後部から炎が噴き出し、C砲塔そのものを海上へと吹き飛ばした。
「よし！射撃を続行しろ！」
フリードリヒの反撃も猛烈を極めた。
フリードリヒは、まるで大和に姉としてのプライドを見せつけるかのように、しぶとく、そして頑強に、自らの敗北を拒否するように、大和へと砲撃を続行し続けた。

刻は午後7時を回っていた。

第五部　終わりと始まり

●終わりと始まり　　午後7時11分

「次弾装填急げっ！！」

冴子のかすれてはいるものの、張りのある、そして殺気だった声がスピーカー越しに聞こえてきた時、パッと視界が真っ白になった。鼓膜が破れるのではないかというほどの轟音が司令塔に侵入し、そして、凄まじい衝撃が、大和の２０万トンの艦体を揺るがせた。

「ぐわぁぁぁっっ！！」

「きゃぁぁぁっ！！」

『第二砲塔天蓋に命中弾1、右舷舷側に至近弾2、第2砲塔天蓋命中弾、跳弾となって昼戦艦橋に直撃、艦橋炎上中。左舷側艦橋横のレーザー発振装置および探索システム消滅！』

「グライムズ君、仕事だ。大至急、昼戦艦橋に行って被害確認を」

「イエッサー！」

グライムズはパッと駆け出していった。

「夜戦艦橋にいたらタダでは済まなかったな」

そう呟いた綾崎はコンソールを作動させ、艦の損害を確認した。機能確認のキーを押す。『機能停止』の文字が、そこかしこで点滅していた。

しかし、艦そのものの戦闘能力には全く影響していなかった。

綾崎は、大和の、そして戦艦の生命力のしぶとさに感心しながらも思った。

（船体に相当ガタが来ているな。こりゃぁ、早いうちにケリつけてオーバーホールしなくては……）

綾崎は、すでに戦後の大和のあり方について頭を働かせている自分に気づき、自嘲した。

（考える前にケリをつけねば……）

『グライムズです。昼戦艦橋は左側壁が剥ぎ取られています。夜戦艦橋にも損害がある模様。炎上は微々たるもの、消火器で消火しました』

「よし。夜戦艦橋の状況確認後、戻ってこい」

『はいっ！』

綾崎がインターホンを戻したとき、大和が放った最後のＡＣＴ全弾がフリードリヒの傷ついた船体に命中し、各所で爆発を引き起こした。

Ｃ砲塔跡に飛び込んだ一発が、つきかけていた５１センチ砲の砲弾と装薬を爆発させた。

暴発への対策が大和同様、完璧を期されているため、砲弾そのものの破壊力はそれほど期待できなかったが、それでもフリードリヒはつんのめるように急停止した。爆圧が、それに耐えられなかった装甲を貫通して、電磁推進装置に到達、肝心の推進機関のバイパスを破壊したためである。

フリードリヒから一発の信号弾が打ち上げられた。

「終わったな……」

信号弾の閃光を見つめつつ、綾崎は安堵のため息をついた。

フリードリヒは各所から火と煙を立ちのぼらせ、段々と左へ傾斜している。

「砲撃停止！山本、米国艦隊に停戦を進言しておけ。それから、フリードリヒに通信。速やかに降伏せよ。全チャンネル開放でおこなえ。急げ！」

「りっ、了解！」

「艦橋見張りより、敵、離脱していきます！」

綾崎以下、全将兵は、それを聞くと、緊張の糸がほぐれたのか、それぞれ思い思いの場所にへたりこんだ。

「終わった……」

「通信士官、全軍に停戦命令を発してくれたまえ」

「りっ、了解……」
「提督……」
リチャードは、興奮した声でリーチに言った。
「何だね？」
返すリーチの声は疲れ切っていた。
「我々は…」
唾を飲み込んむ。
「生きているんですね？」
「ああ」
「生き残ったんですね！？」
「ああ……そのようだ」
「よかった……」
リチャードは、そのまま艦長席でのびてしまった。
その人間として素直な態度が、リーチには微笑ましかった。
「さて……」
リーチは、大和に通信をつなぐよう、通信士官に命じた。
「テレビ通話は不通ですが」
「音声だけでもかまわん」
「はっ」
その時、アイオワの艦橋を、またもや閃光が走った。
「第８戦隊、発砲しました！！」
見張りが枯れかけた声で報告してくる。
リーチは何が起こったのかわからなかった。
「何だって？」
戦いはさっき終わったではないか。

「何？」
突然、接近しつつあるフリードリヒの方角に水柱が立ち上った。
「何だと？」
また水柱が立ち上った。

「馬鹿な！！」
綾崎は砲撃を続行する方角を見た。
マーカスから一時反対方向、つまり日本側へ脱出して、戦いの最中をかけて舞い戻り、叩かれ始めた敵別働隊を後方から叩こうとして失敗した米軍の戦艦インディアナだった。
再度水柱が立ち上る。腕は話にならない位、悪い。
「あの馬鹿共め、何しやがる！！冴子！！」
『はい！』
綾崎とツーカーの間柄の冴子は、間髪を入れずにインディアナとの前面に砲弾を撃ち込んだ。
ＨＥＡＴもＡＦＣも既に尽きていた。万一に備え、綾崎に言われなくてもソフト・ポイントを装填していた冴子の勘の見せ所と言えた。
インディアナの砲撃はそれで停止した。
「提督、米軍のリーチ提督から緊急通信です」
「部隊を集結させろ！香取、馬鹿共とフリードリヒの間に艦を滑り込ませろ！フリードリヒを護るんだ！……おう……提督、米軍は何をなさるんです！！」
『フリードリヒを護れ』その言葉は、先程まで撃沈させようと躍起になっていた自分の口から漏れること自体、皮肉なものだった。
綾崎はあえてそれを無視すると、インターホンに向けて怒鳴ろうとした。
『それはこちらの言うことだ！！仮にも米軍、友軍目がけて砲撃を実施するとは！！』
その耳慣れない声に、綾崎はどこかで混信していることを知った。
「誰だ貴様！」
『インディアナのウイルキー中将だ！貴様、ジャップの分際で米軍にたてつく気か！』
「やかましい！！」
綾崎は叫んだ。

「この火事場泥棒のなり損ないが！！一発でもこれ以上フリードリヒに撃ってみろ！貴様死んでもらうぞ！！」

『ああ、綾崎提督』

リーチの声がようやく聞こえてきた。

あまりの事態に、狼狽している事が解る声色だった。

「提督、フリードリヒは最早、断末魔の状態です。刀折れ、矢尽きた者に対する合衆国海軍の処遇がこれですか！これが合衆国海軍軍人の礼儀ですか！！」

綾崎は今まで押さえてきた感情を一気に爆発させた。

こうしたことにはうるさい男であった。

『やかましい！！一緒に死んでみるか！？』

「やれるものならやって見ろ！貴様、無抵抗の者を殺して誰に武勇を誇るつもりだ！」

『止めをさすだけだ！！』

「追い剥ぎだってもう少し真っ当なことをするわ！」

『なんだとぉ！？』

『綾崎提督』呼びかけるリーチの顔は、この当時、普通の主力艦のスタンダード装備であるはずのテレビ通話装置に映っていない。

ウィルキーもである。

ただ、『画像回線不通』の表示がモニターに出るだけであった。

「提督、あなたも軍人ならば、果たすべき礼儀は果たしていただきたい」

『了解しているつもりです。全軍に対して、戦闘中止と、敵味方問わない遭難者の一』

『インディアナ、本艦へ向け発砲！！距離、４５００！！』

「なにっ！？」

そのほぼ水平弾道の砲弾は、大和の周辺に水柱を立てた。

激震が大和の艦体を揺るがす。

「卑怯者め……」

誰かがうめき声をあげた。

『どうだこの馬一』
勝ち誇ったその声をかき消すように、今度は何と、アイオワ、ミズーリ、そして周辺の戦艦が一気にインディアナの周辺に砲弾を撃ち込んだ。
「!?」
モニターでその光景を見ていた綾崎達は、信じられないものを見る気持ちで、その米軍内のやり取りを見ていた。
『中将、もうこれ以上の出過ぎた真似はやめたまえ!すでに戦闘中止は命じたはずだ!!』
『ウイルキー!貴様、軍人としての最低限の礼儀も知らんのか!?』
『米軍、いや合衆国の恥さらしめ!!今度ぶっ放してみろ!俺が貴様をぶっ殺してやる!!』
『次の砲撃が、貴様の死刑執行令状のサインとなるぞ!!』
米軍の中でやりとりされる通信は、まさに米軍というものを考えさせられるに値するものであった。
「提督、南沙海軍提督宛に通信が入っています」
通信オペレーターが、不意にそう報告した。
「ん?」
「ふ、フリードリヒからです」
オペレーターが狼狽気味に叫んだ。
「フリードリヒの、いえ、ＩＢＣ独立艦隊司令長官のキース・ジャネット大将が、通話を求めています」
「なんだと?」
綾崎はリーチ達もその通信を傍受していることを祈った。
はたせるかな。その祈りは通じた。
『綾崎提督』
「はっ」
『ジャネット大将との会談は、国連軍を代表して提督に任せたいと思います』

「提督！」
綾崎は、その意外な言葉に絶句した。国連軍主力の米軍が交渉に応じるのが筋ではないか。
『しかしですな』
『米軍は礼儀を失しました』
リーチはすっぱりと断言した。
『敵の提督ともあろうお方に会わせる顔を、失っているのです』
「……了解しました」
『頼みます』

「チャンネル合わせ、時間かかります」
「沈まなければいいが、急げ」
「了解、大和よりフリードリヒ、聞こえますか？」
「提督、現在、二水戦が接近中。消火作業は順調に行われています」
「氷川は？」
「先発隊のヘリがそろそろです」
「そうか。航空参謀」
「はっ」今回、全く出番のなかった航空参謀は、ようやくの仕事にはりのある声で答えた。
「上のハリアーは、あとどれくらい飛べる？」
「はっ。最も短いもので後３０分弱です。氷川までは飛行可能です」
「飛行甲板は？」
「連絡用の小型ヘリ１機程度ならばまだしも、ハリアーでは危険です。応急処置はしていますが」
「そうか。氷川のヘリ到着までに何とかしろ。だめならヘリを前甲板に降ろせ」
「了解しました」
「冴子、第１砲塔をどっちでもいい。向けておけ」

『了解』
「上空のハリアーは氷川にでも降ろさせておけ」
そういって、ふと、半径１００キロ以内にいる水上艦隊所属各艦の所在地を示すモニター（３ＷＭ）を見た綾崎は、そこに信じられない物を見た気がして、我が目を疑った。
「なに？」
「どうなさいましたか？」山本が訊ねた。
「３ＷＭを見ろ。なんでこんなことになっている？」
「はっ？」
モニターには、大和から８０キロ離れた所に、こっちへやってくる２６隻の艦の姿を映し出されていた。
ＣＳは須磨、ＨＳは氷川であることはわかる。ＥＷＦで始まる５隻は巡洋艦。ＤＦはフリゲート艦。氷川の護衛任務についてるのは知っている。だが、数が増えているし、それに、そこになぜＨＱＳＳの表示がなされている？
「これは一体」
「なぜ蒼龍が？」
「蒼龍だけではないぞ。見ろ、配備されたての瑞鳳と祥鳳もいる。配備されているよりも巡洋艦が３隻、フリゲートが６隻増えている。病院船は浅間と阿蘇だな。こりゃ、水上艦隊の稼働総戦力の４割近くだぞ？」
瑞鳳と祥鳳は共に強襲揚陸艦である。一隻２００億という高額で購入、つい一週間前に納入されたばかりだった。乗員はようやく航海が可能な程度しかいないはずだ。
「成る程な！！」綾崎は爆笑した。
「まさに火事場泥棒だ！！」
綾崎は笑いながら言った。
「あいつらよりこっちの方がよっぽど火事場泥棒だったわけだ！！」
「あの、提督？」

「第1機動艦隊だよ」笑いながらそう言った。
第1機動艦隊は、現在、空母主眼の統合軍が有する唯一の機動部隊であった。
いわば水上艦隊の虎の子の部隊である。
「それは基本的なオーダーを見ればわかりますが。なぜ奴らが？」
「蒼龍から通信は？」
「ありません。コードを変更しておりますから、現在照合中です。しばらくお待ちくださいい」
「点数稼ぎだといったんだ」
「……ああ。成る程」山本と神は納得したらしい。
「理由はどうとでも付けられる。救難艦としてとかなんとかな」
「総司令部は、水上艦隊の維持費をまるまる日本政府に肩代わりさせる気ですか？」
「らしいな」
おかしなことだ。皮肉だよ。こっちが戦術単位では完璧と思っても、戦略で物を考える奴がいる。あなたは私より何枚上手なのですか？陛下。
このような事態に接しておきながら、冷静に物事を見て、さらなる利益すら考えられていらっしゃるとは……。
あなたは本当に、転んでもただでは起きない方のようですな！！

「コードつながりました。第1機動艦隊の有馬大将が出ます」
狩野粒子の影響で細かいノイズが入るが、そこには人の良さそうな男が出た。
「ご苦労」
「いえ。綾崎提督。戦勝おめでとうございます」
「ありがとう。所で、なぜ貴官がここに？」
「救難機の移動基地ですよ」
「ほう？」
「実は、米海軍は、国連にも、派遣軍にも内緒で、虎の子の空母

を主力とする上陸部隊を編成。２日前に奇襲戦でヴィクトリー島への上陸作戦を展開しようとしたのです」

「それで？」

「失敗したのですよ」有馬は表面に多少の侮蔑を浮かべて言った。「敵艦隊にとりつかれまして。挙げ句に無条件降伏。空母から何から、すべてが敵の手に落ちたというのです」

「ふむ」

「国連はこの海域で起こる事態に関して、米軍の空母を救難者の捜索に当てようとしていたのですが、米軍の失敗というか暴走のおかげで空母がない。それで、国連がうちに訊ねたところが、ある。これは！とでも思ったのでしょうな。我々は訓練航海終了間際にかりだされまして」

「ご苦労なこった」

「これより、我々は貴殿の指揮下に入ります。救難活動開始の許可、求めます」

「聞いてないぞ」

「仕方ありません」有馬はさもありなんと言う顔で頷いて見せた。「長官の特命を受け、完全な隠密部隊として活動していましたから」

「成る程。わかった。ハリヤーを全機、そちらへ回す。回収してくれ」

「了解しました」

「ところで先任士官」

指示を出し終わると、綾崎はふと思い出したように先任士官に訊ねた。

「はっ！」

「佐藤の馬鹿はどうなった？」

「衝撃で海に吹き飛んだのは確認しています」

「あっ……そ」

「提督、フリードリヒとの通信、繋がりました」

オペレーターのほっとした声がした。
綾崎は襟を正し、シートに座り直した。

戦闘終了を告げる指示が、この臨時看護所にも聞こえてきた。
後に残ったのは、歓声でも安堵のため息でもなく、痛みに耐えるうめき声。そして、血と消毒液の匂いだった。
「軍医長」
血塗れの包帯に身を包み、床に横たえられたままの負傷兵の看護に当たっていた看護兵が、妙に感情が消えた声で手術台から離れた軍医長を呼んだ。
「ん？」
「菅原……少佐が……」
「どれ」
血塗れの白衣の軍医長が、ごつい手で脈を取る。
彼も血にまみれ、その外見は負傷兵と区別が付かなかった。
普段ならとがめもするだろう看護兵は、そのことで眉一つ動かさなかった。
彼は時計を見た。
「記録しろ」
「はい……」
焦点のあっていない虚ろな眼で、看護兵は答えた。
「午後7時35分。菅原義男少佐、戦死だ」
死に水をとっておけ。と告げると、彼はうめき続けている負傷兵が乗ったままの手術台の方へと戻っていった。
「はい……」
「お前、幸運だぞ。お前の亡くした脚な、パーツの在庫があった。移植出来るぞ。頑張れ！」
軍医長は励まそうと明るい声で負傷兵に呼びかけていた。
それを遠くで聞いている心地で、看護兵は、ただ呆然と死んだ負傷兵の顔を見つめていた。

少し前、明るく挨拶を交わしたあの人と同一人物とは思えなかった。
砲声もなく、ただ、推進機関の音が響く艦内ー。
ああ。なんて空しいんだろう。
なんで、みんなこうやって死ななくてはならないんだろう。
看護兵は、ふと、自分の手を見た。
血で赤黒く染まっている。
その手の向こうには、人の亡骸が横たわっていた。
その死に顔は、妙に安らかだった。

ねぇ。義男さん？あなた。なんでそんなに楽しそうな顔してるの？
あなた、死んだのよ？

「克美！」
そっとしておきたかったが、このままでいることの危険性を知っていた軍医長である彼は、自分の妹である看護兵の頬を叩くと、自分の職務に忠実に戻そうとした。
戦場でメスを握るなぞ自分だけでたくさんと思っていた。
妹の学費を稼ぐためならば、かまわない。我慢してやると考えていたこの地獄に、よりにもよって妹が来たことを、その運命の皮肉を、戦場について何も考えていなかった妹の軽率を、何よりそれを止められなかった自分の無力を、彼は恨んだ。

●創造と破壊の狭間で　　マーカス島沖現地時間午後7時４０分

ＩＢＣ艦隊は降伏しなかった。
大和の呼びかけに対して、ＩＢＣの艦として、行動不能とは言え、この海域に残ったフリードリヒ・デア・グロッセが交渉に応じただ

けであった。
彼女は浸水が酷くなり、８時までには沈没するだろうと、艦長自らが言った程の損害の傷ついた体を浮かべていた。
すでに機関は停止。核融合炉の閉鎖も完了したという。
傷ついた乗組員達が、互いに助け合いながら、退艦を開始していた。

大和は彼女に平行に艦を止めた。双方の生き残った僅かな連絡艇がゾディアックを搭載してすでに救助活動を開始しようとしていた。

全世界がそれに注目する、後々まで『最後のサムライと老騎士の別れ』と語り草にまでなった会談が開始されたのは、午後７時４０分、フリードリヒのジャネット大将に大和の綾崎が通信をもたらす形で始まった。
ジャネットは相手の若さに驚き、そして綾崎は血塗れのその姿に驚いた。

「……ＩＢＣ独立艦隊司令長官、キース・ジャネット大将じゃ」
「南沙帝国軍水上艦隊第１１任務部隊司令官、綾崎悠矢大将です」
それぞれの間でモニター越しの敬礼が行われる。
ジャネットは、シートに座ってはいるものの、白い軍服を、真っ赤に染めあげていた。
自らの血にせき込む彼の脇の質素なテーブルには、ウイスキーの入ったグラスが置いてあり、彼の右斜め後ろには、スコット艦長が、左斜め後ろには参謀長のリンデマンが立っていた。
「見事な戦いぶり。敬服いたしました」
綾崎は制帽を脱ぐと、深く頭を下げた。
「いやなに。年の功じゃて」ジャネットは自嘲気味に言った。
「いえ。お陰でこの綾崎、己の未熟さを痛感いたしました」
「何の。お前さんはまさに天才じゃった。是非とも味方に欲しか

った」
「……その未熟ゆえ、多くの部下を死地に追いやってしまいました」
しばし、双方は沈黙した。
「……馬鹿な戦いだった」
「全くです。共存の道はあったはずなのに……」
綾崎は嘆くような声でそれに答えた。
「だが、我々軍人は命令が下れば、いかに愚かしい行為でもやらなくてはならない。因果なものじゃな」
「全く、政治が無能だと、我々が尻拭いをさせられる」
「我々軍人はいいところ道化じゃ」
「道化には道化なりの生きる道があります。ジャネット閣下。潔く降伏を。無駄死にはなさらないように」
「のう。……綾崎提督」
「はい」
「ワシ等は、自分の生きる道を求め、アーダベルトの元で幾多の苦難を乗り越えて国を作るために戦った。だが、ここで戦って、お前さんは何を得る？」
暫しの沈黙。
「……戦いで得るものとは、果たしてなんでしょう」
綾崎は少しだけ悲しげな笑みをみせた。
「小官が愚考しますに、得るものより失うもののほうが多い気がします。恐らく、その問いには、容易に答えることは出来ないでしょうな」
「戦いとは、そういうものかもしれんな」
「かもしれません」
「それがわかっていて、なぜ戦うのだ？ワシも実は六十年戦い続けたが、それが判らない」
「小官の五倍近い軍歴を誇る閣下に判らないものが、若輩者の小

官風情に判るとは思えませんが、小官は、最良と愚考させられる言葉を、かつて上官から伺ったことがあります」

「ほう。伺おう」

「人の心にはどんな形であれ、必ず鬼が住んでいるというのです」

「鬼？」

ジャネットは怪訝な顔をした。

「そうです。鬼は死ぬまで人の心を捕えて放さない。我々軍人には、戦いの鬼が住んでいる。その鬼に囚われた以上、戦いを渇望してしまうのだ。と」

「なるほど。アーダベルトも中々の男だが、お前さんのところの女帝陛下も余程のお方と見える……フム。お前さんは、その御仁の下で戦えることが誇りかね」

「無論です」

ジャネットは、この時の綾崎の様な、晴れやかな眼をした人々をどこかで見た覚えがあった。

それは、日曜ごとに、天に最も近い所に集う人々の眼だった。

「そうか……」ジャネットは感心したように言った。

盲信とか、そんな言葉は浮かんでこなかった。

「信じられ、命まで預けられる上官とは得がたいものだ……じゃが、お前さんは、その御仁のため……そして戦の鬼に支配されているからのみ、戦ってきたのか？経験則から言って、戦の鬼に取りつかれた者は、死ぬまで戦から逃れることは出来んぞ」

「ならば……」

「ならば？」

「いっそそれに身を任せてみるのも、また一興でしょうな」

「危険だ」

「勿論」

綾崎は再度、軽く笑ってみせた。

「求めてみるつもりです。戦場でしか己を見つけられないなら、それを見つけられるだけの、より強い敵を、より高度な戦いを」

「罪もない幼子を殺し、その武勇を誇ってでも……か？」
幾らか侮蔑が混じっていた。
「戦いにおける最高の勝ち方とは」
それに対して、綾崎はきっぱりと言い切った。
「戦わずして勝つことです。それを求める高度な戦いを。そして……」
綾崎は、ため息をつくと、晴れやかな声で言った。
「全力を尽くしてなお勝てない、強い敵を……私は求めます」
「お前さんという男は……」
ジャネットは体を震わせて言った。
「そこまでしてなぜ戦う！？かえって判らなくなった！それがいかに不可能か、お前さんには十分以上に判りきっとるはずじゃ！不戦の勝利も、強者に勝利することも、それがいかに困難かも！それでも戦うというのか！？そして死ぬというのか！？いやいや、犬死にとは言わぬ！だが、成功率が０に近い戦場に立たされ、死に逝く者の無念さは、お前程の男になれば、もう判りきっとるはずじゃ！それなのに……」
「……」
しばらく沈黙した綾崎は、それにこう答えた。
「男の尊厳ですよ」
「ん？」
「男として生まれたからには、その信念にかけて最後の最後まで男として戦い抜く。例えその身が灰になろうとも、決して何物をも恐れず、何物をも悔いず、信ずる何かに命を捧げるために……戦い続ける」
綾崎は、一息入れて晴れやかな声で言った。
「男の尊厳とは、そんなものです」
しばらく呆然とした顔をしたジャネットは、
「……男の……尊厳……か」
と言って、クックッと喉の奥で笑った。

「重くて……疲れんか」
綾崎は、小さく笑って首を横に振った。
「それを奮起させてくれるなにかが、貴官にはあるのか？」
「…あります」
「あの女帝陛下か？」
綾崎は遠い目をして呟くように言った。
「……小官の見ていたものよりも遥か遠くを見はるかす瞳を御持ちの御方です」
「うん？」
「陛下と出会った時、小官は手に入れたのです。かの戦女神が指し示す彼方の道を。そして誓ったのです。恐れを知らぬその瞳が目指す所、どこまでもついていこう。そのため命を落とそうとも、決して恐れはすまい……と」
「……」
「それ故に、小官は自らの男の尊厳にかけて、陛下の元、戦場に立つ。そして勝つのです。それが、戦の鬼に取りつかれた小官の戦い抜く理由なのです」
双方はしばらく沈黙した。
「……ワシが６０年かけて出せなかった答えを、貴官はすでに出しているようだ」
「……」
「ワシはここに残るよ」
「しかし！！」
「先達も私が逝かなければ収まりがつくまい」
「それは閣下だけではありますまい」
「違うな」
ジャネットは頑としてそれを否定した。
「いいかね？綾崎提督。軍人たる者、命ある限り最後の最後まで戦うものだ。それを断念するのは、わしのような死にかけた者だけだ。お前さんはまだ戦える」

ジャネットは左手で腹部を触り、鮮血に染まった手のひらを見せた。
「先ほど、艦橋に食った一発でな。腹がやられた。もう助からん」
「！！」
「死に逝く者を留めないでくれんか」
「……」
「死んでいった者達が無駄死にでなかったと証明できるよう、部下を……祖国には彼等が必要だ。軍人として……、船乗りとして……、その名誉……、護ってやってくれんか……頼む」
「了解しているつもりです。自らの名誉……いえ。命にかけて、必ず……」
「忝ない。それから、米艦隊のリーチ提督に伝えて欲しい」
一瞬、ジャネットの顔が苦痛に歪む。
「……１９３８年、インド洋で、私はプリンス・オブ・ウェールズに乗っていた。卿の父上が艦長だった」
「……」
「あの船が沈んで以来、私は死に場所を求めていた。ここは得がたい死に場所だ。自らの意思で死に行く者を引き留めないでくれと、卿の父上も仰っておいでだった。私はそれを確かに聞いた。ワシは、それに殉じてみたいのだ……」
「提督……」
ジャネットは、今の彼にだけ、彼のような状況に置かれた歴戦の強者にだけ許された爽やかな笑みを浮かべた。
「満足だよ。悔いはない。軍人として戦い抜き、そして君のような強者に倒される。今まで出せなかった答えも知れた……。このような最後は得がたいものだ。実に満足だ……」
「羨ましいです」それは、綾崎の本音だった。
「……なぁ。提督」
「はっ」
「破壊の中で生まれるものもある。創造の中で失われるものもあ

る……儂等は、どちらを生むことができたのかのぉ」
「両方です」
綾崎はきっぱりと言った。
「人とは創造と破壊の狭間で生きるもの。それ以上でも、それ以下でもありません」
それ以上の答えようはなかった。
「ふっ……君はまだ若い。見事な腕だった。孫を持つなら、お前さんのような男が欲しかった。若いとはいいものだ……」
「……」
「一度、酒を酌み交わしたかったな。無駄に死ぬなよ。さらばだ」
「はっ……」
不意に涙腺が緩んだのを綾崎は感じた。しかし、それを開くことは、彼の立場が、彼の矜持が、地位が、階級が、ありとあらゆるものが許さなかった。
「いずれ……ヴァルハラにてお会いする……その日まで」
綾崎はそういって見事すぎるまでの敬礼を行った。
ジャネットは不自由になった体で、それに答えるように、スコット達と共に手にしたグラスを豪快にかかげて見せた。
「我らの独立と勇敢なる船乗り達に！」
「乾杯！」
スコット達があふれるほどの笑みでそれに唱和する。
山本も、グライムズも、佐々木も、奈良元も、艦橋に居合わせた全将官が、それらに敬礼を送った。
それは決して命令されたものではなかった。
通信はそこで途切れた。
爆音が轟く。
「傑作」と言われた戦艦フリードリヒは、急激に横転すると、閃光をきらめかせた。
最後の時がやってきた。
１９９６年１０月０２日午後７時５８分マーカス島沖南南西５５

海里。
彼女と、そして多くの将兵がその短くもあり長くもある一生を、終えた。

閃光に照らされ、高々と上がる黒煙。
それを目撃したリーチは、突然奇妙な感情に囚われた。それは、かつて日曜の朝になる度、天に最も近い場所で感じていた何かだった。なぜだかわからない。沈み逝くあの戦艦を見て、これまで抱いていた感情がすべて唾棄すべきものに感じられた。
フリードリヒが起こした最後の爆発を目撃したリーチ提督は、胸で小さく十字を切り、ささやくような声で死に逝く者達への祈りを唱え始めた。

綾崎も山本も、その場に居合わせたすべての軍人は、閃光の後も、しばらく敬礼を崩さなかった。
「……」
綾崎は、フリードリヒが沈み逝った後、ずっと目を閉じて黙っていた。
「提督……」
山本が指示を求めて声をかけた。
「……溺者の救助を開始しろ。通達をだせ」
「了解」
「各部の応急処置も続行させろ。参謀長。大至急、司令部と連絡をとり、経過報告を頼む。それから、氷川に医療活動開始の指示をだしたまえ。敵味方を問わない、救助を……」
「了解しました」
綾崎はとるべき指示をすべてとり終わると、最小限度の人員しかいなくなった頃、司令席でＮＡＴＵを呼び出した。
「ＮＡＴＵ。艦の損害はどれくらいだ。そろそろ統計はとれたろう？」

実は戦闘終了の段階でＮＡＴＵは統計を終えていた。
『大破です』
「アバウトでいいから各部に関する説明を頼む」
『はい。被弾１６発および至近弾２２発により、司令装備の２４％、対空兵装の７９，５％を喪失。左舷への対空戦闘不能。通信・電子装備は４２，２％を破損。一部で私のコントロールが効きません。船体への損傷は３４，７％。航空兵装は９２％を喪失。装甲区画はマジック・コーティングのおかげで疲労はきていません。ただし、非装甲区画は艦首３４％、艦尾６７％が損傷しました。各部のリベットが疲労。浸水が発生しています。早急な修復を要請します」
戦線投入から始まり、戦艦６隻撃沈、１隻拿捕、巡洋艦２隻撃沈、２隻拿捕、駆逐艦およびフリゲート艦５隻撃沈、６隻拿捕、３隻大破の歴史的戦果をあげた大和が自ら支払った代償がこれであった。
「砲塔は？」
「使用限界をオーバーしています。暴発の危険性は５０％を上回っています」
「すまんな。お前をここまで傷つけるとは」
『いえ。私は大丈夫ですが……』
「ん？」
『私がしっかりしてないから、たくさんの人を亡くしてしまいました』
「お前はよくやってくれた」綾崎はＮＡＴＵが他人の痛みをわかるようになったことに驚き、ある程度喜ばしいと感じていた。
『でも……』
「すべては私の拙さだ」
『菅原少佐を始め、私によくしてくれた人が……』
手元のディスプレィに戦死者のリストが出る。隊員が全滅している分隊もあった。その中に菅原の名前があった。
「……そうか。菅原も死んだか」

綾崎と彼は海洋冒険部時代の同期、喧嘩と女中心の悪友同士だった。

綾崎が荒れた時、親身になって心配してくれた親友だった。

『やっぱり、私は欠陥品なんでしょうね。きっと』

「菅原はな」綾崎は慰めるように言った。

「病気だったんだ。長くはなかった。死ぬなら大和で死にたい。死に場所くらい選ばせてくれ。そう言っていたよ」

事実だった。菅原は筋萎縮症で余命後数年の体だった。

「ＮＡＴＵ。お前は決して菅原を無駄に死なせたわけじゃない。菅原に本懐をとげさせてやったんだ」

『提督……』

ＮＡＴＵの感情プログラムの中に、未知のプログラムが生まれつつあった。バグかもしれない。だが、それは彼女にとって喜ばしいものかもしれなかった。

「皆最善を尽くして死んでいった。敵も、味方も……その中でお前は出来る限りのことをしたんだ。その気持ちは大切だが、悩むことはない。わかるか？」

『私、やっぱり欠陥品かもしれません……』ＮＡＴＵは俯いた。

『私は戦闘マシンとして開発されました。そんな感情は不要だといわれて』

「情けを知ることができれば本物さ。成長したんだよ」

『そうでしょうか……』

「俺の言うことが信じられないか？」

『いえ……』

「なあ。ＮＡＴＵ」

『はい？』

「俺は思うんだが……」

綾崎は少し間をおいた。

「人間は常に進歩してきたという。そして今、こうして霊長類の盟主として君臨している。その中で人間は多くの殺戮を繰り広げて

きた。当然、人間は戦争の愚劣さを何度も体験し、理解してきた。だが、それが一体どうだ?人類が生まれてから今日まで、それを本当の意味で実現してきたか?答えは否だ。何も学ばず、何者かによってプログラムされたように戦争戦争の繰り返しだ。お前のようなコンピューターですら残忍と思うようなことを平然とくり返している。平和を理想としてな」

『提督……』

「その平和の創造を理想として、死に逝く者に情けをかけてやれる。言い換えてみれば万人を愛することの出来るお前は、ひょっとしたら、人間よりも人間らしいのかもしれない。俺はそう思うんだ」

『私、平和の創造に役立っているのでしょうか』

「そう信じようじゃないか」

『私は必要ですか?平和の創造に』

「俺達はお前を必要としている。それが行く行くはその役に立っていると信じようじゃないか。お互いに」

『はい!』ＮＡＴＵはこぼれそうな笑みを浮かべて頷いた。

「だが、これだけは言っておく。お前には酷かもしれんがな」

『はい』

「戦闘中にそんなことを考えていたら、お前の大事に思う人間は一人残らず死ぬと思え。お前は戦闘中は高性能のコンピューターとして機能するからこそ、任務に、そして平和の創造に貢献できるのだ。余計な考えは持つな」

正論だった。ＮＡＴＵが出した感情のコントロールに関する概算の出した答えとほとんど一致していた。ＮＡＴＵは正直、これには驚いていた。

『わかりました。それが、私の出来る最良の選択なのですね?』

「そうだ……それじゃ、俺は少し休むが、警戒を怠らないでくれ。沈船に引っかかったなんてシャレにもならないからな。レーダーの不足分を補うため、二水戦に指示を。速やかに輪形陣を構築。警戒にあたれとな。なにかあったら、すぐに呼び出せ」

『提督』
「ん？」
『ある人を大切に思うっていうのを愛するっていうんでしょう？』
「ああ。そうだ」
『私、ひょっとしたら、綾崎提督のこと愛してるのかもしれません』
綾崎はびっくりした顔でしばらくＮＡＴＵを見つめると、笑みを浮かべた。
「光栄だな。お前みたいな美人で頭の切れる女に愛されるとは」
『えへへ。じゃ、ご苦労さまでした。警戒システムは従来の４３％しか働いていませんが。ご命令通りの作動をさせておきます』
「頼む」
綾崎はそういって、シートのリクライニングに身を任せると、しばらく、虚ろな思案に暮れた。
禁止されているにもかかわらず、無意識の内にタバコに手がゆく。
普段から平気で破っているとはいえ、減俸ものである。
だが、もう、そんな事はどうでもよかった。
目の前をエアコンの風に乗って紫煙が流れていく。
減俸？上等じゃねぇか。勝手にしろ。

「提督、ご苦労さまでした」
そこに入ってきた桜井がそっとマイクを近づける。
綾崎は何も答えようとはしなかった。
ため息をついて、わずかほどしか言わなかった。
「……愚かだな」
「何がです？」
「私も、何もかもが。さ」

国連軍戦死者２万３５４８名（行方不明含む）重軽傷者２万３４５９名。

ＩＢＣ側戦死者１万９８５１名（行方不明含む）重軽傷者３万１４３７名。
ＩＢＣ独立戦争における両軍の総戦死者は、これで２５万６２８７名となった。
喪失艦艇は、国連軍が４５％、ＩＢＣ側２９％。そのほとんどが第１艦隊の損害だった。戦力比は、これでＩＢＣ側に勝利宣言を出させることが出来るほどだった。
アーダベルトのカケは吉と出た。

第五部　傷跡

国連軍が、救難活動を開始していた頃、離脱したＩＢＣ残存艦隊は、途中でマーカスから略奪した２２５万トンの物資を積み込んだ輸送船団と合流。略奪した物資の大半が医療品であったという。

物資略奪に成功したことを根拠に、マーカス攻略は成功したとするＩＢＣと、ＩＢＣ主力部隊撃破（もうわかってると思うが、第１戦隊は、ほぼ全滅した）をもって「トライデントの雀取り」作戦の成功を主張する国連軍との間に、解釈上のズレが生ずることとなる。

なお、国連軍は艦隊護衛の船団攻撃を、「危険すぎる」という理由で中止。むしろ、人道的支援の観点から、物資を「支援物資」と呼称。いくらか体裁を保つこととなる。

発案者の綾羅には批判は来なかった。何しろ、作戦目的である「敵主力の撃破」は、ほぼ完全に成功したのだから。

●夢と現実

悪夢の夜が明けた。

「夜明け……か」

綾崎が防空指揮所で海を見ていた。

「いいもんだな」

「いいものです」と山本。

「生きて拝めるんですから」

「うん」

周囲には傷ついた艦船が、それこそ大は戦艦から小は救命ボートまで、数十隻がそこら中に浮いていた。

あるものは傾き、あるものはいまだに煙を燻らせている。

徹夜で行われているのだろう。排水ポンプが、艦のあちこちから出ていた。

もっと酷ければ、艦の一部だけ出して沈んでいるものもある。

「酷いもんだ」

綾崎は心底辛そうに呟いた。

昨日まで海の王者だったものがいまでは魚礁になっている。

昨日までのことが全て夢。木漏れ日と小鳥の囀りの中、自宅のベッドの中で目を覚ます。横で安らかな寝息を立てる真名の髪を優しく撫で……。

そんなことを望んでいた綾崎は、ため息混じりに首を左右に振った。

眼下に見える煤け、あちこちに被弾の後が生々しい大和の前甲板が広がっていたのを見たからである。

「これが、現実……か」

「氷川の医療活動は、ほぼ一段落しました」

山本は事務にこだわり、感慨という物を無視しようとしていた。

それが、彼なりの逃避方法だった。

「国際赤十字が氷川に合流。医療活動を開始したとのことです」

「何人、死んだ……」

その声はどことなく虚ろだった。

「艦隊全てで戦死１４１名。重傷３３３名。なお、四肢等を失った隊員５２名に関しては、軍医療法第５６条に基づき、戦死者から」

「やむをえんな」

南沙統合軍では、戦死した隊員達から、生存した隊員達に臓器類などを移植することが出来ると、軍法で決まっている。そうでもしなければ生き残った方がたまらないのだ。

故に、隊員達は常日頃から、「死んで遺体が切り刻まれても文句いうな。生き残った戦友達のためと思え」と教え込まれている。

「軍医長の話ですと、負傷者の多くは多少は支障が残る者もいる

が、一応、軍務復帰可能とのことです」
「残りは？」
「絶望的です。意識すら回復していません」
「そうか」
「米国は先程、議会が緊急会議を開催。賛成多数でＩＢＣとの講話条約の締結を決定したそうです」
「当然だな」
綾崎は、口の中で「遅すぎる」と呟いた。
「それから、ＩＢＣ独立艦隊は正式に旗艦をプリンス・オブ・ウェールズに移したそうです」
「まだ、どれくらいの艦船が残っているやら……」
「駆逐艦以上だけでも５０隻は下らないものと」
「厄介なものだが」
綾崎はタバコに火をつけた。
その煙の流れる先には、米軍の戦艦の代名詞、戦艦ミズーリ級２隻が舳先を並べて浮かんでいた。
双方ともに、マストには、傷つき、煤にすすけ、戦火に焼かれた国旗が掲揚されたまま残されていた。その船体は、大和同様、スクラップ同様の有様だった。
戦後、サンフランシスコの造船所まで運ばれた両艦は、優先的な修復を受けたものの、その修復期間は実に２年を要し、その他の艦艇の中にも、ハワイまでの航路で、高波を受けるなどして横転・沈没したものもあった。
これはＩＢＣも同様で、曳航することによって大破した戦艦３隻を初め、多数の艦艇が祖国へと生還したが、高波などで沈没した艦も存在した。彼等の受けた損傷が如何に大きなものだったかわかってもらえると思う。
「デザイン的には、悪くないんだがなぁ」
また始まった。と、山本は心の中で舌打ちした。
「優雅さがないんだよ。優雅さが」

「そんなものですか？」
「機能美ってヤツなんだろうが、俺はやっぱり好きになれん」
こんな馬鹿でもいってなければやっていられなかった。
「でも、どうせ今日はアイオワにいかにゃならんのですから。目一杯機能美に浸ってみるのも悪くないんじゃないですか？」
「う～ん」
今頃、損傷した艦の修復、戦死した兵への遺族年金の支払いを含めた軍事費負担の遂行を、統帥本部あたりが日本政府に通達しているはずだ。綾崎達も横須賀のドックの利用権を確保すべく、米軍と交渉に当たらなくてはならない。
米軍の回収艇や補給艦で編成された船団はもうすぐ接触予定だというが、本来の予定より少し遅れていた。米軍からの報告だと、海流に流されるなどして漂流中の航行不能艦の回収に思っていた以上に手間がかかっているためという。
「ん？」
上空を、爆音を轟かせながら、レシプロ機数機が編隊を組んで通過していった。航空隊もかり出されたというのか？
ラックに小型の爆弾の様なものを吊している。３名程度が乗れる小型の救命ボートである。海上に漂っているかもしれない漂流者を探しに、海流の流れにそって捜索機として出動しているらしい。
「教導隊から引っぱり出してきたようですね」
一瞬の通過の際、練習機を意味する主翼の先の黄色の２本線を見逃さなかった山本が言った。
「大丈夫なのか？あんなもので」
「評価は高いと聞いております」
「そうか」
午前７時、綾崎達が朝食をとっている時、ＮＡＴＵから報告があった。
「冬霜より警報！北北西より小型艦多数接近中！！」
「なにぃ！？」

疲労の色が濃く、食事が満足に喉を通らない隊員達の幾人かが腰を浮かせた。
「自衛隊か」その反面、綾崎は冷酷だった。
「山本、全艦に通達。接近しつつあるは自衛艦。相手にするな。とな」
「はっ」
「まったく、くだらん連中だ」
フンと鼻を鳴らして、紅茶の入ったカップを取り上げた時、通信士官が入ってきて、綾崎に通信文を渡した。
「通信です」
「ん」
グラスから口を離さずに通信文を受け取った綾崎は、そのまま凍り付いた様に動かなくなった。
その顔は、あからさまな嫌悪と怒りを示していた。
「何だと?」

「自衛隊だって?」
昨日の興奮と恐怖が冷めやらず、ようやくうつらうつらし始めたところを、リーチは叩き起された。
「相手にするな。それだけだ。私は寝る。9時になったら起こしたまえ。何かあったら、ミズーリのシェーア君の方に」
彼の答えも明確だった。

「自衛隊だと?」
「どうします?」
「一発打ち込んでやろうか?」
砲塔を旋回させておけ。というと、ミズーリの艦長はコーヒーを飲み始めた。
瞼が重かった。
「くそっ。こんなに眠いなんて、キャサリーンのベッドの上以来

だぜ」

「ジョセフィーヌじゃないんですか？」

「……ニーナかもしれん」

国連の一角、次期安保理入りを狙う日本政府が格好だけでもと派遣させた自衛隊は、国連軍にいくら呼びかけてもロクに返答を得ることができなかった。

当然である。彼等は疲れ切っていた。

海域に居合わせた者達は、敵も味方も区別することなく、互いに戦った者として助け合うことに精一杯だったのである。

遭難者は敵も味方もかまわず治療室に送られ、あるいは水葬に付されていった。

昨日まで敵だった者の間に敬礼が交わされ、時には一緒に食事をとる光景すら見られた。

そんな彼等の眼にも、自衛隊は、そして日本は卑劣なる存在に見えた。

敵味方共、「数が足りない」と嘆き続けながらの戦闘だった。

我が軍にこれだけいれば、戦局も……と、豪州海軍のとある士官が毒づいたのも無理はない。

「ねっ、もうちょっと船をよせてよ!!」

「ベスト・ショットが狙えないよ。逆光になってるんだ。あんたそれくらいわかんないの？」

「はい。こちら現場の塚本です。御覧いただけますでしょうかー」

護衛艦「しらね」に同乗したマスコミは、傷ついた各艦の様子を収めることに必死だった。

何故、彼等が今頃来たか？

何の意味もない。ただ、彼等は、首相とその政党の肝いりで、格好取りと、日本領であるマーカス島を取材する目的のマスコミを運んできたに過ぎないのだ。

戦場を神聖視する気持ちは、彼等には無いに等しかった。
彼等は海面を漂う戦死者を回収しようともせず、ただそれをファインダーに収め、『可哀想』とか『戦争の惨禍』なんていう身勝手なコメントをつけることだけに執着した。
自衛隊員も、死体を引き上げようともしない。
「なんて奴等だ!!」
「なめやがって……殺してやろうか」
ボロボロになった中でも、テレビ回線が生きていた艦で中継を傍受出来た艦の乗組員は、一様にその不敬な行為に怒りを覚えた。

国連軍の艦とのインタビューを求め、盛んに通信を送ってくるマスコミ、そして自衛隊のあまりのしつこさにシビレをまず切らせたのは、意外と近かった金剛だった。戦艦1を撃破。他の戦艦にも多数の命中弾を浴びせている。主に大和撃破を目指す駆逐艦や巡洋艦相手に戦わざるを得なかったにしても、高い戦果を得、古参艦の面目躍如といった結果を残した。
「金剛より通信です!」
「読め」
ようやくのことで返答を得られた海自の司令官は、喜びと安堵とを満面に満たせて命じた。
「はっ……ワレ、貴官等ト交信ノ必要ヲ見出セズ」
「我、コンゴウ、貴官等ノ労ヲネギラウ」
「金剛より返信」
「読め」
「はっ、ソレガ何ニナル。国際世界ノ恥サラシメ。ソンナセリフハ、ココデ戦ッタ者ダケニ許サレル発言デアル。何様ノツモリカ。日本ニ帰レ。二度ト世界ニ出テクルナ」
「米軍にも出しておこう。言いたいことはわかる」
彼も軍人である。言いたいことはよくわかった。咎めることは彼らには出来ない。

「大丈夫でしょうか？」
「形だけだ」
「アイオワより返答」
「読め」
「ファック・ユー……以上です」
「ミズーリより！」
「よっ、読め！」
「ゴー・ホーム……以上です」
「なんでだ？」
「当たり前……といえば、当たり前だな」
「こんごう」座乗の三船菊千代一佐は、納得した様な独り言を言った。
いかにも熟練したという面構えの彼は、さもありなんという顔で頷いた。
「しかし、司令の顔でなんとかなりませんか。たしか、妹さんが司令官の婚約者だと……」
「親父は認めてない」
彼は笑いながら、ヒラヒラと手を振った。
「真名の……ああ。妹の名前だが、その旦那は大和の艦長くらいでなければならないってのが、親父の口癖だったのにな……」
「しかし……」
「無理だよ」
三船はシートをずらして参謀の顔を見ながら言った。
「何しろ、相手は真名の親父が何をしているのか知らないんだ」
「なんと！！」
「真名が教えていないんだとさ。そんなことして嫌われたらイヤだとかいってたな……」
「綾崎……とかいいましたかな」
「ああ。しかし、真名もとんでもない男を見初めたもんだ」

「司令」伝令が艦橋に入って来るなり、一礼の後に彼に報告した。
「マスコミの馬鹿共の一部が、大和への接近を要請していますが」
「なに？」
「彼等にインタビューしたいそうです。いかがなさいますか？」
彼等から大和までの距離は、約３キロだった。残弾０になるまで戦って戦艦３を撃沈。フリードリヒにも８発の４６センチ砲を命中させ、大和型の正統に属する艦としての面目を保ったリルガミンが連絡のために接近しようとしていた。
「何でまた？」
「この距離ですと、映像として使えない。もっと視聴率をあげなくては。だそうです」
「どうします？」
「下手すると五月蠅いからなぁ。わかった。艦長。少し寄せろ。それから、最大戦速即時待機。いつでも逃げ出せるようにしておけ」
「了解」

「話せるぜぇ！！」
「やったよ」
マスコミは、その護衛艦の行動に、一様に色めき立ち、大和に乗艦してインタビューを行うと、盛んに本土めがけてまくし立てていた。
しかし……
「見張りより艦長！！駆逐艦数隻、本艦隊目がけて接近中！！」
という報告が、すぐになされた。
海上に双眼鏡を向けると、前方から見慣れない煤けた旗を翻した駆逐艦や、ボロボロになったそれぞれの国旗を翻した米国や豪州の同様の艦が彼等目がけて接近しつつあった。
「なんだ？」
「ねぎらいって訳でもないでしょうねぇ」
自衛隊司令部は、その意味がなんとなく分かった。

通信回線は、国連軍専用のものを使用している以上、傍受できないが。だ。

「司令、通信が入っています」

通信士官より通信を渡された三船は、青くなってとっさに全艦に反転を命じた。

そこにはこう書かれていたのだ。

『宛　自衛艦隊司令官　発　南沙帝国海軍第2水雷戦隊司令官

国連軍を代表して申し上げる。これ以上の接近行為を行う場合、これを国連軍に対する敵対行動と見なし、貴艦隊を撃沈せしめる。速やかに本国に帰還せよ』

事情を知らない。知っていてもその意味が理解できないマスコミは、艦内にとどろき渡るブーイングを響かせた。

これを指揮したのは田中だった。綾崎に言われるまでもなかった。海洋冒険部外洋艦隊上がりの彼は、海外勤務が多かったせいか、意外と各国の艦長とコネがあった。だから、知っている連中に号令をかけた。他の艦長も、いわれるまでもない。と田中の号令に従った。

田中は、恐らくはすべての国連軍の艦長がそうであったろうが、反転する自衛艦を胸くそがわるくなる思いで見ていた。

「何しに来やがったんだ。あの阿呆共め」

「わかりました。その件は大統領からもサポートするようにと命令として承っております」

「助かります」

リーチと綾崎は握手を交わした。

「今後とも、戦友と頼んで下されば幸いです。我々は喜んで7つの海のいずれへでも馳せ参じましょう」

「心強いです」

ＣＮＮがこれを報道し、当日の夕刊の一面を飾った。

国連軍がその海域から撤退を開始したのは、航行不能艦の曳航準備が終了したその日の正午だった。

まずオーストラリア、ついで米国がそれぞれ綾崎達に別れを告げてきた。

戦没者慰霊式典が終わり、綾崎達が艦橋へ戻ってきたとき、配置についていた通信兵が、綾崎にすぐに九重基地へと回線を繋ぐようにと報告してきた。

「艦隊司令部からの緊急通信です」

「何？」

綾崎は、その通信兵に、長官執務室へと回線を回すよう指示を出した。

短いノイズの後、待ちこがれていたように、見慣れたオペレーターがモニターに現れた。

「こちら、九重基地通信管理センターです」

「第１１任務部隊司令官綾崎大将だ。何か用か」

「しばらくお待ちください」

暫く、綾崎はじっと待った。

モニターが切り替わり、一人の女性が映し出された。

「長官」

藤島だった。

双方で敬礼が行われた。

「ご苦労」

藤島は、綾崎が海洋冒険部に入部したての頃からの上官に当たる才媛である。

髪をアップにして制帽をかぶるその凛とした美貌は、まさに大人の色気に満ちあふれていた。

とにかく、統合軍Ｎｏ２と目されるだけあって、比較的完成され

た人物といえた。事実、綾崎も頭が上がらない。
「いえ」
「たった今、フェイズ3が新湊基地に入港した。一時間ほど前だ」
「そうですか」
「艦隊司令官が、貴官に感謝の意を表明した」
「そうですか」
綾崎は、どこか沈みがちだった。
「武装解除は、順調に進んでいるが、どうした？」
綾崎は、俯いたまま、呟くように言った。
「もう、戦場で部下を失う苦しさを味わうことはないと思っていました。あの三日月ヶ丘以来、あの２４８名以来」
「……」
「長官、自分は……」
「私の部下でもあるのだ」
藤島は、フッと、彼から視線を外して言った。
「そして、陛下のな」
「長官」
「皆、耐えている。誰の責任でもない。だが、考えて見ろ。私はともかく、陛下のご心痛を」
「……」
「ＩＢＣの独立に帝国を介入させる案に承諾したのは陛下だ。陛下がそんなことをしなかったなら、彼等は生き続けていたのだ。そう考えてしまう陛下のご心痛を」
「長官……」
藤島は吐き捨てるように言った。
「陛下は優しすぎるのだ。その優しさが、陛下を傷つけてしまう。その傷つきやすい陛下の御心のうちを考えてみろ」
「……」
「戦死者には、それ相応の賠償が出る。どうせ我々軍人は例えどんなにきれい事を並べ立てたところで人殺しの集団にすぎないが、

結局、その程度しか、我々には、いや、人間には何も出来はしない」

「金で人間の価値が……」

「いい加減にしろっ！！！」

藤島の罵声が吐き捨てるように言った綾崎の声を遮った。

「貴官も栄光ある南沙統合軍水上艦隊の将校だろう！！なんだその女々しい態度はっ！！肝心の貴様がそんなことでどうする！！私は貴様のような女の腐ったようなゲスを部下に持った覚えはないっ！！あまつさえ、戦死した連中に貴様のような女々しい馬鹿の下で死んだと、私に言わせる気かっ！？」

「！！」

「皆、貴様を信じて死んでいった。私や貴様、そして陛下が手塩にかけて一人前に育て上げた可愛い部下だ。悲しいのは貴様一人じゃないんだぞ！！」

「長官、しかし……しかし……」

「無念なのはわかる。皆、同じなのだ」

綾崎は、泣きたい気持ちを必死に堪えて、深々と頭を下げた。

この時ほど、自分の地位が恨めしいと思ったことはなかった。

「はい。申し訳ありませんでした。今後、このような醜態は、二度と」

「私ももう愚痴は聞かないぞ」

「はっ」

「秋谷長官等が東京で日本政府高官との交渉を終了させた。三菱横須賀造船ドックに大和を向けろ。ドック入渠は5日後の正午の予定だ。それまでに横須賀入港を終了させろ。それから氷川は予定通り佐世保に。韓国曳航に関しては、現在韓国政府と外務局が中国政府を介して交渉中だ。明日までには話がまとまるはずだ。赤城等の損傷艦は、現在大神基地のドック受け入れ作業を開始している」

「了解しました。各部隊ごとに行動を開始致します。開始時刻は、あと1時間ほどを見てください」

「了解した」

「では、失礼いたします」
「綾崎」
綾崎が、通信を切ろうとした時、不意に藤島が呼び止めた。
「はっ？」
「……戦に出るなら、無名の兵士で出たいものだな。お互い、こんな悲しみを抱かずに済むのだから」
「……はい」
しばらくしてから公室から出てきた綾崎の眼は、少し赤かったという。

それからが慌ただしかった。
皆、一応の休憩をとっただけの疲労が残る身体にむち打って働いた。
大和は横須賀へ。氷川は佐世保。そして二水戦は2隻を除外して大神基地へ。それぞれ解散の後、別々の場所へと航海することとなった。
「二水戦司令より信号」
「読め」
「はっ。一足先ニ帰ル、再見ノ日ヲ心待チニス」
「感謝スル。貴殿ノ航海ノ無事ヲ祈ル……そう返信しておけ」
「了解」
「天城、離れます」
「氷川、前進開始」

綾崎は、それぞれ離れゆく艦達を、破損した夜戦艦橋から眺めていた。
一隻一隻と遠く成り行く艦。
「提督」
山本が、綾崎の指示を促す。
「うむ」

気がつけば、この海域に残っていたのは、大和ただ一隻となっていた。

「行くか……」

「行きましょう。日本へ」

「そうするか」

綾崎はシートに座ると、いつもの変わらない声で命じた。

「微速前進。針路８－９－６、取り舵２０」

「微速前進。ヨウソロ」

「針路８－９－６、取り舵２０ヨウソロ」

「目標、日本本土。横須賀、大和、発進！！」

第六部　日本へ

●大人と子供

「なんですって？」

「聞こえませんでしたか？」

「何ですかその艦艇１２２隻、航空機１９０機、兵員１２万６千名っていうのは」

「今回、うちが投入した戦力です」

大和よりも先に来日していた秋谷が外務省で行われた政府首脳及び外務系各省幹部との会談において切り出した言葉は、日本政府の度肝を抜くものであった。

秋谷は、今回の出撃に関してこう報告したのである。

投入艦艇数

第１１任務部隊

Ａ隊　計１２隻（戦艦１・巡洋艦２・駆逐艦４・フリゲイト艦５）

Ｂ隊　計　８隻（空母１・強襲揚陸艦２・駆逐艦４・フリゲイト艦８）

Ｃ隊　計　８隻（巡洋艦２・工作艦１・病院船１・補給艦４）

その他　計２４隻（港湾支援艦）

総計５２隻

投入航空機数

蒼龍飛行隊　５２機

南沙空輸隊　１１５機

教導隊　３３機

合計１９０機

投入人員数（（）内は戦死者及び負傷者）
第１１任務部隊　　計　５５０７名（３９名戦死・８５４名負傷）
艦隊後方支援部隊　計　６２４１名
航空隊　　計　１１５２名
航空隊後方支援部隊　計　８５２名
司令部投入人員　　計１２２４８名
総計２６０００名

使用弾薬数　５７１２発
使用燃料量　１８７５２米ガロン

費用見積もり　３９２４億２４５０万円（詳細別表）

「我々にとっては総力戦闘だったのです。この程度はかかります」
「あっ、あなた方は……！」
大蔵省の幹部が席を蹴って立ち上がった。この財政難の折、どこから４０００億近い金を出せというのだ？しかも、艦の整備となればそれだけでさらに金が飛んでしまうではないか！
「戦艦１隻のはずではなかったのか？戦艦１隻だけといったはずだ！」
「いつ、言いましたか？」秋谷はやんわりと、しかし毅然とした言い方でそれを否定した。
「我々は戦艦１隻のみの投入などといった覚えはありません。いつ、言いましたか？」
「そっ、それは……」彼は言葉を詰まらせた。たしかに、彼も思いだしたのだ。
『出撃艦艇数及び投入人員の決定権は南沙帝国軍側に一存する』という条約の一節を。

「早急に支払い方法を決めて下さい。それから、今回投入した艦で損傷もしくは疲労の激しい艦は、順次、貴国持ちで整備・修復して頂きます」
「はっ？」
「すぐに整備・修復をお願いするといっているのです。貴国持ちで」
「なっ……」
「それから、内閣官房長官閣下」
「はっ？」
秋谷は、一通のファイルを、いつ失神してもおかしくない顔色の竹村内閣官房長官に差し出しながら言った。
「東京条約３６条および国連安全保障理事会決議に基づき、航空自衛隊及び海上自衛隊艦隊派遣の落とし前として、これを貴国に通告いたします」
「はっ？」
竹村は、それを開いた途端、目の前が真っ暗になった。それはまさに、現政権へのハル・ノートだった。

『南沙政府および帝国軍の双方を代表して一筆啓上申し上げる。我らは、貴国が犯した愚劣極まりない東京条約違反に対し、強い不快を感じ、貴国の誠意に多大なる疑問を有するに至った。
故に、貴国の誠意を求める意味で、ここに同条記載事項（違反時には提示額を２００倍とする）の遂行を求めるものである。

南沙帝国皇帝
御名御璽　』

『国連安全保障理事会は、日本政府の卑劣極まりない態度に強い不快と怒りを感じ、緊急に事態の収拾を図るべく緊急会議を開いた。
その際の決議として、ここに日本政府に対し、東京条約第３６

条遂行を求めるものである。

国連安全保障理事会議長
ハリー・D・ジェバ』

「こっ、これは……」
「さて。閣下」
「はっ？」
「こちらが航空自衛隊南沙侵攻事件に関する被害報告書です。ごらんください」

竹村が病院にかつぎ込まれたのは、それから３０分後のことである。

●大和

１０月2日午後5時１５分から7時５９分にかけて戦われた、かのジュトランド沖海戦以降、戦艦同士が砲火を交えた最大規模の戦闘。翌日、南沙側呼称『第2次マーカス島沖海戦』と命名されたＩＢＣ対国連軍との最終決戦から４日が過ぎた今、大和は、途中で合流した自衛隊の八八艦隊を従えて横須賀への航路をとっていた。

「八丈島沖通過」
「うむ」
防空艦橋にあがって潮風に当たっていた綾崎は、見張りの報告をぼんやりと聞いていた。
「提督」
「ん？」
潮風との合成風力に髪をなびかせてタラップをあがってきた天城冴子が、綾崎の姿を認めると同時に、声をかけてきた。
「艦隊司令部からです。主砲に関して」
「なんだって？」
「主砲門は全て、新型に換装するそうです」
「新型？ひょっとしてあの実験砲か？」

「はい。実戦に耐えられるだけの性能が得られたとの判断からだそうです。現在の所、製造が進行中。1月後には換装作業に入れるそうです」
「扱いが難しいと聞いているぞ」
「はい。レールガンですから、それなりに難しくなるものと」
「また真田大佐あたりが凝りまくったんだろう」
「大佐のお話ですと、『限界に挑戦した』とのことですが」
「やれやれ……」
綾崎は、心底疲れたという顔で頭を左右に振った。
「技術者ってのは、どうしてこう、使い手の迷惑を省みないモノばかりつくってくれるのかな……」
「でも、スペックの面からのすれば」
「欲しいのは、倍以上の耐久性と命中性。ただそれだけだ。それだけあれば十分。なまじあちこち凝ると、ボロがでまくって後始末に困る」
冴子はクスッと笑っただけだった。
「それと、幾見中佐から通信が」
「で？」
「看病してくれた秋元大尉に『なさけない』、藤島長官に『やる気がないならやめてしまえっ！』同僚や先輩達にも『この馬鹿野郎っ！』って怒鳴られてばかり。これじゃ綾崎先輩には何を言われるかわかったものじゃない。ですって」
「決まってる。『この役立たずめ！』だよ」
ついでに『死んでしまえ』とでも付け加えてやろうかと考えながら、綾崎はタラップを降り、後に続いた冴子に、振り向きながら言った。
「軍務復帰は？」
「まだしばらくかかるそうです」
「死んでもいいから連れてこい」
「いうと思いました。でも、懲罰として艦長資格を一時剥奪、半

年間の減棒処分プラス、三階級降格の上、宮城の熟練航海の補佐役として、3ヶ月間の航海立ち会いだそうです」

「なに？」

綾崎は振り返って冴子に訊ねた。

「あの馬鹿、ついに懲罰かかったか」

（何だかんだ言っても、やっぱり部下が心配なのね）

冴子は、そんな綾崎の性格を、結構好ましいものと思った。

「当然です。不可抗力とは言え、艦長が戦場で人事不省に陥ったんです。そうでもしなければ示しがつきません」

「宮城、いつ配備されたんだ」

「昨日。「葛城」と同時に。予定通りです。引き渡し式の写真、転送されています」

「艦長は？」

「野島中佐です」

「野島か。まぁ、あいつなら幾見を鍛えてくれるだろう」

「艦長職は1年以上なされておりませんが」

「大丈夫。あいつはすぐに勘を取り戻せるさ。それより冴子。新型の性能を教えてくれ。俺も詳しくは知らないんだ」

「こちらに引き渡された情報だけですが、よろしいですか？」

「どの程度だ？」

「構造など基本的なものだけです」

「かまわない。専門的な面は、後で真田大佐あたりに聞くことにする」

「はい。では、後ほど公室の方に、資料を持って伺います」

「そうしてくれ」

「提督」

応急長の小野田少佐が、応急処置のなされただけの昼戦艦橋の入り口で、待ちわびていたように声をかけてきた。

「提督。後部２８区画、第２２４５番から４９番までのリベット

が剥離。浸水しています。昨日の大波を越えたのが原因と考えられます。２８区画はすでに閉鎖されていますが、調査の結果、その反対側にある１２５スプリンター区画に細かいクラックが入って、同じく閉鎖されている航空火薬庫にまで浸水していました。浸水はくい止めましたが、あの区画の構造からして修復にはあらゆる部品の全面交換の必要性が生じています」

「キールを一部交換するしかないな。しかし、そんなに酷くなっているのか？」

「はい。あの区画は構造上の問題でコーティング処理が見送られた所です。それに、被弾したとき、あの区画は航空機格納庫と一緒にボコボコにされたんです。傾斜装甲板ももう全面交換するべきです」

「すまんが、各所の装甲の程度を再度、入港までに調べられるだけ調べてくれ。司令部の方には、俺からも被弾箇所および疲労の来ている箇所の装甲板を中心に、修復の全面的な再検討と張り替えを進言してみる」

「助かります」

「なに。何しろ今回は日本政府持ちだ。司令部からも費用はいくらかけてもかまわないと言われている。気にするな。やばそうな所は大小を問わず、各兵員から聞くなりして調べあげて、報告書にして明日の昼までに俺の所に持ってくるように」

「はっ」

「ところで、ＮＡＴＵから既に聞いてはいたが、リベットは剥離するまでガタがきているのか？」

「非防御区画はあらかた叩かれましたからね。アーマー防御がなされた区画は全く問題ないのですが、調べてみると、やはりガタが一気に来たらしくて、剥離していなくても、細かいクラックが相当」

「修理が長引きそうだな」

●数日後　横須賀

大和の横須賀入港は、時間調整などの関係から、日曜日の正午丁度となった。

海自と海上保安庁の前日からの厳重な警戒と、出港差し止め処置により、横須賀海域は普段からは想像がつかない位、がら空きの状態であった。

そして、その港周辺のあらゆる場所には、一目大和を見ようと押し掛けた人々がいた。

マニアから旧軍関係者、親子連れ、カップル、マニアに危険な連中。その人種・あるいは種族は様々ではあれ、大和の入港を固唾を飲んで待ちこがれる連中であることは確かであった。

民放テレビ各局中心のマスコミが三菱造船ドックの一番よく見える位置に陣取り、その後ろ辺りに徹夜で待っているという、若者達がいた。

『えーっ？だってぇ。やっぱりぃ。カッコイイしぃ。こんなチャンス、滅多にないって言う感じだしぃ。やっぱ、見に来なくちゃいけないって感じぃ？』

……書いていてイヤになる様な女のコメントが画面から流れる。

『困るんですよねぇ。確か、昨日でしたよね。原子力機関？核融合推進機関っていうんですか？それを搭載しているっていってましたし。放射能とか、心配だし。困るんですよねぇ』

「三船君」

「はい」

「どうやら、一大イベントとなるようだね」

「そうですな」

黒塗りの公用車の中で、三船俊郎海自幕僚長は、横に座っていた『政界最悪の現実主義者』秋谷民自党総裁にそんな話を持ちかけられた。

彼は秋谷悠介Ａ．Ｋ．Ｄ内務省長官兼統合軍軍警察長官兼統合軍

情報局局長兼統合軍軍務省長官という４つの重職を完璧にこなす『化け物』の父であり、非公式に綾崎敏夫と共に南沙への移民を議会から求められている人物である。

「つくづく思う」

秋谷はシートに身を委ねつつ、呟くように言った。

「あの軍艦に日の丸がついていたらと」

「しかし、提督は日本人です」

「違うな」

「は？」

「彼は日本のために戦ったつもりなぞ毛頭無いはずだ。聞いたろう？あの綾崎家の跡取りのアジ演説」

「はっ……」

「彼等は皇帝のために戦った騎士団気取りだ。彼等に日本のためによく戦ってくれたなどといったら、笑われるのがオチだよ」

「そうでしょうか」

「そんなものさ」

「では、御子息も？」

「政府の要職に就いている関係だろう。私には何も話してはくれない」

「ほぉ」

「ご令嬢が聞いたら、なんというかね」

「さて……」

三船は自嘲気味に笑った。

「村武首相が無茶を言って出撃させた護衛艦隊が日本の態度と世界から叩かれております。親の欲目と笑われるかも知れませんが、あれは意外に頭の良い娘です。恐らく、同じ様な事を言うでしょうな」

「ふむ」

彼は軽く頷いた。

「まぁ、男を見る目もあるようではないか」

「お戯れを」
「いやいや……」
「しかし、大丈夫なのですか？」
「ん？」
「年間で2千億近い資金援助を行う必要があると聞きましたが」
「それだけではない」と、同乗していた橋元副首相が言った。
「はっ？」
「大和と一緒に原子力空母のオーバーホールだそうだ」
「なんと！」三船は顔色を青くした。
「彼らは空母まで？」
「3個機動艦隊を使用したから、この分も頼むとな。合計でいくらだと思う？」
「さぁ」三船は経済には暗かった。妻亡き後、再婚まで子供を男手一つで育てていた時でさえ、家計簿すらつけたことがないような男であった。
「想像もつかん。現在調査させているがね。その上、自衛隊の派遣、特に空自の南沙への威嚇的派遣が東京条約違反としての上乗せ額も加わる、結果は見当もつかない……やつらやりやがったんだ。どさくさに紛れて所有艦艇の4割以上を引っ張ってきたんだ」
「なんと！」
三船にも、それが日本にどれだけの経済的負担を求めるものか、解った。
ちなみに、この条約は『やり直し条約』と命名され、２０兆円もの負担を実施させられた首相には、締結の翌日の臨時国会で内閣の不信任案が出され、無能であるが故に気の毒な首相はすべてが混乱の渦にある内に退陣した。
「やられましたな」
「まったくだよ」橋元も、何と言っていいのか解らない様子でため息をついた。
「私も、派遣には強く反対していたのですが」

「皆知っている」橋元と彼は古くからの付き合いだった。
「首相命令じゃ、防ぎようがあるまい」
「それでも……」
「なに」橋元は笑っていった。
「条約締結は首相の責任さ。奴は南沙側のレトリックに引っかかったんだ。彼に全責任をとってもらう。そうすれば次の選挙で社民党は惨敗。決まっている。国際的にこれほど日本の地位を引き下げ、醜態をさらしたのは戦後初めてといってもいい。ならば、国民はどう考えるかね」
「成る程」
「政治だよ。戦争もね……」
そんな彼等を乗せて、海上自衛隊横須賀司令部に、護衛のパトカーに護られた黒塗りの車が6台、入っていった。
「おい！そっち！」
「あれがそうだ。カメラカメラ！！」
盛んにフラッシュが焚かれるが、その4台目と5台目、そして6台目には、自衛隊のものとは明らかに違う一団が乗り込んでいた。
全員、２０代の若い連中だった。
「ようやく、大和入港ですな」
「ああ」
南沙に割り当てられた3台の内、真ん中の車の後席に乗っていた秋谷は、その頃、父親と同じように、シートに身を委ねながら言った。
「数多くの陛下の赤子を失った代償がこれだ」
「まぁ、いいではないですか」
横に座っていた副官の内、経済関係の懐刀であるチャンドラー財政監査部部長である。
「昨年のあの悪夢よりは」
彼等は、昨年、ピース・ボードの馬鹿のおかげで装甲車両2両損失、隊員3名死亡。被害総額は１０億に登るという損害を出してい

た。彼らはこの時、何ら元をとれずにいる。
以来、海兵隊時代から、南沙統合軍は、ピース・ボードを敵対テロ組織リスト筆頭格に載せ、隊員達には作戦中、彼等が接近次第、無警告で射殺しても良いとしていた。
「まぁな」
「これで我々も経済的に十分楽になります」
もう一人の副官、こちらは謀略専門のハイドリヒ中佐が言った。
「リスクは覚悟するべきでしょう？」
「仕事は増えるがね」
「日本から金が出ます。水上艦隊も綾崎大佐が２５隻、藤島長官が３８隻も持ち出して派手にやってくれたおかげです」
彼等は空母や強襲揚陸艦を、救難機の移動基地として使用し、病院船氷川と協力することで、多数の遭難者と負傷者を救出することに成功。後に国連軍とＩＢＣの双方から、感謝状を贈らせる功績を果たしていた。
「経済的には大助かりだな。すべては生き残るため。それが歴史の流れだ。で？どこまで予算的余裕が維持できるか」
「あと１０年は大丈夫でしょう」
「１０年か」
秋谷は少し思案を巡らせて言った。
「後は、如何に我々がリタイアするまで、この関係を維持・発展させるかです」
「策は？」
「日本を巻き込んでのパクス・ナンサによる太平洋安全保障体制の創設」
「そのために、日本にはもっと血を流してもらわねばなるまい」
「それが、自国のためと、わかる日が来るでしょうからな」
「前方２時方向より駆逐艦１隻接近中。はるな型です」
「うむ」

昼戦艦橋が使えないため、やむを得ず夜戦艦橋で指揮を執っていた綾崎は、報告のあった方角へ私物のツァイスの双眼鏡を構えた。
チカチカ光が見える。
「発光信号です」
「読め」
「はっ。ワレ、コレヨリ貴艦ノエスコートヲ開始スルー以上です」
「指示に従うと返信しておけ」
「了解」
綾崎は艦内通話のためにインターホンをとった。
「艦長より全乗り組み、入港作業にかかれ」

午前１０時５４分、大和は三浦半島の東南の端にある間口と、千葉県の洲崎とを結ぶ、海上交通安全法適用海域境界線に達した。この境界線から中に入れば東京湾ということになる。
ここからは、海上交通安全法に従って東京湾に入っていかなければならないのである。
無論、その辺はわかりきっていることなので、航海室では、航行管理システムを、同法下での航行を想定したものへと切り替えていた。だが、先導艦を出してくれたことに一応の敬意を示すこともあり、今の大和は前方１キロの所を進む、海上自衛隊の「はるな」に従って、ただついていくだけであった。
「はるな」は、洲崎沖合に達すると、針路を３０度にとった。「はるな」の哨信儀が点滅して、
「針路３０度、速力６ノットをとれ」
と、合図を送ってくる。大和の見張り所では、見張員が双眼鏡でその信号を読みとり、
「針路３０、速力６ノット！」
と、怒鳴る。
それを受けた見張り長が、インターホンで航海艦橋に同じ指示を伝える。

「針路３０、速力６ノットです」
それを受けた通信兵が航海艦橋の前にいる池辺航海長に伝え、池辺が、
「針路３０、速力６ノット」
と、号令を下す。
かつて池辺が航海長を勤めていた「はるな」が今回のホスト艦らしく、以降、八八艦隊の護衛艦達が大和の後ろに単縦陣となって浦賀水道に入る。
房総半島と三浦半島が左右にくっきりと浮かび上がった。
（ん？）
三浦半島の付け根の辺りに、一隻の奇妙な艦が浮いていた。
（ひびきか）
音響観測艦『ひびき』であった。恐らくは大和のノイズ・パターンを採取しようとしているのだろう。
「大分変わってしまったな」
彼はそれが無駄な努力であることを知っていたので、敢えて無視しつつ、房総半島の見慣れた景色が一変しているのを見た双眼鏡を戻しながら呟いた。
海上自衛隊からの移籍という、この当時としては珍しい出自の彼は、今年４３歳の妻子持ちである。海自でも腕っこきの航海長であり、大学で海洋学まで修めたという人物だった。
「航海長は、この辺のご出身なのですか？」
羅針盤から眼を離さずにいる竹村裕次郎少尉が訊ねた。
「いや。実家は大阪だ。横須賀管区に属してな。引っこ抜かれるまで、この辺に住んでいたんだ。宿舎、せまくてな」
「以前、「はるな」の航海長をなさっていたと聞いた覚えがありますが」
「ああ」彼は双眼鏡ではるなの姿を見た。
「だから、娘の名前も春菜というんだ」
竹村は視線を外すことなく、思わず笑ってしまった。

「笑うなよ。これでも一生懸命考えたんだぞ？」不服そうな声で池辺が言った。
「自分は石原裕次郎に憧れていた母につけられたそうです」
「あいつと同じなわけか」
「お子さんはお一人ですか？」
「男と女一人ずつ、三人目が女房の腹の中だ」
「どうせなら、民間にでも行けばよかったじゃないですか。子供のことを考えれば。軍隊なんて……」
「そうとも言えないよ」池辺はそれを遮った。
「ずっと軍艦で生活してきた。ここが俺の生きる場所だ。女房もそれがわかってくれている」
「初め。どんな感じでした？引っこ抜かれた時」
彼は上司の彼を良く知らなかった。
「そりゃ、女房には反対された。南の島まで引っ越せるかってな。だけど、廃兵院と遺族手当が世界的スタンダードで確立されているのが魅力だったんだ。いざという時、海では何があるかわからん。家族に迷惑かけたくないしな。あいつも最後には根負けさ」
「はぁ」
「それでもな？いざ引っ越すとなると単身赴任。この前、1年ぶりに訊ねてきた女房もそれまで横須賀のせまっくるしいアパートにイライラしていた分、４ＬＤＫのマンション住まいに物価も安いって大喜びさ。不満っていったら、娯楽施設が少ないことくらい。今頃、女房が軍向けの分譲地のマイホームへ引っ越し中だ。自衛隊じゃ、こうはいかん」
「成る程」
「それにお前、階級は上がらなかったけど、今じゃ俺は大和の航海長様だぞ？」
池辺が恥ずかしさを込めた嬉しそうな声で言った。ちなみに、少佐の給料は、この当時基本手当が年俸約５００万円、池辺は家族手当が出ていて約５４０万円である。

「まぁ、移ったのはいいが、配備艦艇未定って初めいわれてな。なにされるか不安だったんだが、大和配備を聞かされたときは飛び上がって喜んだよ」

そして、池辺は照れくさそうにいった。

「それまで単身赴任だったんだが、今じゃ家族がこっちに来てくれた。「休みの日にウチにいない」って俺、子供達に嫌われてな。それがお前、どうだ?大和の姿見て、あれにお父さんが乗って……お父さんが動かしているのよって、あの日、女房が初めて俺のこと、子供達に自慢してくれて……それで、照れくさい話だが、それまで俺のこと嫌っていた息子がはじめていってくれたよ。『お父さん、すごい』ってな」

「……なんか、感動しちゃいました」それが、彼の正直な感想だった。

「貴様、実家はどこだ?」

「対馬です」

「ほう。九州弁なまりがあるから、そっちとは思っていたがな」

「お袋が熊本暮らしが長かったもので。でも、熊連の連中とは違いますよ?」

『熊連』こと第1機甲師団第3連隊、通称『熊本連隊』は、統合軍陸戦隊の中でも異彩を放つ郷土連隊である。勇猛果敢といえば聞こえがいいが、猪突猛進が激しく、影で猪武者連隊ともいわれている。

「随分、帰っていないだろう」

「両親の方で面会に来てくれるそうです。南沙への移民は嫌がっていて」

「そうか。まぁ、東京見物でもしてくることだな。孝行しておいた方がいい」

「そうしますが、航海長は?」相変わらず、羅針盤から眼を離さない。

「俺か?まだ考えていないが、まぁ、なんとかしよう」

「ドック入ったら、一杯おごらせて下さい」

第六部　入港

大和は浦賀水道を北上し、久里浜の海驢島沖から浦賀水道航路に入った。訓練中なのであろう。護衛艦2隻が遠くの方を航行していた。

横須賀が見えてきたのは正午頃である。横須賀湾が見えてきたとき、はるなが「針路２７０度、速力４ノット」を伝えてきた。それに従って、大和も同じ針路をとり、その後を艦隊が続いた。

１０分後、前方から４隻の大型タグボートがやってくる。それらは左右に分かれ、大和の両舷を通り過ぎ、航法で旋回して戻ってくる。

「錨分隊は第１砲塔前に集合せよ。繰り返す。錨分隊は第１砲塔前に集合せよ」

副長の奈良本の声がが艦内放送のスピーカーから響く。

大和が浦賀水道に現れた時、野次馬の中から、「うぉーっ！！」というどよめきが起こった。

「でかいな！」

「大きいぞ！すごい！」

盛んにシャッターが切られ、ビデオカメラが回される。

「ほぉ！」

軍艦マーチが聞こえてこないのが不思議な光景に、橋元も感嘆の声を挙げた。

「三船君、すごいな。やはり浮かべる城というわけか！」

「はい。そのようですな」

三船は、双眼鏡から眼を放さず、大和をじっと見つめていた。

天を睨む５６センチ砲が黒く光り、何とも言えない迫力がある。

「黒鉄の城……か」

三船の眼には、大和が眩しく映った。

「うーむ。さすが戦艦をものの一撃で撃破できるわけだ」
大和の前を進む護衛艦「はるな」が、まるで玩具のように小さく見える。
「本当にすごい！」
橋元は、いい歳して熱心にカメラのシャッターを押し始めていた。
「４０センチ砲に５１センチ砲で袋にされたと聞きましたが、ここからでは損害がよくはわかりませんな」
彼らが眺めている高台から大和までは7キロほどの距離である。

午後１１時２５分、５隻のタグボートが大和の両舷に接近してきた。
錨分隊の隊員達が駆け足で第１砲塔前に集合している。
タグボートが投げてよこす引き綱を、彼らがボートラードに縛り付ける。
大和ほどの大型艦になると、出来ないことはない（艦長の腕による）が、小回りに相当な制限が出る。この場合、日本側の指示に従うのが礼儀として、大和はタグボートのお世話になっている。
「提督。佐世保の天城から無事に入港との連絡です」
通信兵から報告が入った。
「検疫はどれくらいかかるんだ？」
「海上保安庁からの連絡では、３時過ぎまでかかるとのことです。幹部はレセプションの関係で、すぐに済みます」
「厄介な話だ」
俺は注射が嫌いなんだよ。と、綾崎は真顔で言った。
「たっぷりやられてみては？」
「やな奴だなぁ。お前」
「無針注射器ですから大丈夫ですよ」
「気分の問題だ。気分の」
「そんなものですか？」
前方に、白塗りの建物が見えてきた。

「そんなものです……おい山本、あれが海自の？」
「はっ？……ああ。はい。横須賀総監部です」
かつての横須賀鎮守府の建物の前にある桟橋には、６隻の護衛艦が串刺し係留され、楠ヶ浦の潜水艦基地にも、４隻ほどの自衛隊の潜水艦が横付けになっている。八八艦隊もその辺に泊まるのだろうと綾崎は見当をつけた。
「一発ぶちこんでやろうか？」
「だめです」
「だめか」
「秋谷閣下も今、あそこにいるんです」
「陛下に殺されるな」
怖い怖いと言って、綾崎は小さく笑った。
「艦長。曳航準備、終了いたしました」
「おう」

正午丁度にタグボートに引かれた大和は、夏島の沖合にある検疫錨地で停止し、錨を降ろした。
「錨分隊、錨降ろせ！」
奈良本少佐の艦内放送を通じた号令で、錨分隊の者達が投錨作業にかかった。
一方、ほかの分隊員達は、タグボートと大和を結んでいる係留索を解く作業にかかった。
夏島の方から、海上保安庁の巡視船が白波を挙げて向かってくる。
「左舷梯降ろせ！」
左舷梯は通常一般用に使われるが、ロスバッハとの接触で海に消えた。何とか予備として明石に搭載していたものをとりつけて使っているのだ。
左錨が水深３０メートルの海底に降ろされた。
「機関運転止め！」
大和は、その巨体を検疫錨地にどっしりと浮かべた。

「さて。久々の日本本土だ。これからどんなことがおこるかな？」
綾崎が、ふと呟いた。

海上自衛隊横須賀地方総監部の前の桟橋から、海上自衛隊のランチである「ひよどり」と「ちどり」が、海上自衛隊と帝国軍双方の幹部、そして三菱とＩＨＩにＲＨＩの技師でなる『大和修復合同プロジェクト』の幹部スタッフを乗せて、大和の方に動き出した。
「ひよどり」には、海上自衛隊幕僚長の三船海将と防衛部長の佐橋一佐、横須賀地方総監部司令の伊藤海将、統合軍側は三船真名大尉以下の連絡要員だけが乗っている。他の技師を乗せた「ちどり」は右舷から乗艦するため、別のコースを取り始めた。
「近くにくると迫力が違うなぁ」
プロムナードデッキに立った三船は、「ひよどり」が大和に近づくにつれて、その巨大さに改めて唸った。
『これだけの艦を動かせる南沙統合軍とは、どんな組織なのだ？それに、綾崎とか言うあのバイキン野郎は……』
海上自衛隊幕僚長としてではなく、一人の父親としてはらわたが煮えくり返るような思いで眺めた大和は、まるで巨大なビルが海上に浮かんでいるような感じであった。
海面から艦橋トップまでは６０メートルはありそうだ。
「やられてますなぁ」
「うむ……」
後楼が対空砲塔群の上に崩壊し、その下の対空砲が虚空を睨む形で破壊されていた。傍目からは何やらスクラップ運搬船のようにすら見える。
後部飛行甲板は各所が醜くめくれあがり、よく見ると、かがけられている旗も煤に汚れ、まるで引きちぎられた様だった。
「酷いものだ」
三船にも、その大和の受けた傷の生々しさが強烈に感じ取れた。
「……」

艦橋構造物の見張り所や信号甲板や踊り場には、白い作業服を着た若い乗組員が、珍しそうなまなざしで海上や陸上を眺めている。

まだ佐官だった頃、若手のかき集めに苦心惨憺した経験のある三船にとって、これだけの若手がいる南沙軍は羨ましい存在だった。

左舷舷梯は海上保安庁の巡視船が横付けされているので、「ひよどり」は右舷梯に横付けした。乗り込んでくるのが海自の幹部とあって、大和が右舷梯を降ろしたのである。

「ひよどり」の乗組員が鉤竿を舷梯に引っかけ、舷梯に横付けする。

「接舷しましたよ。さぁ、まいりましょう」

佐橋が三船を促し、プロムナード・デッキから梯子を登って上甲板に降り、舷梯の踏み台に乗り移った。

舷梯の上の舷門では、舷門当番兵が答礼のために笛を鳴らす。

舷門まであがった彼らは、出迎えの士官に敬礼をした。

「海上自衛隊幕僚長の三船海将です。こちらは、部下の防衛部長の佐橋一等海佐、それからこちらは、横須賀地方総監部司令、伊藤海将です」

「先任士官のミハエル・シャルン中尉であります」

お互いに緊張して態度がぎこちない。

ミハエルからすれば、向こうは一国海軍の重鎮。三船からすれば、相手は自分の息子のような歳の青年。

なにやら妙に言葉が出てこなかった。

その頃、大和を検疫地に投錨させた綾崎は、「ひよどり」でやってきた海自の幹部の出迎えのために幹部を引き連れて艦橋から降りてくるところだった。

三船は、悪夢にまで見た男の顔をそう簡単に忘れるほど馬鹿ではなかった。

１８０センチの長身にシャープなインテリジェンスを感じさせる顔をしていた。

実戦であそこまで活躍し、「東郷平八郎の再来」と、ＩＢＣを含む世界中から讃えられているプロを前に、三船以外の男達は、直立不動の姿勢をとり、コチコチに緊張して綾崎達が近づくのを待った。

綾崎と山本、そして神が、それぞれ横に距離を置いて並び、第１種軍装の姿で敬礼した。

腰に刀（申請した下士官以上の者だけが着用を許されている）を下げているのが、妙に気になった。

『こいつが真名を……』

三船は殺意を押さえるのに必死であった。何しろ、立場が立場であるし、後ろには娘がいた。

上空では旋回するヘリの爆音がやかましい。

「提督、こちらが……」

ミハエルが一々説明する。彼も実戦を彼の側で体験している。その采配といい、部下の統率力といい、戦前から高い評価が、さらに高まっていた。彼は階級だけではなく、尊敬のあまり、緊張した声であった。

「南沙帝国軍水上艦隊第１１任務部隊司令官綾崎悠矢大将です」

綾崎は落ち着き払った声で言った。

綾崎は、天城等、韓国へ派遣した部隊との合流を待って、あと少しで任務部隊司令官を解任され、大佐に戻らなければならない。

予備に持ってきていた大佐の階級章をつけた軍服に袖を通さなければならないのも、すぐ先のことだった。大和修復が、綾崎の今回の将校としての最後の仕事といえた。既にその件に関しては、真田ら艦政本部のスタッフが綾崎達のすぐ側で三菱の連中と話し込んでいた。

「ご苦労様でした」

「いえ」

綾崎は（自分が壊したこともあって）、大和の修復が心配で、目の前の自衛官よりむしろ三菱の連中が気になって、挨拶もどこか気が抜けていた。

「ここで立ち話も何ですから、どうぞ」
と、綾崎に誘われるまま、彼らは艦内へと入ろうとした。
艦政本部と三菱を中心とする「大和修復合同プロジェクト」のスタッフの間では、未だに議論が続いているようだった。
佐橋がそれに気づいて言った。
「修復に関する細かい話は三菱やＲＨＩ、それからＩＨＩの技師から聞いてください。しかし、大分叩かれましたな」
佐橋は破口があき、所々めくれあがった甲板を見回した。
対空砲塔群の辺りはスクラップの山を持ってきたようだった。
「やられすぎましたよ」
自分の父親のような歳の将校を目の前にして、綾崎は相変わらずのポーカーフェイスを崩さなかった。
確かにその通りだったからだ。
防水シートがかけられてこそいるものの、右アンカーはすでになく、千切れたチェーンだけがぶら下がり、周辺の甲板にも巨大な穴がいくつも開いていた。
「申し訳ありませんな。本来ならもう少しマシな状態で一」
「なんだとぉ！？」
突然、艦政本部のスタッフと日本側スタッフとつかみ合いになった。
よりによって中核は真田だった。
「こらっ！何をしているか！」
とっさに綾崎などが止めに入る。
「聞いていない！」
「できるかよ！」
「こっちも上の指示だ！」
「大和はうちの機密艦だぞ！そんなマネできるかよ！」
「何をしているのかと聞いている！」
ようやく双方を引き離して綾崎は真田を詰問した。
「大佐、これからって時にこのザマはなんだ！」

「設計図を、大和の全面的な設計図を渡せっていうんですよ！」
「何？」
「電子装備の公開なんてできるわけないだろう！？あれはトップ・シークレットなんだ！大和専用に開発した電子装備なんだ。それをただで三菱に渡すようなマネが出来るか！」
綾崎はスムースにいくと思われたドック入りが大分困難なものになりそうなことを予感していた。なんとかなければ。しかし、原因は何だ？
「大佐。大和は我が軍の機密艦であり、その機密保持は国連でも認められている所である。故に、いかなることがあろうともこの機密を一般人に明かすことは許されない。わかっているな」
「はい」
「よろしい。最悪の場合、我々とＲＨＩだけで修復を進めるようになるかもしれない。出来るか？」
「可能です。まっとうに仕事の出来る人手と時間、それと資金さえあれば」
「うむ。では、俺はどうもどこかで手違いがあるようだから、一度秋谷さんの所に行ってみる。なにかおかしい」
「頼みます」
綾崎がきびすを返した時、すぐに口論が始まった。
「だめだ！完全な設計図がなければ修復はままならない！」
「依頼は破損個所の修復だけだ！全面的な設計図なんてわたせるわけないだろう！？必要も認められない！！」
そうか……。綾崎はようやく理解した。
修復範囲の確定に食い違いがあるのである。
日本側は、艦政本部同様、その細かい神経から全面的に修復を行う必要を認めていたのである。
「ちょっとまて」
綾崎は再度真田達の側へ行った。
「はっ？」

「大佐。部分的な設計図だけを渡せ」
「はぁ？」
「とはいえ、司令部から許可を取り付けたらの話だ。恐らく、司令部ももう少し日本側との交渉続行の必要性を認めるハメになるだろう。司令部の連中、こういうこと、外務にまかせっぱなしだったからな。こういう時、痛くつく」
「出るはずが」
「出させるさ」
綾崎は真田を少し離れた場所へ引っ張ってくると言った。
「考えて見ろ大佐。かつての大和の建造と一緒だよ」
「といいますと」
「管理を徹底させればそれほどでもない。それに、お前、端末ならともかく、ＮＡＴＵ本体の整備をそこらの電気屋が出来ると思うか？」
「ああ。成る程。そう言って下さればわかります」
「外板のリベット交換とか、船本体は奴らに委ねればいい。艦体のメンテも同時に行わせるよう仕向けろ。後はこっちで監視付きで仕事をさせるなり、なんなり出来るだろう」
「はぁ」
真田は、思案した挙げ句に、やってみます。とだけ答えた。
よし。満足そうに頷くと、綾崎は真田の肩を叩いて頷き、不服そうな顔をしている日本側スタッフの方へと歩いていった。
「いや。失礼した」綾崎は率直に頭を下げた。
あの一回の海戦で世界的に名前が通った（どこで調べたかは知らないが、ご丁寧に翌日の各国の新聞には彼の経歴がすべて載っていた）軍人である彼にそうもあっさりと頭を下げられた方は当然当惑した。
「いっ、いえ。こちらこそ、大人げないことをしたと……」
「大和は我が軍の機密艦なのです。確かに、修復作業には全体的な設計図が必要であるという理由はよくわかります。私とて、艦は

完全な状態であってほしいと、常々思っております。差し出がましいようですが、あなた方は、そう大和をあらせたいという、有り難いお気持ちで、設計図の引き渡しを申し出て下さったと思うのですが」

「えっ、ええ。その通りです」言われた禿頭の太り気味の男はふんぞり返るようにして答えた。

「我々にとっても大和の修復に携われることは、工員として最高の名誉と、誰もが考えとります。実際、臨時にでもいい。と、他社からも参加の申し入れが殺到しておりまして」

「成る程成る程」綾崎は満足そうな顔で頷くと、言った。

「しかし、それだけの艦を扱う者としては、それ相応の実力がある工員の方にこそ、修復にたずさわってほしいと考えるのですが」

「それは、当然です」彼は、何を当たり前のことを。と、ややあきれ顔で綾崎を見た。

「設計図が部分的では……ああ、仕事が出来ないというのは、どうでしょう」

綾崎は綾羅のマネをしてみることにした。伊達にアゴでいいように使われているわけではない（これは綾崎の思いこみである。こいつが綾羅に勝てるわけがない）

「かつての大和は設計図が断片的な物でしかなかったのにもかかわらず、あれだけ素晴らしい艦となりました。それは、とりもなおさず、素晴らしい工員の腕前があったからでは？」

「そりゃ、そうです」

「それでは、いかがですか？先人達に迫ってみては？それとも、それも出来ませんか？」

「やってみせますよ！」ムッとしたのであろう。気色ばんで断言した。

「ええ。やってみせますとも」

「よろしい。大佐。お聞きの通りだ。さすがに三菱はしっかりしてるな」

「ええ。さすがです」真田は綾崎の真意に気づき、人の悪い笑みを浮かべた。

「協議の続行は必要でしょうが、まぁ、それでも出来る腕前がある工員の実力には、期待させていただきますよ」

「そういうことだ」

ヒラヒラと手を振って、三船達の元に戻った綾崎は、少し頭を下げた。

「いや。失礼しました。血気の盛んな奴が多くて」

「いや」

三船はふと、ここまで出来る男なら、真名の婿に……と考える自分に気づいた。

彼があわててそんな考えを否定したのは、当然のことである。

長官公室は、上甲板右舷中央部、つまりは旧大和と同じ位置にある。

ホテルのロビーのような広い部屋であり、置かれている家具や調度品も、世界的に有名な一流メーカーの最高級品である。

中央のテーブルの上には、白いクロス製の覆いがかかっており、白磁器の花瓶に花が活けてあった。

「すごい！ここが連合艦隊司令長官の公室なのですか！」

一歩足を踏み入れて感激した伊藤が声を挙げた。

満足な大型艦のない自衛隊の幹部は、その豪華さに驚かされた。

三船にしても同様であった。護衛艦の旗艦の司令室とは比べものにならない。壁には横山大観の絵が飾られ、舷側のガラスも防弾であろうが、どうみてもボヘミア産の最高級クリスタル・ガラスのように見える。壁の板の部分は恐らく古代オークだろう。床のカーペットもジャガード織りの最高級品。デザインも落ち着いたものとなっている。

いわば高級ホテル顔負けの設備である（綾羅がいかに金持ちかわかるだろう）

長官公室は、旧軍ならば天皇陛下御来艦の折の御休憩場所でもあり、外国ではその国の要人賓客をもてなす部屋、言ってみれば、その国の海軍の顔なのである。

そうである以上、そう安っぽいものは使えない。

「いえ。水上艦隊司令長官の公室です」綾崎は、大和といって旧大和と比べてであろう伊藤の発言を苦笑混じりで否定した。

「少し前に、八八艦隊の幹部がここで会食を開いたと」

「はい。それが何か？」

「いえ。無許可だったので減棒処分としました。それから、貴艦には多大なるご迷惑をおかけしたと」

「そんなことはありません。むしろ、航海の安全確保にご協力頂き、感謝しております」

綾崎の態度から、菊千代が真名の父親が自分であるということを知らせていないことを薄々感じ取っていた三船のカンは確実なものとなった。

「まぁ、お座り下さい」

そんな三船の葛藤を知らない綾崎は、海自の幹部にソファを勧めた。

こんな高級なソファーに腰を降ろすのが初めての幹部もいた。珍しそうに辺りを見回したり、ソファーの感触を味わっていた。

各人が腰を降ろすと、綾崎はやおら口を開いた。

「この先のことは、秋谷長官から伺った通りと判断してよろしいのですな？」

「艦政総監」ＮＡＴＵからデーターを引き出していた真田は、その声に後ろも見ないで返事だけした。

「なんだ？」

「全対空砲塔群の修復見積もり、出来ました」

「速いな」真田は部下である瀬田中尉の持ってきたファイルを受け取った。

「当然ですよ」瀬田はほとほと呆れたという顔で言った。
「やっぱり全面交換です。まともな両用砲が5基ないんです。今の大和」
荒波を越えた大和から対空砲が丸ごと海に落下したと聞いたときは、さすがの真田も泣きたくなった。
「成る程、建艦時のデーターから引っ張ってきた方が速かったというわけか」
真田はファイルを見ながらウーン。と唸りだした。
「狩野粒子の影響で、対空砲なんて使わずにいたようなものなんですよ？」
「ここまでだと、新型を搭載した方がいいな」
「９７ですか？」
「対空砲の集弾率が違いすぎる。コストはかかるが、これからのことを考えるとな」
「例の噂ですか？」
「大分、きな臭くなってきたっていうじゃないか。韓国も」

ＩＢＣとの戦争で、韓国はその海軍力を相当に喪失した。彼らも又、戦うことがあるとは思っていなかったのである。だから、大部隊を出して、後々覇を争うこととなるであろう日本に対して存在をアピールする程度の認識しかなかったのである。
無論、大義名分がなかったわけではない。大義名分なき所に戦争は起こらない。
彼らの大義名分とは『世界平和は朝鮮民族が創設する』というものであった。　そして彼らは大敗を喫した。
当然である。
彼らはあまりにも戦争が下手だったのだ。
指揮系統が家柄で決まるような国の軍隊なんてそんなものである。
喪失艦艇１２隻という大敗北に国民はいわばアノミーの世界へと追い込まれた。海軍力で唯でさえ勝る日本に対するイニシアティブ

がまた減った。コンプレックスは高まる一方。早急に海軍力の強化が図られなくてはならない。

そこで韓国は３６８艦隊構想（軽空母３隻、駆逐艦６隻、フリゲート艦８隻、補助艦艇５０隻という韓国海軍史上初の機動艦隊構想）を、４８９構想へと急遽、拡大した。

だが、こうした構想は必ずどこかで利権に絡む。

計画決定の翌日早々に造船業界に軍閥からはじまり財閥、政府関係者多数を巻き込んでの贈収賄などのスキャンダルがマスコミで早々に報道され、責任逃れだのなんだの醜い中傷合戦が続いていた矢先のことである。

マスコミによって続々とリークされていたスキャンダルが噂に噂を呼んだ。

北に機密が漏れている。政府要人多数の贈収賄があった。海軍に核兵器保有計画がある。建艦所の建設で漁場が汚染される。大幅な増税がはかられる。しかも政府高官だけはその課税の範囲から外れる。など、真偽を問われずに流された噂で、国内中が大パニックに陥っていた。

だが、問題は国内にはとどまらなかった。韓国の国際的状況は、この日までに建国以来、最悪の状態となっていた。

礼を尽くして損傷艦を曳航してきた帝国軍に対する韓国海軍は、慇懃無礼というより非常識な態度で、船乗りとして心得ておかねばならない常識を全く無視する態度をとり、あまつさえ、軍艦旗を引きずり降ろそうとまでした。お陰で、トサカに来た帝国軍側とあの事態になった。

これが南沙ＴＶによりすっぱ抜かれ、国際的にも『国際慣習法以前の問題』と韓国側の態度は船乗りの恥であるとして叩かれ、政府の対応や、政府に対する批判記事を巡り、韓国のみならず、世界的に『韓国人の礼儀とは何か』といった紛糾など、内外に関して政治的安定を欠くどころの騒ぎではなく、今では韓国国内は決定的な不安定要素を抱えているといわれるまでになっていた。

そして北朝鮮である。彼らは中国を経由することによって自国の松茸や農産物を中心に細々と商売を行っていた。貴重な国宝も世界的オークションで売りに出しもした。彼らの行ったことは金日成時代からずっと、農業の近代化であった。

中国ほどではないにせよ、農業生産物は輸出可能なまでに安定し、近頃ではようやく発見した油田の操業にまでこぎ着けていた。政治は無論安定していた。

北朝鮮国民は、ここまで自分達の生活を豊かにした金国家主席を尊敬し、配下の者も反逆者のレッテルを張られたくないために躍起になって働いた。彼は部下の横領などには容赦がなかったのである。

この二国間で今もめているのが、３８度線付近の油脈である。この所有権を巡って、両国は神経を尖らせていた。

「綾崎提督ではないですが、共倒れが一番望ましいですな」

「そうなんだが……」

真田は手招きで瀬田を呼び寄せると、小さな声で、秘密だぞ。と断ってからささやくように言った。

「総司令部は９８年１２月までにもう一回今回のオーダーで任務部隊を組めるようにしておけと言ってきた」

「始まりますかね」

「総司令部は両国の我慢の限界と予測している。だが、世論がこれを受け入れるはずがない。ＩＢＣとすぐにでも協議に入りたいとしているんだ」

「じゃ」瀬田は驚いたように言った。

「遂に？」

「そういうことだ」

「でも、間に合いますかね」

「何がだ？」

「ＲＧ砲ですよ」

「ＰＢ砲が間に合うんだ。大丈夫だ。それに、なんとかしないと、司令部が五月蠅いからな」

第六部　日常へ

大和が横須賀に到着してから2日後の午前10時20分。大和は錨地から錨を巻き上げ、曳船に引かれて造船所に向かった。

吾妻島の東側にある吾妻岬の沖から楠ヶ浦に進み、大型タンカー建造用に全長400メートル、幅80メートルに拡張された5番ドックへと向かう。米軍が空母の修理用に作った全長330メートルの6番ドックは、後日空母蒼龍が入るために使えない。

吾妻島の海面に入った大和は、艦首を袖ヶ浦の第5ドックへと向けた。

曳船が這うようにして巨大な大和を押していく。艦首がドックに入った。そして、ソロソロとドックの奥に押し込まれていく。艦全体がドックの中に入るまで、2時間かかった。

「何だと?」長官公室で開かれた説明会において、艦政本部からの説明を受けた綾崎は、思わず訊ね返してしまった。

「レールガンですらわかりかねると言うのに、何だそのPB砲というは」

「パルス・ビーム砲です」

「……理論はいい。どうせわからん。だが、そんなものが何の役に立つというのだ?」

「最大出力で発射すれば衛星軌道上の監視衛星ですら撃墜できます」

「何の必要あるの?」担当となる冴子が呆れを通り越して馬鹿馬鹿しいという口振りで訊ねた。

「使い方はさまざまです」といって、分厚いファイルが取り出された。

「いいわ。でも、大和だけの配備なの?」そんなものを見させられるのは、冴子でもご免だった。何しろこれは半分が計算式で埋ま

っているのだ。
「各地に秘密裏に配備されております」
「発射寸前で被弾したらどうなる？」
レーザーには莫大なエネルギーがかかるのは綾崎達も知っていた。だから、そのエネルギーが集積した段階で爆発したらどうなるか。それが心配だった。
「大丈夫です。砲塔とその周辺が吹き飛ぶ程度で済みます。エネルギーの逆流は理論上、または構造上、まったくありません」
「おいおい」
気楽に言うなよ。という声が幹部から漏れる。
「強烈なパルス波が発生するのですが、人体には無害です」
「理論じゃなくて、実際問題としてはどうなんだと聞いている」
「人体実験はやっておりません。このご時世、そう言った面にはうるさくて」
「全く、艦本の連中、予算があるからって好き勝手やり放題って訳か」
「何考えてるんでしょうかねぇ」
「『試行錯誤即人体実験』の伝統は未だ健在みたいですね……噂には聞いたことがあります」
公室に残った綾崎と山本、冴子が真名の持ってきた紅茶に口を付けながらそんな話をしていた。
「なんだ？噂って」
「冗談ですわ」
「冗談？」それが、冴子の話なのか、それとも噂が冗談混じりのものなのか、綾崎は判断しかねた。
「構わん。言ってみろ」
「艦政本部の連中、大和を宇宙戦艦にするつもりだって」
「そのうち波動砲でも積むっていうのか？」
「兵達の間での冗談ですわ」

「では、幾見には宇宙の果てまで行ってもらわねば」と山本。
「昨日、真名から聞いたんだが」綾崎は紅茶に口を付けながら言った。
「あの馬鹿。入院中、しおりの目を盗んで看護婦にちょっかいだして、昨日、宮城にいく前にしおりにばれて半殺しの目にあったらしい」
「馬鹿ですか？」冴子は目を丸くしていった。
「あの人、学習能力ってものがないんですか？」
「ない」綾崎はきっぱりと言い切った。
「あいつの脳味噌はＳＥＸ７割、仕事３割だ。しかも、あのアホの辞書には『懲りる』という言葉が載っていない」
「教えてあげてはいかがです？」
「俺の仕事に差し障る」綾崎はきっぱりと言い切った。
「はぁ？」
「忙しくて手が回らないとき、あいつに『女紹介してやる』っていうんだ。そうすると、あいつ、どんなにゴネていても、二つ返事で『やります』と来る。あの馬鹿にはそういった使い方があるんだ。小賢しい知恵なんてつけてもらっては困る」
「……そういうものですか？」
私は女にストイックでよかった。と、山本は本気で胸をなで下ろしながら訊ねた。元々事情を知っていた（こういうことは女の方が情報を持っていやすいものである）冴子は、実際にそのことを当の本人の片方、つまり綾崎の口から直接聞いたので、クスクス笑い続けていた。
「そうだ。あの歩く〇〇〇（表記不能）は馬鹿なんだ」
多少、紅茶の時間にそぐわない表現だな。と、綾崎はカップを置いて、菓子に手をつけた。
「だから使いようによっては使える」
「でも、そういった人を使うあなたは？」冴子一流のジョークである。

「形容詞の使い方だ」
「？」
「仕事とつけば文句もあるまい？」
「そういうものですか？」
「そうでなかったら、冴子、お前なんて『馬鹿を艦長に仰ぐ大馬鹿』と言われても仕方ないんだぞ？」

ピーピーピー
突然、インターホンが呼び出し音を立てた。音は緊急を示すものだった。
「綾崎だ……何？解除は？……そうか。ならいい」
「どうしました？」インターホンを戻した綾崎に、山本が訊ねた。
「昨日、どうも不思議に思っていたんだ。秋谷さんの側に何で爆発物処理班がいたのかってね」
「爆発物ですか？」山本は思わず訊ねてしまった。
「俺宛だそうだ。怪我人もいないし、処理にも成功したそうだ」
さも平然と言ってのける綾崎は、何事もなかったかのように紅茶を飲み干した。
「まったく、暇人がいたものだ」

この後すぐに、綾崎は山本と共に横須賀地方総監部の一角に帝国軍が借りている区画に足を運んだ。物騒な事件が起きたのに、部下だけを危険にさらしておくのは気が引けたからである。
年月を感じさせる廊下を、幾人もの制服に身を固めた自衛官達が通り過ぎていく。綾崎達の側を通り過ぎようとした自衛官達は、彼の顔を見るなり、とっさにしゃちほこばった敬礼をして、綾崎が通り過ぎると、彼の背後で彼について小声で何やら囁き合っていた。
彼等の借り受けているのは、４階の６室と、別に宿舎が人数分であり、その中の大きな会議室が事件の起きた場所である。入り口には自動小銃を構えた警務隊の兵士が二人立っていた。

彼らは綾崎達の姿を見つけると、捧げ筒の敬礼を払ってきた。
自衛隊の施設の中でそんなことをする必要かがあるのかよくわからなかったが、ともかくも、ここでは現在、南沙と日本との接触の最前線として機能していた。
臨時に増設された電話やパソコンなどのコードが廊下まで這っていて、綾崎にまるで野戦司令部にでも足を踏み入れたかの錯覚を覚えさせた。
『南沙統合軍水上艦隊司令部臨時出張所』という白い張り幕が張られているのをみて、綾崎は「なんなんだこれは」と笑わずにはいられなかった。まるで災害対策本部とかいうものとかわらないではないか。と思ったのだ。

「提督」大尉の階級章をつけた女性士官が、敬礼して立ち上がったが、その時、パソコンのキーを打ち間違えたらしい。ピーというエラー音がして、彼女は顔をしかめた。
「おう」綾崎は答礼して室内を見回した。本当に戦場の気配だった。
「軍務局もご苦労なこった」
「これでも楽な方なんですよ？」
「これでか？」
「ええ」
「ふぅむ……」やっぱり、俺には事務仕事は向いていないようだ。と、綾崎は痛感した。俺がこんな所にいたら気が狂うのではないか？
「大尉。で？爆発物が発見されたそうだが？」
「はい。爆弾は自衛隊の方に」
「送り主は？」
「ＮＡＤＩＡに報告済みですが、左翼の過激派グループによるものでした。安手のパイプ爆弾です」
「暇人が」
「それで、あのぉ……」大尉は困ったように綾崎を上目遣いでみ

た。
「なんだ？」
「お手紙が随分来ているのですが」
「手紙？」
「ええ。一応、分類はしてあります。私信と思しきもの５４通。ファンレターと思しきもの２４６通、抗議文と思われるものが５１２通、商売目的と思われるもの……」
「しまった！！」
綾崎はその『商売』の一言に敏感に反応して叫んだ。
「原稿送るの忘れてた！！」
「提督？」
「アンダーウォーター、締め切り今日だった！」
綾崎はすぐに部屋を飛び出すと、大和の私室に飛び込み、封筒にまで入れておいた原稿をひっつかむと、一目散に郵便局を探して大和を飛び出していった。
「大丈夫なんですか？」
「あの人、いつもああだから、真名さんがいないと痛いよ」
「グライムズ君は？」
「海洋冒険部の方に送り返す。今、提督から課された宿題に追われている」
山本は大尉と共にため息をついた。
「でも、驚いたな」山本は大尉をみてため息をついた。
「陛下が君を送ってくるとはね。驚いたよ。ルン大尉」
「そう？」
統合幕僚本部官房室次席事務次官ルン・エミーソン大尉が、山本に微笑みながら言った。参謀本部詰めの山本にとって、意外と親しい女性だった。
つまり、恵がやきもきしている相手である。
「いつも私の側じゃ疲れるだろうって、閣下が」
「秋谷さんにとっては、骨休みさせているつもりかい？」

「ええ」

30分ほどして、肩で息をしながら、綾崎が戻ってきた。

「真名さんがいないと、痛いですな」

「まさかあいつまで忘れているとは思わなかった」

ゼェゼェと息をする綾崎に、下っ端の職員がお茶を持ってきてくれた。

「港内に宅配便サービスがあったんで、そこに入れてきた。大分払ったが、超特急でな」

「はぁ……」

「あの、綾崎提督」

「ん？」

「お仕事、してくださいませんか？」

ルンはそう言って隣の倉庫代わりに使っている会議室の方を示した。

元来事務仕事が苦手な綾崎にとって、その仕事は地獄の拷問に等しかった。

何がなんだかわからないようなハガキと封筒の山が会議用の長机4つを並べた上にのせられていた。

「えっと？これが？」

それでも、真名がいないときは綾崎だって少しはやっていたので、以前に比べれば少しはマシになったというべきであろう。

空の段ボール箱の横にマジックで『最重要』とか、『重要』とか、『一見』とか、『不明』とか、『無視』とか書いて並べておき、さらに『ファンレター』とか『隊関係』や『商売関係』と、彼でなければわからないような（大抵後で彼も破綻を来して混乱する）分類を試みていた。

ハガキはザッとみて内容を吟味して、ポイポイとダンボールの中に放り込んでいく。子供の励ましの手紙のような物が意外と多いの

には驚いた。
「あっ、こりゃぁ……」
綾崎は、その中の一通の封筒に手を止めた。
「どうしました？」
横で自分宛の手紙を読んでいた山本が顔を上げた。母親からの手紙だった。
「菅原の親御さんからだ」
「菅原少佐、いえ。菅原大佐の？」
菅原はその献身的行動から議会で2階級特進が認められていた。
「ああ……後でしっかり」彼は最重要のダンボールに丁寧に入れた。
後はほとんどを『不明』の中に入れていたが、その中でさらに何通か、彼の手を止めさせたものがあった。
それは女の子らしい青のかわいらしい封筒だった。当初、ファンレターかと思った。
「光波……」
封筒の裏には、『綾崎光波』という名前が記されいた。彼の脳裏を、あの春の日の出来事がかすめた。
（あいつめ）
顔だけで笑いながら、綾崎はそれをポケットの中に入れた。
他に例としてあげられるのは、小野寺綾美からのものと、そして幾見の名の入った封筒だった。それぞれの宛先は綾崎悠矢と幾見一矢だった。
「……」
綾崎は、幾見宛の手紙を山本に渡した。
「宮城の方へ送ってくれ」
「はい」
「親御さん。きっと幾見が活躍したものとでも考えているに違いない」
「そうでしょうね。きっと」

さすがに彼の姉、千里のことを口には出せなかった。山本は、綾崎の心に彼女が残した傷がどれだけ深い物か、わかっているつもりだった。

だから山本は努めて自分からは話さず、彼の口から漏れるのにあわせる程度にしていた。

「全く、草葉の陰で千里が泣いてるぞ」

「ハハッ。あの方のことです。きっと殴りつけたいんじゃないですか？」

「ん？そうだな……」

「あれから、８年ですか」

「長いものだ」綾崎はじっと山本を見て、不意にいった。

「スマンな」

「はっ？」山本は、その一言を逃さなかった。

「いや……なんでもない」そう言って視線をテーブルに戻した。

彼は珍しく照れていたのだ。

その日、真名は父の誘いを受け、久々に自宅へと戻るといいだした。書類申請もしているから、綾崎が別段文句を付けることもなかった。

そして、グライムズが潜水艦隊教導隊の訓練参加のため、羽田から連絡機で宇津帆島に戻ったのが、この日だった。

「じゃあな。しっかりやれよ？」綾崎は気分転換をかねて、羽田のロビーまでグライムズを送ってやった。忙しい身の彼にとって、精一杯のサービスだった。

「はい。ご期待に添えるよう、努力します」

「うむ」綾崎はグライムズの肩に手を置いて、耳元で小声で言った。

「それでな。グライムズ」

「はいっ！」グライムズは何かとても大切なことだと考えて背筋を伸ばした。

「いいか？もうお前も１８だ」
「はいっ！」
「お前、いい機会だからこの機会を逃さず」
グライムズは、綾崎があまりに真面目な口調だったので、まだ重要な話だと信じて疑っていなかった。
「はっ」
「いい加減、エストをモノにして男になってこい」
「提督！！」
「提督はよせ。私は大佐だ」
「なっ、なんてことを！！」グライムズは赤面して抗議した。
「何を言う。俺は１５で既に最初の女を撃沈しているんだ。お前、遅いぞ。それでも俺の弟子か」
「でっ、でも！」
綾崎にはグライムズのこの青さが好ましく感じられた。
「……男と女って奴はな？友達で終わる奴もいれば、恋人となる奴もいる。その違い、解るか？」
「いっ、いえ？」グライムズはこういった方には山本同様、ウブだった。
「男に勇気があるかないかの違いだ」
「……」
「エストはお前のことが好きだ。これは俺が保証してやる。後は、お前に勇気があるかないかだ」
「はっ、はい」グライムズは、努力してみます。とだけ言った。
『南沙行き、まもなく離陸いたします。御搭乗の皆様方ー』
「さあ。いけ」
「はいっ！」二人は敬礼を交わした。
「グライムズ」背を向けて行こうとしたグライムズを、綾崎は呼び止めた。
「はっ？」
「今の事、人の付き合い方をいったつもりだぞ？」

●羽田空港港内レストラン　　数時間前

旅行く人、戻ってきた人、様々な人々が、このレストランの中で食事をとっていた。

その一角、隅の方にグライムズを送り出した綾崎と連絡将校がいた。綾崎は彼から渡された機密文書に目を通していた。

「そうか。海洋冒険部の方でもそう考えるか」

「はい。この話、結構興味深いです」

「そうか」綾崎はうーん。と考えながら背筋を伸ばした。

「このままでは……」綾崎がよく使っている海洋冒険部の連絡将校だった。

「なんとかしとかんとな」

「そうです。困りますよ」

「なんとかなければ良いな」

「はい。しかし、ターゲットは……」

「いや。私が知りたいのはターゲットの周囲の真意だ。奴ら、ターゲットを売り飛ばしてでも我々に協力を依頼したい腹だろう」

「我々に、ですか？」

「ただしく言えば、我々全体だ」

「では？」

「俺は無論、出るつもりはないがね」

「なぜです？」

「あんな奴ら、共倒れになってしまえばいいんだ。何万の損害出して、修復に何年かかろうとも、知ったことか」

「あなたは貴重な方です」

「ん？」

「今は、あなたにかけるしかないのです」

「そんなに人材不足か？」

「お恥ずかしい話ですが……」連絡将校は、頭をかいた後、言った。

「その通りです」
「人材交換期のど真ん中だからなぁ」
「近頃、海自からの引き抜きも多いんです」
「陸自もだろう？」
「はい」
「誰が行った？」
「指揮官クラスではさほどの人材は未だに。ですが、下士官以下では、金につられて３年在学中の者が多数」
「α計画、どうなってるんだ？」
「それはＡ．Ｋ．Ｄの問題です。私のような下っ端にはなんとも……」
「そうだな。俺としても、何とかしてもらわないと」
「困りますか？」
「遺族のこともあるし、兼任にそろそろ限界を感じていたんだ。まぁ、事後の連絡は密にしてくれ。それから、私は少し、寄る所がある。申請は出してあるが、代理は山本に任せてある。何かあったら、山本の方に」
「はっ」

それからしばらく、綾崎はアルコールに手をつけながら、レストランに居続けていた。その手には、最早機密文書ではなく、手紙が握られていた。
少し、客足が減ったせいか、テレビの音が聞こえてきた。

『テレビを見ました。あまりのことに驚いています。後で紫音お姉ちゃんから色々な話を聞きましたが、それでもまだ信じられない気がします。お兄ちゃんが軍人になっているなんて思いもしませんでした。もう、あれから１０年近くが立って、今、私は歌手をしています。芸名は『氷室光波』といいます。
お兄ちゃん。覚えていますか？昔、私が『歌手になる』っていっ

てたの。
私、その夢を果たしたんです。ほめて下さいとはいいませんけど、どうお考えですか？
ぜひ、聞かせて下さい。そして、出来ることなら、逢って下さい。紹介したい人もいます。私の先輩で小野寺綾美さんっていいます。お兄ちゃんと同じ、蓬莱学園の出身だそうです。もしかしたら。とは思いますけど、知っていますか？この手紙を読んで下さったなら、午後５時から１１時までの間に以下の番号にＴｅＬして下さい。

お兄ちゃんへ

光波』

「あいつめ」

字が唯でさえ丸っこかったので、将来苦労するぞ。とは思っていたが、これほどになるとは。と、その丸っこい文字が並んだ手紙を見て綾崎は苦笑した。

『さて、国会では本日も東京条約遂行を巡る論戦が繰り広げられました』

「ん？」テレビで聞き慣れた言葉が出たので、綾崎はテレビを見た。彼が本土のテレビを見るのは久しぶりだった。ニュースはＢＢＣと決めていたせいもあるが。

国会中継の映像が使われていた。壇上に立った禿頭の議員が、カメラを意識した無用なまでの派手な立ち振る舞いで論陣を張ろうとしていた。

『私が掴んだ情報では、Ａ．Ｋ．Ｄ軍艦隊の司令官、綾崎悠矢なる人物は、民自党の綾崎敏夫君の息子であるという。そして、その上司、東京条約締結の時の帝国政府の全権代表は、同じく民自党の秋谷一郎君の息子ともある。これは、綾崎君や秋谷君のみならず、民自党が彼らに協力していた証拠なのではないか』

「ある訳ないだろ」

テレビ映像には、憔悴した顔の彼の父親の顔が映った。彼は顔をしかめた。

『いえ。そんなことはございません』

「当たり前だ。誰が貴様なんぞに頼るか」

『悠矢へ

お久しぶりです。まだ私のこと、覚えてくれていると嬉しいけど。テレビで見たました。相変わらずね。あなたって。本当に変わっていない。どこがっていわれても困るけど、私の中のあの時の貴男と、全く同じ。驚いたわ。

ところで、多分、あなたも知っているとは思うけど、私は歌手として、それなりの成功を収めています。それにね。私の事務所の後輩に、氷室光波っていう娘がいるの。わかる？本名は綾崎光波。私、明かしてはいないけど、あなたの妹よね。あの子にあなたのこと、いってもいいものか、正直、迷っています。よかったら連絡して』

●　東京南麻布某マンション　午後5時頃

「……もう。連絡してとは言ったけど、押し掛けて来いなんて言った覚えなくてよ？」

「言われた覚えもないな。入ってもいいか？」

綾崎はマンションの入り口のカメラめがけて話しかけていた。

「言わなくても入り込むつもりでしょ？」

「俺だって」

「はいはい。常識はあるっていいたいんでしょ？」

嘘つき。というと、綾美はオートロックを解除しようとして、その手をとめると、真顔で綾崎に言った。

「……手ぶら出来たわけじゃないでしょうね」

綾崎は手に提げていた紙袋を少し掲げて見せた。

「よろしい」綾美は満足そうな顔で頷いた。

「誰かに見られなかった？」

「さぁな」どうでもいい。とだけいって、綾崎は靴を脱ぎ始めた。
「よくないわよ」と綾美はその綾崎の開き直った態度に唖然とした。
「迷惑するのは私なのよ？」
「俺は迷惑しない」
「まったく、相変わらず何も変わらないんだから」
「人間、そうそう変わってたまるか」
「ふふっ」

私が悠矢と別れから、すでに7年が過ぎようとしている。
今、目の前に立っているのは、私を夢見る少女から女に仕立て上げた男。私を自分の色に染め上げた男。私が恋して、そして、愛した男。
少しだけ背が伸びた気がする。大人びた印象が、確実にモノになっている。

綾美は過ぎ去りし日々を思い浮かべていた。
海洋冒険部の荒くれ達との酒場でのドンチャン騒ぎ。初めてステージに立った時の緊張感。綾崎との出会い。初めてのキス。初めての男、初めての別れ。全てが初めてづくしだった彼女の青春時代……。
「どうした？」
綾美は気がつくと玄関に立ちつくしていた。リビングから綾崎が顔を出した。
「えっ？」ハッとして、今までのデジャ・ブから彼女は解放された。
「うっ、ううん。少し、昔のこと思い出していただけ」
「ピアノの鍵盤、ろくに弾けなかった頃か？それとも、調子っぱぐれた声しか出せなかった頃か？」
「意地悪」

「本当のことだろうが」
「緊張してただけよ」
「そうか？」
「人前で言わないでね」
「海鷲で初めて歌う歌姫にはよく言っている。かの小野寺綾美だってそうだったって。自信つくらしいぞ。大好評だ」
「馬鹿」
背広姿の綾崎は、そのままリビングのソファーに腰を下ろした。
「相変わらず、ゼニア？」
「ん？」
「スーツよ。あなた、昔からゼニアのダブルでしょう？まだ、変わらなかったとはね」
「気に入ってるんだ。一番落ち着く」
「お手当必死になって貯めて買ってたけど、今は？」
「意地の悪いこと聞くなよ」

ワインが開けられ、綾美の手作りの肴がテーブルの上に広げられた。
「より戻しに来たってわけじゃないみたいね」
「期待したか？」
「まさか」綾美はきっぱりと言い切った。
「よくもまぁ、そんなに臆面もなく言えるわね」
「誰がふったんだ？」
「さぁ」クスクスと笑う綾美。
「……光波ちゃんのことでしょう？」
グラスにワインを注ぐ綾崎は答えなかった。
「今や時の人よ。はっきりいっとくけど、才能あるわよ。あなた、ジャズとクラシック位しか聴かないから、あの子が芸能人になっていたなんて、知らなかったんでしょう」
「……あいつと最後に別れたのいくつだと思う？あいつがまだ小

学校に通っていた頃だぞ？」
「だから鈍いっていうのよ。あなた、自分の情報にはからっきしなんだから」
綾美もグラスを仰いだ。
「ついでに、私がどんな歌を歌ってるかも知らない」
「よくおわかりで」
「ふふっ」と笑った綾美の顔は、すぐに暗くなった。
「新聞、読んだわ」グラスを置くと、綾美はぽつりと言った。
「菅原さん。亡くなったって」
「いい奴だった」
「本当に、優しくて。いい人だったわ」
「惜しい奴ほど散り急ぐのさ」
「惜しい人だったわね」
「そうだ。本当に……そうだ」
「みんな、死んでいくのね」
「生きるために戦って、そして……な」
「あなた、何で戦うの？」
「ん？」
「随分、あの時大演説ぶってたけど、あれ、あなたの本心じゃないでしょう？皇帝への忠誠がどうのなんて、嘘よそんなの。絶対、もっと別の、本当の理由があるはずよ？」
「ないな」綾崎は言い切った。
「女をなめない方がいいわよ？私はあなたの女だったのよ？」
「……そうだったな」
綾崎はグラスの中のワインを揺らせながらしばらく考えていた。
その態度だけで、綾美は綾崎が嘘を言うのがわかっていた。
「わからん」
「嘘！」
「嘘？」
「あなた、絶対誰かに戦いを挑んでいる。誰かを護るとかじゃな

くて、誰かを打ち負かしてやりたいって」
「……そうかな？」
「そうでしょう？誰なの？お父さん？」
「わからん。だがな……」綾崎はワインをあおって、何かを言おうとした時、
ピンポーン
チャイムが鳴り響き、綾崎の言葉を遮った。
綾美は舌打ちすると席を立って室内に据え付けられていたインターホンを取った。
「あら？……うん。入ってきて」綾美はそう言うと、受話器を戻して綾崎の方を振り向いた。
「どうするの？」
「ん？」
「光波ちゃんが遊びに来たって」
「なんだと!?」綾崎は驚いて綾美を見返した。
「……呼びつけたってわけでもないみたいね」
「当たり前だ。心の準備ってものがあるだろう？」というと、綾崎はグラスに残ったワインを空けた。
「昔の女ならいいの？」
「気心、通じてると思ったがな」
「ワイン一本で許せるものね」
「昔話でもしようと思ったんだが。とんでもないお邪魔が入ったな」
「まぁ。後で光波ちゃんに言ってやろっと」
「おいおい」

第六部　修理完了

●3月8日、大和、出渠

大和がドック入渠したのが前年の10月14日。

綾崎が大佐に戻ったのが11月1日、同日大和艦長任命。2月7日に綾崎が退艦し、幾見が約4ヶ月ぶりに大和艦長として戻ってきた。

三菱造船ドックは日々見学者が訪れる横須賀有数の観光名所となっていた。

大抵の場合、バスツアー客や年寄り、そして軍艦好きの青少年が中心であった。

観光バスで来れば『え～っ、皆様、右手をご覧ください。ただ今、右手に見えてまいりましたのが、今度の目的地、横須賀三菱第5造船ドックでございます。おわかりいただけますでしょうか。ドックの中には、戦艦大和が入渠しております。戦艦大和は、水上艦隊旗艦として……』という説明を頼まなくても聞くことができた。

確かに大和は目立った。元々空母などの修復用の第6ドックが使われるはずだったが、こちらには現在では空母蒼龍が収まっている。

理由は簡単である。大和がデかすぎるのである。全長380メートルの大和を第6ドックに入れたければ、大和を切断するかドックを拡張する必要があった。　さらに、蒼龍の整備のためにこのドックが使用されるに至り、大和の整備は横須賀ではなく、呉に回す必要性すらあった。だが、横須賀の三菱が石川島播磨重工に大和修復プロジェクトをもって行かれることに嫌悪感を示したが故に、タンカー用の造船ドックに回されたのである。

横須賀のドックは三菱が宣伝効果も兼ねて、道路から建造の様子がわかるようにされていた。それだけに、その中に居座る大和は物

凄く目立つしかなかったのだ。
　こと、大工事となった主砲交換作業の４０日間と、なにより機関の整備のため、対空砲など、艦構造物のほとんどを取り払った姿は、その様子を一目でも見ようというファンや野次馬、そして各国の情報機関がこぞってこの辺の道路を毎日占拠、交通渋滞を引き起こす事態まで招いてしまった。
　『スパイを見たければここへ行け』と言われ、マスコミ関連を中心に、連日といっても過言ではないほど、そこら中に死体が転がっていることから、『スパイヶ丘』とか『死体ヶ丘』と呼ばれるまでに至ったこの一帯に対しては、神奈川県警をして、公安関係者の応援を得て、のべ４０００人という途方もない数の警官を動員して公園の閉鎖と不法侵入者の取り締まることまでさせた。

　日本政府に後で「２５００億円」の請求書を突きつけたこの改装は、事実上、大和を生まれ変わらせた。
　ＮＡＴＵは、大規模なバージョンアップを受けてキャパシティーが６００万ギガバイトから９００万ギガバイトに変更。
　対空砲は収束率重視の新型７６ミリ両用砲と１２７ミリ両用砲が搭載され、トマホークランチャーをＰＢ砲に交換。ハリヤーの格納庫を改造して、５６センチ砲第４砲塔を組み込んだ。
　この主砲が人類初の試みとなった『レールガン』である。
　制式名称『９７式ＲＧ－５６砲』
　この採用によりついに大和の砲身は本来あるべき６０口径に到達。
　砲塔内部に速射砲とほぼ同様のシステムを組み込み、装弾時間を大幅に減少（装薬が不要なのだから当然である）させ、毎分２０発の発射を可能とした。
　射程距離実に８０キロ。毎秒１，５キロという高初速を実現した、まさに化け物砲だった。
　そして、開発局が最も腐心した機関に関しては、整備のついでに従来問題視されていたバイパスとジェネレーターの一部が交換され、

発電力を倍近くアップさせ、冗談みたいだが、これにより、大和は完成していたものの、莫大な電力を消費するため装備が見送られていた荷電粒子砲を後部副砲（従来はトマホークミサイルの６連装ランチャーが装備されていた）に装備し、世界発の実戦配備に成功。並行して対レーザーコーティング処理を行った。

そして、とうとう２月１６日に最終工程である全装甲およびリベットの安全性の検査が行われ、すべて異状無しとなったことで全修理工程が完了。

出渠式を経て引き渡すことが決定した。

予定日は３月８日。

新旧を含む大和乗組員が南沙から大型輸送機に缶詰にされて送られてきたのは、２月１０日である。

それまでの大和乗組員は幹部と少々の兵ほんの１００名足らずである。

しかし、それだけいれば大和は楽に動かせるのである。人工知覚電子脳ＮＡＴＵを搭載し、それに伴う機能の大半の自動化が施されている以上、乗組員は最終的な決断を下す、もしくはＮＡＴＵの指示に従うか任せていればよいのだから当然である。

３月８日は雲一つない晴天に恵まれていた。

かのマーカス島沖海戦において最武勲艦の誉れも高い大和の出渠式である以上、各国のマスコミもこぞってこの式典を取材に来ていた。

のみならず、日本でもっともポピュラーなこの巨大艦の出渠に立ち会うのは、造船関係者の悲願ともいえ、関係のない造船関係企業まで含めて、造船に関する関係者、新旧含めた海軍関係者およそ１万人が参加した。

『～というわけでありましてぇ！』

うんたらかんたらと、横須賀三菱造船所所長の牧野勝一郎氏が、

この日のためにと練りに練った祝詞を読み上げている裏では、乗組員とドック関係者達が出渠に備えた整備点検に追われていた。

『前部、異状無し！』

『中部、異状無し！』

『後部、異状無し！』

『機関部異状無し！』

作業員達が次々と整備点検結果を報告する。

「主任。艦体各部、異常ありません」

『主任。電気系統、融合炉、推進機関各部、オールグリーンです』

副長の奈良元とナツが修復担当の真田大佐に報告する。

「よし、式典の方へ報告しておけ」

「はっ」

横須賀三菱造船所所長の牧野勝一郎氏と艦隊司令の藤島悠理少将の二人による鏡割と参列者全員が乾杯の音頭の後、点検終了の報告が会場に流れた。

牧野ら造船幹部が艦首横にしつらえられていた特別のお立ち台に立ち、カメラのフラッシュを浴びながら艦首と陸とを結んでいた綱を切断し、待機していた曳船のロープを大和側の先任士官が艦首に結びつけた。

いよいよ進水式を気取ったシャンパン割とくす玉割である。

当初、『そんなことする必要はない』と海兵隊側は渋ったが、『どうしてもやらせてほしい』と三菱側が強硬に主張したため、たかが修復のためなのにこんなことになってしまったのである。

全員が艦尾にしつらえられた櫓の上に注目する。

そこには氷室光波の姿があった。

この日のために特別に呼ばれた彼女は、エデン・フェーズ、小川のり子に続くトップアイドル達の3番目に大和のシャンパン割りを行うことになった。

「せーの……」

ガッシャアアン！！

シャンパンが砕け散ると、くす玉も割られ、紙吹雪と鳩が一斉に舞い上がる。

ワッ！と大歓声と拍手の嵐が会場にこだました。

「あいつは昔っからものを壊すのがうまかった」と、モニターで見ていた兄が苦笑していたが、この際関係ない。

『作業員はドックより退去せよ。注水開始、注水開始！』

今度は三菱と協力して大和の修復を行ったＩＨＩの主任技師がドック注水ボタンを押し、ドックに注水を開始した。何しろ大型である。注水には時間がかかった。

５分、１０分、２０分、と皆が注目する中、全開に開かれたドック注水弁からは次々と水がドックに送り込まれる。下手に注水をすれば艦に傷がつく緊張の時間。注水担当者の腕の見せ所だった。

『第一次圧縮機さらに加圧中。二次圧縮起動開始します』

『第一融合炉安定正常』

『メイントランスエンジン？１から？３まで起動。出力現在６０％上昇中。メインバンクラムクリアー。Ｎシステム完全作動確認。各種データー、デフォルトでＮシステムに転送中』

そして３０分後、

『注水完了！』

『艦体各部異状無し！』の報告が入る。

『バランサー作動中』

『トリム水平』

綾崎の指令が三菱製大型２５０インチプロジェクターを通じて会場に響く。艦橋や各部の様子を次々移して出席者を飽きさせないためだ。

『了解。トリム水平』

大和が、ほんのわずかだがドックの中で浮き上がった。

『サブエンジン始動、メインエンジン始動準備』
『了解、サブエンジン始動。メインエンジン始動準備了解』
『ハッチ開放！』
『曳航開始します！』
今までたるんでいた曳船と大和を繋ぐロープがピンと張った。
『作業員は接触に留意せよ！繰り返す！作業員は接触に留意せよ！』
大和の甲板にはすでに３００人近い作業員が安全確認のため、勢揃いしていた。
「いよいよですな」
と、ＩＨＩ総裁の市原が隣にいた三菱造船総裁の岩崎に囁いた。
「はい」岩崎の言葉は自信にあふれていた。
「５０年の時を経て、武蔵についでわが三菱造船が大和を作り上げた。そう思っております」
万感胸に詰まる。そんな声だった。
スルスルとまではいかないが、「島が動く」といった感じで、大和はドックから引きずり出されつつあった。
普段、大型タンカーの出渠を見ている造船関係者の目にも、それは巨大に見えた。
何しろ高さが違う。しかもこんなに力強くはない。
本当に小気味よい一瞬だった。何が楽しいといって、世の中に巨大メカの発進プロセスほど楽しいものはない。
『進路クリアー！』錨見台に体を縛りつけた先任士官が大声で報告してくる。
『艦橋がドックを出ます！』
その時、
グンッという感じが乗組員を襲った。
ザバァァァン！！
と大波が発生し、一瞬だが水位が５０センチは上昇した。
曳船のロープはそこで外された。

万歳の声がそこら中で聞こえる。
『大和、進水完了！』
万歳！万歳！
乗組員、工員、関係者から無関係者まで、その声は会場中にこだました。
ズドォォンズドォォン――
海上では待機していた海上自衛隊の護衛艦と、海兵隊の巡洋艦『城』シリーズ3隻『天城』『赤城』『宮城』、そして前年12月に正式に相互安全保障条約を締結した旧IBC、現ファーランドから派遣された配備されたての『フリードリヒ・デア・グロッセ』2番艦『フォン・ハイエク』及び戦艦『長門』『伊勢』が予定通り、一斉に祝砲を打ち上げる。
「うわっ！！」
ビリビリと、空気が振動するのが会場にいた者達にもわかった。
ワッ！と興奮した歓声が上がるが、その興奮が冷めやらぬうちに、上空にポツポツと黒い点が見えてくる。
『会場の皆様にお知らせいたします。大和出渠を記念して、海上に待機中の強襲揚陸艦「飛龍」より蓬莱学園海兵隊および航空部の教導隊が上空をフライパスの後、アトラクションを繰り広げます。皆様、しばしお楽しみください！』
そんな放送が海上に流れた。
ブァァァン！！
爆音を轟かせて来たのは、まず零戦が12機。続いて彗星、流星である。
「あっ、ゼロ戦だ！」という声が各所で聞こえる。戦後の連中は、日本軍の航空機となれば何でも零戦となるらしい。
外では零戦が好き放題暴れている。
「さて。これで一段落ですな」真田はそういって司令席に座っている綾崎の顔を見た。

「全く、面倒なことで」
綾崎が煙草を胸のポケットから取り出した瞬間だった。
見張りの報告が入った。
「左舷上空、航空機2、本艦目がけて急降下！」
「左舷雷撃機4接近中！」
「くそっ」綾崎は煙草を戻すと幾見を見た。
「機関は暖めておきましたよ」と真田。
「よし。戦隊各艦通達、レッツ・ダンス、オール・ウエポンズフリー」
「了解、全艦、レッツ・ダンス、オールウエポンズフリー！繰り返すー」
「総員対空戦闘用意！防空長、上空の蠅を落とせ！」
幾見と綾崎はそれぞれインターホンを掴んで叫ぶ。
こと幾見はようやく自分の力の見せ所を得たのではりきっていた。だてに『しおりの腹いせ』から艦を護っていたのではない。大和の艦長として一番の力量が求められるのは、このデカ物を潜水艦と航空機の驚異から守り抜くことである。幾見は綾崎としおりという厄介者から艦を守り抜いてきた実績がある。
実際の話、だから、大和の艦長として認定されたのである。
「左舷、敵機、魚雷投下！」
「対空砲、想定射撃開始！」
無論、弾は出ない。だが、各機とのデーター通信により、命中判定は出来る。
綾崎も幾見も手元のモニターを見て顔をしかめた。
「ＶＴ使用禁止だと？」近接信管が使えなければ、大和といえども苦戦を強いられることは誰でも分かってもらえると思う。
「左舷３０番は雷撃進入前の海面、左舷７６番、敵機進入予想コース前面の海面をねらえ！急げ！」
演習用に被弾した機は尾翼の部分に取り付けられているスモークチャージャーから煙が吐き出されることでわかる。だが、彼らは、

列機が撃墜されても、決して怯むことなく、海面すれすれを一糸乱れぬ編隊を維持しつつ、大和に突っ込んでくる。

「ふうむ……」

綾崎はなかなか見ることの出来ない教導隊の教官達の見事すぎる技術を感心しながら見ていた。

「さすがだな」

もうここまで来ると司令官の役目はない。後は幾見の役目である。

１２７ミリ砲が想定射撃を開始した。海面で爆発するものや、海面ではじけて飛び跳ねたものが、ＮＡＴＵの計算でランダムに産み出される。

同時に２機、被弾判定が出た。

「取り舵一杯！」

幾見はそれでも艦長らしく繰艦技量を見せていた。

（大分、鍛えられたようだな）

綾崎は、ちらっと幾見を見た。

「敵機、突っ込んでくる！」

昼戦艦橋の前面を、彗星艦攻がフライ・パスしていった。

確かに、奴の顔は笑っていた。

綾崎がそう思った時、警報が鳴り響き、ＮＡＴＵから報告が入った。

『左舷第２区画に直撃弾３、浸水警報発令』

一度の攻撃で大和が受けた損害は、軽微とは言い切れないものがあった。

２５０キロ４発、魚雷５発を被弾。

戦果として敵機２５機、つまり遁走した敵機を含め、全機を撃墜したことになる。大和の面目は、一応護られたと言うべきか。

●新型砲試射に関して。

今回の改装は大和の第２改装として、工事関係者代表として三菱造船の名と共に艦尾のプレートに刻印された。

その中で、最大規模と言えば、砲関係の改装であろう。何しろ、対空砲はほぼ全面改装。主砲も新型へと換装された。となれば、やるべき事は一つ。

試射である。

空砲射撃による艦体のダメージ調査も兼ねた射撃は、横須賀湾内で実施されることとなった。というか、まだ艤装工事が完全に終了していない大和を、湾から外に引っぱり出すわけにはいかなかったのだ。

だから、大和は横須賀湾内の指定箇所に自走した後、射撃の瞬間を待っていた。

上空には、自衛隊からマスコミまで幅広い分野のヘリが空を覆い尽くすかの如く飛びまくっていた。

「さて。始まりですな」と、昼戦艦橋には、日本側技師代表として、三菱重工の高村主任技師が乗り込んでいた。防空艦橋等、各部にも、同様に技師が十数名乗り込んでいた。彼がその代表格なのである。

「１２番とは勝手が違う！各分隊長はルーキーが潰れないように注意しておけよ！！」

「水密扉閉鎖確認急げ！！」

「第４分隊、配置ついたのか！？確認、はいっていないぞ！何やってんの！」

各部に命令が飛び交う。

「久々ですよ。腕が鳴ります」と幾見。綾崎は既に艦を降りていた。

「何しろ、一年ぶりですからね」

「私なんて、生涯始まって以来ですよ。昨日なんて、大和の主砲発射につき合ってくるって息子に言ったら、恨まれましたよ」

「ハハッ。まぁ、そんなものでしょう。私も昨日は興奮して眠れませんでしたよ」

「砲術より艦長。空砲安全確認完了。目標未設定。目標の指定を」

幾見はインターホンを取り上げて言った。
「綾崎大佐の命令に従う」
「目標どうぞ」
「目標、国会議事堂、まかり間違っても皇居への流れ弾だけは避けろ」
「了解。データーインプット中」
「大丈夫なんですか？」
「実弾を撃ちはしませんよ」
高村は艦橋から第1，第2砲塔を見た。まるで生き物のように各砲が鎌首をもたげる。仰角はほぼ最大。やはり迫力があるな。と、自衛艦の射撃に多数つき合ってきた彼でもそう思わせるものがあった。
「データーインプット完了。射撃準備、完了しました」
「各砲塔、安全確認。空砲」
幾見はつばを飲み込んだ後、叫んだ。
「撃ち方始め！！」
「了解、てーっ！！」
爆音と衝撃波、そして火焔。
空砲とはいえ、もの凄い迫力である。装備を止めておく紐が緩かった場所では、脱出用のボートが紐が千切れた結果、海に落下した。また、衝撃波によって、海には波が発生した。考えられないことだったが、その時、大和の爆音が聞こえるのではないか。と、東京・神奈川などの各地で射撃から暫くの間、シーンとした空気に包まれた。
その時、幸運な者は、遠雷のような音を聞くことが出来た。が、あまりに間近にいたために、爆音と同時に目の前が真っ暗になるという経験をしてしまった人もいる。
「高村さん、高村さん」
気がつくと、彼は医務室のソファーに寝かされていた。軍医が顔を覗き込んでいた。

「えっ？わっ、私は？」なんだかもの凄く気分が悪い。
「衝撃波でノびたんですよ」
「衝撃波で？」
「いや、一般人では仕方ありません。乗組員の中にも胃潰瘍を患う奴もいるくらいです。そんなものですよ」
軍医は気付け薬を取ってこいと看護兵に命じると、席を立った。
彼はまだ起きあがるのが億劫だったので、そのままで周囲を眺めてみた。すると、彼の部下達も何人か同じように寝かされていた。
「いい経験でしょう。大和の医務室で治療が受けられるなんて、滅多に出来ませんよ」
「そうでしょうね」といって目をつむった高村は、帰って息子に土産話をせがまれた時、なんて答えようかと、少し悩んでしまった。

それにしても――
高村は考えずにはいられなかった。
このフネは、日本のフネじゃない。
あくまで、南沙帝國のフネだ。
いつ、敵になるかわからないフネ。
それを、両手放しで喜ぶ日本人――
本当に、これでよいのだろうか、と。

第六部　修理完了（後書き）

お疲れさまでした！……というか、本当に最初から最後まで読まれた方、いるんでしょうか？（いたらごめんなさい！）『南沙シリーズ』の一部として書き始めたので、終わりが何だか中途半端ですが、お許し下さい。お読みいただき、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2426b/

南沙戦記

2010年10月12日08時05分発行